長野市

浅川扇状地遺跡群　本村南沖遺跡

（あさかわせんじょうちいせきぐん　ほんむらみなみおき）

新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７．３

長　　野　　県
長野県埋蔵文化財センター

1c 区全景（南より）

2b・2c 区全景（南東より）

竪穴住居跡　SB03　出土遺物

弥生時代の土器

墓跡　SM02　出土土器

墓跡　SM02　棺内完掘（北より）

竪穴建物跡　SB13　出土土器

竪穴建物跡　SB13　遺物出土状態（南東より）

はじめに

北信五岳の１つ飯縄山（標高 1,917m）を水源とする浅川は、扇状に緩やかに広がった地形を形成しています。浅川は流域面積が小さいため、雨が続くと氾濫し、雨が降らなければ急に水量を減らします。近年、浅川扇状地上は市街地化が急速に進み、河川が形成したかつての地形はわかりません。しかし氾濫によって形成された微高地や流路にあたる低地を巧みに利用し、縄文時代からの人々が生活をしていた遺跡が数多く存在する長野市内有数の規模を誇る浅川扇状地遺跡群が知られています。

1950 年に開学した長野県短期大学は、1929 年長野県長野女子高等学校（現長野県長野西高等学校）内に設立された長野県女子専門学校が前身で、1931 年に現在の校地に移転した際には発掘調査は行われていませんでした。2018 年４月に開学する新県立大学施設整備事業のため、今回初めて埋蔵文化財の発掘調査が行われることになりました。

今回の発掘調査では、17 軒の竪穴住居跡や竪穴建物跡、掘立柱建物跡、墓跡、流路跡等が発見されました。なかでも弥生時代後期初頭の吉田式期の竪穴住居跡７軒は重複がなく、比較的短期間に存在した集落であることが分かりました。この時期の集落跡は浅川扇状地上でも少なく６例目の発見となりました。弥生時代中期後半や弥生時代後期前半の大規模な集落の分布と重なることがなく、「吉田式土器」の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡とほぼ同時期であるため、吉田式期の集落域の分布の広がりを考えるうえでの貴重な資料の１つとなるでしょう。

最後になりましたが、発掘作業から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県短期大学、長野市三輪・上松地区の皆さま、長野市教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や長野県立歴史館、そのほか関係各位に、心から敬意と感謝を表す次第です。

例　　言

1　本書は新県立大学施設整備事業に伴う長野県長野市三輪に所在する浅川扇状地遺跡群（あさかわせんじょうちいせきぐん）本村南沖遺跡（ほんむらみなみおきいせき）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、長野県の委託を受けて、長野県教育委員会の指導の下、（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺跡の概要は、『長野県埋蔵文化財センター年報』、現地公開、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図１：25,000『長野』・『須坂』・『若槻』・『中野西部』、１：50,000『長野』・『須坂』・『戸隠』・『中野』、長野市都市計画図１：2,500（デジタルデータ）をもとに作成した。

5　発掘・整理作業において以下の機関に業務委託した。

測量業務および空中写真撮影	：株式会社こうそく
自然科学分析（年代測定、樹種同定）	：株式会社パレオ・ラボ
自然科学分析（花粉、珪藻、プラント・オパール）	：株式会社古環境研究所
自然科学分析（付着物）	：株式会社古環境研究所
遺物写真撮影	：信毎書籍印刷株式会社

6　発掘、整理作業において、以下の方々にご指導をいただいた。
　飯島哲也、市澤英利、小山岳夫、櫻井秀雄、笹澤浩、茂原信生、本郷一美、長野市教育委員会

7　発掘調査・整理作業の担当者、発掘・整理作業員は第１章第１節３項に記載した。

8　本報告書は第１章第１節１項・第３節・第４章第１節を町田勝則、第１章第２節を髙山いず美、第３章第１節を福井優希、第２・第３節の遺物の執筆を西香子、それ以外の執筆と編集は長谷川桂子が行い、調査部長平林彰、調査第２課長町田勝則が校閲した。

9　註および引用参考文献は末尾に記載した。

10　調査資料および遺物は長野県立歴史館へ移管予定である。

凡　　例

1．遺跡分布図、遺構図等に示した国家座標は世界測地系の値である。

2．遺構番号は遺構種ごとに付してある。

3．遺物番号は本文、挿表、遺物図版、遺構図版の遺物出土状況図、写真図版のすべてに共通する。遺物図版に実測図が掲載されていない遺物の写真には、（遺物管理番号）で示した。

4．本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

（1）遺構実測図

竪穴住居跡・竪穴建物跡・掘立柱建物跡　1：60　　墓跡　1：20　　土坑　1：60

土器集中　1：40　　溝跡　1：40～1：200

（2）遺物実測図

土器・陶磁器　1：4　　土器拓影　1：3　1：4

石鏃等小形石器　2：3　　石核・石斧・磨石・敲石　1：3　　金属製品　1：2

（3）遺物写真

土器　1：3　1：4　　石器・石器製品　1：3　2：3　　金属製品　1：2

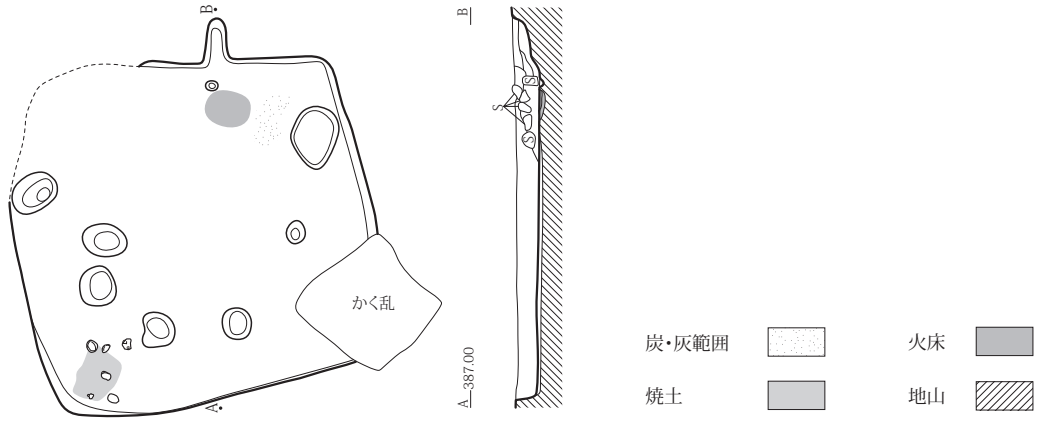
上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。遺物写真縮尺は遺物実測図に一致する。

5．遺構図版のＰは土器、Ｓは石器または自然礫を示す。

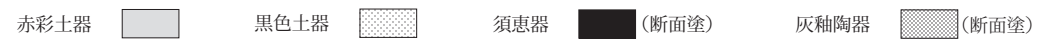
6．基本層序および遺構埋土の色調と土器の色調は『新版　標準土色帖』による。

7．本報告書で用いたスクリーントーン等の凡例は以下のとおりである。

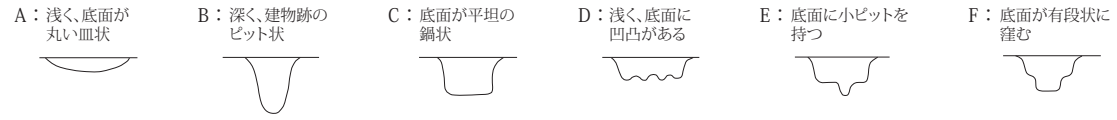
遺構図版



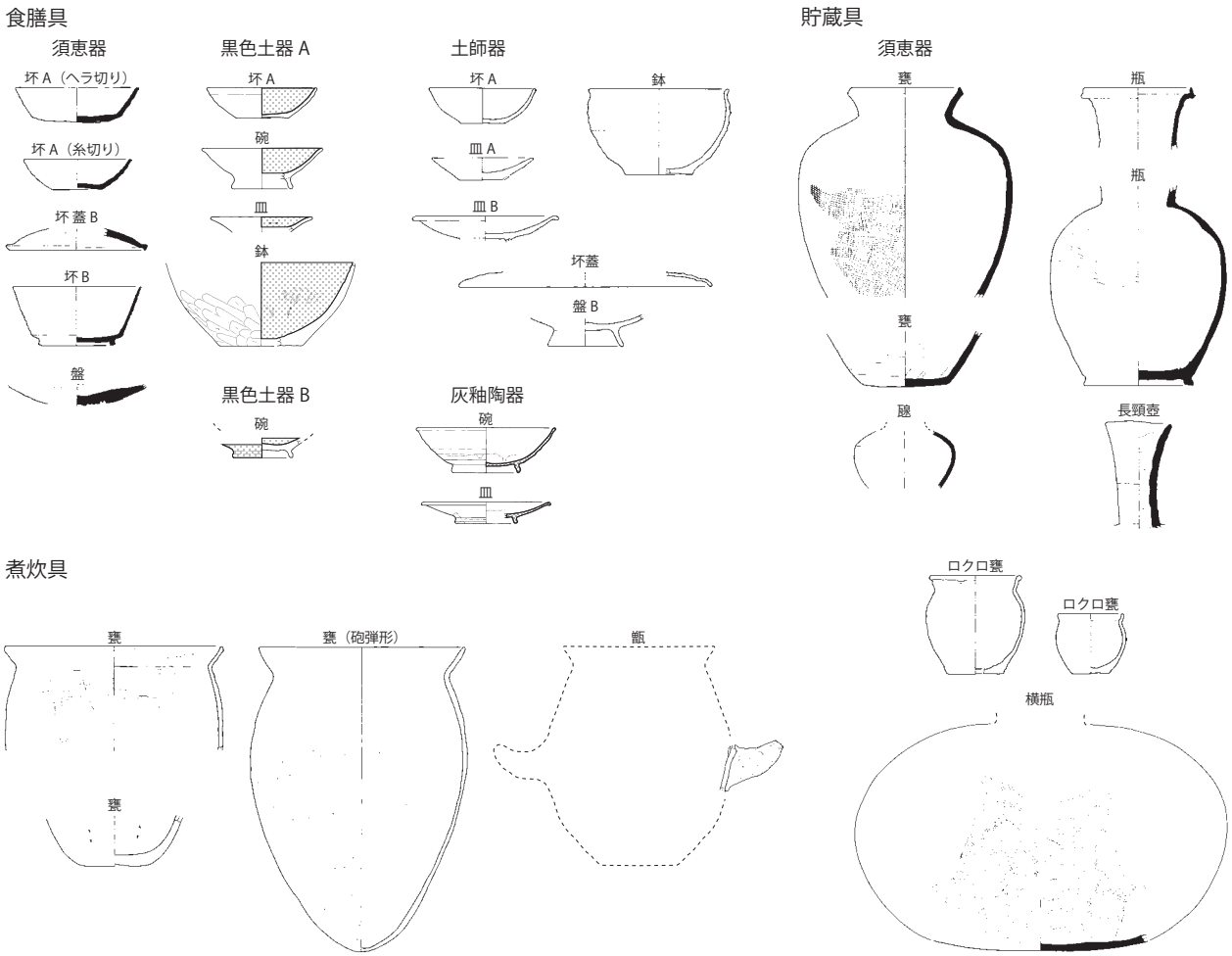
遺物図版



土坑断面分類記号



８．遺物の機種名については細分せず、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書等を参考にして一般的と思われる名称を用いた。



古代の土器　器種分類図

目　　次

巻頭写真
はじめに
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　調査の経緯と方法
　第１節　発掘調査の経緯と作業経過
　　１．調査に至る経緯…… 1
　　２．発掘作業と整理作業の経過…… 3
　　３．調査体制…… 3
　　４．調査日誌抄…… 4
　第２節　発掘作業と整理作業の方法
　　１．発掘作業の方法…… 8
　　２．整理作業の方法…… 10
　　３．遺物と記録の収納…… 11
　第３節　遺跡・遺物の公開方法
　　１．公開の方法…… 12

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 15
　第２節　歴史的環境
　　１．周辺の遺跡…… 20
　　２．歴史的環境…… 21
　第３節　調査成果の概要
　　１．遺跡の範囲…… 28
　　２．調査成果の概要…… 28
　第４節　基本層序…… 37

第３章　遺構と遺物
　第１節　弥生時代前期以前
　　１．墓跡…… 43
　　２．遺構外…… 44
　　３．小結…… 44
　第２節　弥生時代後期
　　１．竪穴住居跡…… 46
　　２．掘立柱建物跡…… 65
　　３．墓跡…… 67

４．溝跡…… 75
５．土坑…… 76
６．遺物集中…… 81
７．遺構外…… 81
８．小結…… 82
第３節　古墳時代
１．流路跡…… 84
２．遺構外…… 86
３．小結…… 87
第４節　奈良・平安時代
１．竪穴建物跡…… 88
２．掘立柱建物跡…… 110
３．流路跡…… 111
４．土坑…… 115
５．遺構外…… 118
６．小結…… 118

第４章　総括
第１節　浅川扇状地遺跡群の後期弥生式土器の位置づけ
１．本村南沖遺跡出土の後期弥生式土器…… 119
２．中期後半から後期前半の弥生式土器変遷試案…… 121
３．まとめ…… 126
第２節　浅川扇状地遺跡群の弥生時代集落の変遷
１．浅川扇状地と弥生時代の遺跡の立地…… 130
２．本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期遺跡の様相…… 132

引用・参考文献…… 134
遺構一覧…… 137
遺物一覧…… 144
写真図版
報告書抄録
添付 DVD

図版目次

第１図　地区設定図…… 3
第２図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称…… 9
第３図　本村南沖遺跡の位置…… 16
第４図　遺跡周辺地形区分図…… 17
第５図　本村南沖遺跡周辺の鳥瞰図（南西より）…… 17
第６図　遺跡周辺地質図…… 18
第７図　地質図凡例…… 19
第８図　周辺遺跡位置図…… 23
第９図　周辺遺跡位置図　弥生時代…… 24
第10図　周辺遺跡位置図　平安時代…… 25
第11図　遺構分布全体図…… 29
第12図　遺構分布部分拡大指示図…… 30
第13図　遺構分布部分拡大図（１）…… 31
第14図　遺構分布部分拡大図（２）…… 32
第15図　遺構分布部分拡大図（３）…… 33
第16図　遺構分布部分拡大図（４）…… 34
第17図　遺構分布部分拡大図（５）…… 35
第18図　遺構分布部分拡大図（６）…… 36
第19図　基本層序…… 37
第20図　断面位置図…… 39
第21図　１・２区　土層柱状図…… 40
第22図　３区　土層柱状図…… 41
第23図　１・２区　深掘りトレンチ柱状図… 42
第24図　SQ02　遺構図・遺物図…… 43
第25図　弥生時代前期以前 遺構外 遺物図… 45
第26図　SB01　遺構図…… 47
第27図　SB01　遺物図（１）…… 48
第28図　SB01　遺物図（２）…… 49
第29図　SB02　遺構図…… 51
第30図　SB02　遺物図…… 52
第31図　SB03　遺構図（１）…… 54
第32図　SB03　遺構図（２）…… 55
第33図　SB03　遺物図（１）…… 56
第34図　SB03　遺物図（２）…… 57
第35図　SB04　遺物図…… 58
第36図　SB04　遺構図…… 59
第37図　SB09　遺物図…… 60
第38図　SB09　遺構図…… 61
第39図　SB16　遺構図・遺物図…… 62
第40図　SB17　遺物図…… 63
第41図　SB17　遺構図…… 64
第42図　ST01　遺物図…… 65
第43図　ST01　遺構図…… 66
第44図　SM01　遺構図…… 67
第45図　SM02　遺構図（１）…… 69
第46図　SM02　遺物図（１）・遺構図（２） 70
第47図　SM02　遺物図（２）・遺構図（３） 71
第48図　SM02　遺物図（３）・遺構図（４） 72
第49図　SM02　遺物図（４）・遺構図（５） 73
第50図　SM03　遺構図…… 74
第51図　SM03　遺物図…… 75
第52図　SD04　遺構図…… 75
第53図　SK127・220・261・287　遺構図・遺物図…… 77
第54図　弥生時代後期　土坑分布図…… 78
第55図　SD06～10　遺構図…… 80
第56図　SQ01　遺構図・遺物図…… 81
第57図　弥生時代後期　遺構外　遺物図…… 82
第58図　SD01　遺構図…… 85
第59図　SD01　遺物図…… 86
第60図　古墳時代　遺構外　遺物図…… 86
第61図　SB05　遺構図…… 89
第62図　SB05　遺物図（１）…… 90
第63図　SB05　遺物図（２）…… 91
第64図　SB06　遺物図…… 92
第65図　SB06・07　遺構図（１）…… 93
第66図　SB06・07　遺構図（２）…… 94
第67図　SB07　遺物図…… 96
第68図　SB08　遺構図…… 97
第69図　SB08　遺物図…… 98
第70図　SB10　遺構図・遺物図…… 99
第71図　SB11・12　遺構図…… 101
第72図　SB11・12　遺物図…… 102
第73図　SB13　遺構図（１）…… 103

第74図　SB13　遺構図（２）・遺物図…… 104
第75図　SB14　遺物図…… 105
第76図　SB14　遺構図…… 106
第77図　SB15　遺構図（１）…… 107
第78図　SB15　遺構図（２）・遺物図（１） 108
第79図　SB15　遺物図（２）…… 109
第80図　ST02　遺構図・遺物図…… 110
第81図　SD02・03　遺構図（１）…… 113
第82図　SD02・03　遺構図（２）・遺物図… 114
第83図　SK062・232・233・237　遺構図… 116
第84図　奈良・平安時代　溝跡・土坑分布図 117
第85図　奈良・平安時代　遺構外　遺物図… 118
第86図　本村南沖遺跡　出土土器の様相…… 120
第87図　壺形土器の変遷…… 127
第88図　甕形土器の変遷…… 128
第89図　鉢形土器・高坏形土器の変遷…… 129
第90図　弥生時代中期　栗林式期の遺跡…… 130
第91図　弥生時代後期　吉田式期の遺跡…… 131
第92図　弥生時代後期　箱清水式期の遺跡… 131
第93図　本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期箱清水式期の遺構分布…… 133

表目次

第１表　文化財保護法に関わる諸届…… 2
第２表　受・委託契約一覧…… 2
第３表　遺跡保護協議一覧…… 2
第４表　調査体制…… 3
第５表　発掘だより・ホームページ…… 12
第６表　現地説明会等…… 13
第７表　周辺遺跡一覧（１）…… 26
第８表　周辺遺跡一覧（２）…… 27
第９表　SD03　出土歯骨一覧…… 112
第10表　竪穴住居跡一覧（弥生時代）…… 137
第11表　竪穴建物跡一覧（平安時代）…… 137
第12表　掘立柱建物跡一覧…… 137
第13表　墓跡一覧…… 138
第14表　溝・流路跡一覧…… 138
第15表　土坑一覧…… 138
第16表　縄文土器一覧…… 144
第17表　弥生土器一覧…… 145
第18表　古墳・奈良・平安・中世土器一覧… 151
第19表　石器一覧…… 159
第20表　金属製品一覧…… 159

写真図版目次

PL１　本村南沖遺跡の基本土層１
PL２　本村南沖遺跡の基本土層２
PL３　本村南沖遺跡の基本土層３
PL４　本村南沖遺跡の基本土層４
PL５　本村南沖遺跡の遺構１
PL６　本村南沖遺跡の遺構２
PL７　本村南沖遺跡の遺構３
PL８　本村南沖遺跡の遺構４
PL９　本村南沖遺跡の遺構５
PL10　本村南沖遺跡の遺構６
PL11　本村南沖遺跡の遺構７
PL12　本村南沖遺跡の遺構８
PL13　本村南沖遺跡の遺構９
PL14　本村南沖遺跡の遺構10
PL15　本村南沖遺跡の遺構11
PL16　本村南沖遺跡の遺構12
PL17　本村南沖遺跡の遺構13
PL18　本村南沖遺跡の遺構14
PL19　本村南沖遺跡の遺構15
PL20　本村南沖遺跡の遺構16
PL21　本村南沖遺跡の遺構17
PL22　本村南沖遺跡の遺構18

PL23　本村南沖遺跡の遺構19
PL24　本村南沖遺跡の遺構20
PL25　本村南沖遺跡の遺構21
PL26　本村南沖遺跡の遺構22
PL27　本村南沖遺跡の遺構23
PL28　本村南沖遺跡の遺構24
PL29　本村南沖遺跡の遺構25
PL30　弥生時代前期以前土器・弥生時代後期土器１
PL31　弥生時代後期土器２
PL32　弥生時代後期土器３
PL33　弥生時代後期土器４
PL34　弥生時代後期土器５
PL35　弥生時代後期土器６
PL36　弥生時代後期土器７
PL37　弥生時代後期土器８
PL38　弥生時代後期土器９
PL39　古墳時代土器
PL40　奈良・平安時代土器１
PL41　奈良・平安時代土器２
PL42　奈良・平安時代土器３
PL43　奈良・平安時代土器４
PL44　奈良・平安時代土器５
PL45　奈良・平安時代土器６
PL46　奈良・平安時代土器７
PL47　奈良・平安時代土器８
PL48　石器１
PL49　石器２・金属製品

添付 DVD 収録データ

遺構・遺物一覧
写真図版
自然科学分析報告書
周辺遺跡データ

第１章　調査の経緯と方法

第１節　発掘調査の経緯と作業経過

１．調査に至る経緯

（１）事業概要

平成22年、長野県は高等教育を取り巻く近年の環境変化を背景に、その現状と課題をまとめ、県が高等教育において果たすべき役割を整理した。また、その過程で長野県短期大学（以下「短期大学」という。）の現状と課題をまとめ、「長野県の高等教育をより一層充実するため、短期大学を改組し、新たな公立４年制大学に転換することが必要」との結論から、平成25年『県立大学基本構想』を決定、めざすべき大学像を提示した。４年制大学移行に伴う短期大学施設整備は、現在の短期大学と長野市立後町小学校跡地を利用し、前者に校舎および体育館を建設、後者に新学生寮や地域貢献型施設を建設するものとした（県立大学設立準備委員会2013）。

新県立大学の校舎および体育館予定地は、埋蔵文化財包蔵地として周知化された浅川扇状地遺跡群（長野市遺跡番号Ａ－①）内であり、予定地の近傍には弥生時代後期から古墳時代にわたる大規模集落として知られる本村東沖遺跡、平安時代の集落として知られる三輪小学校遺跡等がある。当該予定地は未調査地であり、遺跡の内容や遺構の広がりに関する情報が不十分であった。このため長野県（総務部情報公開・私学課県立大学設立準備室、以下「設立準備室」という。）は、開発事業を円滑に進めるため、事前に建設予定地内の埋蔵文化財に関わる試掘調査を長野市教育委員会（以下「市教委」という。）に依頼した（H25.6.24）。市教委は、建設予定地内に試掘坑を設定、遺物包含層の存在とその広がりを確認、埋蔵文化財保護の措置が必要であると判断した（H25.9.24）。この結果を踏まえ、設立準備室は文化財保護法第94条に関わる通知を、市教委に提出（H27.3.3）、市教委は、記録保存の措置（発掘調査）を長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）に委託して行うよう長野県に対して勧告した（H27.3.6）。一連の経過の中、設立準備室は本発掘調査を委託する目的で、埋文センターと埋蔵文化財調査のための調整協議を重ね（H25.10.11～第３表参照）、平成27年４月１日付けで埋蔵文化財調査のための業務委託契約を締結した。

（２）試掘調査

市教委は、平成25年８月13日および14日に、開発予定地内14箇所（短期大学構内）に試掘坑を設定した。その結果、８箇所（１～３、９、10～13試掘坑）に遺物包含層を確認、埋蔵文化財の保護措置の必要性が示された（H25.9.24付け25長埋５－11号）。

開発予定地のうち、遺物包含層が確認できた部分は、グランド西側および駐車場・遊具場一帯（約3,000㎡）、付属幼稚園舎、職員宿泊棟、北棟周辺（約3,000㎡）である。グランド東側および体育館周辺では、遺物包含層を確認できず、その理由として現校舎建設および旧校舎の建設・解体時に埋蔵文化財への破壊があったと推定した。

（３）本発掘調査

平成27年４月７日から、埋文センターによる本発掘調査が始まった。短期大学はもとより、移転の決

まった付属幼稚園の運営（４月～５月）、解体工事着手（７月～）との工程調整に関わりながら、発掘調査は進められることとなった。幼稚園運営期は、主にグランド東側（業務箇所３区）に試掘溝を設定し、破壊が及んでいるとされた範囲の内容確認調査を実施した。結果、遺構および土器破片１点も出土することなく、広範囲にわたりグランド造成等に伴う削平があったと判断した。駐車場・遊具の解体期（５月～７月）、幼稚園舎および職員宿泊棟の解体期（７月～９月）は、グランド西側（業務箇所２区）や旧テニスコート部分（業務箇所 1a 区・1b 区）の面調査を実施し、弥生時代から平安時代の竪穴住居跡や墓跡を調査した。最後に、幼稚園舎および職員宿泊棟部分を調査して 11 月 30 日で発掘作業を終了した。

（４）遺跡の名称

市教委は、平成 27 年５月１日、６月３日に遺跡の調査状況を確認し、周辺遺跡の調査内容を加味した現地指導を埋文センターに行った。その中で、浅川扇状地遺跡群内における当該遺跡の位置付けは、北 400m にある本村東沖遺跡に隣接する遺跡であり、そこでの調査成果（長野高校校舎建設地および市営住宅上松東団地２号棟建設地）とは集落時期を違えており､弥生時代後期前半を中心とする集落遺跡として、本村南沖遺跡（ほんむらみなみおきいせき）と評価、長野市遺跡番号 A503 を符号した。

第１表　文化財保護法に関わる諸届

遺跡名（調査年度）	発掘届（法 92 条１項）		発掘許可通知（法 92 条２項）		発掘終了報告		埋蔵物発見届（遺失物法）		埋蔵文化財保管証		文化財認定（法 102 条）			
	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	認定日	文書番号	県帰属日	文書番号
浅川扇状地遺跡群（H27）	H27.3.5	26 長埋第 14-14 号	H27.3.17	26 教文第 6-18 号	H27.12.4	27 長埋第 4-8 号	H27.12.4	27 長埋第 2-7 号	H27.12.4	27 長埋第 3-7 号	H27.12.15	27 埋第 196 号	H27.12.28	27 教文第 559 号

第２表　受・委託契約一覧

年度	埋蔵文化財発掘調査業務名	契約期間	契約額（円）	作業内容
H27	平成 27 年度　新県立大学施設整備事業	H27.4.1 ～ H28.3.31	78,325,000	発掘作業　基礎整理作業
H28	平成 28 年度　新県立大学施設整備事業	H28.4.1 ～ H29.3.31	24,246,000	本格整理作業　報告書刊行

（５）遺跡協議

遺跡保護のための打ち合わせ等協議は以下のとおりである。

第３表　遺跡保護協議一覧

		出　席　者	協　議　内　容
平成 25 年	10 月 11 日	設立準備室・短期大学事務局・埋文センター	1　埋蔵文化財調査の時期と調査箇所、費用概算 2　付属幼稚園の運営等 3　埋蔵文化財調査の方法
	10 月 25 日	設立準備室・埋文センター	1　埋蔵文化財調査の時期と費用概算 2　工事用進入路の取り扱い
平成 26 年	6 月　2 日	設立準備室・埋文センター	1　埋蔵文化財調査の時期と期間 2　工事用進入路の取り扱い
	11 月 12 日	設立準備室・埋文センター	1　埋蔵文化財調査の時期と手順、費用概算 2　工事用進入路の取り扱い
平成 27 年	3 月　6 日	設立準備室・短期大学事務局・埋文センター	埋蔵文化財調査の準備と開始時期
	6 月　3 日	設立準備課（旧設立準備室）・県教育委員会事務局・市教委・埋文センター	埋蔵文化財調査と校舎建設工事との調整
	6 月 16 日	設立準備課・埋文センター	付属幼稚園解体に伴う１期・２期工事の区分
	7 月 14 日	長野県建設部施設課・設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係４社	付属幼稚園解体１期工事の実施と発掘調査工程等
	7 月 23 日	短期大学事務局・埋文センター・建設関係者	3 者で毎週水曜日に現地定例打合せ開始 7/23 ～
	8 月　6 日	短期大学事務局・埋文センター・建設関係３社	付属幼稚園解体１期工事の実施と発掘調査工程等
	8 月 28 日	設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係２社	付属幼稚園解体１期工事の実施と発掘調査工程等
	9 月　3 日	長野県建設部施設課・設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係３社	付属幼稚園解体１期工事の実施と発掘調査工程等
	9 月 17 日	長野県建設部施設課・設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係２社ほか	付属幼稚園解体２期工事の実施と発掘調査工程等
	11 月　5 日	長野県建設部施設課・設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係２社	付属幼稚園解体２期工事の実施と発掘調査工程等
	11 月 25 日	設立準備課・埋文センター・建設関係１社	H27 年度発掘調査の終了と現地引渡し
	12 月　3 日	設立準備課・埋文センター	H27 年度発掘調査の終了と現地引渡し
	12 月 17 日	設立準備課・埋文センター	1　H27 年度の事業進捗状況 2　H28 年度事業計画等

２．発掘作業と整理作業の経過

（１）発掘作業

平成 27 年度に発掘調査を行った。新県立大学施設整備事業に伴う発掘調査であり、施設建設予定地に調査区が設定された。調査区を１区から３区に区分し、調査を実施した（第１図）。

１区・２区は表土を重機で除去したのち、遺構検出を行い、弥生時代、古墳時代、平安時代を主体とした遺構の調査を実施した。３区は内容確認のためのトレンチ調査を実施し、市教委の試掘結果と同様包含層の分布が認められなかったため面調査は行わなかった。

発掘作業期間と調査面積は以下のとおりである。

平成 27 年４月７日から平成 27 年 11 月 28 日　　6,000㎡

（２）整理作業

図面、写真、遺構等の台帳類作成、遺物の洗浄と注記等の基礎整理は平成 27 年度に実施した。また遺物の分類、接合・復元作業も平成 27 年度に実施した。

平成 28 年度は遺物の実測、トレス、写真撮影、遺構図版作成等本格的に整理作業を開始した。図版組、原稿執筆をし、報告書の印刷製本を行った。

３．調査体制

調査体制は、第４表のとおりである。

第４表　調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成 27 年度	会津敏男	平林　彰	町田勝則	長谷川桂子、大澤泰智、鈴木時夫
平成 28 年度	会津敏男	平林　彰	町田勝則	長谷川桂子
平成 27 年度　発掘作業員 大澤紅美、岡村文雄、上畑幸子、菅雅孝、竹内福一、竹内美枝子、竹内鈴子、土屋美晴、傳田早苗、徳竹知従、徳竹寿幸、徳永理樹、戸谷利男、中沢和剛、中村かね子、中村國男、中村誠、松本正美、丸山高資、山岸あや子、山口良則、若林敏、和田明				
平成 27 ～ 28 年度　整理作業員 阿部高子、市川ちず子、伊藤由美、猪俣万里子、臼井博子、大内秀子、小根山貞子、柄澤登紀子、窪田順、窪田翔、小池美香、児玉径子、小林愛、近藤朋子、坂田恵美子、塩野入奈菜美、島田由美、清水秋子、清水栄子、相馬麻織、祖山克彦、高松法子、塚田晴美、土屋悦子、中村智恵子、松本眞行、丸山千夏、柳原澄子、山下千幸				

第１図　地区設定図

４．調査日誌抄

平成27年度（発掘作業）

４月１日　受･委託・重機借上・現場建物運搬等・安全対策
　　契約締結　発掘作業開始（～11月30日）
４月８日　重機（0.45㎥）搬入
４月10日　安全対策（安全鋼板・防塵ネット・単管バリケード）
　　施工
４月13日　３区 重機によるトレンチ掘削開始
４月23日　現場建物（プレハブ・トイレ）運搬・設置
４月24日　電気仮設工事（契約締結４月20日）
４月28日　測量業務委託打ち合わせ（契約締結４月28日）
５月１日　３区 トレンチ調査終了　重機による埋め戻し
５月７日　発掘作業員作業開始（～11月30日）
　　水道仮設工事（契約締結４月22日）
　　契約変更等に関する協議
５月８日　敷鉄板設置
５月11日　1a区 重機による表土掘削開始　遺構検出調査開始
　　流路跡SD01・02・03検出調査
５月14日　測量業務委託　基準杭設定　単点測量等開始
５月15日　普及啓発「発掘だより」No.１発行　以降７号発行
　　（６月３日No.２・７月８日No.３・８月19日
　　No.４・９月11日No.５・10月16日No.６・11月24
　　日No.７・12月17日No.８）
５月20日　2c区 重機による表土掘削開始
５月21日　安全対策（安全鋼板）撤去
６月２日　1a区 調査終了・重機による埋め戻し
６月３日　発掘調査に関する協議（第１回）
６月４日　2c区 遺構検出・調査開始
　　竪穴住居跡SB01・02検出調査
６月９日　1b区 重機による表土掘削開始
６月15日　重機（0.25㎥）・クローラー搬入
６月16日　幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第２回）
６月18日　1b区 遺構検出　調査開始
　　竪穴住居跡SB03検出調査
　　墓跡SM01検出調査
６月22日　2b区 重機による表土掘削開始
７月１日　短期大学生　遺跡見学（58名）
７月６日　1b区 調査終了　重機による埋め戻し
　　2b区 遺構検出　調査開始

重機による表土掘削

壁削り

遺構調査

遺物出土状態図作成

７月７日　敷鉄板撤去・搬出　1a・1b区　調査区引き渡し
７月10日　2a区 重機による表土掘削開始
７月14日　2b・2c区 空撮による全景写真撮影
　　幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第３回）
７月17日　2b区 調査終了　重機による埋め戻し
７月22日　2a区 遺構検出　調査開始
　　竪穴住居・建物跡SB04～10検出調査
　　墓跡SM02検出調査
７月23日　長野女子高校生　遺跡見学（ 36名）定例連絡会
　　３区 調査区引き渡し
７月27日　現地公開（～７月31日） 来訪者 計280名
７月30日　定例連絡会
８月６日　幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第４回）
　　安全対策（防塵シート）移設
８月20日　定例連絡会
８月26日　短期大学生　発掘体験（17名）
８月27日　定例連絡会
８月28日　幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第５回）
９月３日　幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第６回）
９月７日　1c区 重機による表土掘削開始
９月10日　定例連絡会
９月11日　2a区 高所作業車による全景写真撮影
９月15日　2c区 調査終了　重機による埋め戻し
９月17日　長野県議会議員５名視察
　　解体工事と調査工程に関する協議（第７回）
９月25日　発掘作業員増員に関する協議
９月28日　水道延長仮設工事
９月29日　2a区 調査終了　重機による埋め戻し
　　1c区 遺構検出　調査開始
　　竪穴住居・建物跡SB11～17検出調査
　　掘立柱建物跡ST01検出調査
　　墓跡SM03検出調査
　　墓跡SQ02検出調査
　　流路跡・土坑SD01～10検出調査
10月１日　発掘作業員増員
10月７日　短期大学生 講義に伴う遺跡見学（110名）
10月８日　定例連絡会
10月15日　定例連絡会
10月18日　短期大学「六鈴祭」に伴う現地公開（見学者162名）
10月21日　調査研究員の増員に関する協議

遺構検出

写真撮影

土器洗浄

土器接合

10月22日　定例連絡会

10月31日　安全対策(防塵シート)撤去

２区 調査区引き渡し

11月１日　調査研究員増員

11月５日　解体工事と調査区埋め戻しに関する協議（第８回）

11月11日　1c区 空撮による全景写真撮影

11月12日　定例連絡会

11月24日　1c区 調査終了　重機による埋め戻し

11月25日　現地引き渡しに関する協議

11月30日　仮設水道・仮設電気撤去

安全対策（単管バリケード）撤去

発掘器材運搬作業　発掘作業員作業終了

発掘作業終了

12月１日　基礎整理作業開始（～３月31日）

基礎整理作業員作業開始

12月２日　現場建物（プレハブ・トイレ）撤去

12月３日　現地引き渡しに関する協議（第９回）

現地引き渡し

12月４日　埋蔵物発見届および発掘調査終了報告等

12月17日　予算執行状況および来年度予算確認等に関する協議（第10回）

12月24日　科学分析委託業務（C14年代測定）打ち合わせ

分析試料引き渡し（契約締結12月21日）

平成28年

１月６日　科学分析委託業務（花粉・珪藻・プラント･オパール分析）打ち合わせ　分析試料引き渡し（契約締結12月28日）

２月４日　遺跡報告会

２月14日　長野県埋蔵文化財センター出土品展

『掘るしんinしののい2016』開始（～2月19日）

出土遺物展示

３月８日　科学分析委託業務（C14年代測定）分析結果報告書一式納品

科学分析業務委託（花粉・珪藻・プラント･オパール分析）分析結果報告書一式納品

３月10日　基礎整理作業員作業終了

３月11日　測量業務委託　成果品一式納品

３月12日　長野県立歴史館『長野県の遺跡発掘2016』開始（～６月26日）　出土遺物および写真パネル展示

３月31日　本年度委託契約終了

平成28年度（整理作業）

原稿執筆、遺構図トレス、遺構図版編集、遺物の分類、接合、実測、トレス、遺物図版編集、遺物写真撮影、写真図版編集を行い、報告書を刊行。

４月１日　受委託契約締結

本格整理作業開始（～３月31日）

４月12日　本格整理作業員作業開始（～３月16日）

原稿執筆、遺構図デジタルトレス（～７月13日）

土器実測開始（～７月６日）

４月15日　金属製品（５点）保存処理開始（～７月21日）

５月６日　小山岳夫氏（御代田町）弥生土器見学

５月26日　市澤英利（（一財）長野県文化振興事業団理事）弥生土器見学

６月７日　石器実測開始（～８月10日）

６月８日　科学分析委託業務（付着物分析）契約締結　実施打ち合わせ　分析試料引き渡し

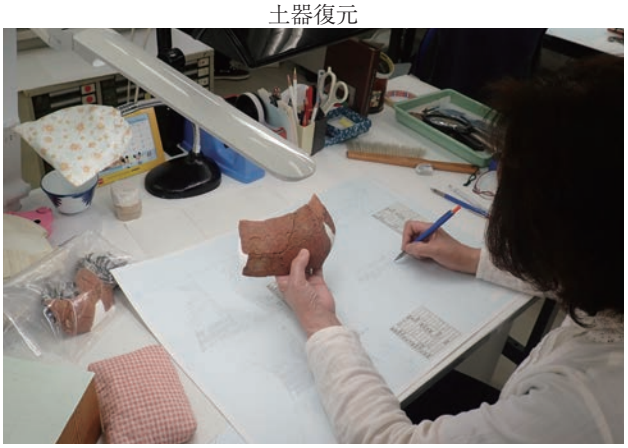
６月10日　土器トレス開始（～７月８日）

６月27日　写真撮影用土器着色開始（～7月15日）

７月７日　長野市立三陽中学生 職場体験で作業見学

７月13日　茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大

土器復元



土器実測

学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員による出土動物歯骨鑑定指導
７月19日　普及啓発「発掘だより」No.９発行 以降１号発行（１月18日No.10）
７月25日　長野市立川中島中学生 職場体験で作業見学
７月26日　長野市立篠ノ井東中学生 職場体験で作業見学
８月２日　科学分析業務委託（付着物分析）成果品一式納品
８月３日　金属製品実測開始（～８月19日）
８月８日　遺物写真撮影委託業務打ち合わせ、実施（～９月１日）（契約締結７月27日）
８月24日　資料調査 長野吉田高校出土遺物について
長野市埋蔵文化財センター
９月５日　金属製品トレス開始（～９月９日）
９月８日　国立長野工業高等専門学校生インターンシップ受け入れ（～９日）
９月20日　中間報告（設立準備課）
９月27日　写真撮影委託 成果品一式納品
10月11日　石器トレス開始（～11月11日）
長野市立犀陵中学生 職場体験で作業見学
10月12日　長野市立松代中学生 職場体験で作業見学
10月18日　小諸高校生 キャリア教育で作業見学
10月22日　短期大学「六鈴祭」において出土品展開催（～23日）（167名）
10月28日　若槻養護学校中学部で出前授業（社会科授業「遺跡に親しむ」）
長野市立大岡中学生 職場体験で作業体験
11月28日　資料調査 愛知県埋蔵文化財センター
11月29日　資料調査 岐阜県埋蔵文化財センター
12月５日　長野合同庁舎ロビーにおいて出土品公開（～15日）
12月27日　本報告書印刷製本等委託業務（明和印刷（株））
契約締結　打ち合わせ
平成29年
１月23日　笹澤浩（元長野県文化財保護審議委員）による指導（吉田式土器）
２月18日　長野県埋蔵文化財センター出土品展
『掘るしんinしののい2017』開始（～２月24日）
出土遺物展示
３月15日　報告書刊行

遺構デジタルトレス

遺物写真撮影

出土動物歯骨鑑定指導

吉田式土器の指導

第２節　発掘作業と整理作業の方法

１．発掘作業の方法

埋文センターでは調査の統一を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。

（１）遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

浅川扇状地遺跡群　本村南沖遺跡（あさかわせんじょうちいせきぐん　ほんむらみなみおきいせき）

遺跡記号　ＢＡＳＭ

埋文センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット３文字で示す遺跡記号を用いている。１文字目は長野県を10分割した地区記号で、長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡を示す「Ｂ」、２文字目および３文字目は遺跡名のローマ字表記２文字を選択したものである。ただしすでに浅川扇状地遺跡群では埋文センターで吉田地区・桐原地区において発掘調査を行っており、その遺跡記号に「ＢＡＳ」を用いているため、４文字目のアルファベットを付け区別した。各種記録類や遺物の注記に上記の遺跡記号を使用している。

（２）遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、遺構の形状および特徴で区分した。

遺構番号は時代等にかかわらず、検出順に付けた。調査の結果、遺構でないことが判明した場合は欠番とした。

今回の発掘調査で用いた遺構記号は以下の種類がある。

ＳＢ：２ｍを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。

【竪穴住居跡・竪穴状遺構】

ただし平安時代の同形状の掘り込みについては、【竪穴建物跡】と呼称した。

ＳＤ：溝状の掘り込み。【溝跡、自然流路ほか】

ＳＫ：単独、もしくはほかの掘り込みとの関係が認められないＳＢよりも小さな掘り込み。

【土坑、土坑墓】

ＳＭ：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。【土坑墓、土器棺墓、周溝墓】

ＳＱ：遺物が面的に集中するもの。【遺物集中】

ＳＴ：ＳＢより小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【掘立柱建物跡】

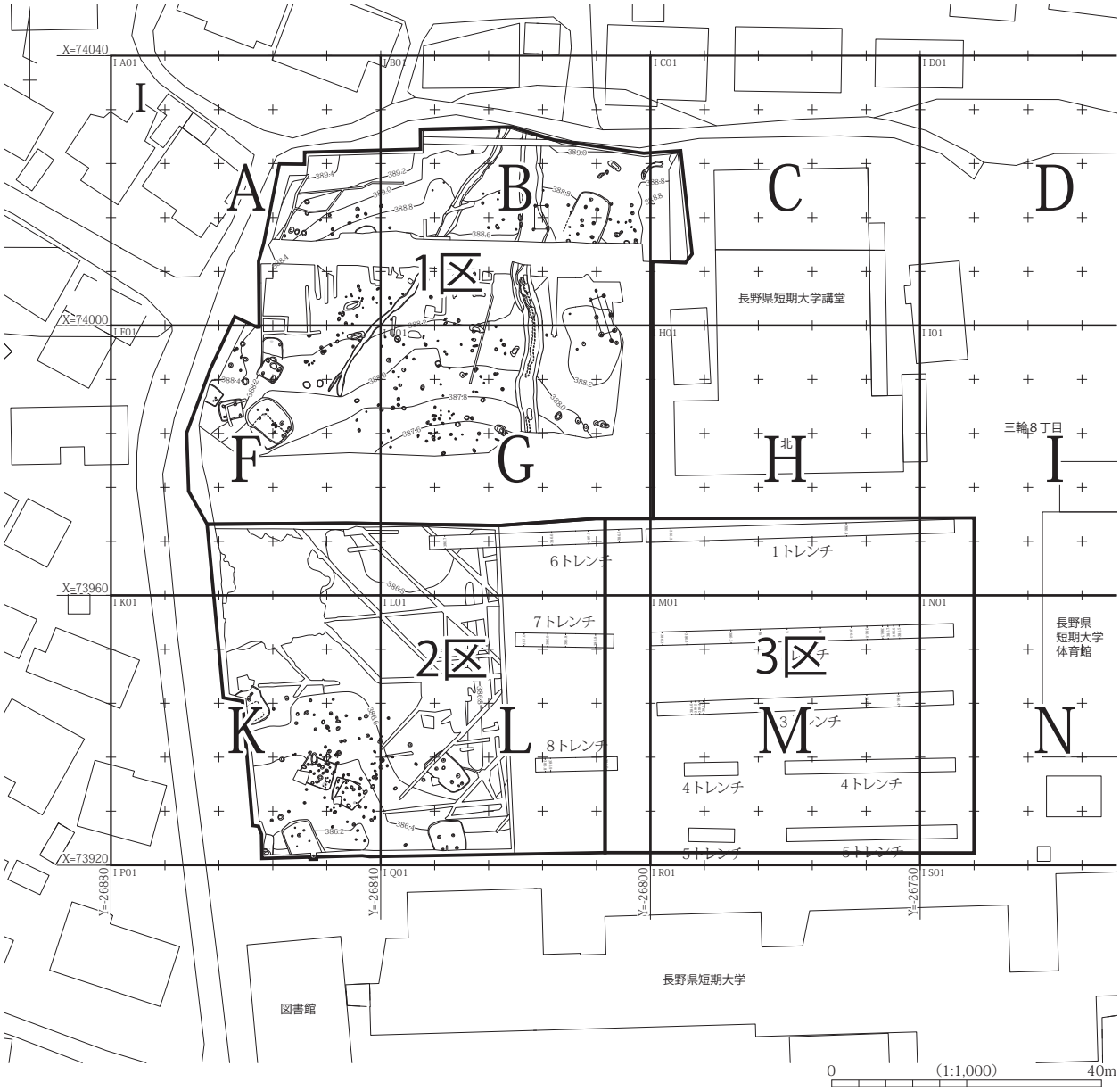
なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴等やＳＴを構成する個々の掘り込みにはピット（Pit）を付した。

（３）調査グリッドの設定と呼称（第２図）

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点（Ｘ =0.0000、Ｙ =0.0000）に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは大々地区・大地区・中地区・小地区の４段階に区分した。

大々地区は200ｍ×200ｍの区画で、ローマ数字で示した。Ｘ =74,040、Ｙ =-26,880を基準として調査対象地区全体にかかる１区画を設定し、Ｉと表記した。

大地区は大々地区を40ｍ×40ｍの25区画に分割したもので、北西から南東へＡ～Ｙまでの大文字ア



A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

大々地区 200m

大地区 40m

大地区（40×40mグリッド）：A・B・C…Y

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

大地区 40m

中地区 8m

中地区（8×8mグリッド）：1・2・3…25

グリッド名の呼称例
8mグリッドの記載例：I G07

第２図　調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称

ルファベットを用いた。中地区は大地区を８ｍ×８ｍの 25 区画に分割したもので、北西から南東へ１から 25 の算用数字を用いた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区である。

（４）調査区の区割りの設定（第１図）

グリッドとは別に調査区を１区～３区に分割した。１区、２区では表土を重機で除去し、遺構検出を行った。３区では重機で内容確認のトレンチ調査を行った。

（５）遺構の発掘

遺構検出はⅣ層とした地山の上面で行った。ただし、遺物包含層であるⅢ層を重機で掘削中に遺構を認めた場合はⅢ層中で検出を行い、遺構調査を実施した。調査面は１面である。検出された遺構の調査では、平面で遺構の形状や重複関係を把握してから精査にとりかかった。断面で遺構埋土を観察・記録し、掘り下げ、完掘状態を記録した。竪穴住居・建物跡は掘り上げて記録を行った後、床面下の状態を確認して調査を終了した。

遺物は遺構ごとに出土層位を分けて取り上げた。竪穴住居跡の埋土中の遺物は遺構内をセクションポイントを結んだ線で４分割し、北・南・東・西で分けた。出土地点の記録の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付けて取り上げた。遺構に属さない遺物は地区単位で取り上げた。金属器、有機質等の脆弱な遺物は脆弱遺物台帳を作成し遺物を管理した。

（６）遺構の記録

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘作業員が行った。前記の測量基準杭による簡易遣り方測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。遺構測量は、中地区（８ｍ×８ｍ）単位に図面用紙に記録した割付図と、必要に応じて個別の遺構ごとに図面用紙に記録した個別図を作成した。断面図はすべて図面用紙に記録した。遺構図の縮尺は１/20 の縮尺を基本とし、必要に応じて１/10 の縮尺で測量した。また、トレンチ位置図、調査区範囲、地形の測量は業務委託で実施した。

遺構の撮影は一眼レフデジタルカメラとマミヤ７Ⅱ（６×７）を用いてモノクロネガフィルム（ネオパン 100）・カラーリバーサルフィルム（フジクローム 100F）で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼き付けは業者に委託した。また空中写真撮影による調査区の遺構全体写真を業務委託により実施した。デジタル写真のファイル名は遺跡記号と通し番号を組み合わせたものとし、ＬＡＷデータとＪＰＧ形式のデータを保存した。

２．整理作業の方法

（１）遺物の整理について

ブラシを用いた水洗作業の後、注記マシンによる注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。土器、石器、金属器、歯骨類の素材別に整理を進めた。土器・石器は１cm 角以下程度の微細な資料を除きすべてに注記をした。遺跡名ＢＡＳＭ、出土地点または層位を以下の略号を用いて注記をした。

注記に用いた略号　床：床面・床下、表：表土、検：検出面、採：表採、カク：かく乱、
Ｚ：出土地点不明

土器･土製品については、接合･復元･補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。接合作業は遺構の周辺出土土器を含めて遺構ごとに実施した。切り合う遺構は、相互の遺構間接合を実施し、器形が推定できる竪穴住居・建物跡出土の土器は、ほかの住居跡との遺構間接合を実施したが、土器群全体の遺構間接合の実態を把握するには不十分である。実測は手実測により、１：１縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。また必要に応じて拓本も行った。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。

石器・石製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。剝片については接合作業を実施した。実測は手実測により、１：１縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。

金属器は、発掘調査後はシリカゲルを入れてタッパーに保管し、長野県立歴史館においてＸ線透過写真撮影を行った後、金属製品と判断した資料については保存処理を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。実測は手実測により、１：１縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。

歯骨片については水洗･乾燥後、鑑定を実施し、すべて破片のため写真･図化の必要がないと判断された。

トレスした遺物図は、画像編集ソフト Photoshop を用いてデジタルスキャニングと画像処理を行い、描画ソフト Illustrator と組版ソフト InDesing を用いてデジタル図版データを作成した。

遺物写真撮影は業者に委託し実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラと６×７判カラーリバーサルフィルムを使用した。

掲載した遺物については観察表を作成した。（第 16 ～ 20 表）

（２）遺構図面の整理について

遺構図面類はグリッドを基準にして図面用紙に１/20 で測量したものと、委託業務で単点測量後結線しデジタルトレスしたものがある。原図は記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。図面用紙に記録した平面図は、委託業務でデジタルトレスを行い合成し、グリッドごとに１/20 で出力したものを第２原図とした。基礎整理作業で作成した修正図や第２原図をもとに、遺構配置図（全体図）、個別遺構図、土層図等を作成し、描画ソフト Illustrator を用いてデジタルトレスを行い、組版ソフト InDesing を用いてデジタル図版データを作成した。

（３）写真記録の整理

フィルム写真はアルバムに収納し、撮影内容を注記した。デジタル写真はポータブルハードディスクとＤＶＤに記録し BASM0002 ～ BASM5420（IGP0002 ～ IGP5420）の通し番号をファイル名とし、ファイル名と撮影内容を記入した台帳を作成した。

３．遺物と記録の収納

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納し、遺物収納台帳を作成した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関連写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、ＤＶＤおよびポータブルハードディスクに記録した。

第３節　遺跡・遺物の公開方法

１．公開の方法

埋文センターが行う埋蔵文化財の公開は、発掘作業時に行うもの、整理作業時に行うもの、報告書刊行後に行うもの等、３つの段階がある。本書では、発掘作業時に行うもの、整理作業時に行うものについて取り上げる。

（１）ホームページでの公開、発掘だよりの配布

発掘調査の情報を迅速に、そして的確に公開することは、発掘調査の透明性確保という観点において重要である。埋文センターでは、月に１回程度、公式ホームページに調査情報を掲載するとともに、遺跡来跡者だけでなく遺跡周辺の住民に対し「発掘だより」を配布して、情報の早期公開・共有化を図るよう努めている。浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡では平成 27 年度に８回、平成 28 年度に３回、調査状況をホームページに掲載した。また「発掘だより」は平成 27 年度に８回、平成 28 年度に２回、配布を行った。内容については、第５表のとおりである。

（２）現地説明会、展示会の開催

「現地説明会」は発掘調査を進める過程で、調査状況を広く一般に公開し、説明を加えることで、より分かりやすい馴染みのある存在として遺跡を周知できる。埋文センターでは、年に１～２回程度、発掘調査の進行状況に応じて現地説明会を実施するように心掛けている。時に遺跡の周辺環境により多くの見学者を受け入れることのできない場合は、現地説明会の方法を、遺跡公開期間を限定し随時見学者を受け入れる「現地公開」に変更、開催通知範囲の広狭、公開期間の長短等を工夫し実施している。浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡では、見学者駐車場のスペースが確保できないことから「現地公開」のスタイルで平成 27 年７月 27 日（月）から 31 日（金）までの間遺跡を公開した。また短期大学六鈴祭において六鈴祭実行委員会からの依頼があり、10 月 18 日（日）に遺跡を公開した。短期大学構内での発掘作業であることから、短期大学生や教職員の関心が高く、授業として現地や出土遺物の公開を行った。

「展示会」は遺跡の所在する地域とより広い地域を対象にそれぞれ場所を選定し、展示公開した。開催内容については、第６表とおりである。

第５表　発掘だより・ホームページ

番号	発行日	掲　載　内　容	HP掲示日
1	平成27年５月15日	１．本格的に発掘調査を開始しました　２．浅川扇状地遺跡群とは　３．４月の調査　４．豆知識「延喜式」　※発掘開始のお知らせ	平成27年４月22日
2	６月３日	１．5月の調査　２．豆知識「小型丸底土器」	５月20日
3	７月８日	１．6月の調査	６月９日
4	８月19日	１．7月の調査　２．豆知識「吉田式土器とは」　※７/27～31現地説明会の報告	７月13日
5	９月11日	１．8月の調査　２．豆知識「再葬とは」　※８/26短期大学生の発掘体験の報告	８月19日
6	10月16日	１．9月の調査　２．豆知識「遺跡の名まえ」 ※浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡の名称を周知。10/7短期大学「地域と文化」受講生見学の報告	10月１日
7	11月24日	１．10月の調査　２．豆知識「掘立柱建物とは」 ※10/18短期大学学園祭「六鈴祭」遺跡公開の報告	11月10日
8	12月17日	１．11月の調査　２．調査成果　３．豆知識「片口土器とは」　※発掘終了のお知らせ	平成28年１月８日
9	平成28年７月14日	１．遺構実測図のトレス・編集作業　２．土器の実測・トレス作業　３．埋文センター施設公開のお知らせ	５月10日 ７月13日
10	平成29年１月18日	１．遺物写真撮影　２．報告書の編集・版組・刊行　※「掘るしんinしののい2017」のお知らせ	平成29年１月30日

第６表　現地説明会等

番号	実施日	公開の種類	参加者（数）	掲　載　内　容
1	平成27年７月１日	現地見学会	短期大学生・ 教職員 63名	遺跡の概要説明および出土遺物の見学
2	７月23日	現地見学会	長野女子高生・ 教員　37名	遺跡の概要説明および出土遺物の見学
3	７月27日 ～31日	現地公開	一般 280名	遺跡の現地公開と概要説明 ※信濃毎日新聞23面（７/29）・長野市民新聞３面（７/25）に掲載記事
4	８月26日	発掘体験	短期大学生 ・教職員 17名	遺跡の発掘体験および出土遺物の洗浄体験
5	10月８日	現地見学会	短期大学生・ 教職員 111名	遺跡の現地公開および出土遺物の展示解説
6	10月18日	現地公開	一般 162名	遺跡の現地公開および出土遺物の展示解説 ※短期大学学園祭「第48回六鈴祭」に伴う遺跡現地公開
7	平成28年２月14日 ～19日	展示会	一般 265名	長野県埋蔵文化財センター出土品展　「掘るしんinしののい2016」 （於: 埋文センター展示室）
8	３月12日 ～６月26日	展示会	一般	長野県立歴史館発掘調査速報展2016
9	10月22日 ・23日	展示会	一般 167名	遺跡の概要説明および出土遺物の展示解説 ※短期大学学園祭「第49回六鈴祭」に伴う遺物展示公開
10	12月５日 ～15日	展示会	一般	長野県長野合同庁舎１階ロビー、遺跡速報展
11	平成29年２月18日 ～24日	展示会	一般	長野県埋蔵文化財センター出土品展　「掘るしんinしののい2017」 （於: 埋文センター展示室）

発掘だより

遺跡の現地公開と概要説明

短期大学生　遺跡の発掘体験

発掘体験記念バッジ

短期大学生　現地見学会

短期大学学園祭「第 48 回六鈴祭」に伴う遺跡現地公開

長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in しののい 2016」

短期大学学園祭「第 49 回六鈴祭」に伴う遺物展示公開

調査スタッフ

第２章　遺跡の位置と環境

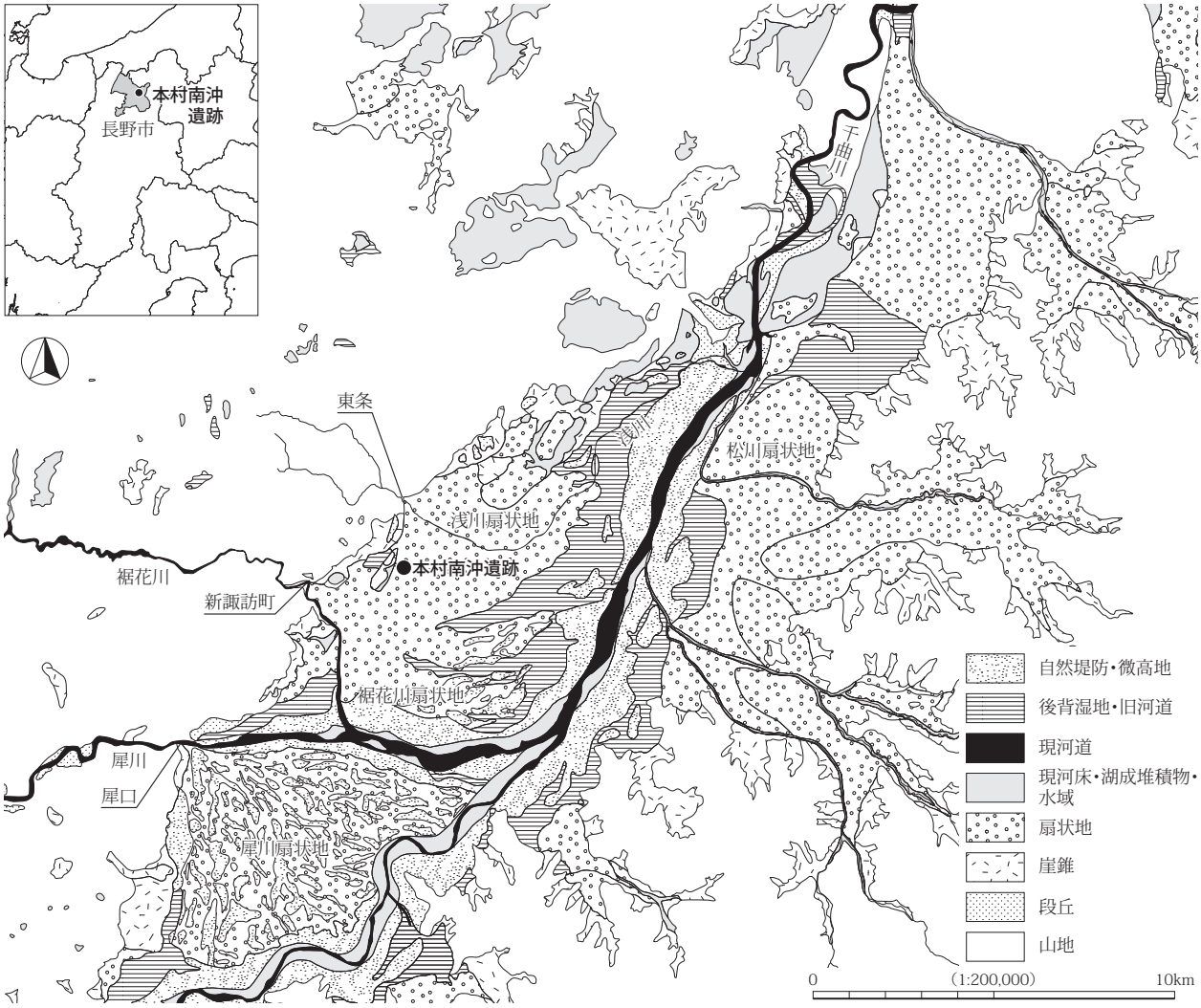
第１節　地理的環境

浅川扇状地遺跡群は長野盆地北西部に位置する（第３図）。長野盆地は西側に主に堆積岩類からなる標高 900m 以下の西部山地（丘陵）、東側に主に火山岩類からなる最高所 2,000m の東部山地（河東山地）に挟まれた南北約 30km、東西幅約８～ 10km の紡錘形をしている。盆地の西縁山麓線は北北東－南南西の直線状で、長野盆地西縁断層が走っている。東縁の山麓線は屈曲している。周囲の山地からは河川が流入し下流部に扇状地を形成している。主なものに西部山地の南側から、犀川扇状地、裾花川扇状地、湯福川扇状地、浅川扇状地、東部山地から松川扇状地がある。盆地内を流れる千曲川はこれらの扇状地に影響を受けながら自由蛇行し、南南西から北北東に向かって流れ、自然堤防や後背湿地、旧河道等の氾濫原を形成している（第４図）。

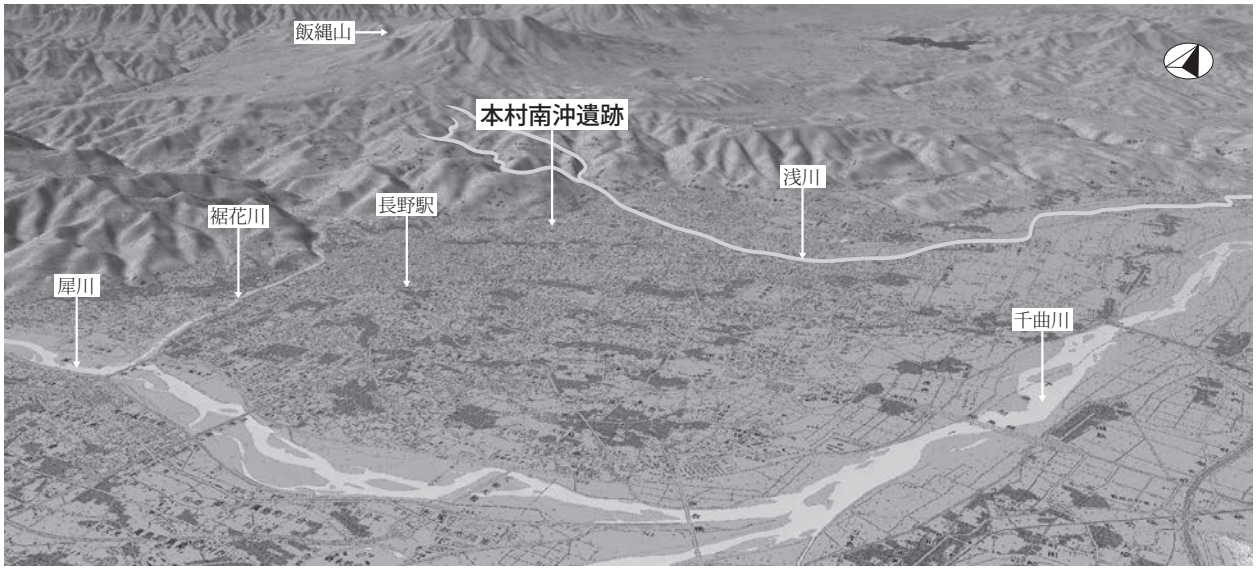
犀川扇状地は犀口（標高 370m）を扇頂とし南東方向に広がり、扇端が千曲川と接する。長野盆地内で最も大きい扇状地であり、勾配が４/1,000 と緩いため千曲川氾濫原との明確な境がない。裾花川扇状地は新諏訪町（標高 400m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地中心部が発達する。裾花川が長野県庁付近で方向を南に変え、犀川へ合流するのは江戸時代に人工的に川筋を掘削したためである。それ以前は県庁から東へ流れ千曲川と合流していた。現在市街地を流れる北八幡川、南八幡川等は裾花川の分流である。湯福川扇状地は善光寺の北西、箱清水の湯福神社（標高 420m）を扇頂とし、裾花川の古い扇状地面を覆う急勾配の新しい扇状地である。浅川扇状地は飯縄山（標高 1,917m）南東麓を源流とする北浅川と南浅川が真光寺で合流した浅川が運搬した土砂で形成される。浅川東条付近（標高 435m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地が発達する。扇頂部で浅川は扇状地面を開析するが、扇状地が開けてくるとかつては天井川を形成していた（現在では河川改修が進み解消されている）。浅川は富竹で流れの向きを南東から北東に変え、上駒沢で新田川を、下駒沢で駒沢川を合流し北流した後、上高井郡小布施町で千曲川と合流する。扇端側は千曲川氾濫原と接していて、最も標高が低いのは下駒沢（標高 332m）である。また裾花川扇状地とも接し、境は善光寺下駅と東和田を結ぶ線である。浅川扇状地遺跡群はこの浅川扇状地上に立地し、多くの遺跡が登録されている（第５図）。

本村南沖遺跡は長野市三輪８丁目、短期大学構内に所在する。長野電鉄本郷駅から北西約 500m、浅川扇状地扇央部分の西端で南東方向に傾斜する地形にあたり、標高は約 387 ～ 390m を測る。遺跡の南西にある康楽寺墓地東側から短期大学の北西隅、長野県長野高等学校東縁を通り、湯谷小学校南西までの約 1.5km にわたって南南西－北北東方向に延び、２～４m ほどの段差で幅 100 ～ 200m の撓曲崖を伴う。城山断層（活断層研究会 1980）といわれ、1847 年（弘化４年）の善光寺地震によって動いたと考えられているが、この撓曲崖が 1847 年の善光寺地震１回で形成されたものか、それ以前の地震の影響があるかどうかは不明である。長野市が作成した１/3,000 地形図（大正 15 年測量、昭和 27 年修正）によれば、遺跡周辺は田畑や桑畑、果樹畑が広がっている。

第３図　本村南沖遺跡の位置

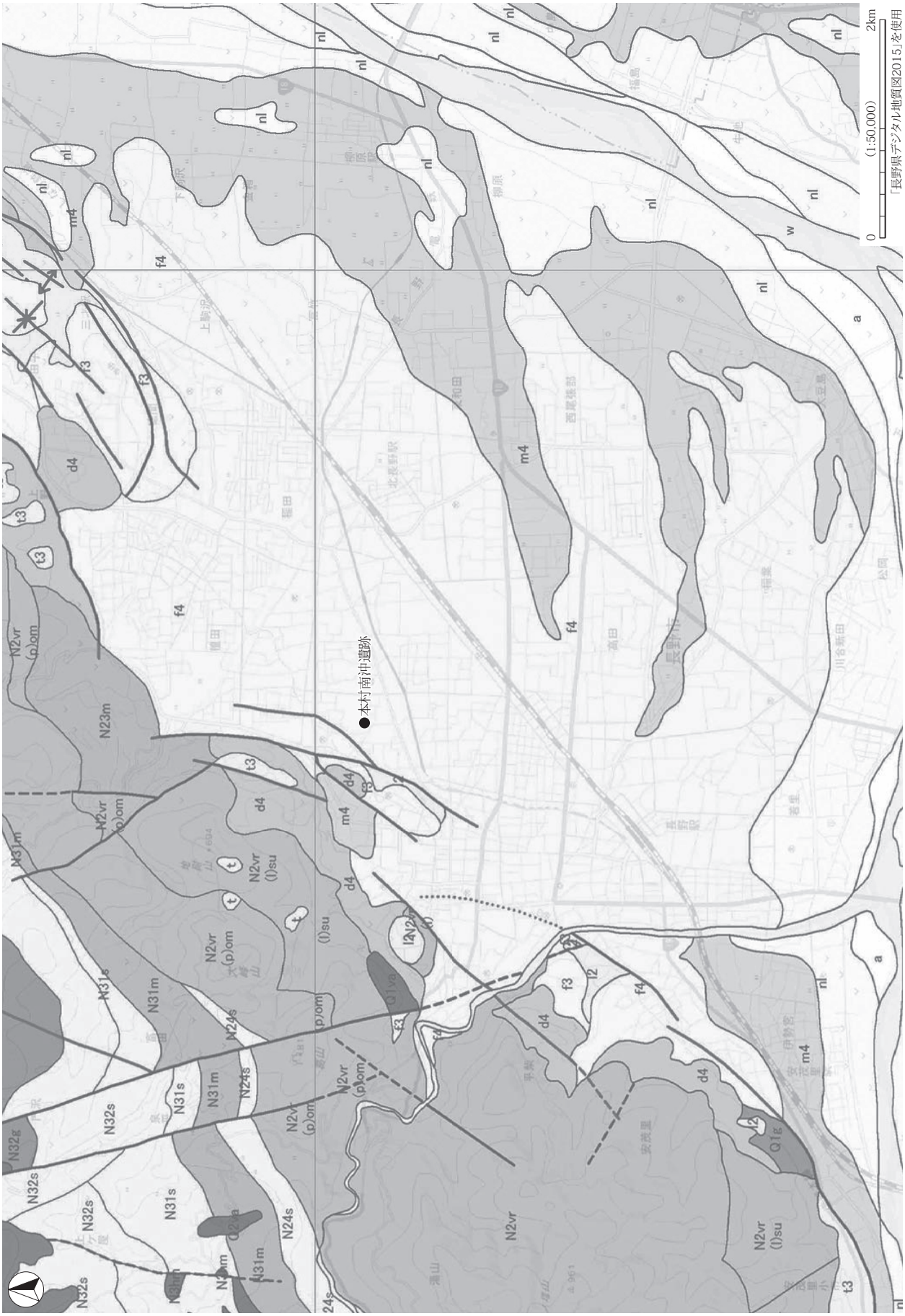


第４図　遺跡周辺地形区分図

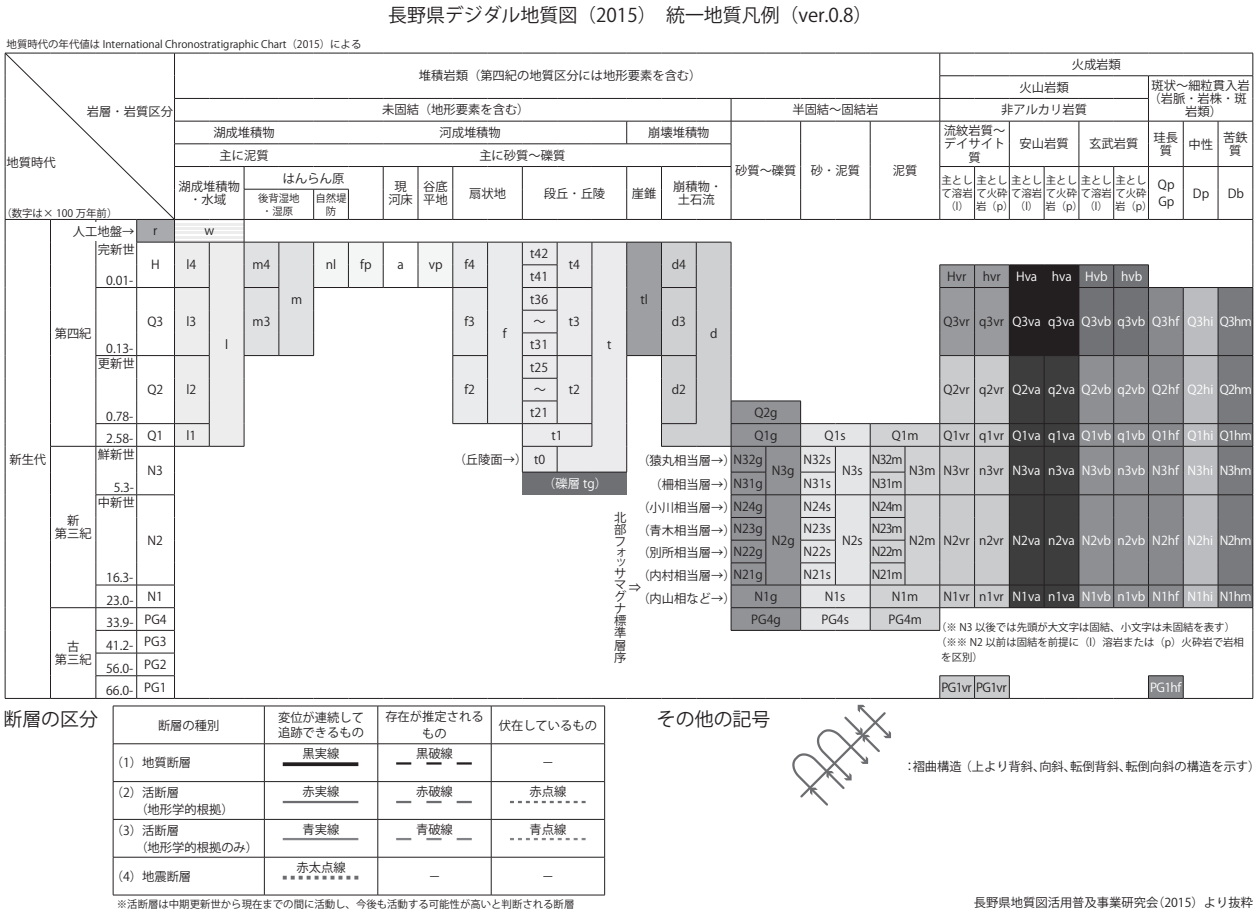


カシミール 3D にて作成

第５図　本村南沖遺跡周辺の鳥瞰図（南西より）



第６図　遺跡周辺地質図



第７図　地質図凡例

浅川が運搬する土砂は後背地である新第三紀中新世、鮮新世、第四紀更新世の堆積物からなる（第６・７図）。下位より中新世の青木層相当層である半固結から固結の泥質の浅川泥岩層（N23m）、中新世の小川層相当層である裾花凝灰岩部層の流紋岩質からデイサイト質の溶岩（N2vr（l））と火砕岩（N2vr（p））、鮮新世の柵層である半固結から固結の砂・泥質岩（N31s）と泥質岩（N31m）、鮮新世の猿丸層である半固結から固結の砂質～礫質岩（N32g）と砂・泥質岩（N32s）、前期更新統である半固結から固結の砂質～礫質岩（Q1g）が分布している。飯縄山は安山岩質の溶岩や火砕岩（q2va）からなる成層火山で、所々に溶岩ドームを形成している。今から 25 万年前に噴火を開始し５万年前まで活動していたと考えられている（長野県地質図活用普及事業研究会 2015）。

本村南沖遺跡西方の長野市城山丘陵には更新世中期末から後期にかけて堆積した南郷層が分布する。長野盆地内に形成された湖成堆積物で、盆地西縁に沿って分布する。全体に砂礫層、下部ほど礫層優勢である。礫種は亜円礫の安山岩、凝灰岩、円礫のチャート、粘板岩等の古期岩類で礫径は大礫以下である。

浅川伺去真光寺では油井が掘られ、石油の生産が行われた。現在は稼働しておらず、ループ橋の脇に石油井戸だけ残されている。浅川泥岩層からの産出である。真光寺のブランド薬師の南方および東方に分布する裾花凝灰岩層からベントナイト（白土）が採掘されていたが、現在は稼働していない。北郷では猿丸層に含まれる最大数 10cm ほどの亜炭層を資源難であった第二次世界大戦中に採掘していた。現在は採掘されていない。遺跡南西約 20km の長野盆地南部に矢崎山陶石鉱山（千曲市八幡矢崎山）がある。この鉱山は裾花凝灰岩部層の流紋岩が熱水変質をして形成されたもので、耐火物の原料として利用された。現在は採掘されていない（加藤・赤羽 1986）。

第２節　歴史的環境

浅川扇状地遺跡群は長野市北部を代表する遺跡群である。水はけや日当たりが良いため人々にとって住みやすい場所であり、扇状地の広い範囲で各時代の人々が集落を営んだ痕跡が確認されている。

本村南沖遺跡（69）（図表番号）は浅川東条を扇頂に南東方向に広がる扇央部分で、南東方向に傾斜する地形にあたり、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構と遺物が発見されている。そのなかでも、集落の構成は弥生時代後期前半と平安時代９世紀中頃から後半期にほぼ限定されている。本節では、当該時代を中心に本村南沖遺跡（69）周辺の遺跡の概要を、時代ごとに述べる（第８～10図、第７・８表）（註）。

１．周辺の遺跡

旧石器時代：旧石器時代の遺跡は、浅川源流に近い飯綱猫又池遺跡、飯綱大池遺跡等が確認されているが、浅川扇状地上およびその周辺では確認されていない。

縄文時代：浅川扇状地上で確認されている縄文時代の集落跡は比較的少ない。本遺跡に隣接する本村東沖遺跡（21）では晩期の土坑１基と、早期末から中期後半の多量の土器・石器が出土している。長野高校地点南側の緩斜面に縄文期の遺跡が展開する可能性が高いと考えられているが、調査による確認は行われていない。ほかに代表的な遺跡では、多量の土器や、玦状耳飾りを中心に多彩な装身具が出土し、縄文時代を通して集落が営まれた松ノ木田遺跡（42）、早期から前期では住居跡や特殊磨石がみつかった牟礼バイパスＡ地点遺跡（103）等がある。中期では大規模な集落跡が営まれた檀田遺跡（16）、中期から後期の住居跡や土偶、ヒスイ製垂飾がみつかっている吉田古屋敷遺跡（45）、後期では敷石住居跡を検出した吉田四ツ屋遺跡（44）等がある。晩期の遺跡は非常に少なく、上述の遺跡のほか、吉田古屋敷遺跡（45）で遺物が出土する程度である。

弥生時代：中期後半の栗林式期には、檀田遺跡（16）、水内坐一元神社遺跡（78）、中俣遺跡（79）等で集落跡が確認されている。檀田遺跡（16）では微高地ごとに形成された複数の居住域と、居住域に近接する位置に設けられた墓域が検出されている。この時期の拠点的集落であった可能性が高く、墓域も集団墓地的な性格であったと考えられる。後期初頭には吉田式の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（31）がある。吉田式期の集落跡は三輪地区ではこれまで確認されていなかったが、本村南沖遺跡（69）では今回の調査で吉田式期の住居跡を検出した。発見された新資料から浅川扇状地上の吉田式期の集落の広がりを検討する要素が得られた。後期前～後半には、箱清水式の標式遺跡である箱清水遺跡（152）をはじめとして、本村東沖遺跡（21）、長野女子高校校庭遺跡（24）、下宇木遺跡（26）等がある。本村東沖遺跡（21）上松東団地地点では円形周溝墓・木棺墓・土器棺墓が検出されており、この時期の墓域としての様子もうかがえる。

古墳時代：三輪地区では長野女子高校校庭遺跡（24）、下宇木遺跡（26）、三輪遺跡（27）等で集落跡が確認されている。浅川扇状地上では、古墳時代の中心的な集落跡として本村東沖遺跡（21）が挙げられる。上松東団地地点では前期の住居跡・遺物がみつかっており、長野高校地点では中期から後期にかけての大型住居跡が集中傾向にある。出現期のカマド・間仕切り溝・ベッド状遺構等特殊施設の画一的配置もみられる。出土遺物には多量の古式須恵器、まとまって出土した石製模造品の未製品、子持勾玉や土鈴等祭祀的性格の強い特殊遺物等がある。このことから本村東沖遺跡（21）は古墳時代中期の中核的集落であると考えられる。また地附山前方後円墳を盟主墓とする地附山古墳群（117）と同時期の土器が多量に出土しており、地附山古墳群（117）との密接な関連性も考えられる。また、浅川端遺跡（30）では大陸とのつ

ながりを示す青銅製の馬形帯鉤が出土している。祭祀に関連する遺跡では、５世紀から７世紀の水辺の祭祀遺構が確認されている駒沢祭祀遺跡（38）がある。そのほか中期の三才古墳（120）、中期後半に比定される本堂原１号古墳（121）、後期の円墳で直刀や装飾品、馬具等が出土している湯谷東古墳群（55）、６世紀頃の築造と推定される南向塚古墳（139）等がある。

奈良時代：三輪地区においては三輪遺跡（27）三輪保育園地点で住居跡が確認されているが、ほかは遺物が少量出土するのみである。浅川扇状地上では浅川端遺跡（30）、吉田四ツ屋遺跡（44）、二ツ宮遺跡（39）、北陸新幹線調査地点（77）等があり、二ツ宮遺跡（39）では奈良時代後半頃に廃棄されたと考えられる瓦製鴟尾が溝跡から出土している。周辺では裾花川扇状地上の八幡田沖遺跡（82）、御所遺跡（83）、芹田東沖遺跡（84）等で集落跡が確認されている。

平安時代：本村東沖遺跡（21）、辰巳池遺跡（33）、芹田東沖遺跡（84）で８世紀末から９世紀代、二ツ宮遺跡（39）では前期から末期の集落跡が確認されている。10 世紀から平安時代末期にかけては芹田小学校遺跡（81）、小板屋遺跡（50）、寺村遺跡（86）、西方遺跡（85）、上中島遺跡（80）、御所遺跡（83）、牟礼バイパスＣ地点遺跡（105）、浅川西条遺跡（18）等が確認されている。

中世・近世：中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城跡（56）をはじめ本堀（65）・押鐘（58）・相木（57）・平林（74）・和田（東和田城（76）・西和田城（149））等の城館址がある。本村南沖遺跡（69）からは青磁片が出土したのみで、該期の遺構は確認されなかった。

２．歴史的環境

旧石器時代には、浅川源流である飯綱高原の湖沼周辺に動物が集まり、人々は動物たちを追ってきてこの地を生活の舞台とした。続く縄文時代になると、山間地に住んでいた人々は徐々に長野盆地へと生活の場所を移動してくるようになる。

浅川扇状地で大規模な集落が形成され、本格的な開発が始まったのは弥生時代に入ってからである。稲作文化の伝来により、人々は山から平地へと移り住み家を構えるようになった。浅川の氾濫を受けない微高地には多くの集落がつくられ、社会の仕組みも縄文時代とは大きく変わる。後期の千曲川流域では地域色の強い「赤い土器のクニ」文化圏が形成され、弥生時代の終わり頃にはムラ長の墓が築造されるようになる。これらの墓跡からは鉄製武器等の副葬品がみつかっている。

古墳時代に入ると、大和政権によって広域を結ぶ道が整備された。この道は古東山道とよばれ、松本平や善光寺平へもこの道につながる支道が延びていたことが古墳の分布から確認できる。この頃には「王」の登場により地域的政治圏が形成されるようになり、長野盆地では前方後円墳が築造されている。５世紀以後はこの道を通じてカマドや馬匹・馬具、須恵器等が伝えられ、新しい文化が広まっていった。

古代には古東山道等を母体とした令制東山道が整備され、支道を通じて長野の地でも陸上交通路の重要性が増大した。『善光寺縁起』によると、７世紀半ばに善光寺が建立され、以降長野の地は「三国一の霊場」善光寺の門前町として親しまれ、繁栄の大きな要因となった。

『日本三代実録』巻十二の清和天皇貞観八年（866 年）二月七日の条に、「国司、講師が水内郡の三和・神部の両神に派遣され、奉幣・転読して憤怒を鎮める」と美和神社に関する記録が確認されている。美和神社は、『延喜式』神名帳記載の水内郡九座中の一社であり、祭神は三輪大物主・相殿に国業比売を祀る。医薬の神として信仰されている。創建年代の詳細は不明だが、同書の貞観三年（861 年）には相殿に祀られる国業比売についての記録もあり、古くから美和神社が鎮座していたことがうかがわれる。「三輪」の地名はこの美和神社に起因するものとされ、中世には三和とも書いたようである。平安時代末期にはこの地域に信濃 28 牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢等の名称はその名残と考え

られる。広大な扇状地は好適な放牧地であったようだ。

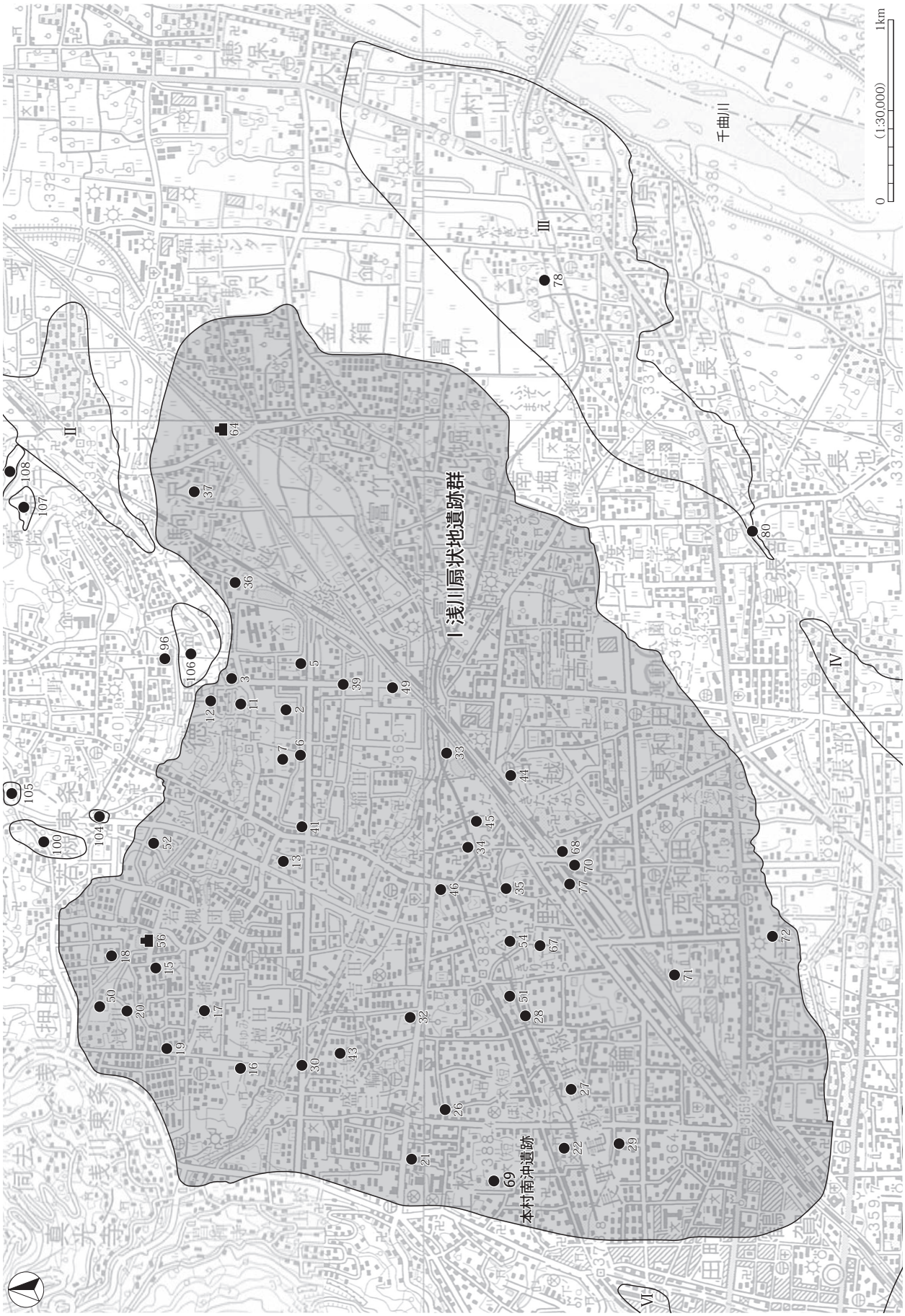
中世には幕府の政策により、焼失した善光寺の再建が行われる。善光寺信仰は全国に広がり、参詣者が増加するに伴って道も発達した。室町時代には戸隠・飯綱信仰と併せ多くの人々が長野市域を訪れた。近世には三輪の地にも北国街道が通り、善光寺へ参詣する人がこの地を行き来した。弘化４年（1847 年）に発生した善光寺地震のときは、７年に１回の御開帳行事と重なり、全国から訪れた多くの参詣者が犠牲になった。被害は県北部の広い範囲におよび、火災や土砂災害・洪水等二次災害も深刻であった。

註　長野市が公開している長野市行政地図情報『遺跡地図（埋蔵文化財）』（2016 年現在）、須坂市が公開している『遺跡詳細分布図』（2016 年現在）、各教育委員会発行の遺跡発掘調査報告書をもとに作成している。本節で用いる遺跡に関しては、その出典を末尾の引用・参考文献一覧に譲る。

Ⅰ浅川扇状地遺跡群
Ⅱ三才遺跡群
Ⅲ小島・柳原遺跡群
Ⅳ裾花川扇状地遺跡群
Ⅴ安茂里遺跡群
Ⅵ長野遺跡群
Ⅶ綿内遺跡群
69 本村南沖遺跡
千曲川
裾花川
0
(1:50,000)
2km

第８図　周辺遺跡位置図

第９図　周辺遺跡位置図　弥生時代



第 10 図　周辺遺跡位置図　平安時代

第７表　周辺遺跡一覧（１）

地図番号	遺跡名	所在地（長野市は地区）	遺跡番号	時代 縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
長　野　市										
Ⅰ	**浅川扇状地遺跡群**		A-①	○	○	○	○	○	○	○
1	東居町	長野	A-000		○					
2	徳間柳田	若槻	A-012		○	○	○	○		
3	三反田	若槻	A-013	○	○	○		○		
4	五ツ屋	若槻	A-014		○					
5	徳間稗田	若槻	A-016					○		
6	徳間大南	若槻	A-017					○		
7	徳間中南	若槻	A-018					○		
8	徳間番場	若槻	A-019		○	○	○	○	○	
9	徳間榎田	若槻	A-020	○		○				
10	八幡社境内	若槻	A-022		○					
11	徳間寺下	若槻	A-023					○		
12	徳間古屋敷	若槻	A-024			○		○		
13	北浦田	若槻	A-027		○			○		
14	稲田坂口	若槻	A-028	○						
15	屋敷田	浅川	A-033					○		
16	檀田	若槻	A-035	○	○	○	○	○	○	
17	神楽橋	浅川	A-036		○	○	○	○	○	○
18	浅川西条	浅川	A-037			○	○	○		
19	浅川団地	浅川	A-039					○		
20	塚田	浅川	A-040					○		
21	本村東沖	長野	A-053	○	○	○	○	○		
22	三輪小学校（三輪遺跡）	三輪	A-054		○	○	○	○		
23	下宇木Ｂ	三輪	A-055			○				
24	長野女子高校校庭	三輪	A-056		○	○				
25	古宇木	三輪	A-057		○	○				
26	下宇木	三輪	A-058		○	○	○	○		
27	三輪	三輪	A-059		○	○	○	○	○	
28	返目	三輪	A-060		○	○	○	○		
29	本郷前	三輪	A-061		○	○	○	○		
30	浅川端	吉田	A-062	○	○	○	○	○		
31	吉田高校グランド	吉田	A-063		○					
32	信越放送局前	吉田	A-064		○			○		
33	辰巳池	吉田	A-065	○	○	○	○	○		
34	信濃吉田駅	吉田	A-066					○		
35	東部中学校	吉田	A-067		○	○	○	○		
36	駒沢新町	古里	A-072			○	○	○	○	
37	上長畑	古里	A-073			○		○	○	
38	駒沢祭祀	古里	A-074			○	○			
39	二ツ宮	若槻	A-080		○	○	○	○		
40	本堀	若槻	A-081		○	○			○	
41	稲添	若槻	A-082			○		○	○	
42	松ノ木田	浅川	A-084	○	○					
43	押鐘	吉田	A-085					○		
44	吉田四ツ屋	吉田	A-086	○	○	○	○	○		
45	吉田古屋敷	吉田	A-087	○	○	○	○	○		
46	吉田町東	吉田	A-088	○	○	○	○	○		
47	天神木	若槻	A-089						○	
48	樋爪	若槻	A-090		○	○				
49	権現堂	若槻	A-091			○	○	○	○	
50	小板屋	浅川	A-092				○	○		
51	桐原宮西	吉田	A-093			○	○	○		
52	迎田	若槻	A-094	○	○	○	○	○	○	
53	稲積一里塚	若槻	A-095							○
54	桐原宮北	吉田	A-099	○	○	○	○	○	○	
55	湯谷東古墳群	長野	A-110			○				
56	若槻里城跡	若槻	A-204		○	○	○	○	○	
57	相木城跡（相ノ木氏居館跡）	三輪	A-207						○	
58	押鐘城跡	吉田	A-208						○	
59	盛伝寺居館跡	吉田	A-209						○	
60	善教寺居館跡	吉田	A-210						○	
61	中越居館跡（宮下氏館跡）	吉田	A-211						○	
62	桐原要害（高野氏館跡）	吉田	A-212						○	
63	太田古屋敷割地	吉田	A-213						○	
64	駒沢城跡	古里	A-214			○		○	○	
65	本堀城跡	若槻	A-215						○	
66	宇木古城跡	三輪	A-221						○	
67	桐原牧野	吉田	A-501		○	○	○	○		
68	中越	吉田	A-502		○	○		○		
69	**本村南沖**	長野	A-503	○	○	○	○	○		
70	国鉄車両基地	小牧	B-009	○	○	○	○	○		
71	西和田	小牧	B-010		○			○		
72	平林東沖	小牧	B-023		○	○	○	○		
73	高山氏館跡（石渡館跡）	朝陽	B-202						○	
74	平林城跡	小牧	B-203						○	
75	穂里城跡	朝陽	B-212						○	
76	東和田城跡	小牧	B-213						○	
77	北陸新幹線調査地点	-	-	○	○	○	○	○	○	○
Ⅱ	三才遺跡群		A-②		○	○	○	○	○	○
Ⅲ	小島・柳原遺跡群		B-①	○	○	○	○	○	○	
78	水内坐一元神社	柳原	B-003		○	○	○	○		
79	中俣	柳原	B-004		○	○				
80	上中島	朝陽	B-019					○	○	
Ⅳ	裾花川扇状地遺跡群		B-②		○	○	○	○	○	
81	芹田小学校	芹田	B-013					○		
82	八幡田沖	芹田	B-015		○	○	○	○		
83	御所	芹田	B-016			○	○	○	○	
84	芹田東沖	芹田	B-017				○	○		
85	西方	小牧	B-018			○	○	○		
86	寺村	小牧	B-021					○		
Ⅴ	安茂里遺跡群		C-①	○	○	○	○	○		
Ⅵ	長野遺跡群		C-②	○	○	○	○	○	○	○
Ⅶ	綿内遺跡群		G-③		○	○	○	○	○	
87	沖	若槻	A-001	○						
88	二本松	若槻	A-003	○	○	○	○	○		
89	和出	若槻	A-004					○		
90	田子池上	若槻	A-005					○		
91	南田子	若槻	A-006					○		
92	田子窯跡	若槻	A-007					○		
93	上野	若槻	A-008		○					
94	田中	若槻	A-010	○	○	○	○	○		
95	田中窯跡	若槻	A-011					○		
96	徳間宮東	若槻	A-015					○		
97	赤萱平Ａ	浅川	A-038	○						
98	麻生	若槻	A-026		○					
99	寺山	若槻	A-029		○					
100	宮前	若槻	A-030		○			○		
101	湯谷	長野	A-052	○						
102	吉	若槻	A-075	○	○	○	○	○		
103	牟礼バイパスＡ地点	若槻	A-076	○		○				
104	牟礼バイパスＢ地点	若槻	A-077	○		○		○		
105	牟礼バイパスＣ地点	若槻	A-078					○	○	○
106	徳間本堂原	若槻	A-083	○	○	○		○		
107	籠沢	古里	A-097	○		○	○	○		
108	両堰	古里	A-098					○		

第８表　周辺遺跡一覧（２）

地図番号	遺跡名	所在地（長野市は地区）	遺跡番号	時代 縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
109	山千寺古墳群（3基）	若槻	A-102			○				
110	田子池古墳	若槻	A-103			○				
111	田子古墳群（6基）	若槻	A-104			○				
112	上野古墳群（4基）	若槻	A-105			○				
113	蚊里田古墳群（8基）	若槻	A-106			○				
114	鰻沢古墳群（4基）	浅川	A-107			○				
115	籠塚古墳	浅川	A-108			○				
116	県主塚古墳	浅川	A-109			○				
117	地附山古墳群（7基）	長野	A-111			○				
118	東平古墳群（6基）	長野	A-112			○				
119	滝上山古墳群（3基）	長野	A-113			○				
120	三才古墳（2基）	古里	A-114			○				
121	本堂原１号古墳	若槻	A-115			○				
122	親ヶ峯古墳	浅川	A-116			○				
123	駒沢古墳群（2基）	浅川	A-117			○				
124	半脳田古墳	浅川	A-118			○				
125	金塚古墳	浅川	A-119			○				
126	徳間古墳群（3基）	若槻	A-120			○				
127	東条古墳群（2基）	若槻	A-121			○				
128	ウマヤクボ古墳群（4基）	若槻	A-122			○				
129	土京山城跡	若槻	A-202						○	
130	若槻山城跡	若槻	A-203						○	
131	押田館跡（押田城跡）	浅川	A-205						○	
132	枡形城跡（桝形城跡）	長野	A-206						○	
133	堂沢出城跡（若槻山城跡）	若槻	A-216						○	
134	番所跡（若槻山城跡）	若槻	A-217						○	
135	北郷古城跡	浅川	A-218						○	
136	北郷本城跡	浅川	A-219						○	
137	多胡氏居館跡	若槻	A-220						○	
138	九反	芹田	B-024		○					
139	南向塚古墳	小牧	B-101			○				
140	長沼城跡	長沼	B-201						○	○
141	栗田城跡	芹田	B-204						○	
142	守護所跡（中御所居館跡）	芹田	B-205						○	
143	中沢城跡	小牧	B-206						○	
144	尾張城跡	小牧	B-207						○	
145	西巌寺館跡？	長沼	B-208						○	
146	赤沼館跡	長沼	B-209						○	
147	砂田城跡	柳原	B-210						○	
148	中俣城跡	柳原	B-211						○	
149	西和田城跡	小牧	B-214						○	
150	金子氏古宅跡	芹田	B-216						○	
151	千田城跡	芹田	B-217						○	
152	箱清水	長野	C-002		○					
153	平柴平	安茂里	C-006	○	○	○	○	○		
154	小柴見	安茂里	C-007					○		
155	杏花台	安茂里	C-008		○	○	○	○		
156	欠下	安茂里	C-011		○					
157	西河原墳墓	安茂里	C-013				○	○	○	○
158	西河原宮平	安茂里	C-014		○	○	○	○		
159	往生寺	長野	C-019	○						
160	朝日山東部	安茂里	C-022	○						
161	二子塚附近	安茂里	C-023		○					
162	西長野古墳群（3基）	長野	C-101			○				
163	花岡平古墳群（2基）	長野	C-102			○				
164	小丸山古墳群（3基）	長野	C-103			○				
165	王塚古墳	安茂里	C-104			○				
166	双子塚古墳	安茂里	C-105			○				
167	大黒山古墳	安茂里	C-106			○				
168	上弥勒寺古墳	安茂里	C-107			○				
169	弥勒寺古墳	安茂里	C-108			○				
170	北原古墳群（4基）	安茂里	C-109			○				
171	北原古墳？	安茂里	C-109?			○				
172	きょう塚古墳	安茂里	C-110			○				
173	中塚古墳（平柴中組古墳）	安茂里	C-111			○				
174	諏訪平古墳	安茂里	C-112			○				
175	諏訪の原古墳	安茂里	C-113			○				
176	遠藤塚古墳	安茂里	C-114			○				
177	大分坂古墳	安茂里	C-115			○				
178	小柴見古墳群（3基）	安茂里	C-116			○				
179	三合塚古墳	安茂里	C-117			○				
180	大門古墳群（2基）	安茂里	C-118			○				
181	（西河原）城古墳	安茂里	C-119			○				
182	穂高山古墳	安茂里	C-122			○				
183	岩下古墳	安茂里	C-123			○				
184	三合塚西古墳	安茂里	C-124			○				
185	木曽屋敷古墳　１号墳	安茂里	C-126			○				
186	木曽屋敷古墳　２号墳	安茂里	C-127			○				
187	新開古墳　１号墳	安茂里	C-128			○				
188	新開古墳　２号墳	安茂里	C-129			○				
189	阿弥陀堂山古墳	安茂里	C-130			○				
190	金堀塚古墳	安茂里	C-131			○				
191	春日社古墳	安茂里	C-132			○				
192	頼朝山城跡	長野	C-201						○	
193	横山城跡	長野	C-202						○	
194	大峰城跡	長野	C-203						○	
195	旭山城跡	安茂里	C-204						○	
196	小柴見城跡	安茂里	C-206						○	
197	窪寺城跡	安茂里	C-207						○	
198	大黒山城跡	安茂里	C-209						○	
199	木曾殿屋敷跡（朝日氏屋敷跡）	安茂里	C-211						○	
200	窪寺屋敷跡	安茂里	C-212						○	
201	山王館跡	長野	C-213						○	
202	泉平	芋井	D-011		○					
203	富田	芋井	D-015				○	○	○	
204	古代製鉄所跡	芋井	D-016				○	○	○	
205	葛山城跡	芋井	D-201						○	
206	明神前	豊野	J-064	○	○	○	○	○		
207	中ノ丁	豊野	J-065	○	○			○		
208	宮畑	豊野	J-070	○						
209	屋敷	豊野	J-071	○				○		
210	五厘林	若槻	J-072							
211	姥山古墳	豊野	J-129			○				
212	虚空蔵山古墳	豊野	J-130			○				
	須　坂　市									
213	八重森	八重森・上西久保	14		○					
214	高梨城館跡	高梨・築山	15						○	
215	梶田	梶田	16			○				
216	境沢	小山・仏施	19-7	○						
217	八幡	小山	19-8					○	○	
218	蒔田	小山・蒔田	21		○					
219	東畑	福島・東畑	27		○			○		
220	福島城跡	福島・城	28						○	
221	米持	米持	29		○	○		○		
222	井上・幸高遺跡群	井上・幸高	30	○	○	○		○		
223	井上氏居館跡	井上・御堀	31						○	
224	藤山古墳	井上・藤山	88			○				
225	福正寺跡	沼目・北冲	111						○	

第３節　調査成果の概要

１．遺跡の範囲

本村南沖遺跡は今回の発掘調査を契機に遺跡台帳に登録された。市教委が示す遺跡地図（長野市行政地図情報）に示されているが、遺跡範囲は未確定である。今回の発掘調査結果から南側、西側の調査区外へ弥生時代や平安時代の住居跡が延びており、遺跡はさらに周囲へ広がる可能性が高い。

２．調査成果の概要

新県立大学施設整備事業に伴う発掘調査は、調査対象地を１～３区に区分し、平成27年度に発掘作業を実施した（第11図）。

検出した遺構・遺物は縄文時代、弥生時代前期末、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代、平安時代９世紀後半のものである。このほかに、中世の陶磁器が１点出土したのみで、ほかの時代の遺構・遺物はなかった（第12～第18図）。土坑については、埋土の特徴と遺物から時期を判断できたものだけで、大半の土坑の時期は特定できなかった。

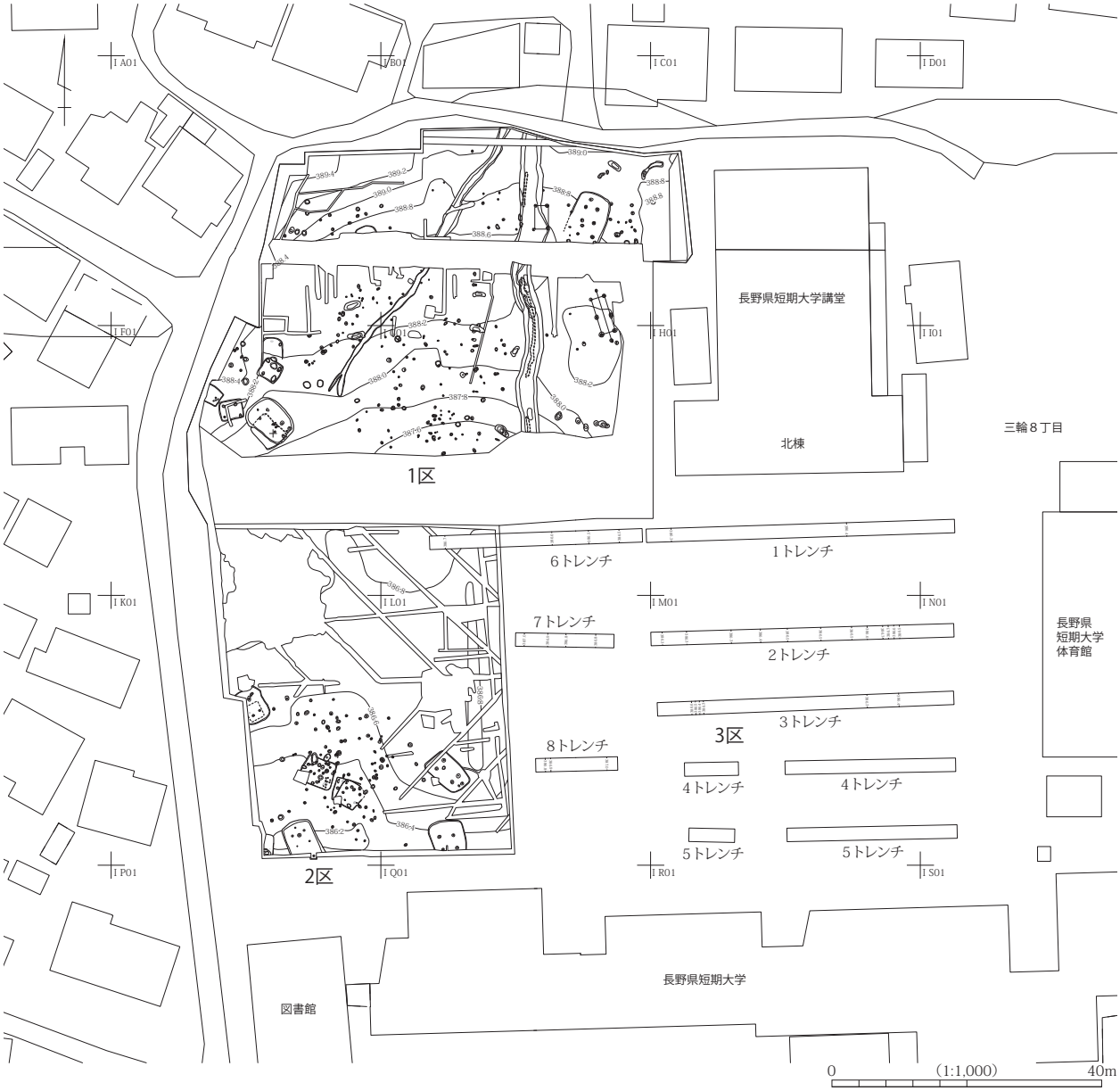
縄文時代では、土器（前期・中期・後期）が出土しているのみである。

弥生時代では、竪穴住居跡７軒（後期初頭）、掘立柱建物跡１棟（後期初頭）、土器棺墓３基（前期末１基、後期前半２基）、土坑墓１基、土坑４基、溝跡１条を検出した。竪穴住居跡は切り合いがなく、ほぼ同時期と考えられる。竪穴住居跡（SB03）は長軸方向が東に振れ、６本の主柱穴から構成されほかの６軒と異なる。竪穴住居跡から出土の遺物は壺が目立ち、甕は破片で復元できる個体はない。ほかに凹石や剝片、磨製石鏃の未製品が出土した。掘立柱建物跡は１間×２間で、長軸方向の側柱外に棟を支えるような柱穴があり棟持柱をもつ。土器棺墓（SM02）は３個体の大形の壺と１個体の甕からなる。溝跡は周溝墓に伴ったものであった可能性がある。

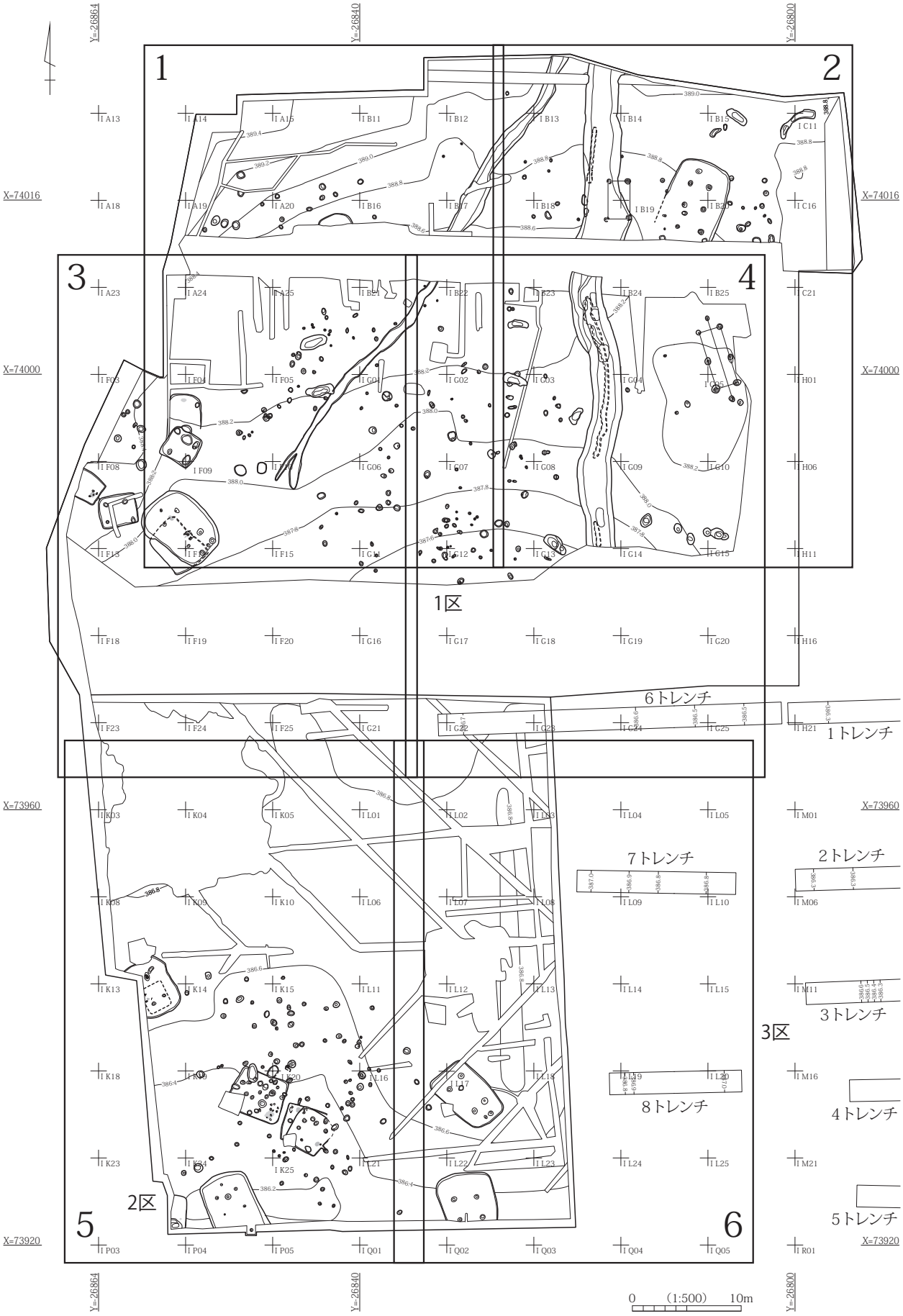
古墳時代では、流路跡１条（中期）を検出した。摩耗が少ない遺物の集中が認められることから、祭祀を行った可能性が考えられる。

奈良時代では、流路跡１条を検出した。

平安時代では、竪穴建物跡10軒（９世紀後半）、掘立柱建物跡１棟、土坑４基、流路跡１条を検出した。竪穴建物跡はSB06と07、SB11と12に切り合いがあるが、出土遺物からみた時期差はない。10軒はほぼ同時期に存在していたと考えられる。SB05からは毛抜きや刀子、釘等の鉄製品が出土した。掘立柱建物跡は奈良時代からの流路跡が埋没後につくられている。詳細な時期は不明である。

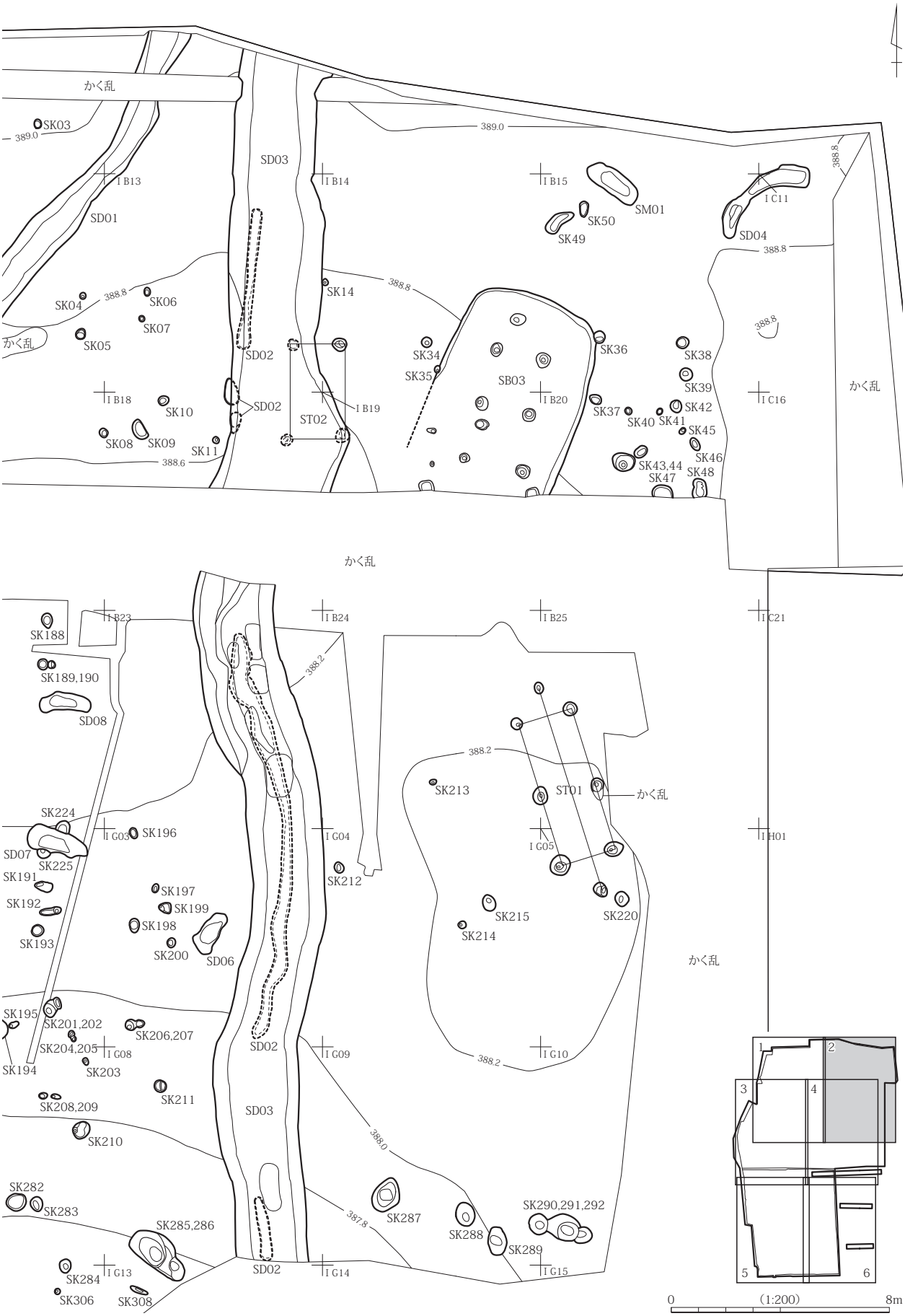


第 11 図　遺構分布全体図



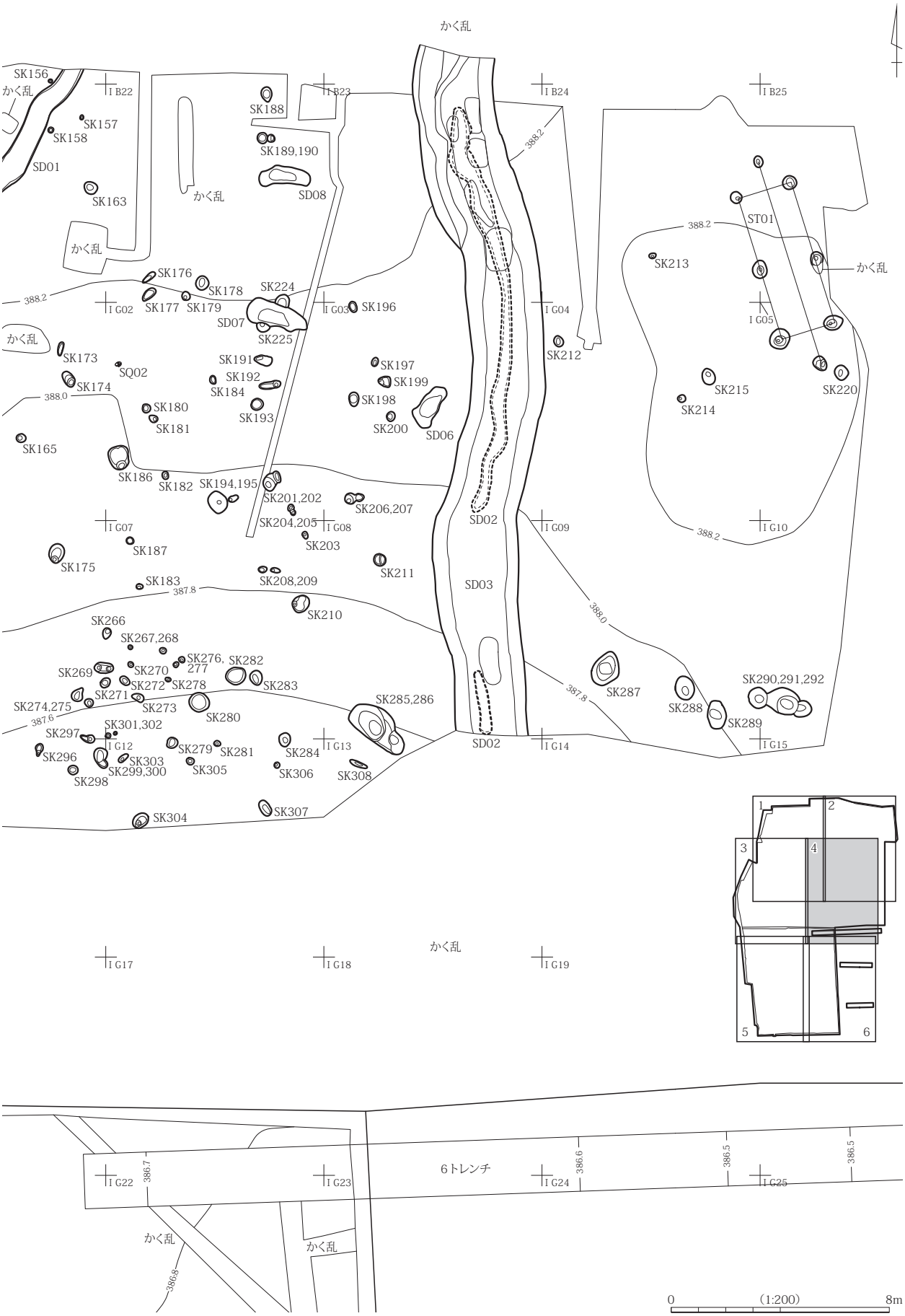
第 12 図　遺構分布部分拡大指示図

第 13 図　遺構分布部分拡大図（１）

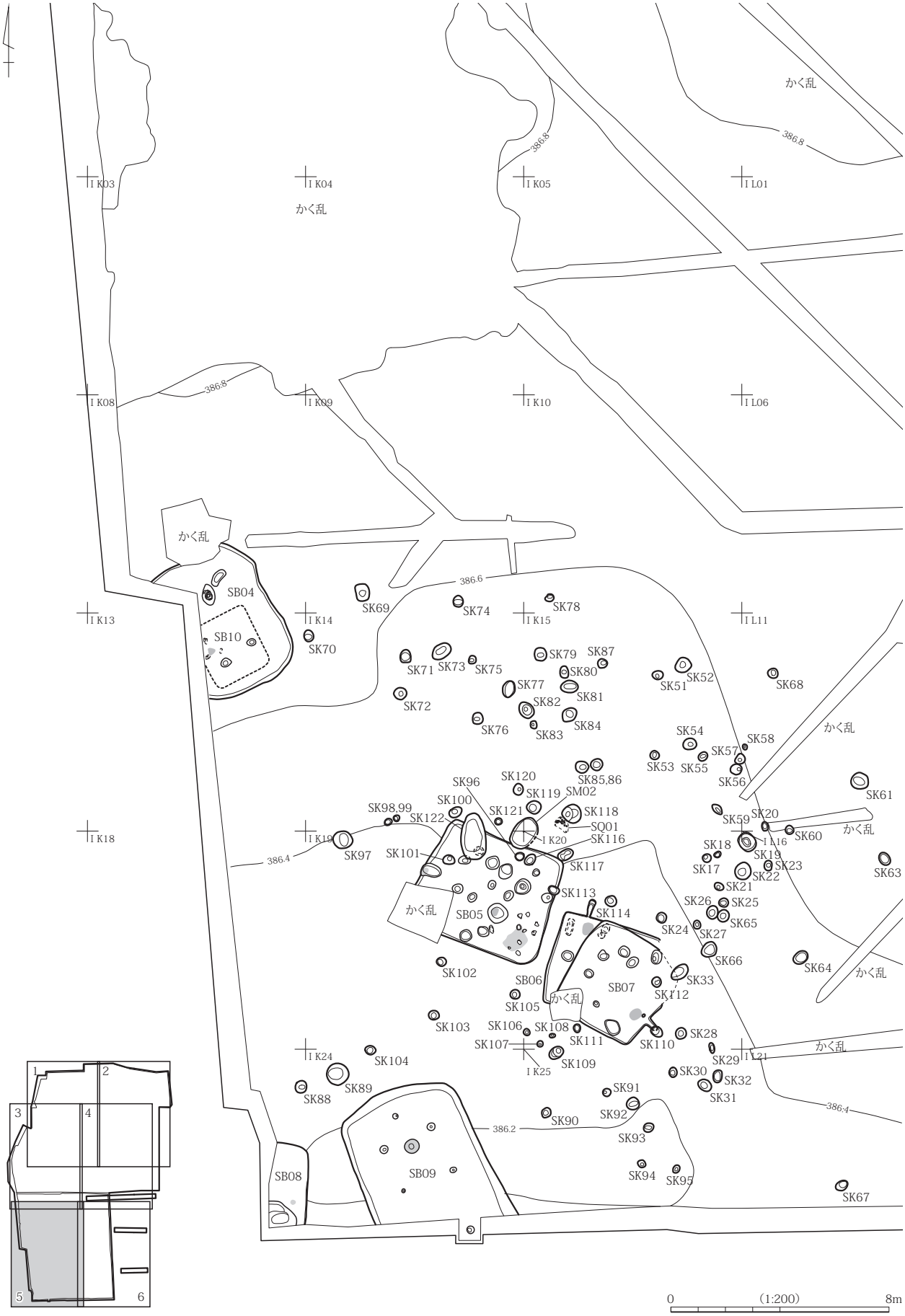


第 14 図　遺構分布部分拡大図（２）

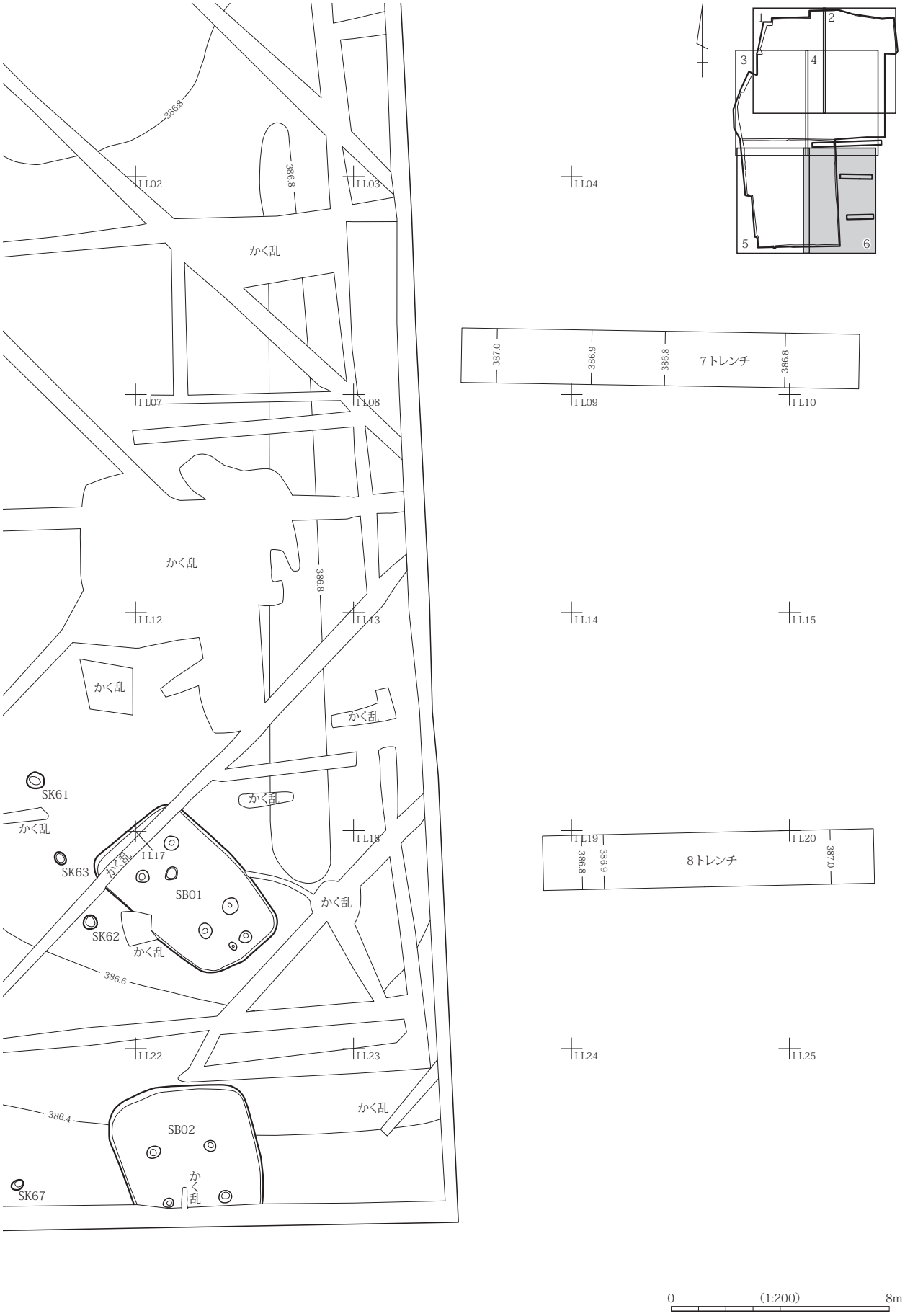
第 15 図　遺構分布部分拡大図（３）



第 16 図　遺構分布部分拡大図（４）



第 17 図　遺構分布部分拡大図（５）



第 18 図　遺構分布部分拡大図（６）

第４節　基本層序

層序は調査地区の壁断面の土層観察を行って把握した。また遺構調査終了後、深掘りを行い下位に遺物包含層の有無を確認し、堆積物の記録に努めた（第 19 図）。

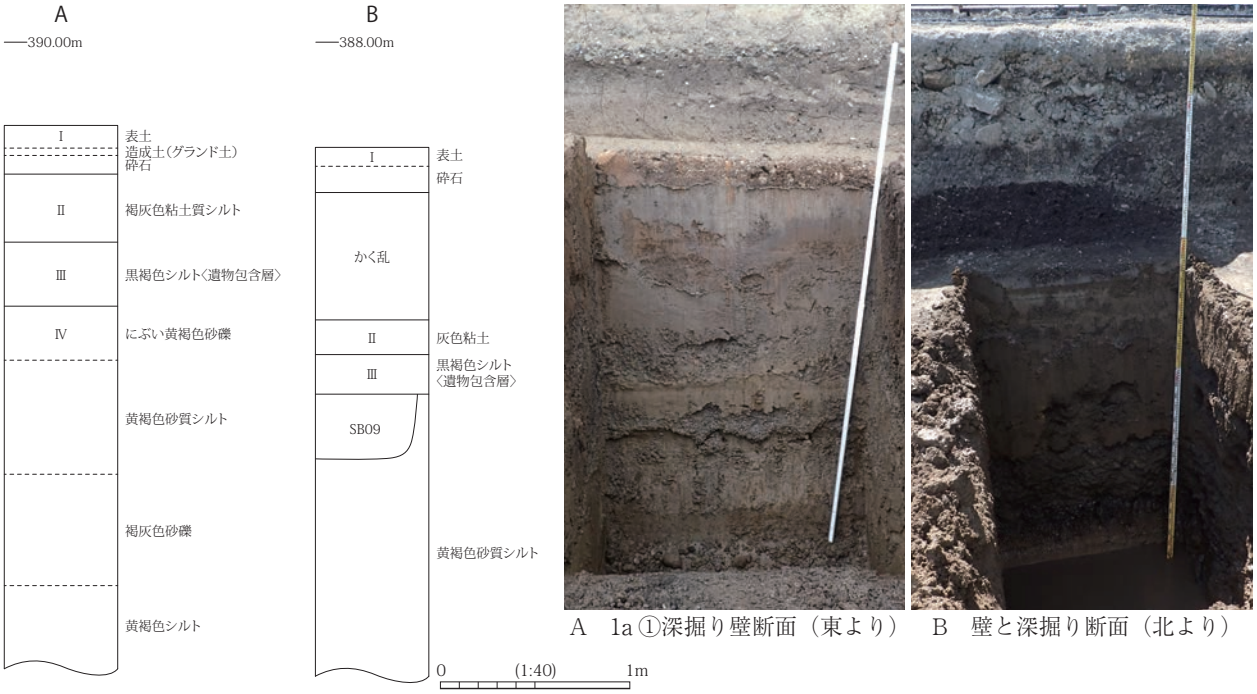
Ⅰ層:表土（グランド土、砕石、駐車場アスファルト、園庭･宿舎造成土を含む）、かく乱（旧構造物の基礎、基礎解体後平坦にするための客土、かく乱埋土はこれに相当する。灰色～灰褐色土粘質土を主とし黒褐色土のブロック土を含むこともある）。

Ⅱ層：灰色～褐灰色粘土質シルト。1a 区、1b 区南部では比較的明瞭に分布している。古代の須恵器、土師器の摩耗した破片を含む部分がある。下位の遺物包含層の遺物を巻き込んだものと考えられる。1c 区壁から採取した土壌の科学分析で多量のプラント・オパールが検出され水田の指摘がある。大正 15 年測量の長野市地形図では調査地周辺に水田が広がっていることから、旧水田土壌と考えるのが妥当である。

Ⅲ層：黒褐色シルト。層厚約 20 ～ 30cm。遺物包含層。砂～小礫を含む。礫の含有量に多少はあるが分層できない。本来は調査地全体に分布していたと考えられるが、後世の削平で地形に合わせ、南部は残りが良く、北部は残りが悪い状況と考えられる。またグランド東側の３区では残存していない。

Ⅳ層：黄褐色～褐灰色砂礫～砂質シルト。上面で遺構検出を行う。礫質優勢な部分とシルト質優勢な部分がある。扇状地の堆積物であるため、層相の変化は著しいと考えられる。

深掘り下位層確認では、検出面下約３m まで砂礫層とシルト層の互層が続く。遺物包含層の分布はなかった。



A　1a ①深掘り壁断面（東より）　B　壁と深掘り断面（北より）

第 19 図　基本層序

基本土層の自然科学分析

1c 区西壁　基本土層Ⅱ層（分析 No. ８）、Ⅲ層（分析 No. ９）、Ⅳ層（分析 No.10）（第 20・21 図 J 地点）

堆積物 1 g 中の珪藻殻数はⅡ層 2.3×10^3 個、Ⅲ層 4.2×10^2 個、Ⅳ層 1.5×10^2 個、完形殻の出現率はⅡ層 16.7%、Ⅲ層 66.7%、Ⅳ層 100% である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群では沼沢湿地付着生指標種群（O）が検出された。

花粉・胞子の分類群集数は、Ⅱ層：樹木花粉（サワグルミ属－クルミ属、コナラ属アカガシ亜属）２個、シダ植物胞子１個、Ⅲ層：樹木花粉（マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属）６個、草本花粉（イネ科、ヨモギ属）８個、Ⅳ層：草本花粉（タンポポ亜科）１個で、いずれも保存状態は良好でなく十分な量の花粉化石が得られなかった。

プラント・オパールの分類群集数は、計測値を試料１g 中に換算して示す（単位は× 100 個 /g）。Ⅱ層ではイネ（84）が高密度であり優占する。水田土壌である。ススキ属型（36）とチマキザサ節型（36）がやや高い密度である。ほかにはキビ族型（12）、ヨシ属（12）、シバ属（６）、ネザサ節型（18）、およびミヤコザサ節型（18）がやや低い密度で検出された。Ⅲ層ではイネ（30）、ススキ属型（24）、チマキザサ節型（24）がやや高い密度である。キビ族型（６）、ヨシ属（６）、シバ属（６）、ネザサ節型（６）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。Ⅳ層ではイネ（６）、ヨシ属（６）、ススキ属型（６）、チマキザサ節型（６）、ミヤコザサ節型（６）が検出されたがいずれも低い密度である。

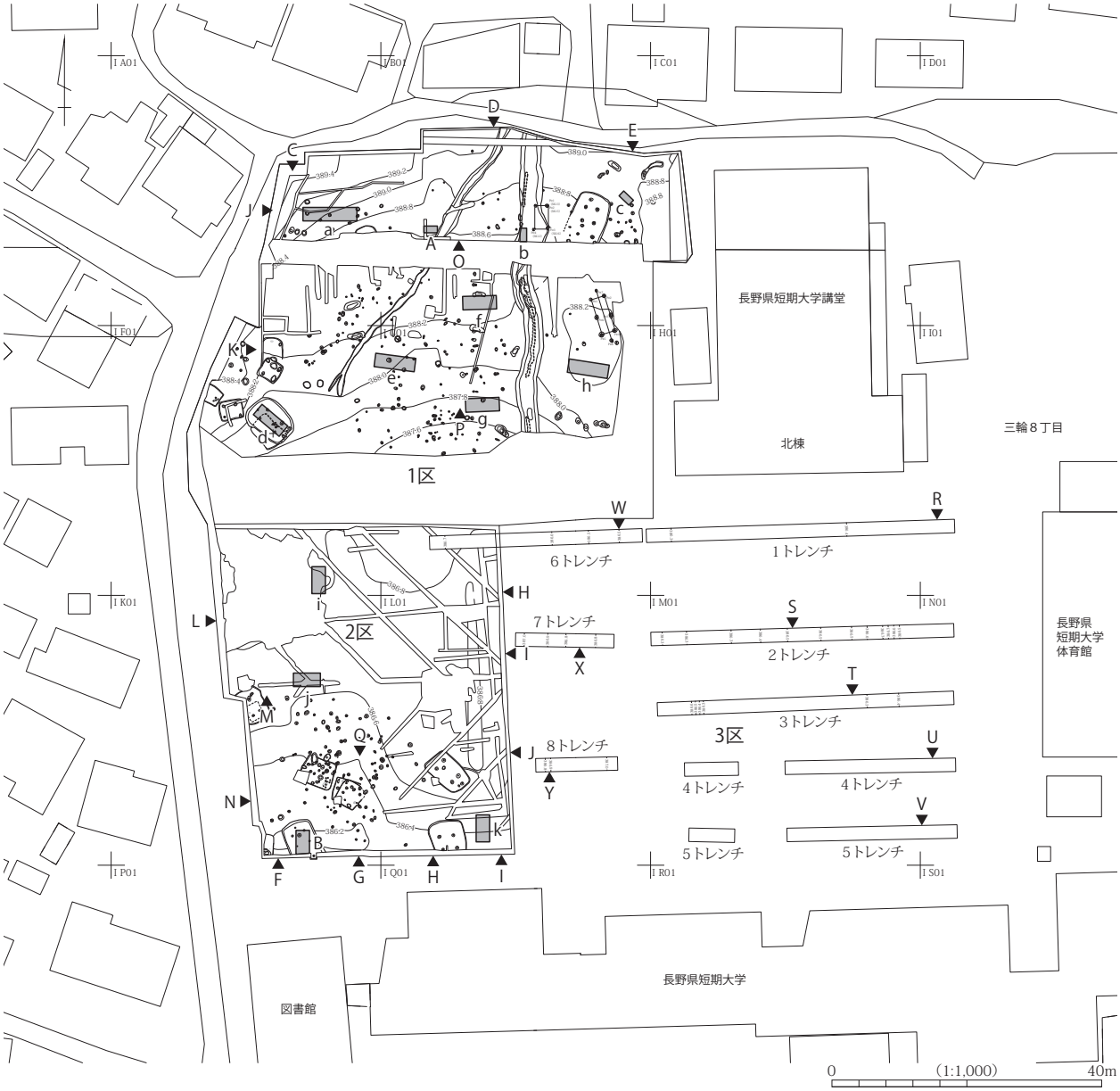
2c 区南壁　基本土層Ⅱ層（分析 No.11）、Ⅲ層（分析 No.12）、Ⅳ層上（分析 No.13）、Ⅳ層下（分析 No.14）（第 20・21 図 H 地点）

堆積物１g 中の珪藻殻数はⅡ層０個、Ⅲ層０個、Ⅳ層上 1.6×10^3 個、Ⅳ層下 4.0×10^2 個、完形殻の出現率はⅡ層０％、Ⅲ層０％、Ⅳ層上 25%、Ⅳ層下０％である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群では陸生珪藻Ａ群（Qa）が検出された。

花粉・胞子の分類群集数は、Ⅱ層：樹木花粉（マツ属複維管束亜属、ニレ－ケヤキ属）２個、草本花粉（アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科）４個、Ⅲ層：樹木花粉（スギ属、ニレ－ケヤキ属）３個、草本花粉（イネ科、ヨモギ属）２個、Ⅳ層上：草本花粉（アブラナ科）１個、Ⅳ層下：樹木花粉（マツ属複維管束亜属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属）５個、草本花粉（イネ科、タケニグサ属、ヨモギ属、キク亜科）７個で、いずれも保存状態は良好でなく十分な量の花粉化石は得られなかった。

プラント・オパールの分類群集数は、Ⅱ層ではチマキザサ節型（36）が比較的高い密度である。ほかのイネ（12）、キビ族型（12）、ヨシ属（18）、ススキ属型（18）、ネザサ節型（６）、ミヤコザサ節型（12）はやや低い密度である。Ⅲ層ではチマキザサ節型（54）が比較的高い密度である。ヨシ属（24）、ススキ属型（24）はやや高い密度である。ほかのイネ（12）、キビ族型（６）、ネザサ節型（６）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。Ⅳ層上ではチマキザサ節型（54）が高い密度である。ほかのイネ（６）、ヨシ属（12）、ススキ属型（６）、ミヤコザサ節型（６）は低い密度である。Ⅳ層下ではチマキザサ節型（30）がやや高い密度である。ほかのイネ（６）、ヨシ属（12）、ススキ属型（12）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。

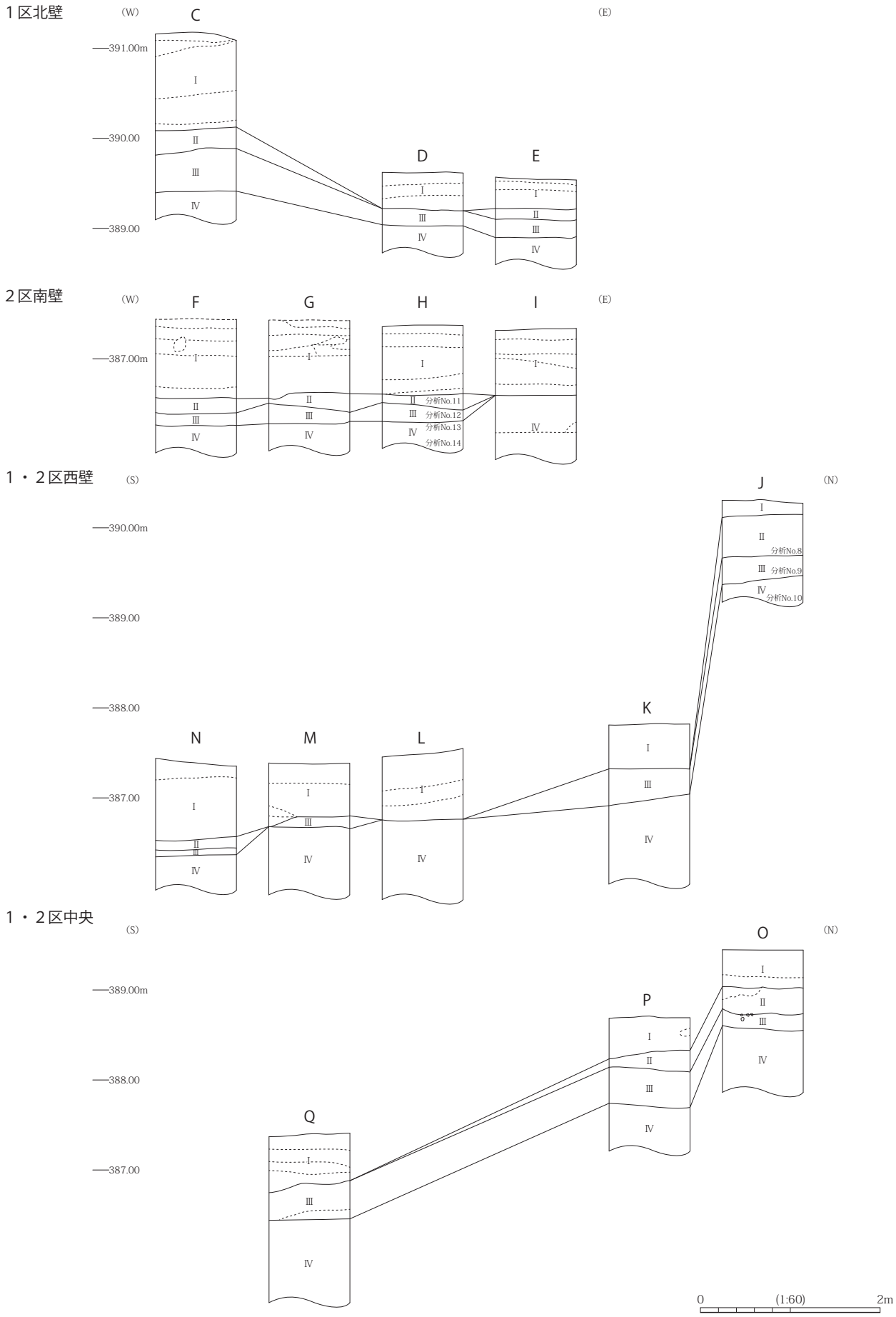
まとめ　珪藻化石、花粉化石がほとんど検出されなかったので、それぞれの分析だけでは堆積環境や古植生についての推定は難しい。検出が困難であった理由として、堆積速度が速く珪藻化石や花粉化石が取り込まれなかったことや堆積時の乾燥化が挙げられる。乾燥化が著しければ、珪藻は繁茂できず化石化しない。また花粉は水成堆積物中では保存状態が良好であるが、一般的に乾湿を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリア等によって分解され消失してしまう。基本土層の 1c 区西壁Ⅳ層（分析 No.10）、2c 区南壁Ⅳ層上（分析 No.13）、Ⅳ層下（分析 No.14）は灰褐色砂礫層で、中礫を含むことから堆積速度が速かったことが予想される。Ⅲ層（分析 No. ９・12）は砂礫を混入する黒褐色土層で、弥生時代から平安時代の遺構や遺物を含むことから、水の営力で堆積したがその後は安定した環境であったと考えられるため、乾燥化が予想される。Ⅱ層（分析 No. ８・11）は灰色粘質土層で、プラント・オパール分析から分析 No. ８は水田土壌の可能性が指摘され、乾湿を繰り返す環境であったと予想される。



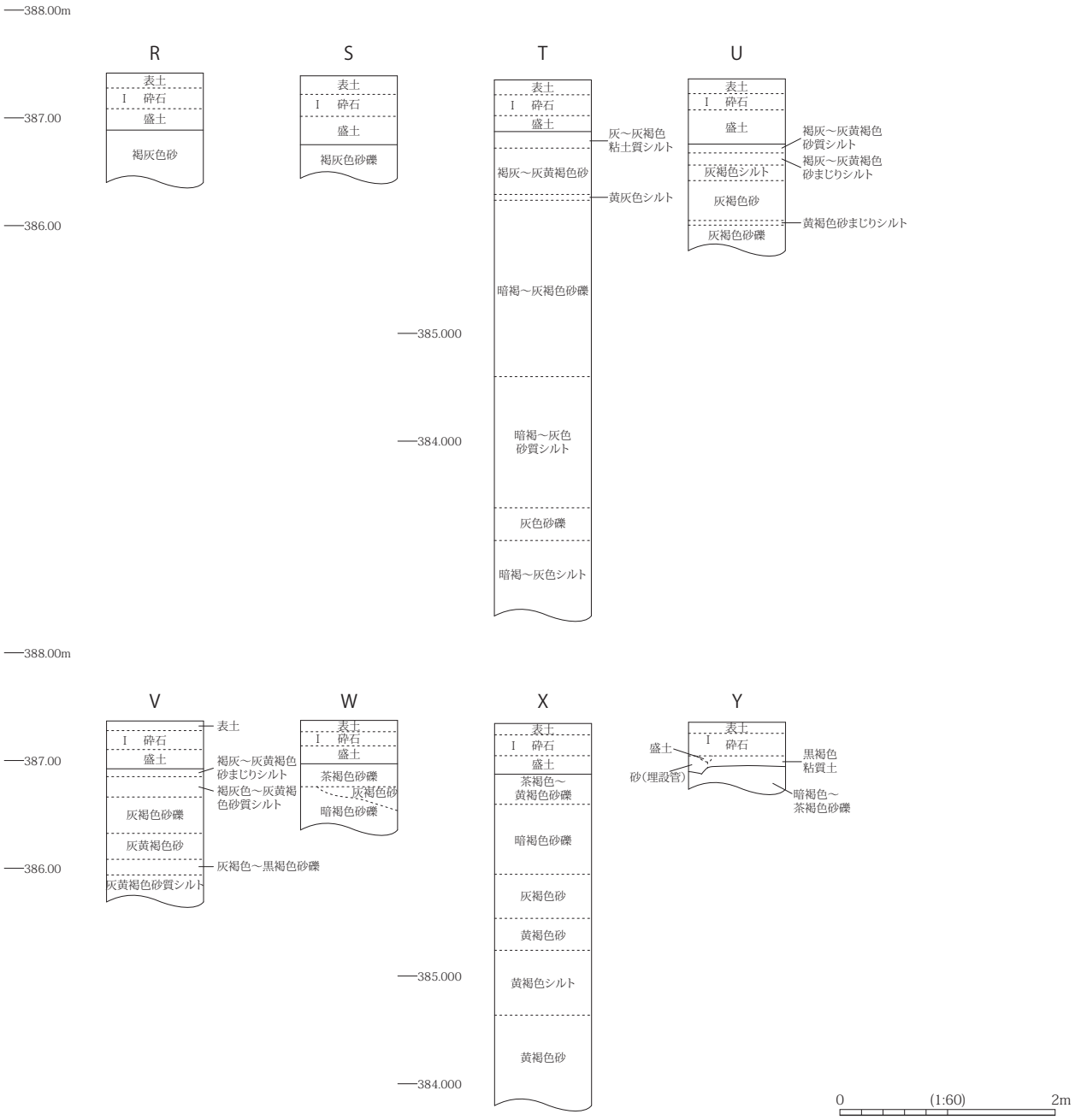
第 20 図　断面位置図

2c 区南壁断面（Ｈ・Ｉ）東側（北西より）

1a 区西壁　壁削り（南より）

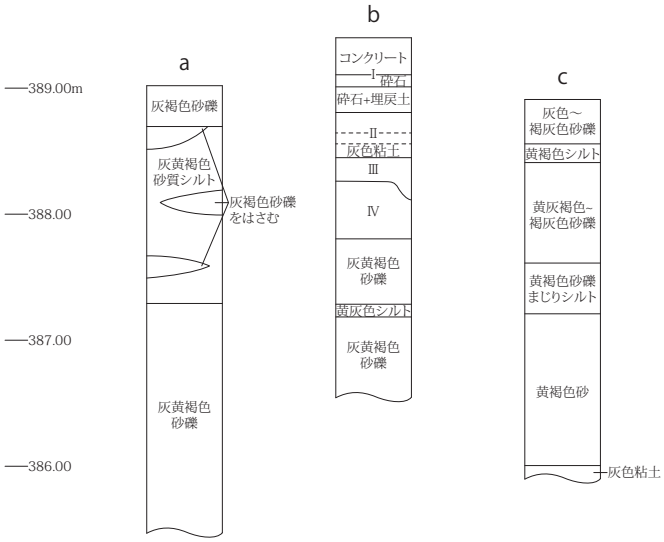


第 21 図　１・２区　土層柱状図

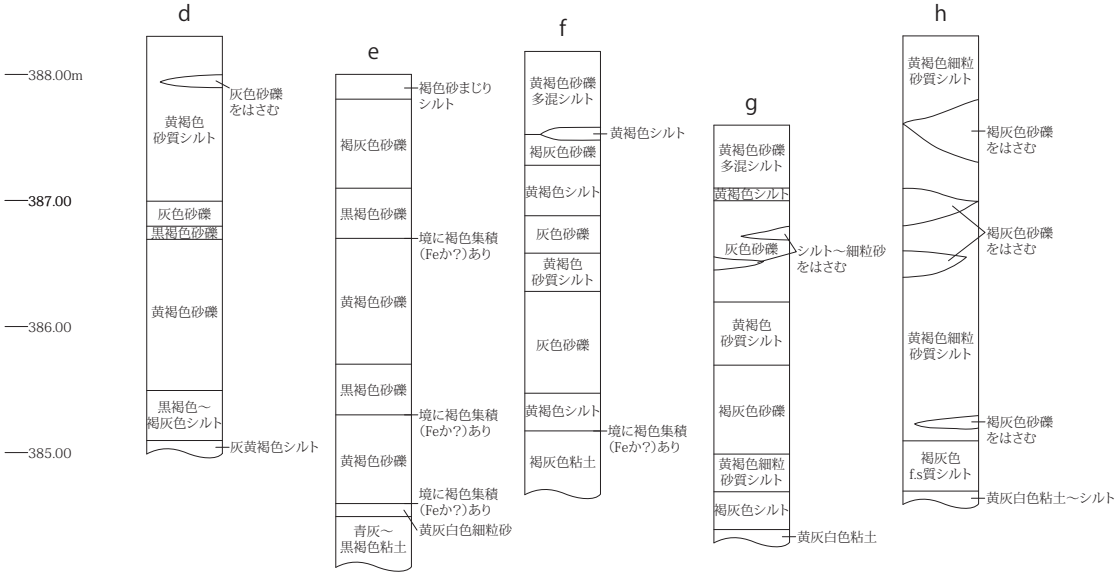


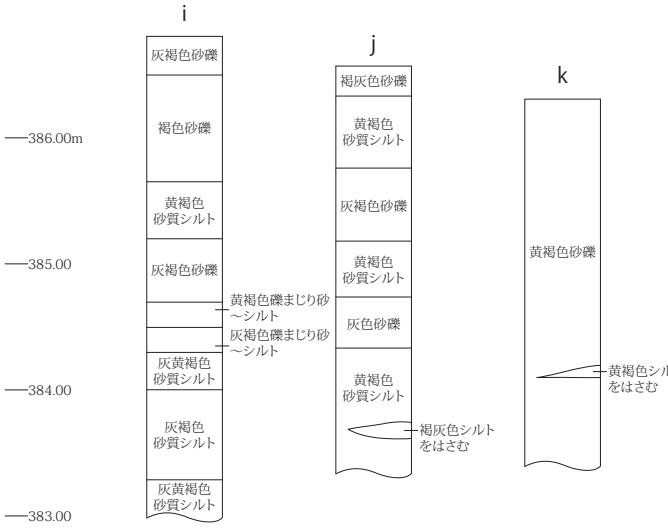
第 22 図　３区　土層柱状図

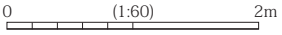
３区トレンチ（東より）



1c 区（ｅ）深掘りトレンチ（西より）







第 23 図　１・２区　深掘りトレンチ柱状図

第３章　遺構と遺物

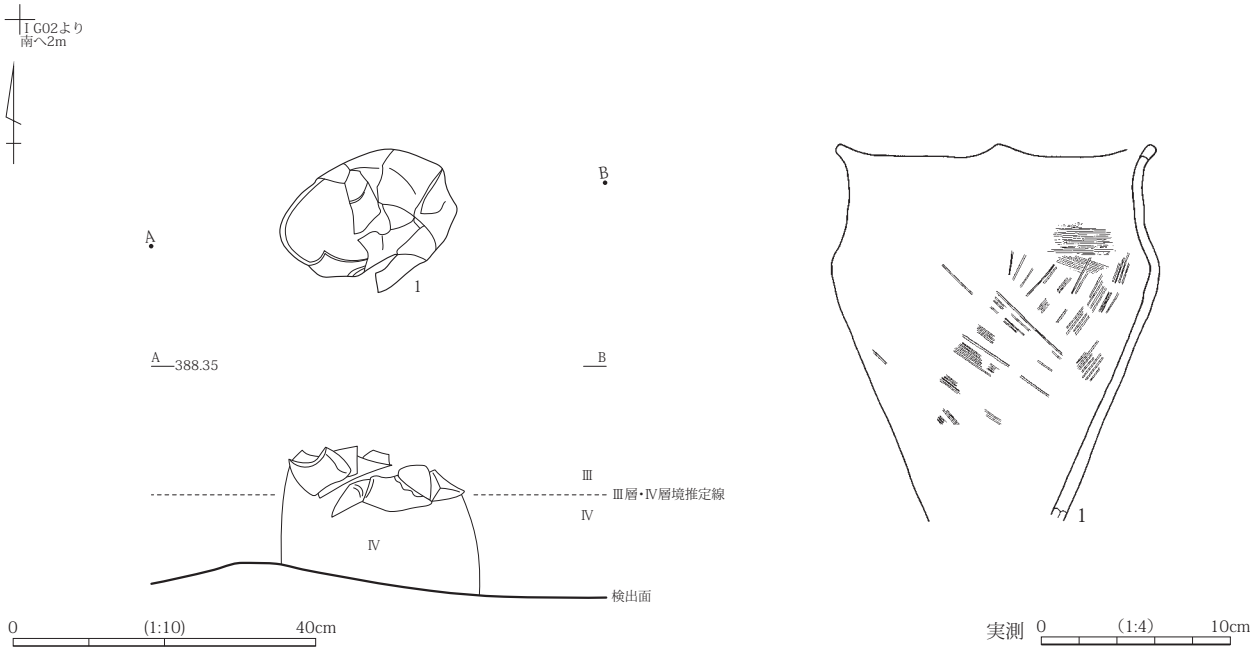
第１節　弥生時代前期以前

１．墓跡

SQ02（第 24 図　PL ５・30）

位置：Ⅰ G02 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で土器片を認めるが、周囲は検出面を掘り下げ過ぎた。**重複関係**：なし。**埋土**：なし。**構造**：掘り込みは確認できない。**遺物出土状態**：小形の深鉢（１）で、底部を西側にして横にされ、口縁部をやや下に向けた斜めの状態で出土している。底部は欠損している。出土時はほぼ完形と思われたが、取り上げたところ地山（Ⅳ層）に接している口縁から胴部は欠損していた。土器内部の土を水洗いしたが、歯骨片、玉類等の副葬品と思われる遺物はない。**時期**：出土土器から弥生時代前期併行（縄文晩期氷Ⅱ式）と考えられる。

出土遺物：掲載した遺物はⅢ層からの出土である。口縁部の大半と底部を欠き、外面には条痕文が施文される。口縁は波状を呈し、口頸部と胴部の間に稜をもつ器形である。



第 24 図　SQ02　遺構図・遺物図

２．遺構外

包含層出土遺物（第 25 図　PL30）

調査区内に縄文時代の遺構はなかった。1a・1c・2a・2c 区の遺構検出面および弥生時代・古代の遺構埋土から出土した縄文時代の土器片について本項に掲載した。

すべて深鉢形土器である。４～７は口縁部、16 は底部と台部の接合部、そのほかはすべて胴部である。２は胎土に繊維を含んでおり、外面には沈線が２本横方向に施されている。前期前半の土器と判断する。３は横方向と斜め方向の沈線による条痕文が施されている。前期後半の諸磯ｂ式併行期の土器と判断する。４は内側折り返し口縁であり、折り返し部分がやや肥厚している。５は口縁部破片で、隆線により左右に区画された内部を縄文の磨り消しが施されている。また、内面口唇部付近には圧痕がみられる。６は口縁部で斜縄文が施された下部に圧痕隆帯が施されている。７は隆帯による渦巻文が施されている。渦巻文様下部の左右には斜め方向と縦方向の沈線がみられるが、縦方向の沈線は摩耗している。いずれも沈線文を施した後に、隆帯を貼り付け、渦巻文を施文している。口縁部の上面には刺突文が施されている。全体的に剥離面が多く、摩耗が激しい。また、同一片とみられる土器片が２点出土しているが、いずれも口縁部付近の部位であり、施文が類似していることから、４つの突起をもつ深鉢形土器片であると考えられる。８は縄文、９は斜縄文が施されているが、摩耗が激しく詳細は不明である。10 ～ 14 も斜縄文が施されている。10 の内面は摩耗している。13 の内面は剥離している。15 は全体に斜縄文の後に縦縄文が施されているが、Ｕ字に区画された内部には一部磨り消しがみられる。16 は深鉢形であるが台が付いており、台部と胴部を分けるように２本の分割線が施文され、そのすぐ上部には縦方向の沈線文が施される。４・９・11 は中期、16 は中期前半（五領ヶ台式併行期）、５～８・10・12 ～ 15 は中期後半（５・６・８・15 は加曽利ＥⅢ式併行期）の土器と判断する。

17 は上下で方向が異なる斜縄文が施されている。18 は縄文が施されているが、摩耗が激しく詳細は不明である。17・18 は後期の土器と判断する。

19 ～ 25 は条痕文や細密条痕文が施され、晩期の土器と判断する。19 は条痕文が摩耗している。20・21 は摩耗が激しい。

３.小結

縄文時代の遺構はない。縄文時代前期から晩期の土器片が包含層や他時期の遺構から出土しているが、いずれも摩耗した破片であり、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。北方約 400m に所在する浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡（長野高校地点）においても縄文時代早期末から中期後半の土器片が出土しているが、同様の傾向がみられる。

弥生時代前期では本遺跡の北方約 700m に位置する浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡（上松東団地地点）において土坑（SK 1（径 95cm））から SQ02 と類似する条痕文を施した深鉢が出土している。当調査地では SQ02 以外に遺構はみつかっていない。SQ02 周辺の土坑の中には同時期の遺構がある可能性も考えられるが、遺物が出土しないため時期を特定できない。調査地周辺に集落域があった可能性を指摘するのにとどまる。

第 25 図　弥生時代前期以前　遺構外　遺物図

2c 区検出（南西より）

第２節　弥生時代後期

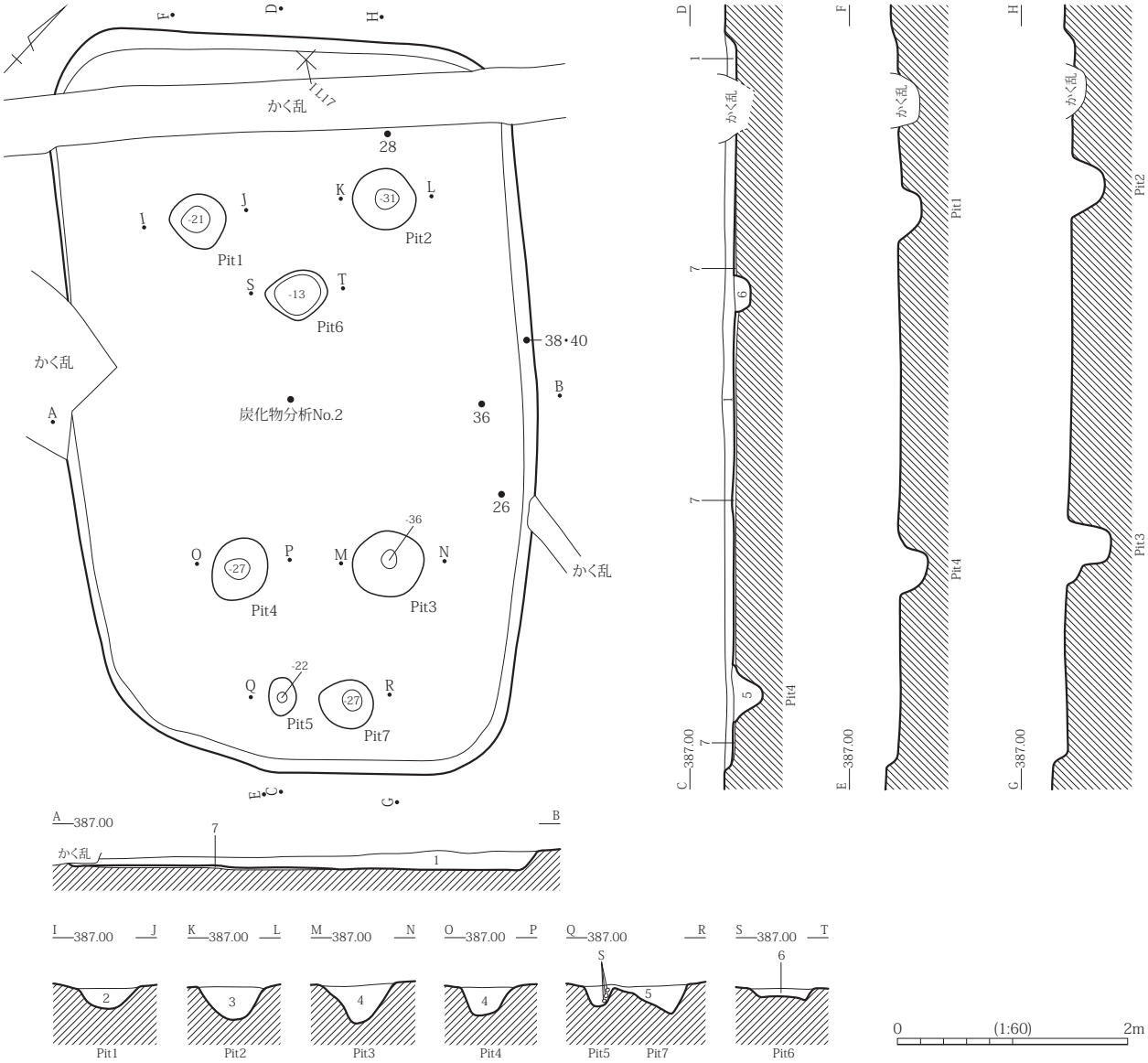
１．竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区全体（１・２区）から７軒が検出されている。住居跡間の重複関係はない。

SB01（第 26 ～ 28 図　PL ５・30・48）

位置：Ⅰ L11･12･16･17 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居北西壁付近と南西壁中央部分、北東壁中央部分が破壊されている。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N42.5° W。主軸長 6.10m、直交軸長 3.90m。検出面からの深さは 10 ～ 16cm。床は黄褐色土を混入した厚さ２cm 程度の貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは６基を床面で確認する。主柱穴４基（Pit1 ～ Pit4）は長方形に配置する。床面からの深さは 21 ～ 36cm。南東壁際中央の床面には出入口施設と思われるピット（Pit5、Pit7）が並ぶ。住居北西壁付近はかく乱で破壊されているが、棟持柱のピットが存在した可能性がある。**炉**：北側の主柱穴（Pit1、Pit2）間よりやや中心寄りに Pit6 を検出する。位置的に炉跡と考えられるが、埋土から焼土および炭化物は出土しない。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく埋土中全体にまばらに広がり、床面からやや高い位置での出土が目立つ。北東隅埋土中から壺口縁部の破片（28）が、北東壁際中央からやや南よりの床面からほぼ完形の鉢（26）が伏せた状態で出土している。また埋土中から石器の出土がほかの遺構より目立つが、床面からは泥岩の剥片（36）が出土したのみである。**時期**：埋土と床面出土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）と判断する。床面から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No. ２）の放射性炭素年代測定で 2,039 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（111cal BC-23cal AD（95.4%））。

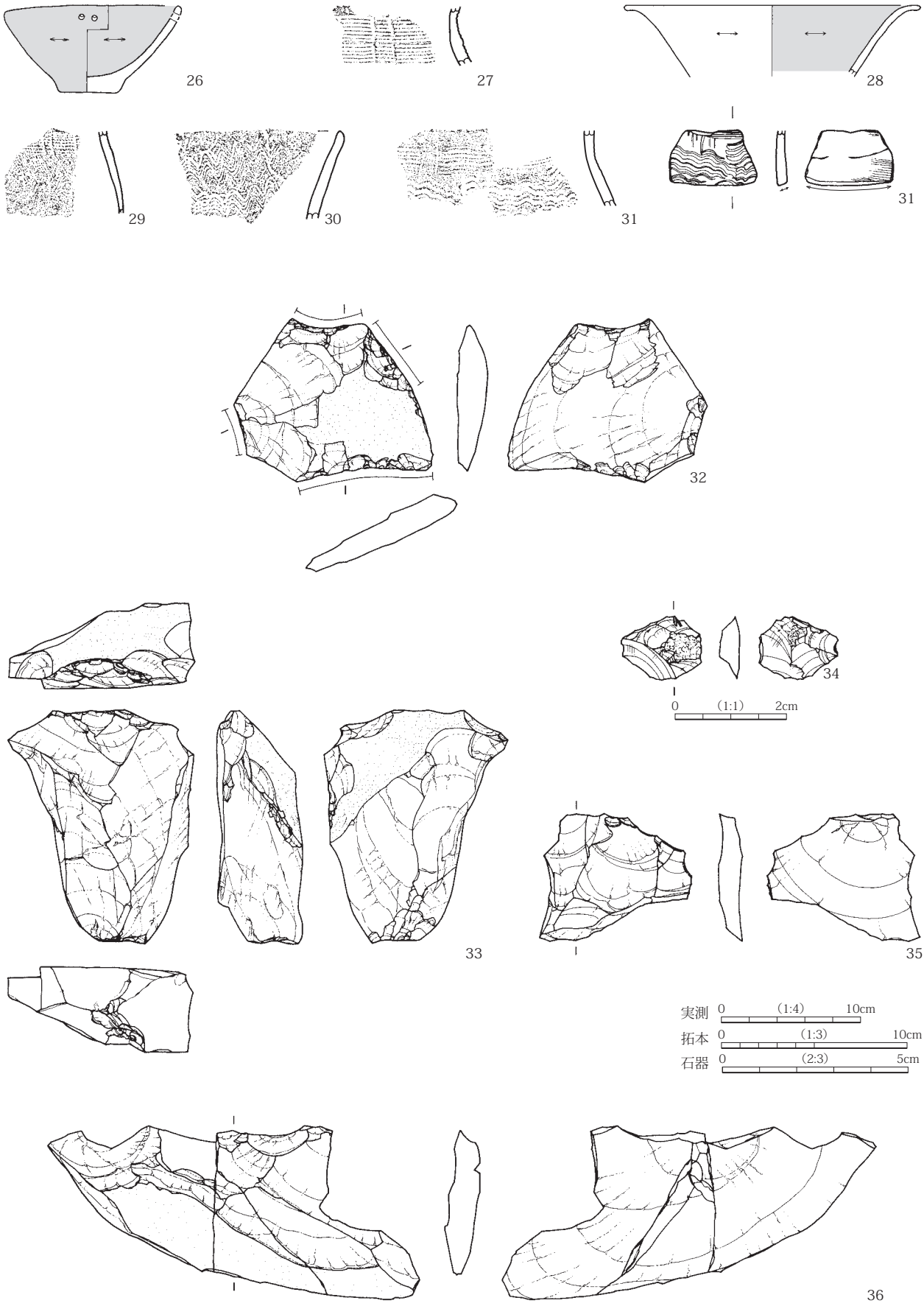
出土遺物：26 は鉢である。内外面とも赤彩され、口縁部には一対の円孔が設けられている。27・28 は壺である。27 は頸部の破片で、櫛描簾状文が巡らされる。28 は口縁が外反する壺の口縁部で内側だけが赤彩される。29 ～ 31 は甕である。29 は頸部付近の破片であるが小形であるため、台付甕の可能性も考えられる。頸部文様には櫛描簾状文が巡らされ、文様直下には櫛描波状文が施される。30 は口縁部の破片で、櫛描波状文が施される。31 は頸部付近の破片で、頸部文様には横走する櫛描平行沈線文（以下本節では「櫛描直線文」とする。）を縦方向の垂下文で区画する「Ｔ字文」が施され、文様直下には櫛描波状文が施される。また、破片の下部一側面には磨痕が認められる。中野市琵琶島遺跡で「磨痕をもつ土器片」として報告（黒岩 2016）されているような、土器の器面調整等に使われた工具の可能性も考えられる。32 は泥岩の楔形石器である。上下と左右に挟み打ちによる両極打撃痕が二対ある。33 は泥岩の石核である。34 ～ 41 は剥片である。34 は黒曜石、35 は流紋岩、そのほかは泥岩で、いずれも使用痕は確認できない。37 ～ 41 は５点の剥片接合資料。38 と 40 は東壁際の床面付近から出土し、37 と 39 は埋土中からの出土である。また 41 は本跡の南約８m に位置する SB02 の検出時に出土した資料である。以上の出土状況から、この接合資料は SB01 廃絶後に流入した資料と判断できる。自然面打面で、連続的に打点を移動し、横長の剥片を剥離している。いずれも二次加工や使用の痕跡は確認できない。



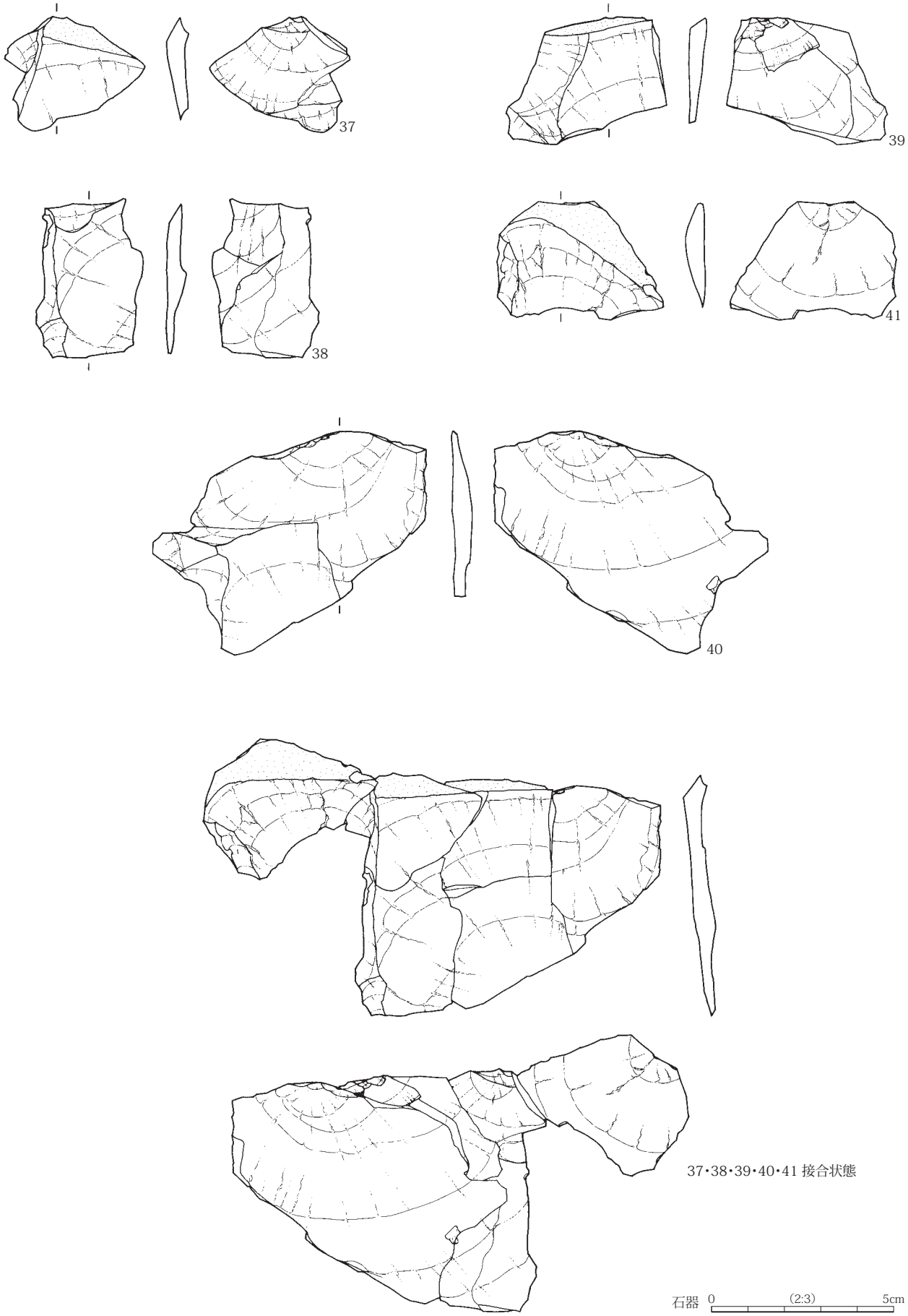
1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。粘性なし。しまり強。白色粒20%・2～5㎝礫5%混。
2　黒褐色(10YR3/2)　粘性あり。しまり強。黒褐色土（粘性なし。しまり強）ブロック5%混。7㎝礫少混。
3　黒褐色(10YR3/2)　粘性あり。しまり強。灰黄褐色土3%混。5㎝礫少混。
4　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。しまり強。黄褐色土粒5%混。5㎝礫少混。
5　黒褐色(10YR3/2)　粘性あり。しまり強。3㎝礫集中あり。
6　黒褐色(10YR3/2)　粘性なし。しまり強。
7　黒褐色(10YR3/1)　粘性なし。しまり強。黄褐色土ブロック混。貼床。

第 26 図　SB01　遺構図

SB01　28 出土状態（南東より）



第 27 図　SB01　遺物図（１）

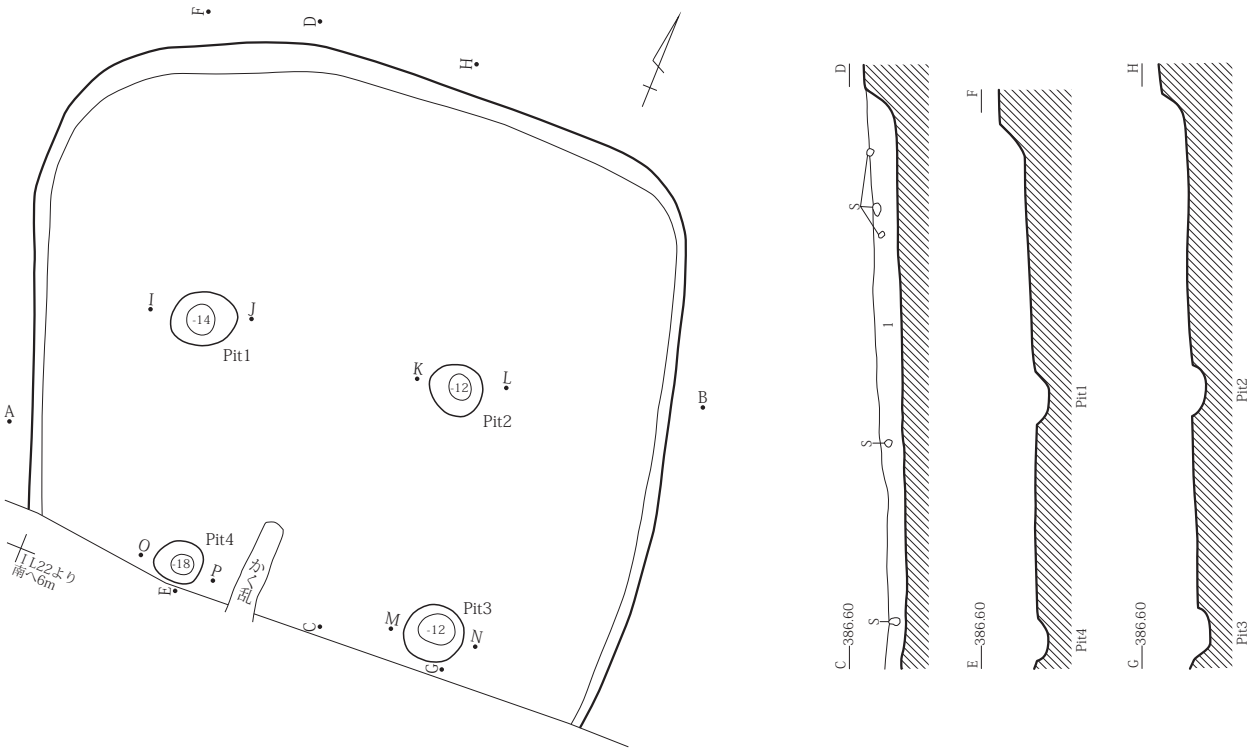


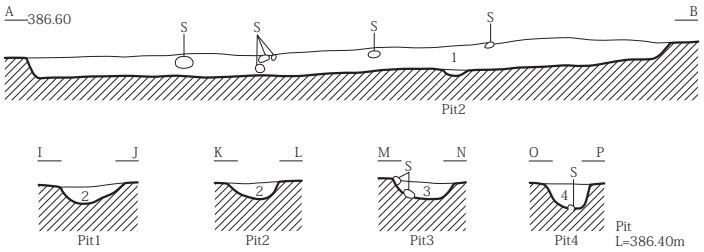
第 28 図　SB01　遺物図（２）

SB02（第 29・30 図　PL ５・６・30・31・48）

位置：Ⅰ L21・22 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりと遺物の分布を確認する。かく乱で住居南部分が一部破壊されている。南側は調査区外へ延びる。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。上部の方がやや粘性があり、下部の方が礫の混入がやや多い印象があるが、分層できない。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N22° W。主軸残存長 4.30m、直交軸長 4.80m。検出面からの深さは 12 ～ 25cm。床は不明瞭である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴４基（Pit1 ～ Pit4）は方形に配置され、主柱穴の位置にあると考えられるが、ほかの住居跡の主柱穴と比較して掘り込みは浅く（床面からの深さは 12 ～ 18cm）明確でない。**炉**：ない。埋土中に炭化物や焼土粒はない。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がり、ほとんどが破片である。北東部から壺口縁部～頸部（52）、北部から壺胴部（53）や高坏脚部（47）、甕（ミニチュア）（60）、中央部から高坏接合部（45）が出土している。北西部から出土の破片は北へ 90m 離れた SB03 埋没後に掘り込まれた Pit2 出土の高坏脚部（64）と接合する。安山岩の凹石（61）や敲石（62）が出土している。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）とする。**出土遺物**：42 は鉢で内外面とも赤彩される。43 ～ 48 は高坏である。43・44 は坏部が碗形を呈する高坏で、内外面とも赤彩される。45 ～ 47 は高坏の脚部で、45・46 は赤彩される。48 は口縁部が水平に屈曲する鍔縁状口縁高坏の坏部で、内外面とも赤彩される。49 ～ 53 は壺である。49･50 は頸部付近の破片で、49 は外面が赤彩される。49 は頸部文様に箆描直線文が施され、文様直下には鋸歯文が付加される。50 は頸部文様に箆描直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。51 は口縁が外反する壺の口縁部で、内外面とも赤彩される。52 は口縁が外反する壺の口縁部から頸部で、頸部文様には箆描横羽状文が巡らされ、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。外面と口縁部内面が赤彩される。53 は壺の胴部で胴部上半外面が赤彩される。52・53 は同一個体と考えられるが接合しない。54 は内外面とも赤彩され、赤彩深鉢の底部としたが、器種は検討を要する。55 ～ 59 は甕である。55・59 は口縁部に櫛描波状文が巡らされ、口唇には圧痕が施されるが、施文具は不明である。両者は同一の個体である可能性が考えられる。56 は口縁部が短く外反するもので、口縁部には櫛描波状文が、頸部には簾状文が巡らされる。57 は頸部付近の破片で、頸部文様には簾状文が、文様直下には櫛描波状文が巡らされる。56・57 は同一個体と考えられるが接合しない。58 は口縁部が短く外反する小形の甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。60 は甕のミニチュアである。口縁部には櫛描波状文が、頸部文様には簾状文が巡らされている。61 は凹石である。安山岩の自然礫を用い、片側に敲打による凹部が認められる。62 は敲石である。安山岩の自然礫を用い、長軸の片側の端部に敲打痕が認められる。長さは幅の２倍以下である。

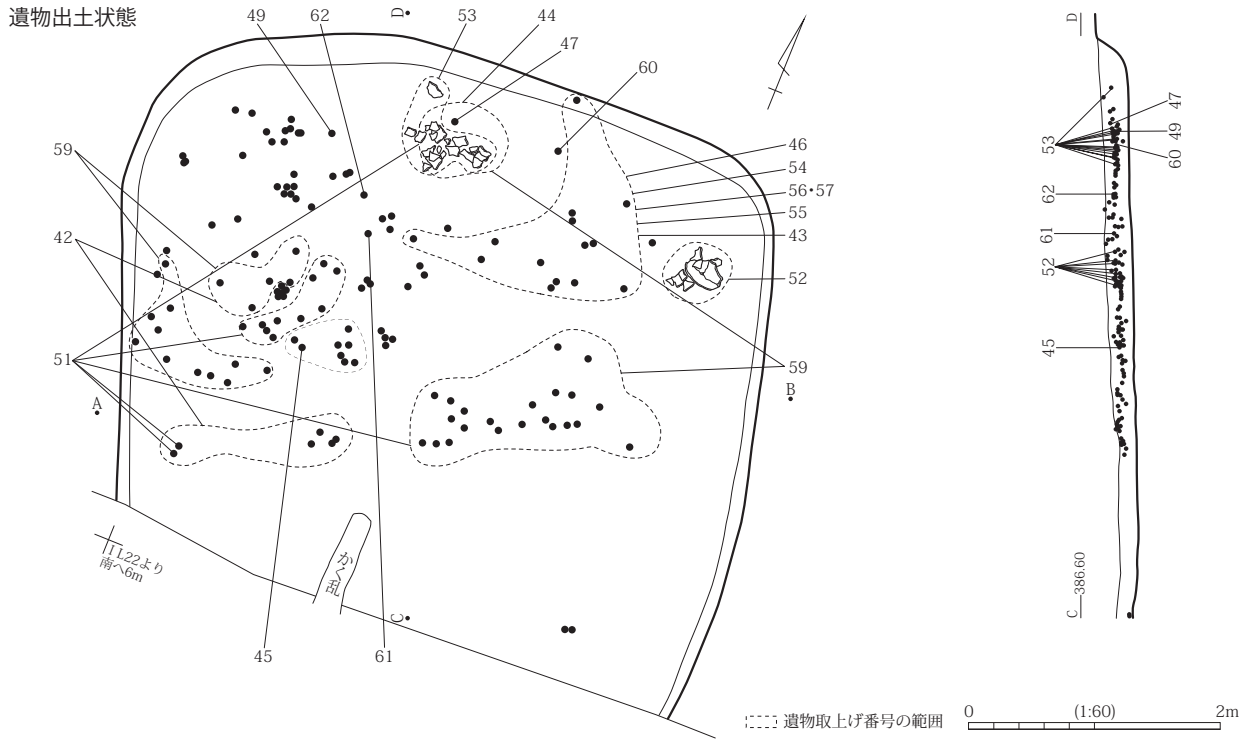
SB02　調査（北西より）



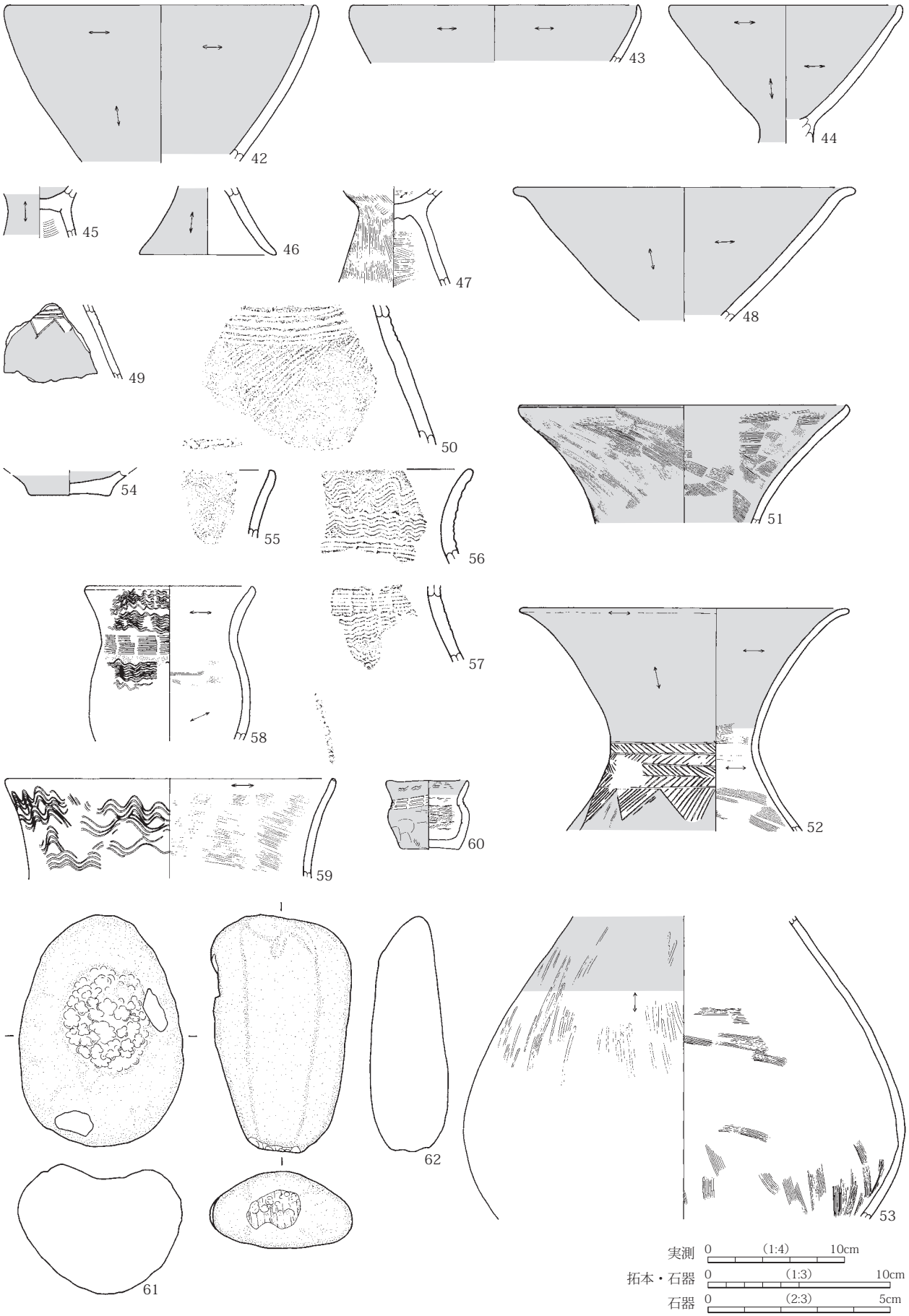


1　黒褐色(10YR3/1)　礫混シルト。粘性あり。しまり強。
　　～(10YR3/2)　土器片多混。
2　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性ややあり。
　　しまり普通。0.5～3cm・最大5cm礫混。
3　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性普通。しまり普通。
　　0.2～1cm・最大5cm礫混。
　　シルトブロック多混。
4　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性あり。しまりやや強。
　　0.5～3cm・最大5cm礫混。

遺物出土状態



第 29 図　SB02　遺構図

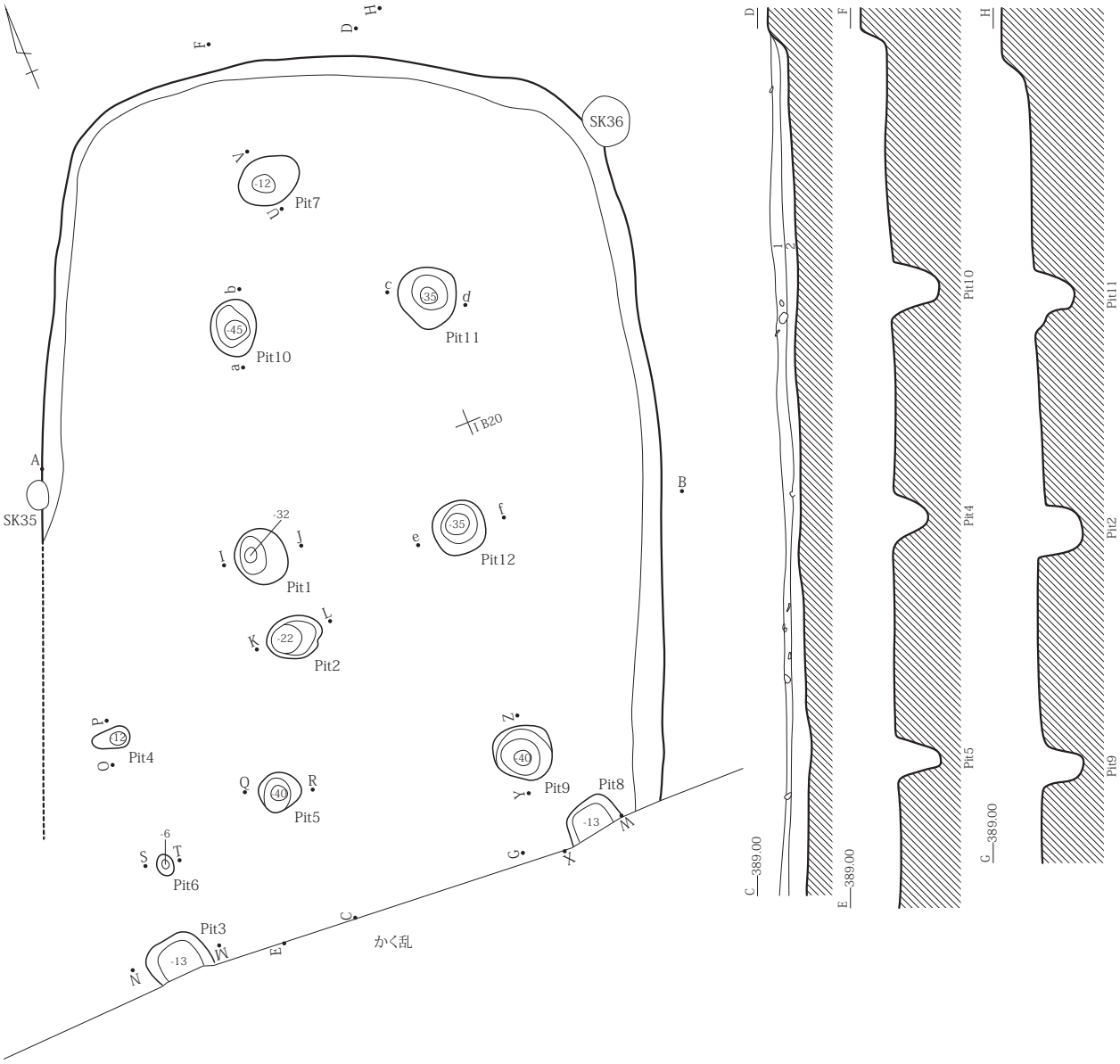


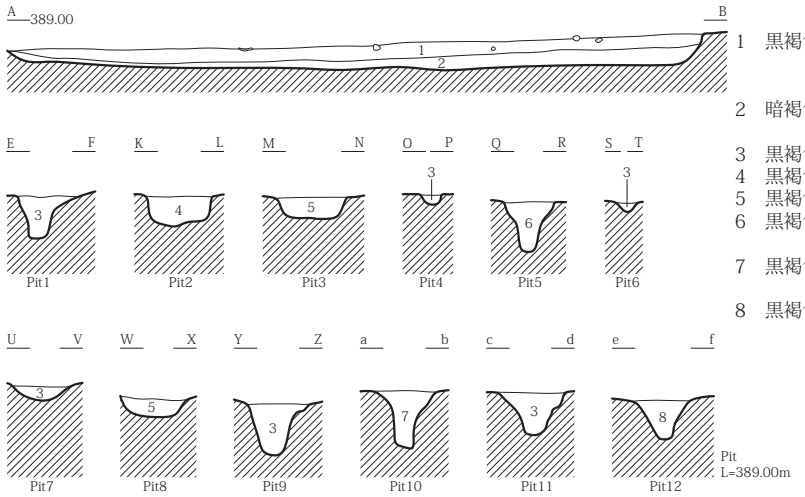
第 30 図　SB02　遺物図

SB03（第 31 ～ 34 図　PL ６・７・31 ～ 33・49）

位置：Ⅰ B14・15・19・20 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりと遺物の分布を確認する。かく乱で住居南壁が破壊されている。**重複関係**：SK 35・36 に切られる。**埋土**：先行トレンチの壁断面では黒褐色土を主体とする上層と黄褐色土粒を含む下層の２層に分層できるが、埋土掘り下げ時において、平面では明確に違いを認めることができない。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N22° E。主軸残存長 7.45m、直交軸長 5.15m。検出面からの深さは 10 ～ 25cm。床面は地山がややしまりのよい部分が認められるが､全体に広がらない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット 12 基を床面で確認する。うち６基（Pit1・Pit5・Pit9 ～ Pit12）は床面からは 32 ～ 45cm と掘り込みが深く、住居跡の主軸方向に合う長方形に配置することから主柱穴と考えられる。主柱穴が１間×２間の規模である住居跡は本遺構のみである。Pit7 は棟持柱のピットであると考えられる。Pit2 の埋土は黒褐色土に粘質土を混入し、弥生土器片と共にタタキ甕の破片が出土することから SB03 埋没後に掘り込まれたピットと考えられる。同様に Pit3・Pit8 は平面形が方形であること、埋土の粘性が強いことから、SB03 に伴うピットではないと考えられる。Pit4・Pit6 の埋土は主柱穴の埋土と同じであるが、床面から６～ 12cm と掘り込みが浅く機能は不明である。**炉**：ない。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。特に検出面から 10cm ほど掘り下げた１層中に多数の破片が目立つ。住居跡北部から壺（70・71・73・74・78）、甕（80 ～ 82）、中央部から壺（67・68・75 ～ 77・79）、ほぼ完形の小形の鉢（83）が出土している。また検出面から泥岩の剝片（84）や床面よりやや浮いた状態で安山岩の凹石（85･86）が出土している。**時期**:埋土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）とする。壺（79）はやや新しい様相を呈するが、ほかの土器については埋土の上・下による型式の差はない。Pit10 埋土中から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No. １）の放射性炭素年代測定で 2,028 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（92cal BC-26cal AD（95.4%））。

出土遺物：64 は Pit2 内と SB02 埋土中からの接合資料、63 は Pit5 内と埋土からの接合資料、69 ～ 72 は Pit10 と埋土からの接合資料である。63 ～ 65 は高坏の脚部で赤彩される。66 ～ 79 は壺である。66 は頸部付近の破片で頸部文様に櫛描直線文が施され、その下位は赤彩される。69 は口縁が外反する壺の口縁部から頸部で、頸部文様には櫛描直線文が施される。67 は頸部付近の破片で、頸部文様に櫛描直線文が施され、その最下位は櫛描波状文となる。70 は口縁端がわずかに内湾する壺の口縁から頸部で、頸部文様に櫛描直線文が施され、その最下位は櫛描波状文となる。口縁部内外面とも赤彩される。68・71 は頸部から胴上部の破片で、頸部文様には横走する櫛描直線文を縦方向の垂下文で区画する「Ｔ字文」が施される。68 の口縁部内側は器面の摩耗が進んでいて範囲は不明であるが、赤彩されている。72 は頸部から胴上部の破片で、頸部文様には箆描横羽状文が巡らされ、文様直下には逆三角形内を棒状工具による刺突で充填した鋸歯文が付加される。73 は壺の頸部付近の破片で、頸部文様には櫛描「Ｔ字文」が施され、円形浮文が貼り付けられる。74 は壺胴部の破片である。75 ～ 78 は壺の底部である。73 ～ 75 は同一個体と考えられるが接合しない。79 は口縁が外反する壺で、頸部文様には櫛描「Ｔ字文」が施され、口縁部内外面と胴部が赤彩される。80 ～ 82 は甕である。80･82 は頸部から胴部の破片で頸部文様には簾状文が、文様直下には櫛描波状文が巡らされる。81 は大形の甕で、頸部文様には簾状文が巡らされ、櫛状工具により刺突が付された円形浮文が付加される。口縁部と胴部上半には櫛描波状文が巡らされ、胴部下半には縦羽状文が施される。83 は小形の鉢である。85・86 は安山岩の凹石である。85 は敲打により表裏の両面に皿状に凹部が形成される。86 は敲打により表裏の両面にわずかな凹部が形成される。84 は泥岩の剝片である。剝離面を打面とする。微弱な剝離が認められるものの、使用痕とは断定できない。

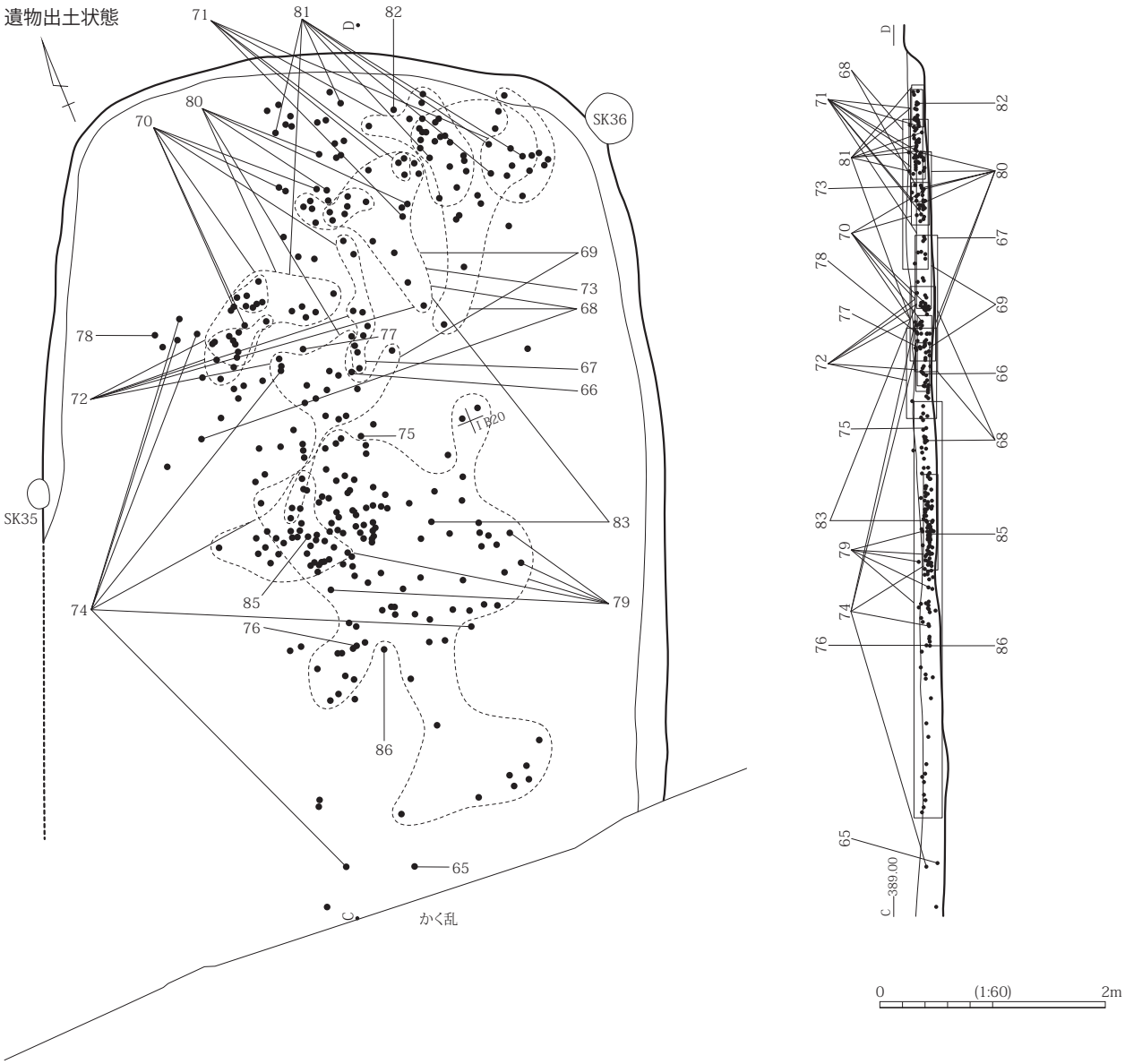




1　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性あり。しまり強。砂礫全体に混。10㎝の円～亜円礫・0.2～5㎝礫混。
2　暗褐色(10YR3/3)　粘性なし。しまり強。にぶい黄褐色土粒10%混。
3　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。小礫混。
4　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。小礫・粘質土少混。
5　黒褐色(10YR3/2)　粘性あり。小礫少混。
6　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。小礫少混。やや粗い砂・土器片混。
7　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。小礫少混。炭化物混。
8　黒褐色(10YR3/2)　粘性なし。小礫少混。

0　(1:60)　2m

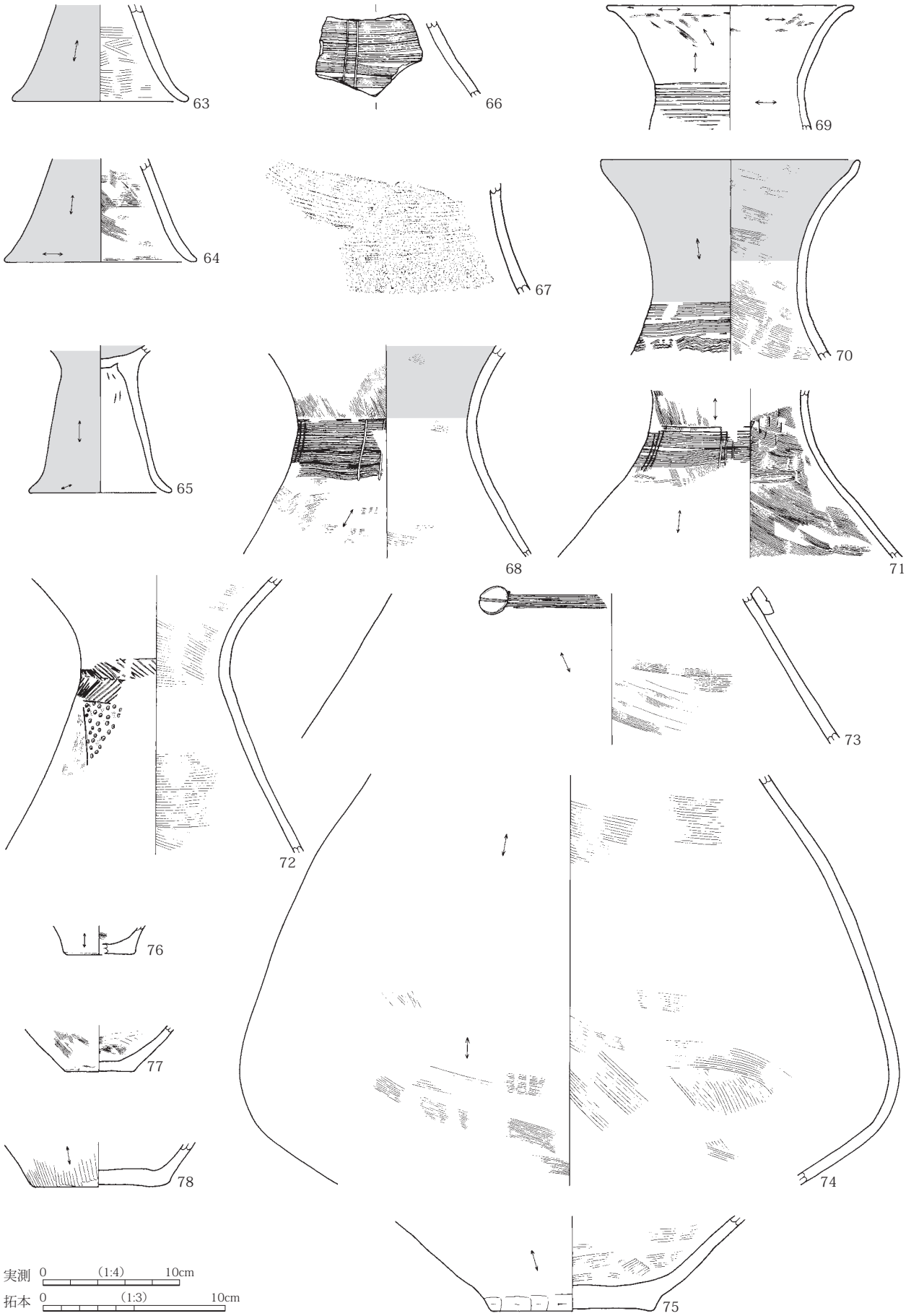
第 31 図　SB03　遺構図（1）



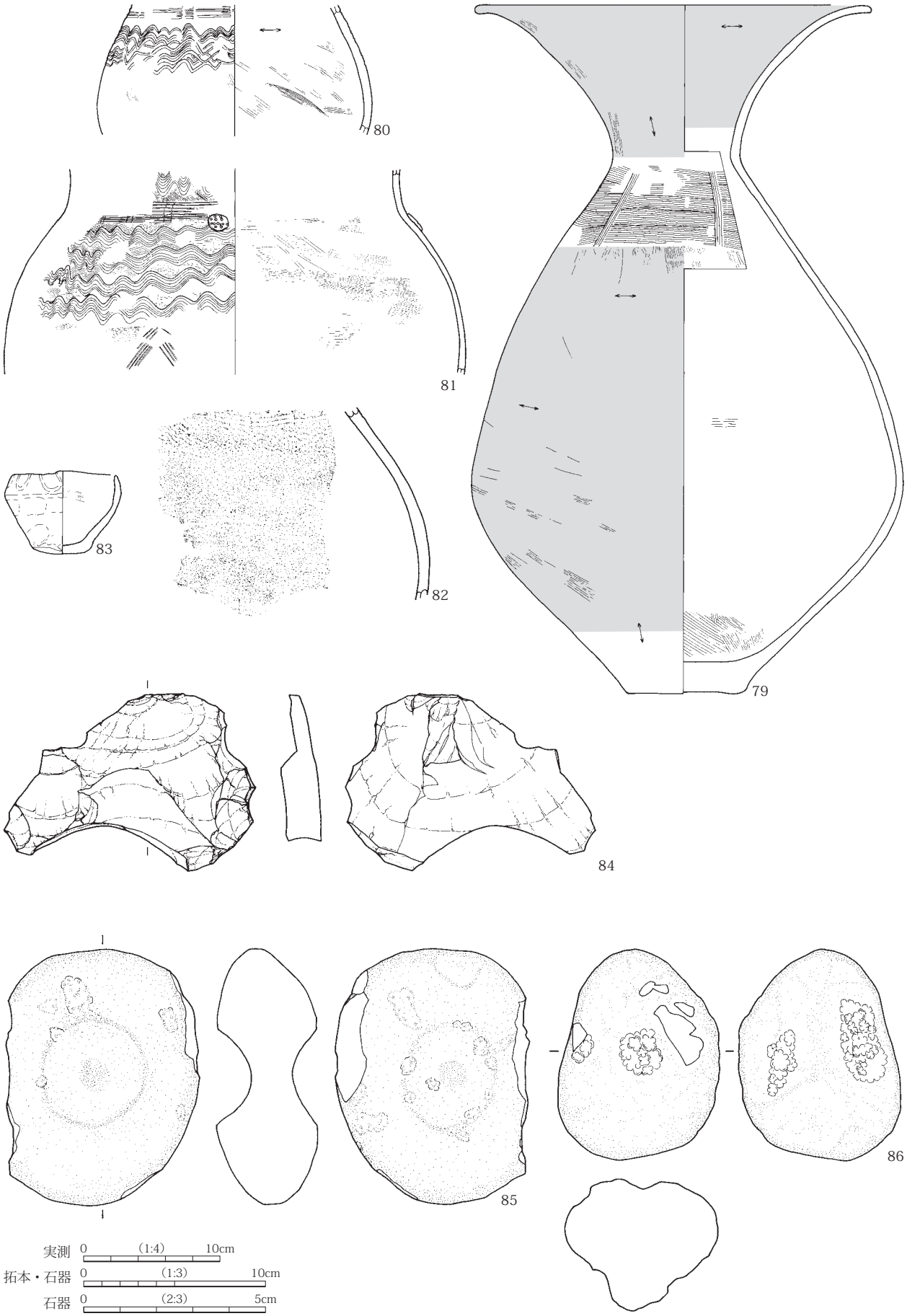
第 32 図　SB03　遺構図（２）

SB03　調査（西より）

SB03　遺物出土状態（西より）



第 33 図　SB03　遺物図（１）

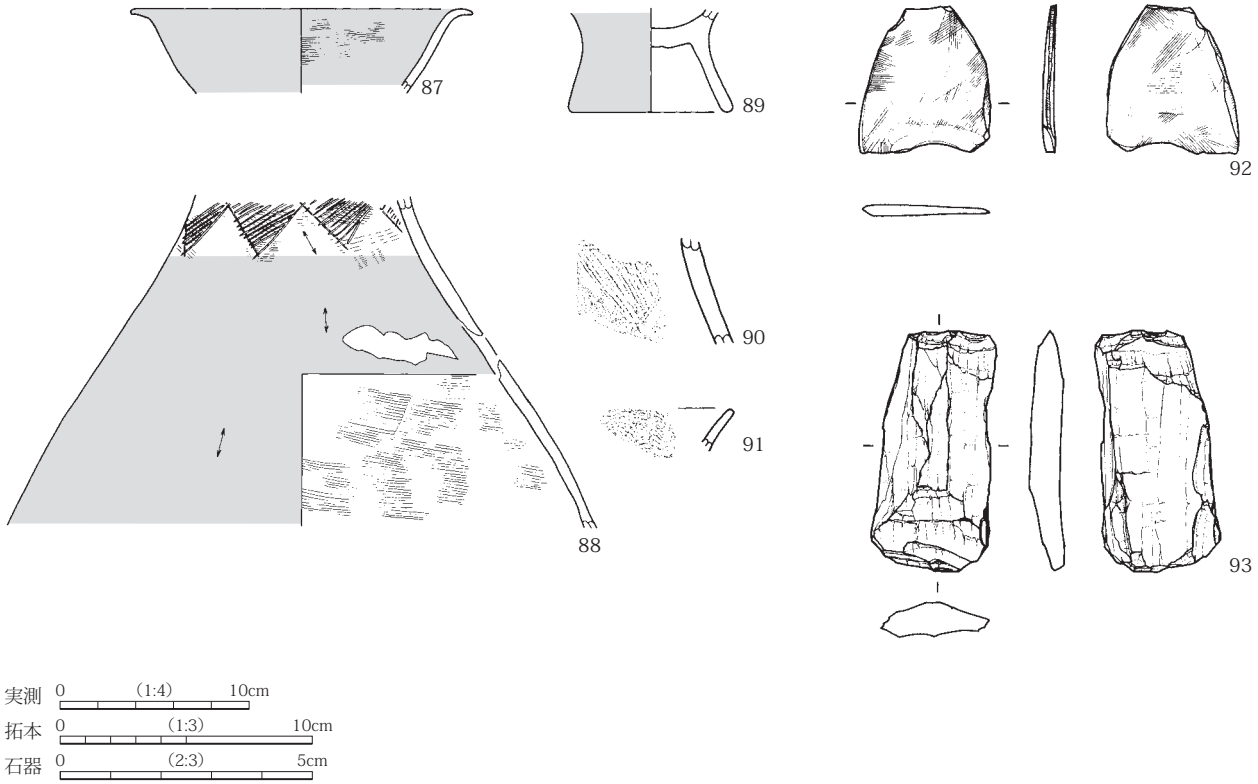


第 34 図　SB03　遺物図（２）

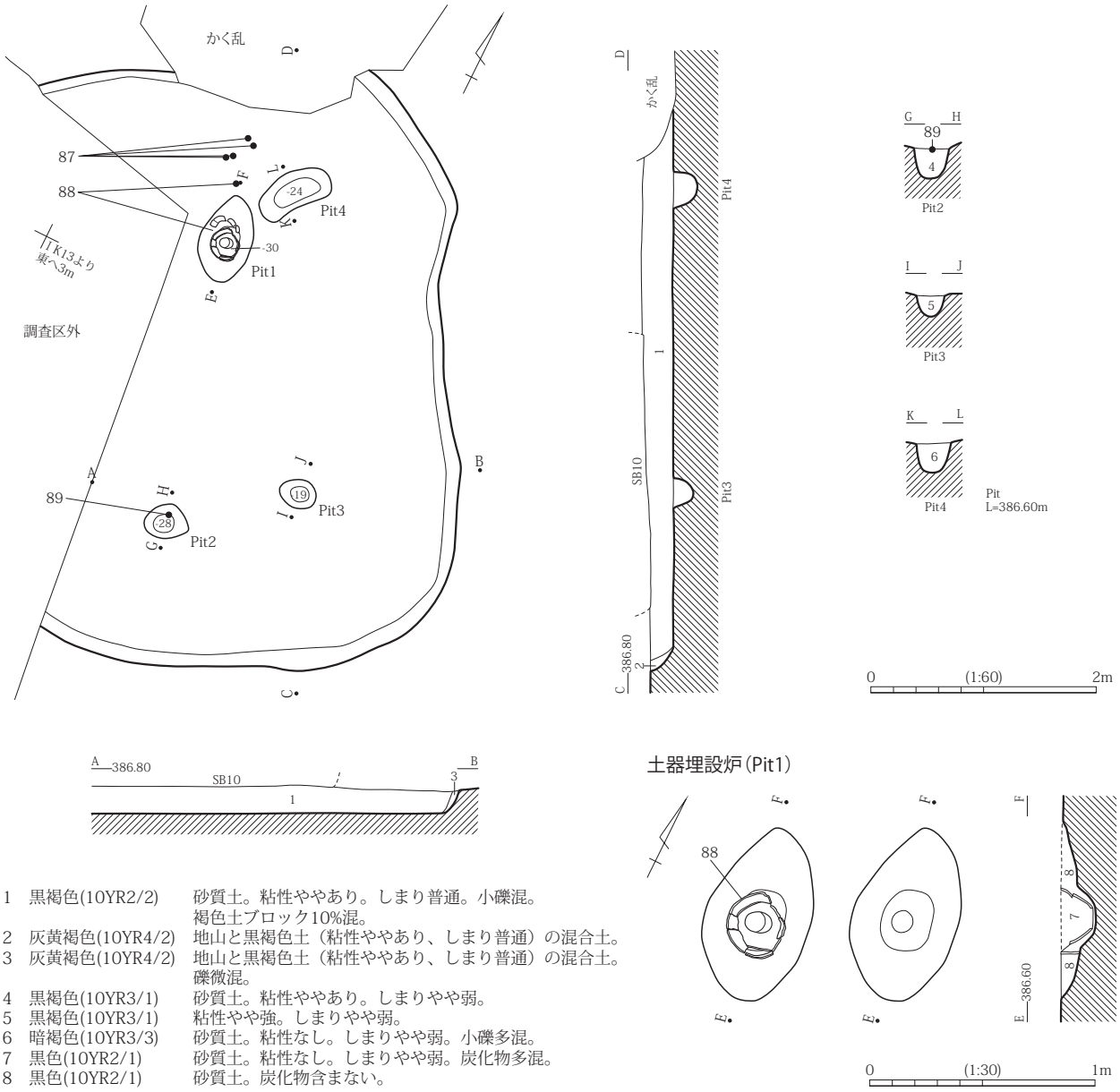
SB04（第 35・36 図　PL ８・33・49）

位置：Ⅰ K08・13 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居北壁が破壊され、西壁は調査区外へ延びる。**重複関係**：SB10 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。壁際に地山の崩落土が観察できる。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N26.5° W。主軸長 5.05m、直交軸残存長 2.60m（推定 4.00m）。検出面からの深さは 20 ～ 30cm。床は貼床でなく地山を敲いて床としている（以下「地山敲き」とする）。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴３基（Pit2 ～ Pit4）を確認する。１基は調査区外に位置すると考えられ、長方形に配置する。床面からの深さは 19 ～ 28cm である。**炉**：土器埋設炉（Pit1）である。北側主柱穴間よりやや内側の床面を掘り窪め、内部に壺口縁～頸部を逆位にして設置している。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが破片である。北西壁際床面から高坏体部（87）、Pit1 内炉体土器と床面から壺頸部直下から胴上半部（88）、Pit2 埋土上部から赤彩深鉢台部（89）が出土している。**時期**：炉体土器から、弥生時代後期（吉田式期）とする。

出土遺物：87 は口縁部が水平に屈曲する鍔縁状口縁高坏の坏部で、赤彩されている。88・90 は壺である。88 は頸部直下から胴部上半の破片で、頸部文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加され、その下方は赤彩される。胴部上半に穿孔が認められる。90 は頸部の破片で、頸部文様には箆描直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。89 は台付の赤彩深鉢の台部と思われるが、検討を要する。91 は小形の甕の口縁部破片で櫛描波状文が巡らされる。92・93 は磨製石鏃である。92 は未製品で表裏面に研磨痕がある泥岩。側面は研磨後、再加工され刃付に入るのか。93 は緑色片岩素材で、上下は挟み打ちによる両極打撃痕、右側面は折り取り痕が認められる。擦り切り痕は確認できない。



第 35 図　SB04　遺物図



1　黒褐色(10YR2/2)　砂質土。粘性ややあり。しまり普通。小礫混。褐色土ブロック10%混。
2　灰黄褐色(10YR4/2)　地山と黒褐色土（粘性ややあり、しまり普通）の混合土。
3　灰黄褐色(10YR4/2)　地山と黒褐色土（粘性ややあり、しまり普通）の混合土。礫微混。
4　黒褐色(10YR3/1)　砂質土。粘性ややあり。しまりやや弱。
5　黒褐色(10YR3/1)　粘性やや強。しまりやや弱。
6　暗褐色(10YR3/3)　砂質土。粘性なし。しまりやや弱。小礫多混。
7　黒色(10YR2/1)　砂質土。粘性なし。しまりやや弱。炭化物多混。
8　黒色(10YR2/1)　砂質土。炭化物含まない。

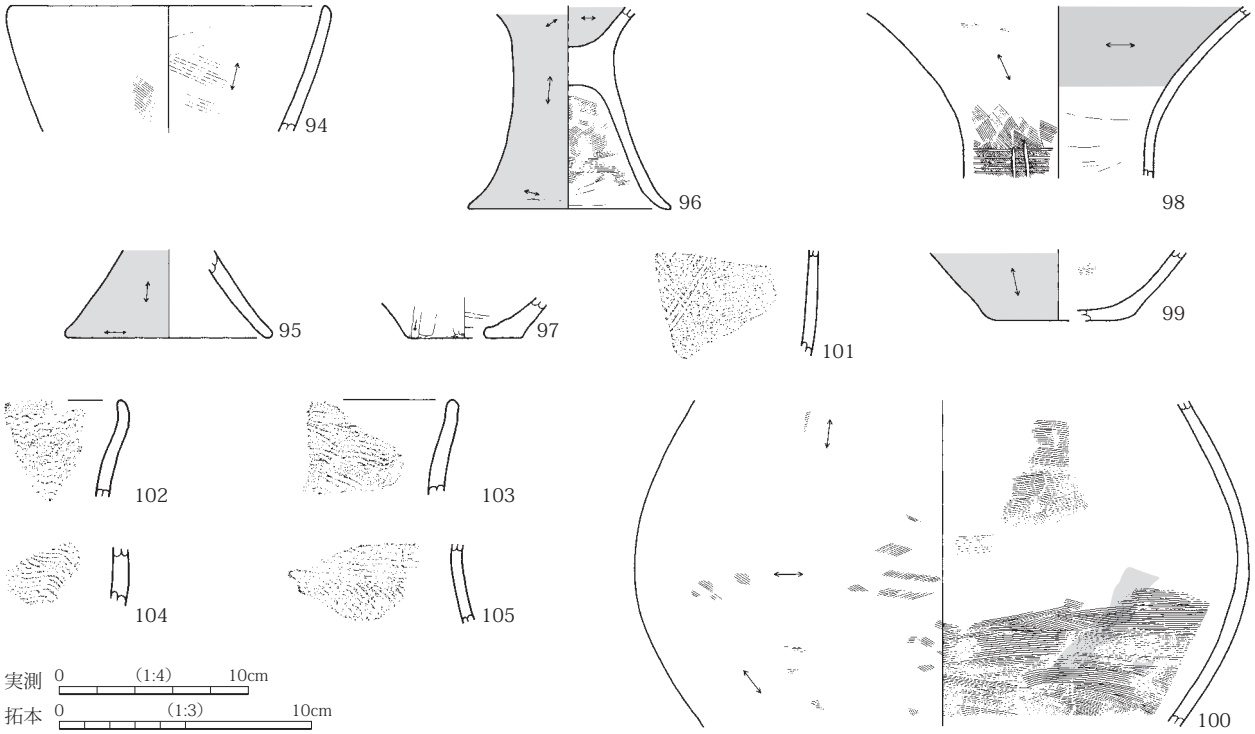
第 36 図　SB04　遺構図

SB04　調査（東より）

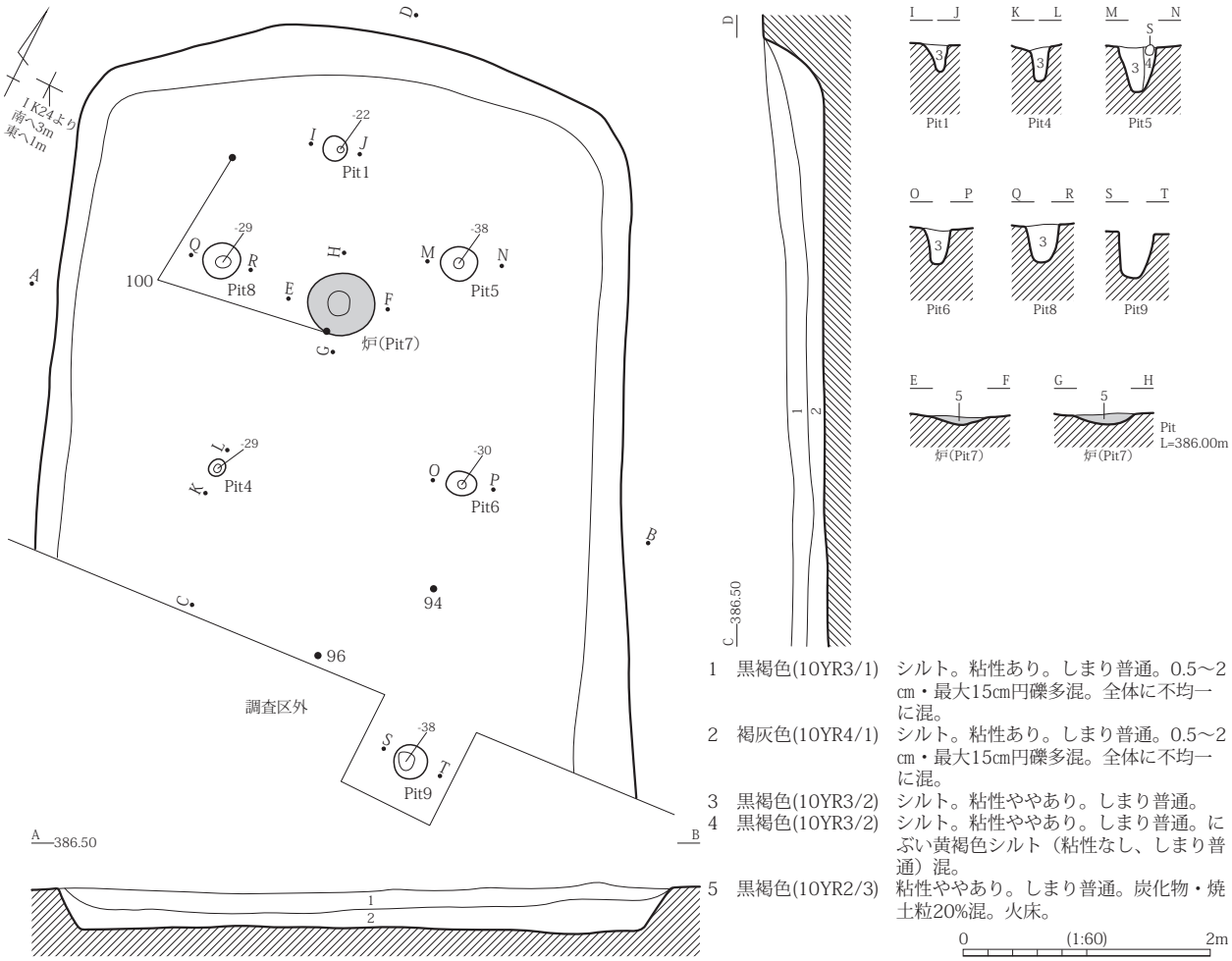
SB09（第 37・38 図　PL ８・９・34）

位置：Ⅰ K24 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりを確認する。住居南壁は調査区外へ延びる。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とし砂礫を不均一に多く含む。色調で２層に区分した。１層は黒褐色土、２層はやや色調が明るく褐灰色土である。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N26° W。主軸長推定 6.00m、直交軸長 4.24m。検出面からの深さは 32 ～ 48cm。床は地山敲き締め。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは６基を床面で確認する。主柱穴４基（Pit4 ～ Pit6・Pit8）は方形に配置する。床面からの深さは 29 ～ 38cm。Pit1 は北側の主柱穴間と北壁中央との間に位置する。棟持柱の柱穴であると考えられる。南側で検出した Pit9 は、住居跡の軸方向に平行するように検出された主柱穴４基と軸方向が一致しない。棟持柱と炉の位置から、おそらく入口は南東方向であると想定されるので、Pit9 は出入口施設や貯蔵穴の可能性がある。**炉**：Pit7。主柱穴 Pit5、Pit8 間よりやや内側に位置する。やや掘り窪められた土坑の埋土に炭化物と焼土を多く含んでおり、地床炉と考える。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが１層からの出土で破片である。２層中から壺（98）、甕（101）、床面から壺胴部（100）、Pit8 内から甕（102）が出土している。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）とする。

出土遺物：94 は鉢である。95・96 は高坏の脚部で赤彩される。97 は甑である。98 ～ 100 は壺である。98 は頸部付近の破片で、頸部文様には横走する箆描直線文を縦方向の垂下文で区画する「Ｔ字文」が施される。口縁部内側は赤彩される。99 は壺底部付近の破片で赤彩される。100 は胴部の破片で、内面の一部に赤色顔料の付着が認められる。101 ～ 105 は甕である。101 は胴部の破片で縦羽状文が施される。102・103 は口縁部の破片で櫛描波状文が充填される。104 は胴部の破片で櫛描波状文が充填される。内面に豆粒大の圧痕が認められる。105 は頸部付近の破片で、頸部文様には簾状文が巡らされ、文様直下には櫛描斜線文が施される。



第 37 図　SB09　遺物図



1　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性あり。しまり普通。0.5～2㎝・最大15㎝円礫多混。全体に不均一に混。
2　褐灰色(10YR4/1)　シルト。粘性あり。しまり普通。0.5～2㎝・最大15㎝円礫多混。全体に不均一に混。
3　黒褐色(10YR3/2)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。
4　黒褐色(10YR3/2)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。にぶい黄褐色シルト（粘性なし、しまり普通）混。
5　黒褐色(10YR2/3)　粘性ややあり。しまり普通。炭化物・焼土粒20%混。火床。

0　(1:60)　2m

第 38 図　SB09　遺構図

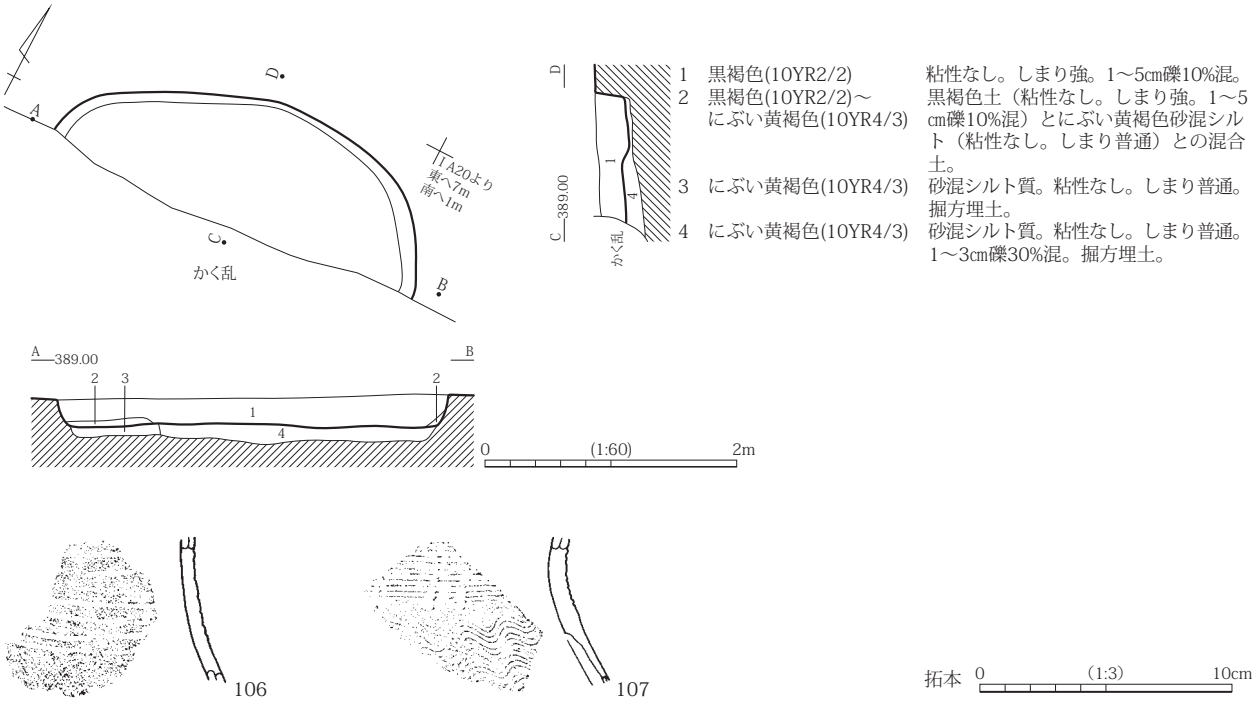
SB09　炉Ａ－Ｂ断面（南より）

SB09　調査（北より）

SB16（第 39 図　PL10・34）

位置：Ⅰ A20 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で建物跡の大部分が破壊されていて北西壁付近のみ残る。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。壁ぎわから床面にかけて地山の崩落土が観察できる。**構造**：平面隅丸長方形と推定。主軸方向は N27° W。主軸残存長 1.45m、推定直交軸長 2.70m。検出面からの深さは 22 ～ 24cm。床は地山を掘り窪めた後埋め戻し敲いて整形している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴はかく乱で破壊されていると考えられる。**炉**：かく乱で破壊されていると考えられる。**遺物出土状態**：遺物の総量はごくわずかで破片である。検出時、周囲のかく乱土から弥生土器が出土した。埋土の遺物と同時期であり、おそらくこの建物跡の遺物であったと推測する。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）と推定する。

出土遺物：掲載した遺物は、埋土中からの出土である。106 は壺の頸部の破片で、頸部文様には箆描直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線を充填した鋸歯文が付加される。107 は甕の頸部の破片で、頸部文様には簾状文が巡らされ、文様直下には櫛描波状文が施される。



第 39 図　SB16　遺構図・遺物図

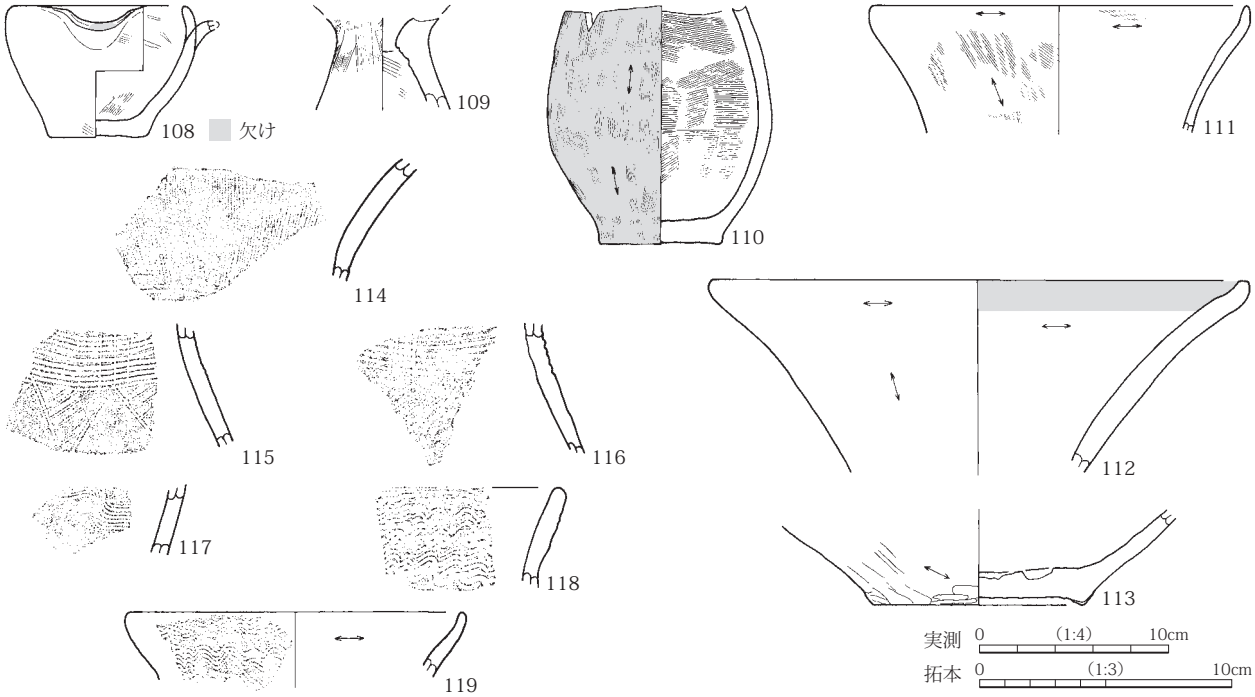
SB16　A－B 断面（南より）

SB16　調査（南東より）

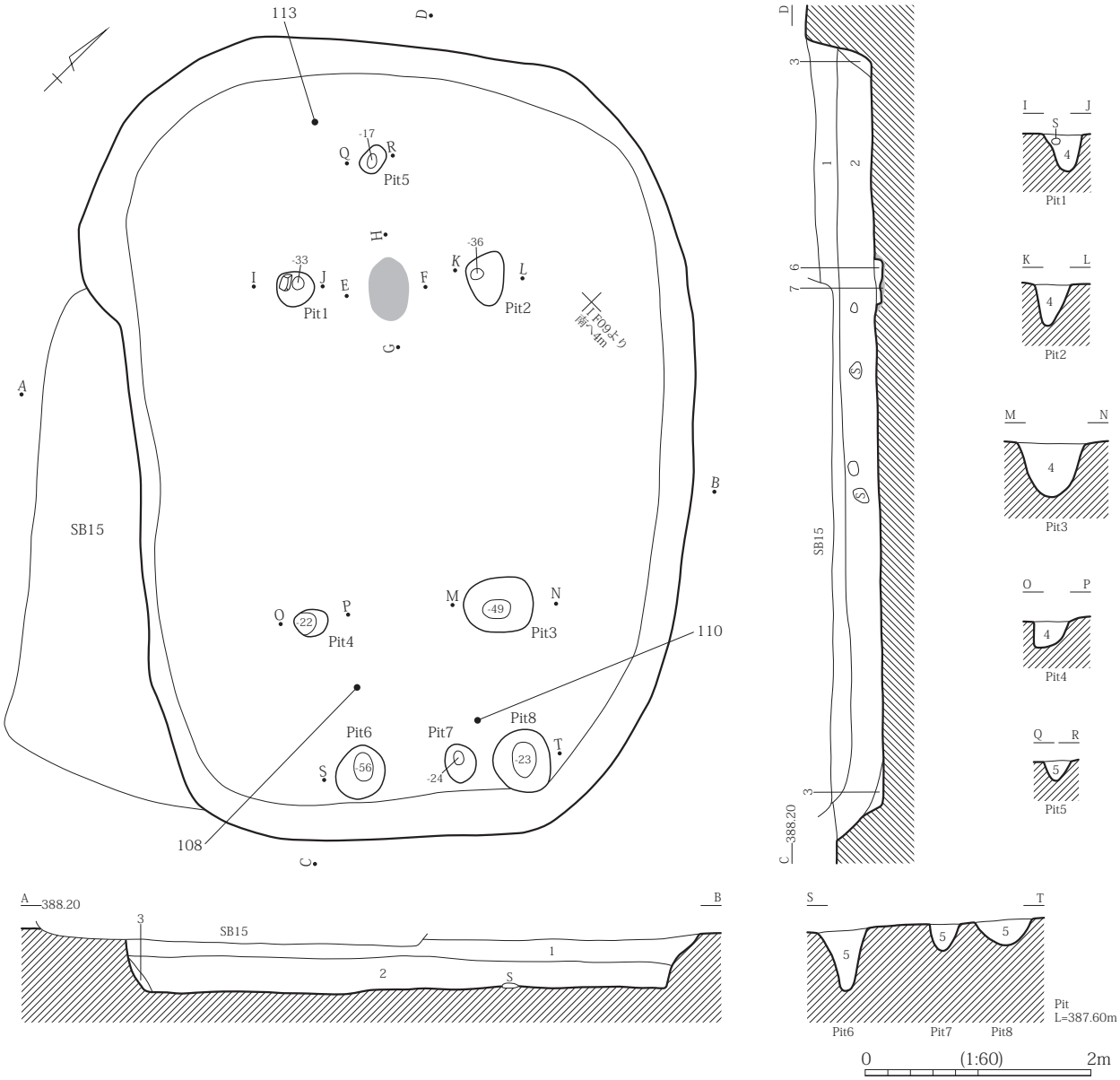
SB17（第 40・41 図　PL10・11・34）

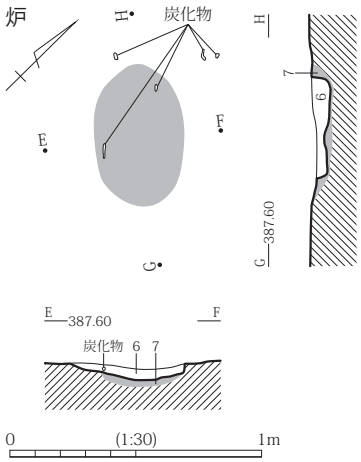
位置：Ⅰ F08・09・13・14 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりを確認する。SB15 で住居南西部が一部破壊されている。**重複関係**：SB15 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向は N45° W。主軸長 6.40m、直交軸長 4.45m。検出面からの深さは 50 ～ 60cm。床は地山敲きだがしまりは弱い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは８基を床面で確認する。主柱穴４基（Pit1 ～ Pit4）は長方形に配置する。床面からの深さは 22 ～ 49cm。北東壁中央付近の床面から棟持柱のピット（Pit5）を検出する。南東壁中央付近の床面には出入口施設と思われるピット（Pit6･Pit7）が並ぶ。南東隅に位置的に貯蔵穴と考えられる Pit8 を検出する。**炉**：Pit1、Pit2 間に検出する。炭化物が散在し地山が焼けている状態で地床炉と考えられる。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、埋土中全体にまばらに広がりほとんどが破片である。床面から頸部から上方が欠損する壺（110）、完形の片口鉢（108）が出土している。埋土１層から高坏破片（109）、壺破片（111･113･114）、埋土２層から壺破片（112）、甕破片（117･119）、埋土中から壺破片（115）、甕破片（118）が出土している。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）とする。炉の埋土中から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No.10）の放射性炭素年代測定で 2,026 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（92-68cal BC（5.7%）, 61cal BC-28cal AD（88.6%）, 41-48cal AD（1.1%））。

出土遺物：108 は片口の鉢である。109 は高坏の脚部である。110 ～ 116 は壺である。115・116 は壺の頸部の破片で、頸部文様には櫛描「Ｔ字文」が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線を充填した鋸歯文が付加される。114 は頸部の破片で、頸部文様には櫛描直線文が施される。110 は小形の壺で赤彩される。頸部より上方が欠損しているが、欠損部が水平に近く疑似口縁として加工され再利用された可能性も考えられる。111 は口縁端がわずかに内湾する壺の口縁部である。112 はわずかに口縁端が内湾する壺の口縁部で、口縁端部内側が赤彩される。113 は底部の破片である。117 ～ 119 は甕である。117 は胴部の破片で、櫛描波状文が施される。118・119 は口縁部の破片で櫛描波状文が施される。



第 40 図　SB17　遺物図





1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫多混シルト。粘性ややあり～普通。しまり普通。
　　2㎝以下礫（亜円～亜角）多混。
2　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通～弱。
　　～褐灰色(10YR4/1)　2㎝以下・5～10㎝・最大20㎝礫（円～亜円）混。
3　褐灰色(10YR4/1)　砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通～弱。
　　1㎝以下礫（円～亜円）・黄褐色土粒ブロック混。
4　黒色(10YR2/1)　細礫混砂質土。粘性ややあり。しまり普通。5㎝礫少混。
5　黒褐色(10YR3/2)　砂礫土（細礫）。しまり普通。
6　暗褐色(10YR3/4)　砂混シルト。粘性ややあり。しまり普通。焼土粒5%・炭化物混。
7　赤褐色(2.5YR4/6)　粘性なし。しまり強。火床。

SB17　調査（南東より）

第 41 図　SB17　遺構図

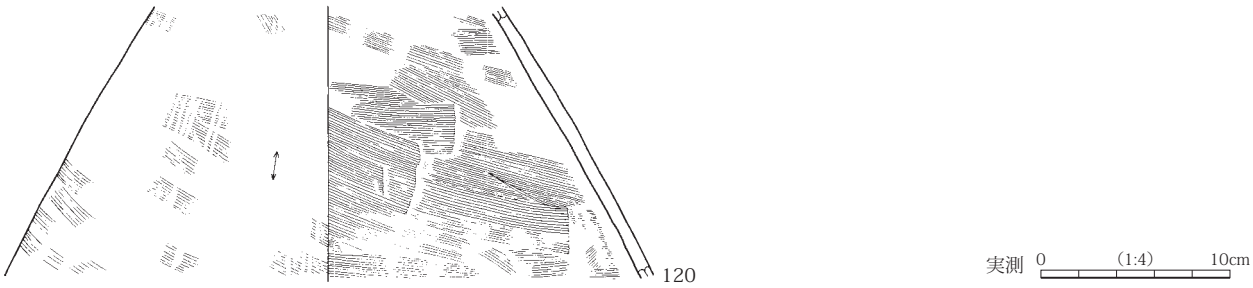
２．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は１棟検出している。竪穴住居跡が南側（２区）まで広がって分布しているのに比べ、唯一１棟のみが北側（１区）で確認された。また、独立した棟持柱（以下「独立棟持柱」とする。）をもっているのが特徴である。

ST01（第 42・43 図　PL12・13・34）

位置：Ⅰ B24・25、Ⅰ G05 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。当初土坑として調査を開始したが、土坑の形状が類似し等間隔に並ぶことから掘立柱建物跡と判断した。かく乱で Pit3 の上部が破壊されている。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。**構造**：棟方向N 17°Wで独立棟持柱をもつ側柱建物。桁行２間×梁行１間、桁行長 5.4m、梁行長 2.03m。柱穴は平面形が径 42 × 52cm ～ 31 × 75cm の円形～楕円形で、検出面からの深さが 42 ～ 57cm である。埋土は単層で柱痕は認められない。Pit1 ～ Pit6 が主柱穴、Pit7、Pit8 が棟持柱である。**遺物出土状態**：遺物の総量はわずかで、破片である。Pit4 から壺頸部破片、Pit5 から壺胴部破片（120）が出土している。壺胴部破片（120）は検出時に包含層から出土した破片と接合する。また 120 と Pit5 出土のそれ以外の破片とは接点はないが、同一資料の可能性がある。**時期**：出土遺物から弥生時代後期と考えられる。出土遺物は破片のため、吉田式期か否かは判断できないが、遺跡内の弥生時代後期の竪穴住居跡は吉田式期であると判断しているため、この掘立柱建物跡も同時期と考えるのが妥当である。

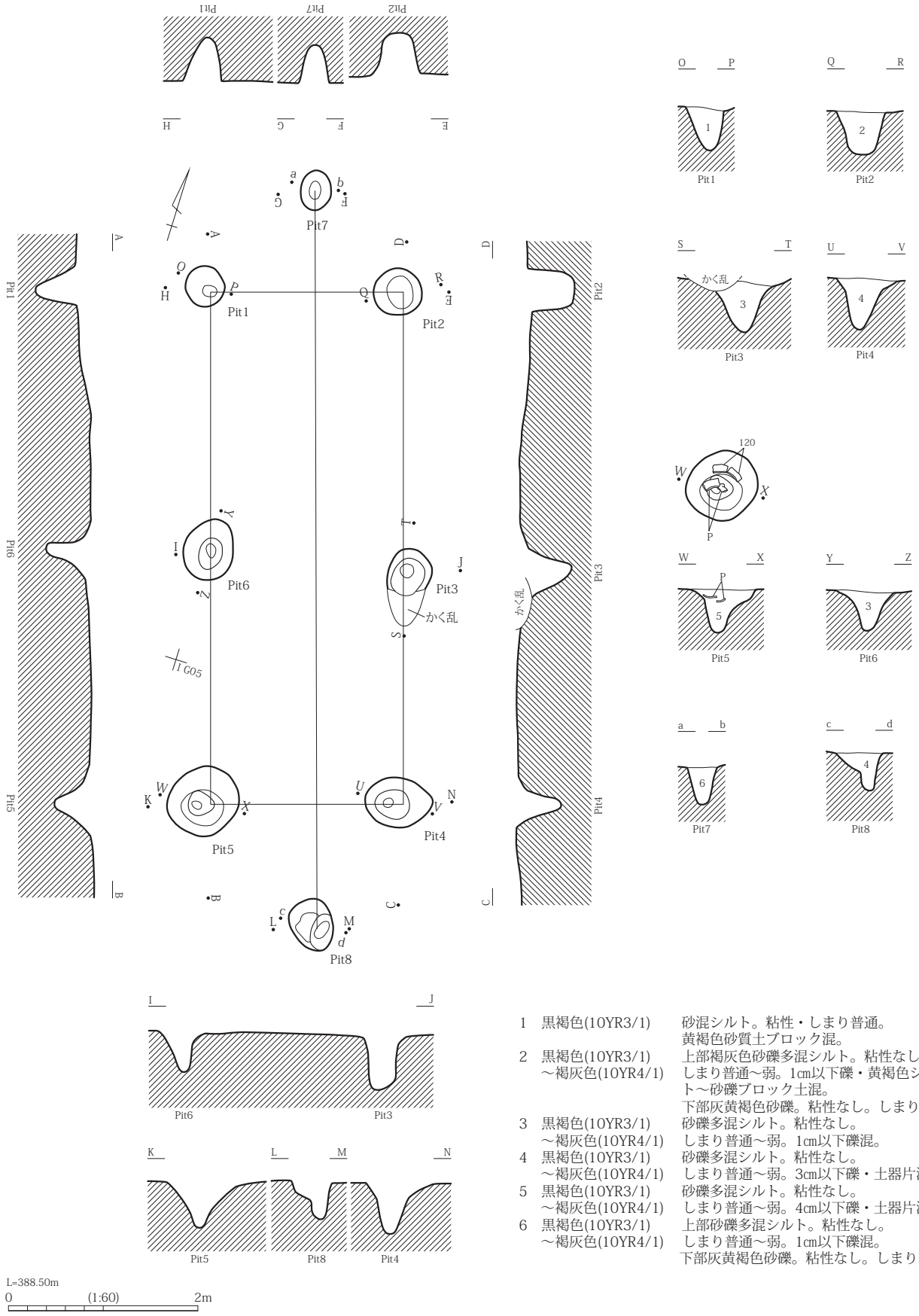
出土遺物：120 は壺の胴部上半の破片で、内側表面に部分的な剥離が認められる。意図的なものか検討を要する。



第 42 図　ST01　遺物図

ST01　完掘（北西より）

ST01　調査（南東より）



1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。粘性・しまり普通。
　　黄褐色砂質土ブロック混。
2　黒褐色(10YR3/1)　上部褐灰色砂礫多混シルト。粘性なし。
　　～褐灰色(10YR4/1)　しまり普通～弱。1cm以下礫・黄褐色シルト～砂礫ブロック土混。
　　下部灰黄褐色砂礫。粘性なし。しまり弱。
3　黒褐色(10YR3/1)　砂礫多混シルト。粘性なし。
　　～褐灰色(10YR4/1)　しまり普通～弱。1cm以下礫混。
4　黒褐色(10YR3/1)　砂礫多混シルト。粘性なし。
　　～褐灰色(10YR4/1)　しまり普通～弱。3cm以下礫・土器片混。
5　黒褐色(10YR3/1)　砂礫多混シルト。粘性なし。
　　～褐灰色(10YR4/1)　しまり普通～弱。4cm以下礫・土器片混。
6　黒褐色(10YR3/1)　上部砂礫多混シルト。粘性なし。
　　～褐灰色(10YR4/1)　しまり普通～弱。1cm以下礫混。
　　下部灰黄褐色砂礫。粘性なし。しまり弱。

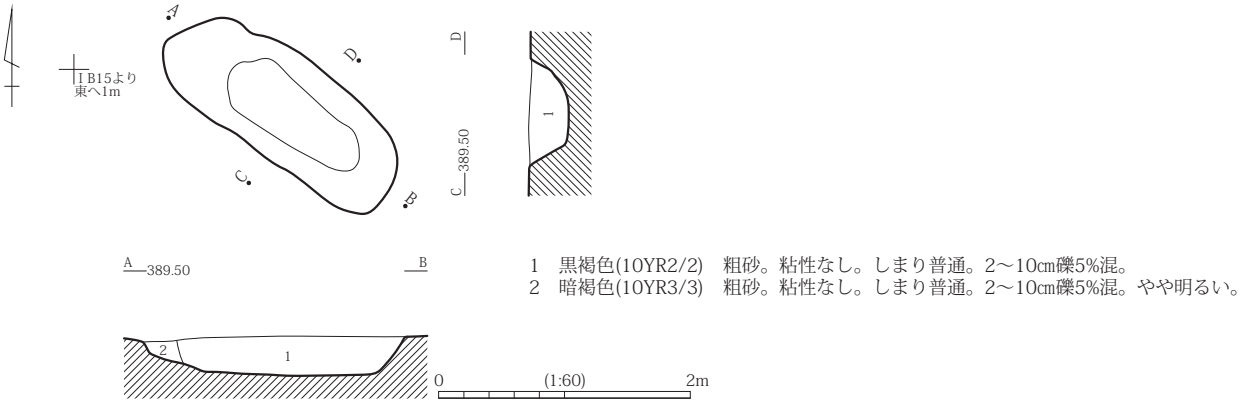
第 43 図　ST01　遺構図

３．墓跡

墓跡は３基検出している。SM01 は遺物が出土しないため断定はできないが、平面と掘り込みの形状から、土坑墓と判断した。SM02 は３個体の壺と１個体の甕を組み合わせて作られた土器棺墓である。SM03 は１個体の甕で作られた土器棺墓である。

SM01（第 44 図　PL13）

位置：Ⅰ B10・15 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。形状から土坑墓と判断し調査をする。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。北西側の壁際に崩落土と考えられるやや色調の明るい埋土が堆積する。**構造**：長軸方向 N50° W、長軸長 2.10m、直交軸長 0.80m。平面形は角がやや丸い長方形で、壁はやや急に立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは 31 ～ 33cm である。**遺物出土状態**：土坑墓内の土を水洗いしたが、歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物や土器はない。**時期**：SM01 と弥生時代後期の竪穴住居跡（SB03 以外）の長軸方向が類似すること、SM01、SD04 の埋土が掘立柱建物跡 ST01 の柱穴の埋土と類似する砂礫（粘性なし、しまり普通～やや弱）であることから、弥生時代後期と推測する。



1　黒褐色(10YR2/2)　粗砂。粘性なし。しまり普通。2～10㎝礫5%混。
2　暗褐色(10YR3/3)　粗砂。粘性なし。しまり普通。2～10㎝礫5%混。やや明るい。

第 44 図　SM01　遺構図

SM01　調査（南より）

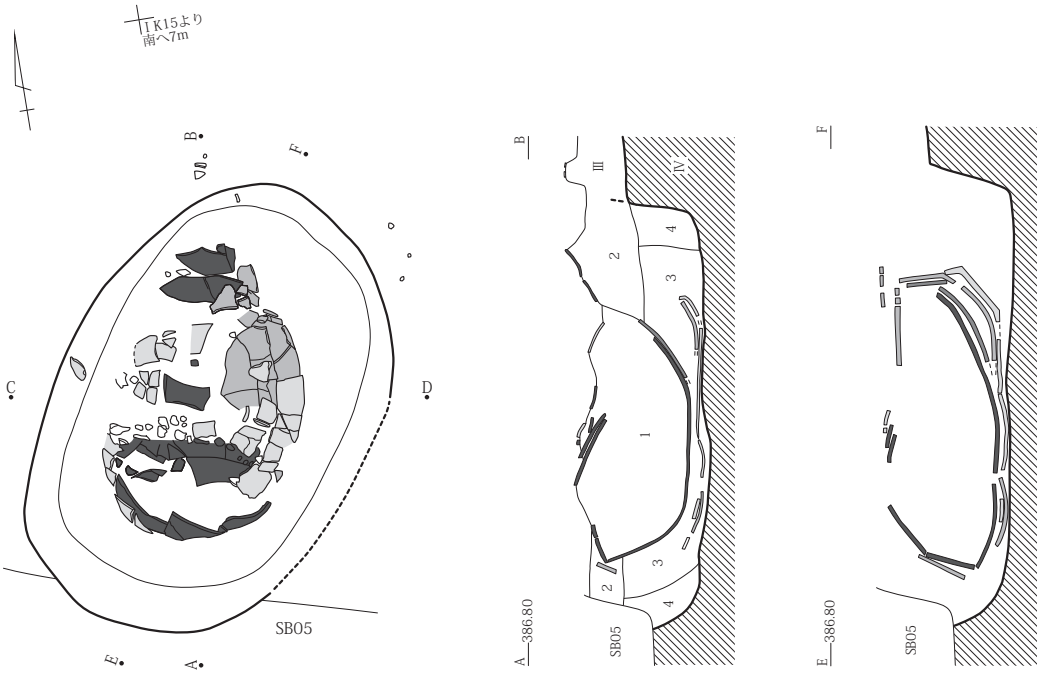
SM02　調査、検出（南西より）

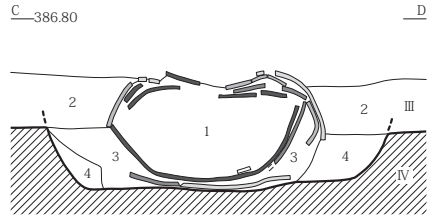
SM02（第 45 ～ 49 図　PL13・14・35 ～ 37）

位置：Ⅰ K14・15・19・20 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物の分布を確認する。大形の壺が横にされた状態から土器棺墓と判断し調査をする。検出したⅢ層中では掘り込みは認められないが、遺物の出土状態からⅢ層中から掘り込まれた可能性がある。断面観察において、弥生時代の竪穴住居を検出するⅣ層上面で掘り込みを確認する。**重複関係**：南端を SB05 に切られる。**埋土**：掘方埋土は黒褐色土を主体とする。土器棺内は粘性の強い黒褐色土である。土器棺を少しずつ埋めながら据えていったかどうかは、埋土の観察からは明らかにできなかった。**構造**：楕円形の掘り込み内に３個体の壺と１個体の甕を組み合わせて埋設している。組み合わせは外側から壺（123）、壺（122）、甕（124）、壺（121）の順である。掘方の長軸方向は N31° E、長軸長 1.24m、直交軸長 0.83m。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平らで、Ⅳ層上面からの深さは約 17 ～ 23cm である。**遺物出土状態**：遺物の出土状態から、構築状況を復元する（第 45 図遺物出土状態）。下面：掘り込みの北東側に壺（123）の底部から胴下半部の半分を底部を北東方向に向けて置く。南西側には壺（122）の破片、壺（123）の頸部から胴上半部の一部の破片と甕（124）の胴上半部の破片を平らに敷く。さらに北東側に壺（123）とやや長軸方向を東へずらして、壺（122）の底部から胴下半部を重ねている。中面：掘り込みの北東側で壺（122）の内側に甕（124）の底部から胴下半部を底部を重ねるように置き、一番内側に壺（121）の底部を南西側、頸部を北東側に向け据えた後、壺（122）の口縁部を壺（121）の底部に逆位で被せている。壺（121）胴部の一部に焼成後の穿孔が１つあるが、穴は掘り込みの底面側にある。上面：北東側の壺（122）胴下半部の内側に甕（124）を置いている。検出面:最後に南東側で壺（121）胴部の外側に壺（122･123）の胴部から頸部の大きな破片を貼りつけている。棺として底部から頸部までほぼ完形なのは一番内側の壺（121）のみである。それ以外の甕（124）､壺（122･123）は底部から胴下半部はほぼ完形で、出土時に隣り合った破片同士が接合することから、構築時は完形のまま据えられたと考えられる。しかし胴上半部は１/２から１/４程度のみ残存することや、出土時に隣り合った破片同士が接合しないこと、破片の上下の方向がさまざまな方向を向くことから、大きく割った（割れた）破片を利用し、全体として棺の形状になるよう整えていったと考えられる。一番内側の壺（121）の胴部最大径が約 50cm と最も大きく、一番外側に置かれる壺（123）の胴部最大径は約 45cm と最も小さいことからも想定できる。また一番外側に置かれる壺（123）は赤彩の残りが最もよい。色彩的な効果を意識している可能性が考えられるのではないか。内側の壺（121・122）も赤彩されているが残りはよくない。土器棺内の土を水洗いしたが､歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物の出土はない。**時期**:出土土器から弥生時代後期（箱清水式期）と考えられる。土器棺（121）内埋土中から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No. ５）の放射性炭素年代測定で 1,950 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（3-87cal AD（92.2%），105-120cal AD（3.2%））。ただし１世紀から３世紀は日本産樹木が数 10 年から 100 年程度古い炭素年代を示すことが知られている（Sakamoto　2003；尾嵜　2009）ので、欧米産樹木で作成した IntCal13 で較正した暦年代範囲は見かけ上実際の年代より数 10 年から 100 年程度古い可能性が考えられる。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセット（Jcal）で較正し直した場合、暦年代範囲はより新しい方に動く可能性に留意する必要がある。

出土遺物：掲載した遺物は、すべて土坑内に埋置されていた土器である。121 ～ 123 は壺である。121 は頸部から底部の破片で、頸部文様には２条一対の櫛描「Ｔ字文」が施され、文様直下から胴部最大径のやや下側まで赤彩される。胴部中央付近に径約 0.8cm の焼成後穿孔が認められる。122 は口縁が外反する壺で、頸部文様には櫛描「Ｔ字文」が施され外面と口縁部内面が赤彩される。123 は頸部から底部の破片で、頸部文様には２条一対の櫛描「Ｔ字文」が施され外面と口縁部内面が赤彩される。124 は甕である。胴部から底部の破片で胴部上半には櫛描波状文が施される。

遺物出土状態（検出面）



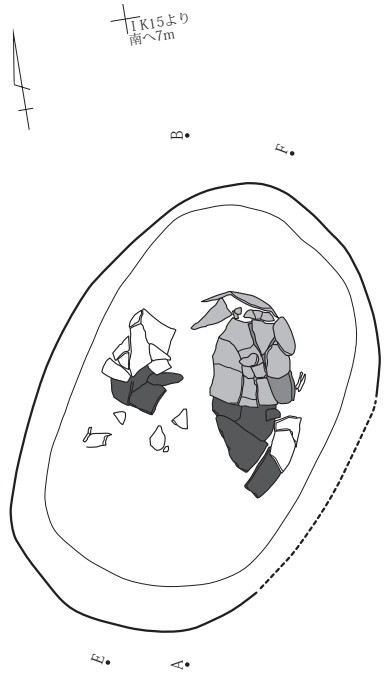


1　褐灰色(10YR4/1)　粘性なし。しまり強。
　　黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ3%混。
2　黒褐色(10YR3/1)　粘性なし。しまり強。
　　黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ粒5%程混。
3　黒褐色(10YR2/2)　粘性あり。しまり強。
4　黒褐色(10YR2/2)　粘性強。しまり強。

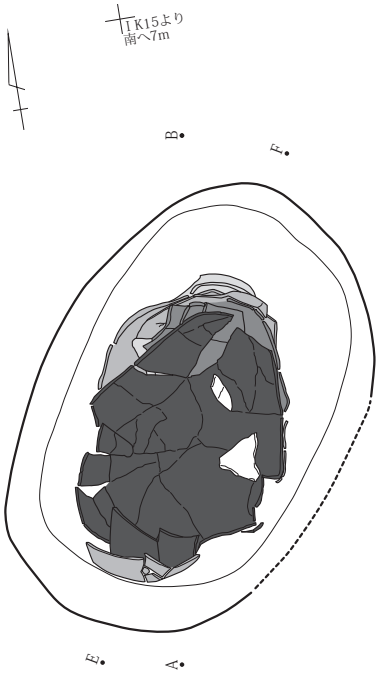
0　(1:20)　1m

121 …
124 …
122 …
123 …
不明 …

遺物出土状態（上面）

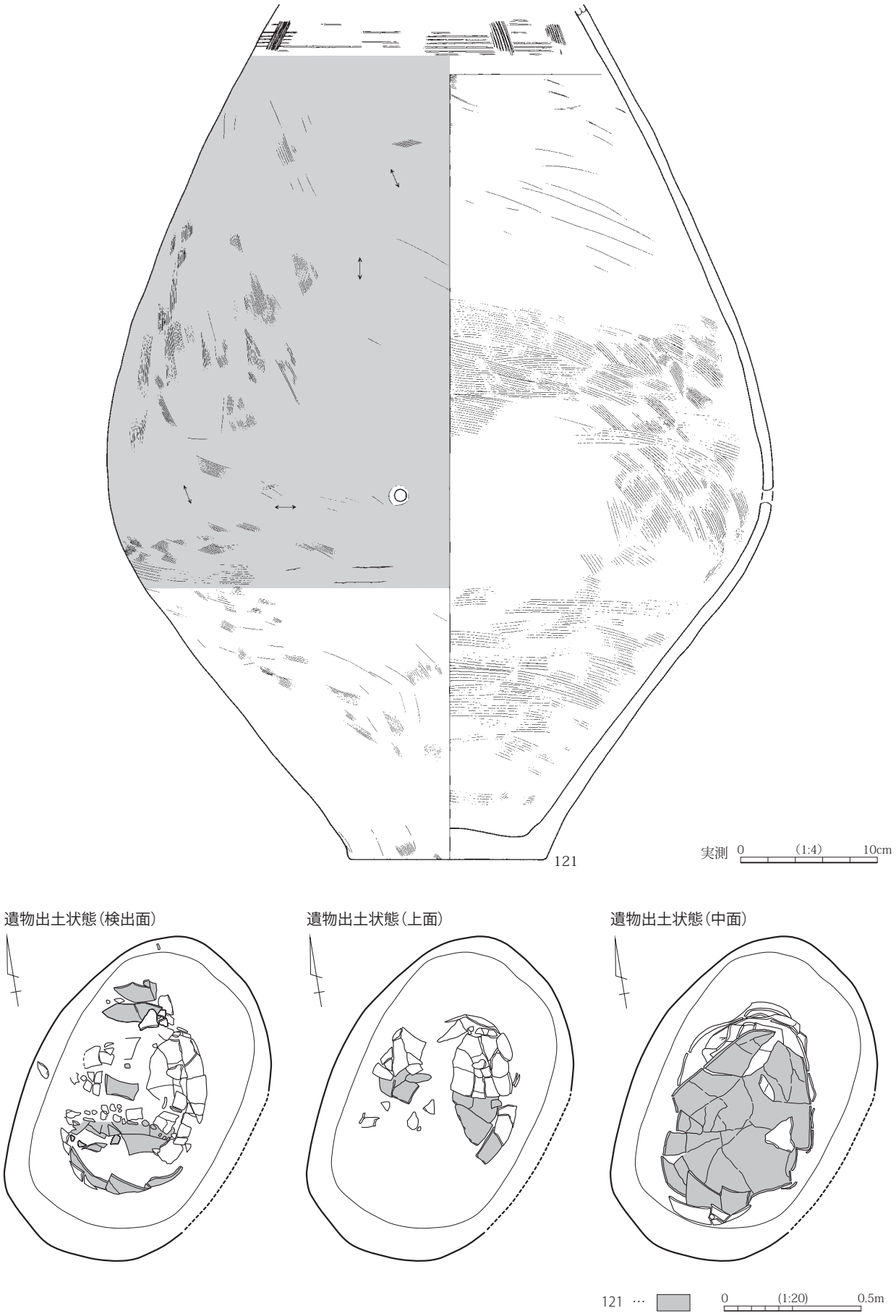


遺物出土状態（中面）

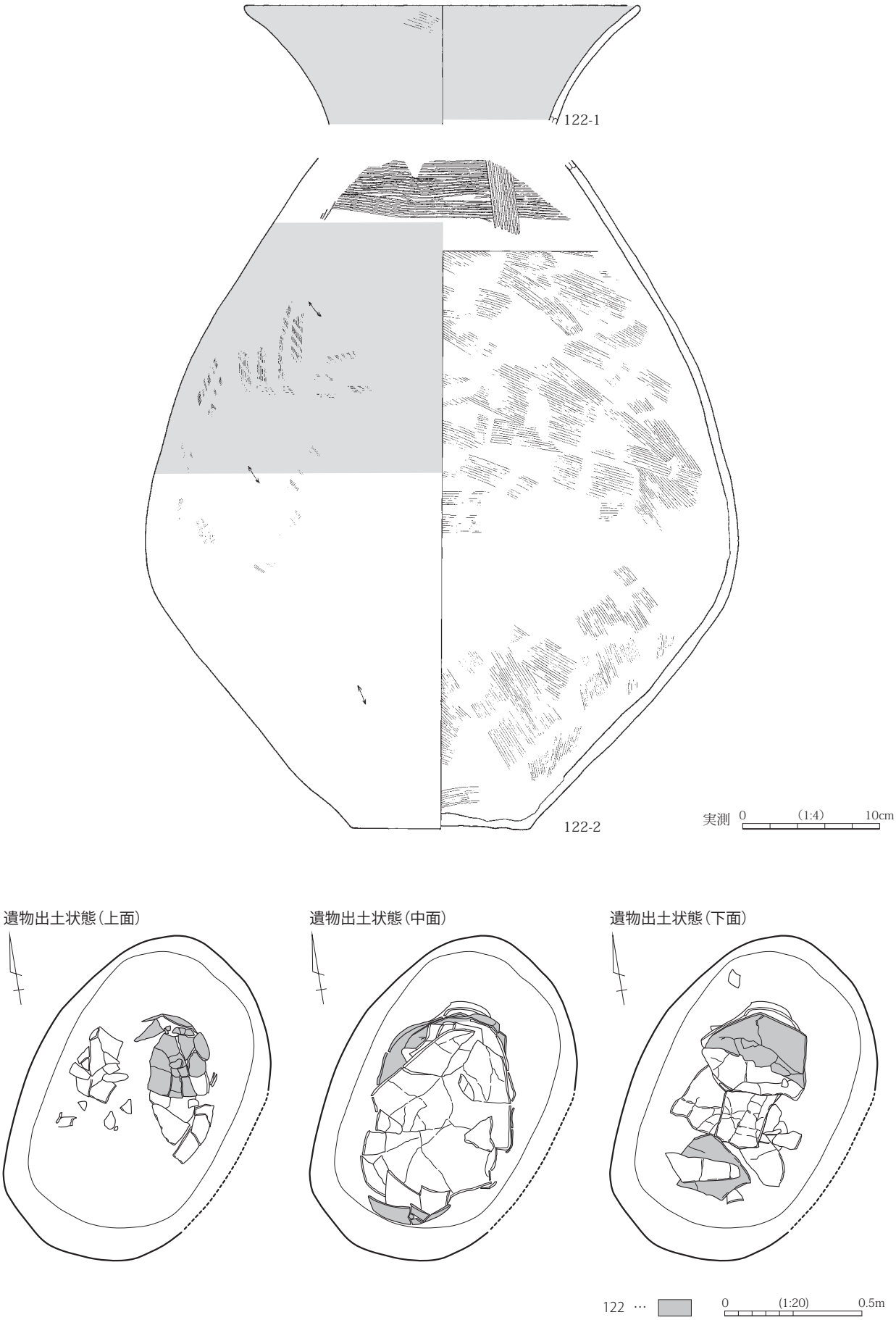


遺物出土状態（下面）

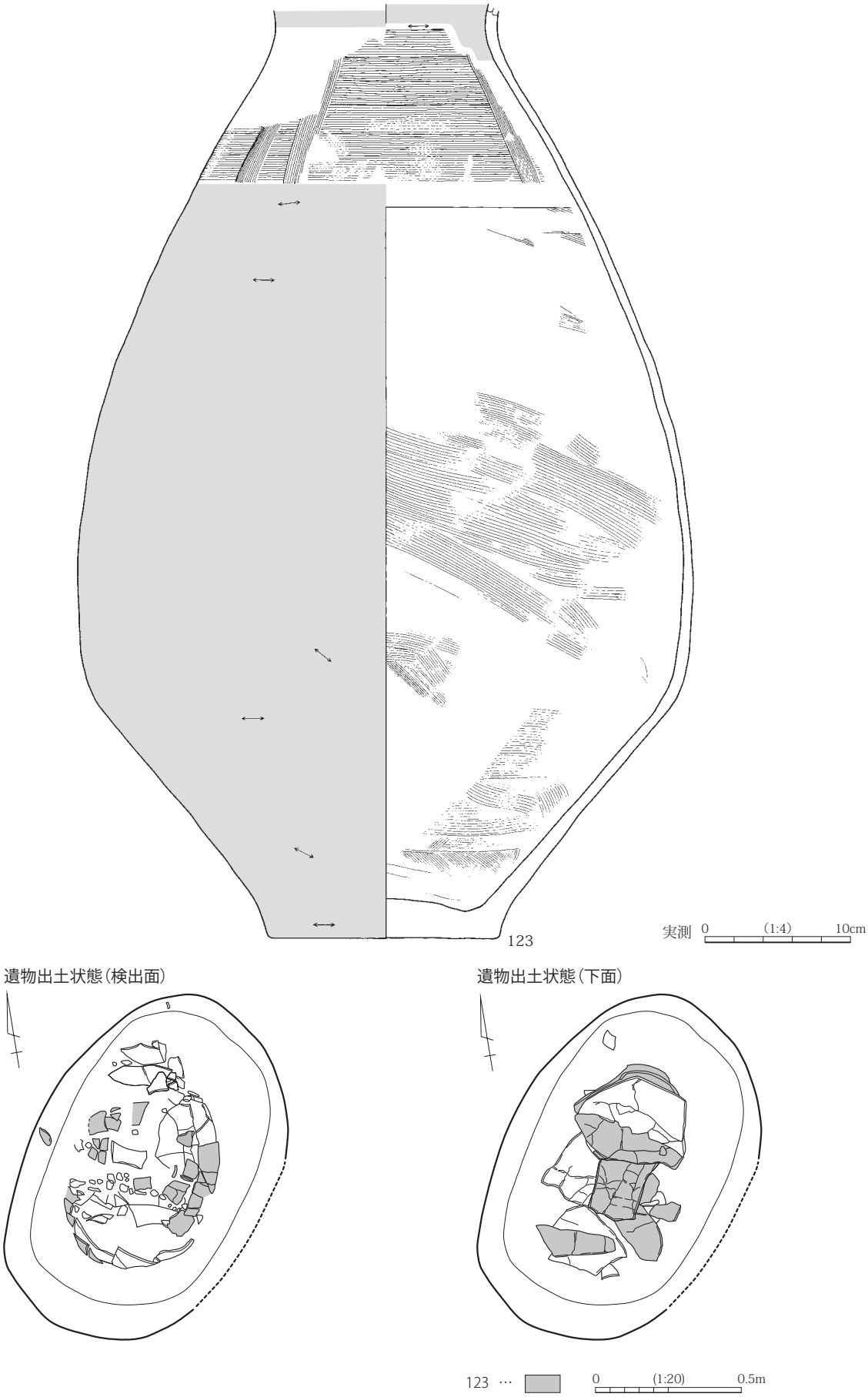
第 45 図　SM02　遺構図（１）



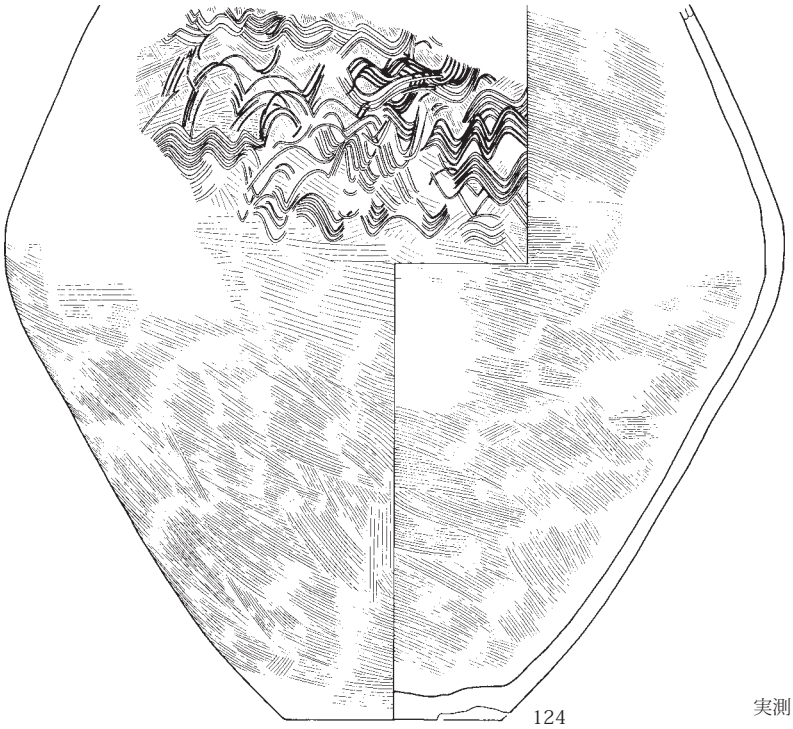
第 46 図　SM02　遺物図（１）・遺構図（２）



第 47 図　SM02　遺物図（２）・遺構図（３）

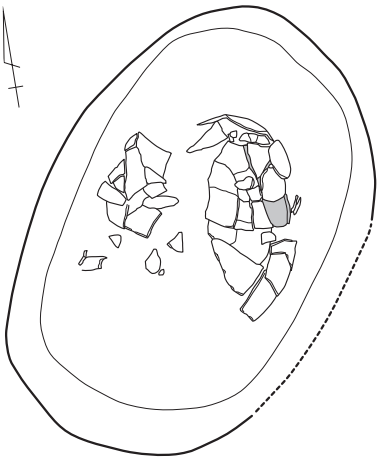


第 48 図　SM02　遺物図（３）・遺構図（４）

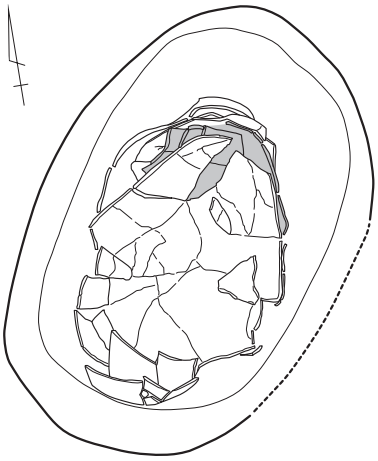


実測 0 (1:4) 10cm

遺物出土状態（上面）



遺物出土状態（中面）



遺物出土状態（下面）

124 … 0 (1:20) 0.5m

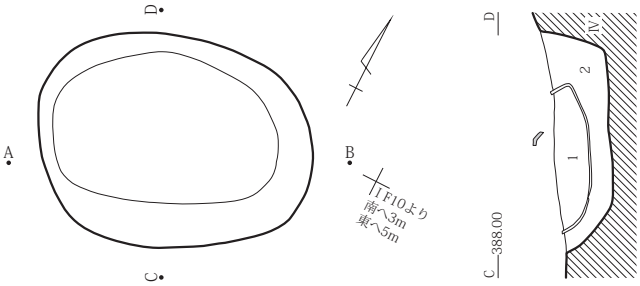
第 49 図　SM02　遺物図（４）・遺構図（５）

SM02　調査（南東より）

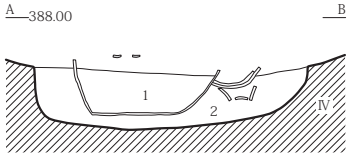
SM03（第 50・51 図　PL14・38）

位置：Ⅰ F10 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で土器が出土する。上部はかく乱により破壊されているため、土器は半分のみ検出される。また土器を埋設した掘り込みが確認できる。SM02 と類似し、形状から土器棺墓と判断し調査をする。**重複関係**：なし。**埋土**：土器棺内は黒褐色土を主体とする単層。粘性はなく、しまりはやや弱い。掘方埋土は土器棺内埋土と類似する黒褐色土を主体とするが、しまりは普通でやや明るい色調である。**構造**:掘り込みは主軸方向 N63° E、主軸長 0.70m、直行軸長 0.58m。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは 12 ～ 19cm である。**遺物出土状態**:甕（125）の頸部で破壊し、口縁部から頸部を逆位にして被せ、主軸とほぼ同一方向に底部を南西へ向け、横にされた状態で掘り込み内のやや南東側へ片寄って埋置している。甕（125）を設置後埋め戻したと想像できるが、上部が破壊されているため、埋土から埋め方の過程を推測することはできない。土器棺内部の土を水洗いしたが、歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物の出土はない。**時期**：出土土器から弥生時代後期と考えられる。

出土遺物：掲載した遺物は、土坑内に埋置されていた土器である。125 は甕で口縁から頸部の破片と頸部から底部の破片である。同一個体と考えられるが接合しない。口縁部と胴部上半に櫛描波状文が充填され、頸部には等間隔止めの櫛描簾状文が施される。



SM03　調査（東より）

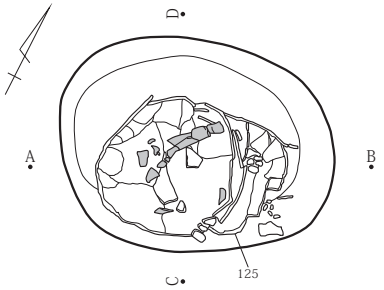


1　黒褐色(10YR2/2)　シルト質。粘性なし。しまりやや弱。細礫3%混。

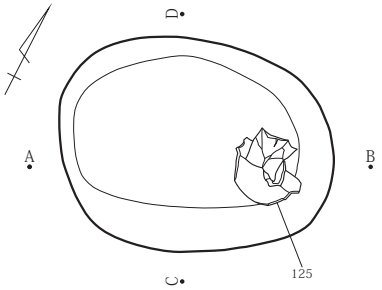
2　黒褐色(10YR2/3)　シルト質。粘性なし。しまり普通。細礫3%混。

0　(1:20)　0.5m

遺物出土状態（上面）



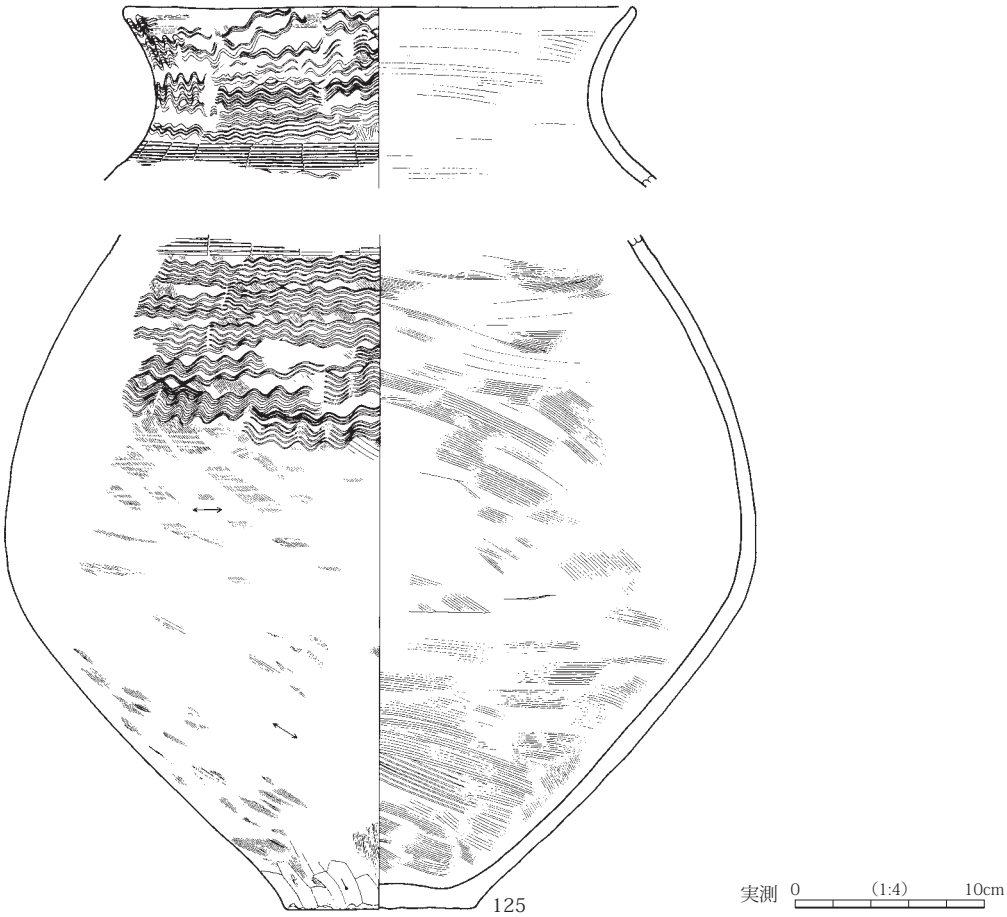
遺物出土状態（下面）



検出面出土遺物

0　(1:20)　0.5m

第 50 図　SM03　遺構図



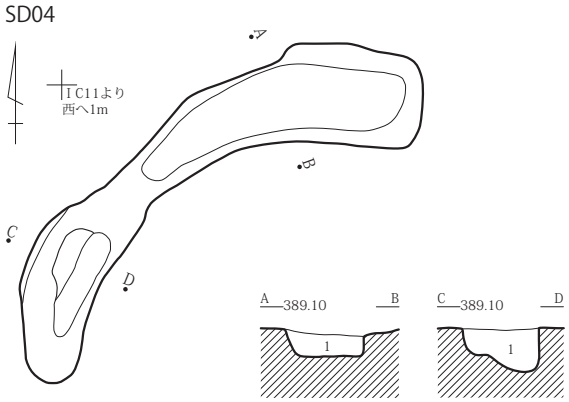
第 51 図　SM03　遺物図

４．溝跡

１区においてⅣ層上面検出面で１条の溝跡を検出している。長方形状に延びるため溝跡として登録したが、遺構の機能は不明である。

SD04（第 52 図　PL14）

位置：Ⅰ B15、Ⅰ C06・11 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土のやや湾曲した帯状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：黒色土を主体とする単層。ややしまりがない。**構造**：北東－南西方向に弧を描き、全長 3.90m、溝幅 0.35 ～ 0.80m、断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは 11 ～ 35cm。平面形から周溝が考えられるが、内側で主体部と考えられるような遺構はなく、機能は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：弥生時代後期か。



1　黒褐色(10YR2/2)　粗砂。粘性なし。しまりやや弱。
2～5㎝礫5%混。

第 52 図　SD04　遺構図

５．土坑

弥生時代の遺物を出土する土坑は、SK127 と SK160、SK220、SK261、SK287、SK289、SK291 の７基である。SK160、SK289、SK291 の出土土器はいずれも破片で、掲載可能な遺物はない。SK49、SK50 は付近の墓跡 SM01 や溝跡 SD04 と埋土が類似すること、SK214、SK215 は掘立柱建物跡 ST01 や SK220 と埋土が類似すること、SK286、SK288 ～ 292 は SK287 と形状や埋土が類似することから同時期の土坑の可能性が高い。調査時に溝跡として登録した SD06 ～ SD10 は整理時に土坑と判断したため、本項に記載する。SD07 と SD08、SD09 と SD10 は 3.5m ～ 4 m ほどの距離をとってほぼ平行に位置する。これらの４基の土坑にはなんらかの関連性があると考えられる。SD10 が古墳時代の流路跡 SD01 に切られることから、古墳時代中期以前弥生時代後期以降の遺構であると考えられ本節に掲載するが、出土遺物がないため詳細な時期は不明である。また形状の類似性から SD06、SD07、SD08、SD09 も同様の可能性が高い。

SK127（第 53・54 図　PL49）

位置：Ⅰ F04 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：SK134 を切る。**埋土**：黒褐色砂質シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造**：掘り込みは主軸方向 N38° E、主軸長 52cm、直交軸長 43cm。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は南側に偏って柱状に窪む。検出面からの深さは 40cm である。**遺物出土状態**：磨石（126）が埋土中から出土している。**時期**：弥生時代後期と考えられる。

出土遺物：126 は粗粒玄武岩の磨石である。表裏面に磨面があり、長軸方向に沿ってわずかに擦痕が認められる。

SK220（第 53・54 図　PL15・34）

位置：Ⅰ G05 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で褐灰色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：褐灰色砂礫多混シルトを主体とする単層。粘性なし、しまり普通。**構造**：掘り込みは主軸方向Ｎ 7° E、長軸長 52cm、直交軸長 52cm。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は窪み、検出面からの深さは 30cm である。**遺物出土状態**：鉢（127）と甕（128）の破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器から弥生時代後期と考えられる。

出土遺物：127 は内外面とも赤彩される鉢としたが、検討を要する。128 は小形の甕で、口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

SK261（第 53・54 図　PL34）

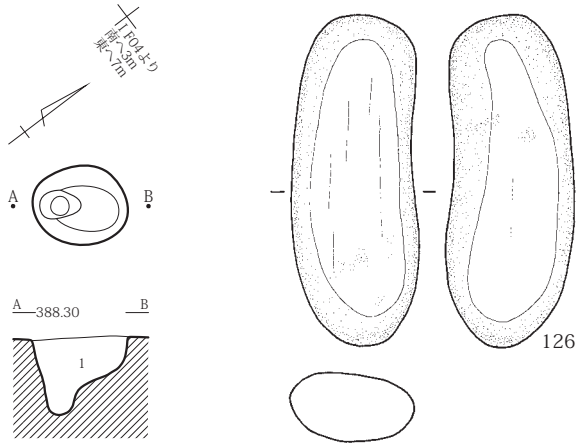
位置：Ⅰ F10、G06 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：小礫をわずかに含む黒褐色シルトを主体とする単層。粘性ややあり、しまり普通。**構造**：掘り込みは主軸方向 N86° W、主軸長 49cm、直交軸長 34cm。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平らで、検出面からの深さは 17cm である。**遺物出土状態**：甕（129）の破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器から弥生時代後期と考えられる。

出土遺物：129 は甕の底部付近の破片で、櫛状工具により施された斜条文の一部が残る。

SK287（第 53・54 図　PL15・49）

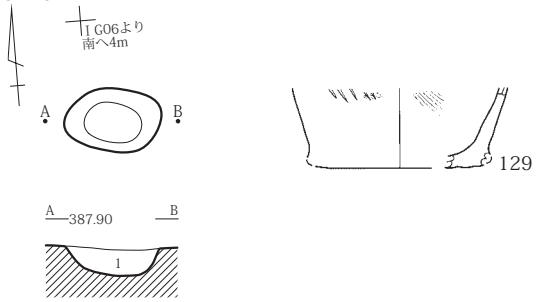
位置：Ⅰ G09 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：小礫をわずかに含む黒褐色シルトを主体とする単層。粘性なし、しまり普通。**構造**：掘り込みは主軸方向 N23° E、

SK127



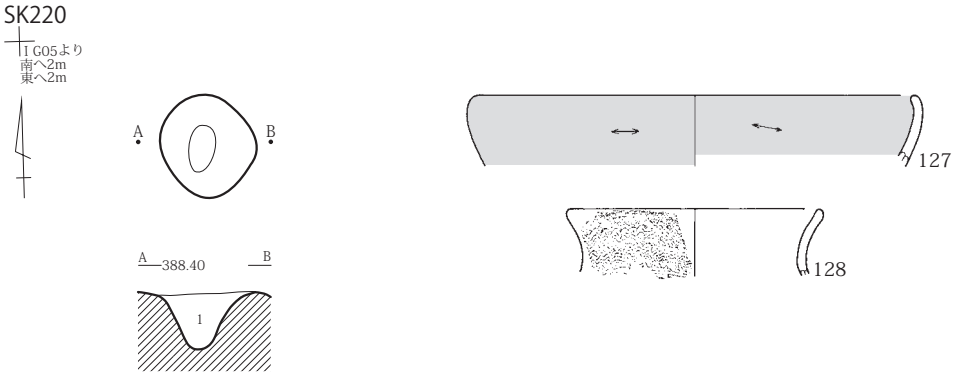
1　黒褐色(10YR3/1)　砂質シルト。粘性普通。しまり普通。
黄褐色砂質土ブロック少混。
黄褐色砂質土地山。

SK261



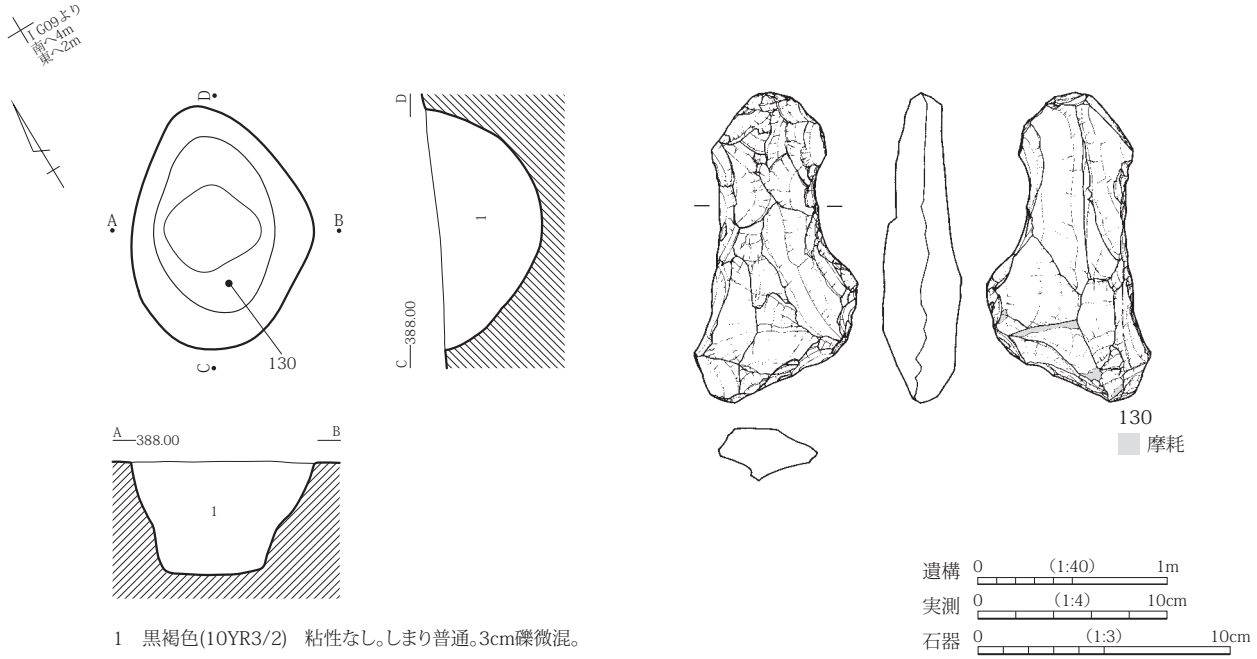
1　黒褐色(10YR2/2)　粘性ややあり。しまり普通。
黄褐色土粒3%混。
3cm礫微混。

SK220



1　褐灰色(10YR3/1～10YR4/1)　砂礫多混。シルト。
粘性なし。しまり普通～弱。
1cm以下（最大3cm）礫混。

SK287



1　黒褐色(10YR3/2)　粘性なし。しまり普通。3cm礫微混。

第 53 図　SK127・220・261・287　遺構図・遺物図

第 54 図　弥生時代後期　土坑分布図

主軸長 128cm、直交軸長 96cm。平面形は楕円形で、壁は短軸方向にはほぼ垂直に、長軸方向には緩やかに立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは 63cm である。**遺物出土状態**：打製石斧（130）が底部付近の埋土中から刃先を下に向けて出土している。**時期**：出土遺物から弥生時代後期と考えられる。**出土遺物**：130 は分銅形の打製石斧。使用頻度が激しかったようで、刃部は片減りして変形、摩耗し鋭利さを失っている。泥岩製。

SD06（第 54・55 図　PL15）

位置：Ⅰ G03 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：暗褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向は N31° E。主軸長 166cm、溝幅 55 ～ 75cm で断面形は南東側がやや深くなった逆台形状で、検出面からの深さは 28 ～ 44cm。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01 と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

SD07（第 54・55 図　PL15）

位置：Ⅰ B22、Ⅰ G02 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：SK224、SK225 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向は N68° W。主軸長 228cm、溝幅 76 ～ 92cm で断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは 40 ～ 52cm。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01 と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

SD08（第 54・55 図　PL15）

位置：Ⅰ B22 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土のわずかに湾曲した帯状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向は N83° W。主軸長 187cm、溝幅 50 ～ 60cm で断面は南側がやや深くなった逆台形を呈し、検出面からの深さは 23 ～ 33cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01 と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

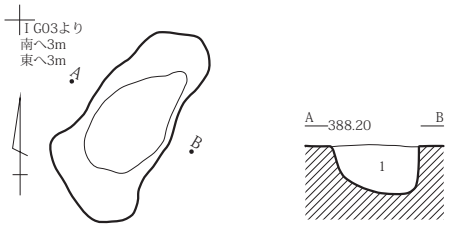
SD09（第 54・55 図　PL15）

位置：Ⅰ A25 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の先端のつぶれた長楕円形状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向は N66.5° E。主軸長 260cm、溝幅 100 ～ 120cm、断面は緩やかなＶ字状で検出面からの深さは 36 ～ 55cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01 と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

SD10（第 54・55 図　PL15）

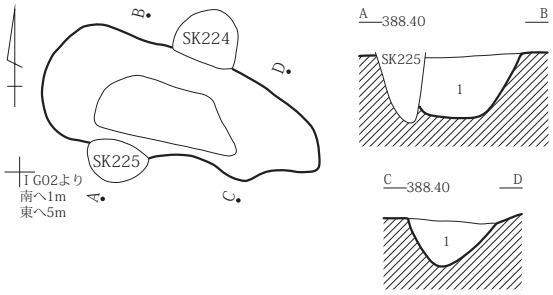
位置：Ⅰ F05 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：SD01 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向は N80° E。主軸長 263cm、溝幅 75 ～ 90cm、断面は中央部がやや深く凹む逆台形を呈し、検出面からの深さは 23 ～ 35cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01 と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

SD06



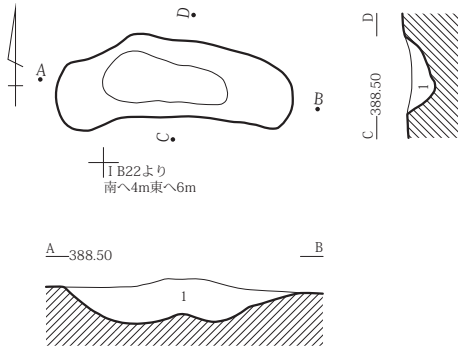
1　暗褐色(10YR3/4)　砂混シルト。粘性なし。
しまり強。1～3㎝細礫10%・
黄褐色粒3%混。

SD07



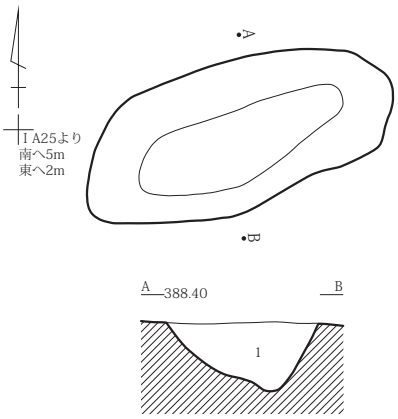
1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。粘性ややあり。
しまり強。黄褐色粒3%混。
5㎝礫少混。

SD08



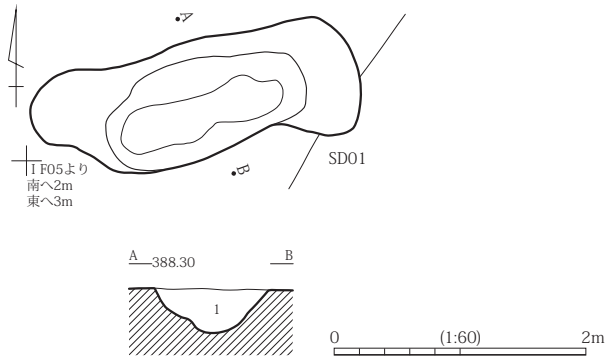
1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。粘性ややあり。
しまり強。黄褐色粒3%混。
上部に細礫多混部分あり。

SD09



1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。粘性なし。
しまり強。黄褐色粒5%混。
3～7㎝礫上部に多混。

SD10



1　黒褐色(10YR3/1)　砂混シルト。
粘性なし。しまり強。
黄褐色粒5%混。礫微混。

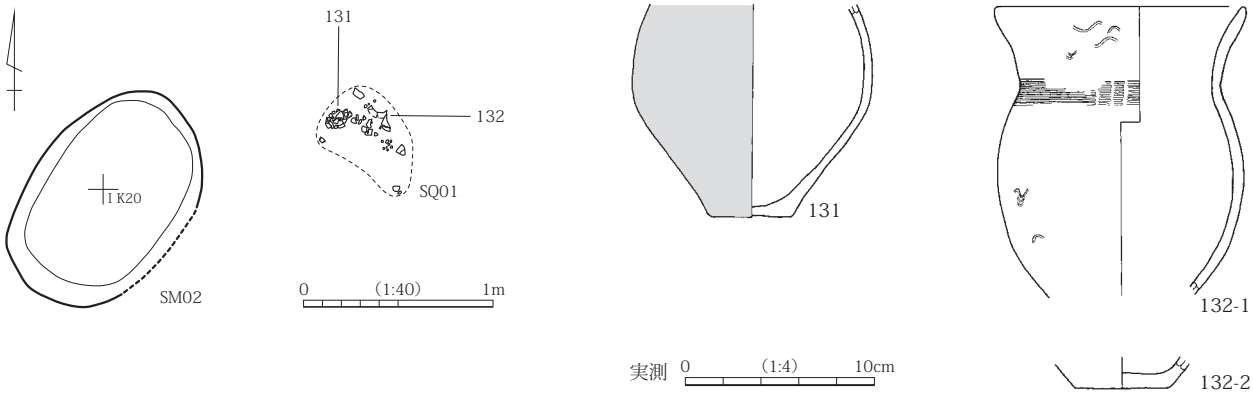
第 55 図　SD06 ～ 10　遺構図

６．遺物集中

SQ01（第 56 図　PL15・34）

位置：Ⅰ K20 グリッド。**検出**：遺物包含層（Ⅲ層）をバックホーで掘り下げ、Ⅳ層上面での遺構検出途中で土器片の集中を認める。西側約 1.5m に土器棺墓 SM02 が位置するため、関連性を考え調査をする。**重複関係**：なし。**埋土**：なし。**構造**：掘り込みなし。**遺物出土状態**：小形の壺（131）と甕（132）が割れた状態でⅢ層から出土する。壺は破片の散らばりがあまりみられず、甕は壺と比較するとやや散らばって出土している。両者とも接合したが、完形にはならなかった。**時期**：出土土器から弥生時代後期箱清水式期と考えられる。小形の壺と甕のため非日常で使用されたと考えられ、隣接する SM02 との関連がうかがわれる。

出土遺物：131 は小形の壺で赤彩される。132 は小形の甕で外面の摩耗が激しいが、頸部には簾状文が巡らされ、口縁部と胴部には櫛描波状文が施されていたと推定される。同一個体と考えられる小形の甕の底部破片が出土しているが接合しない。



第 56 図　SQ01　遺構図・遺物図

７．遺構外

包含層出土遺物（第 57 図　PL38）

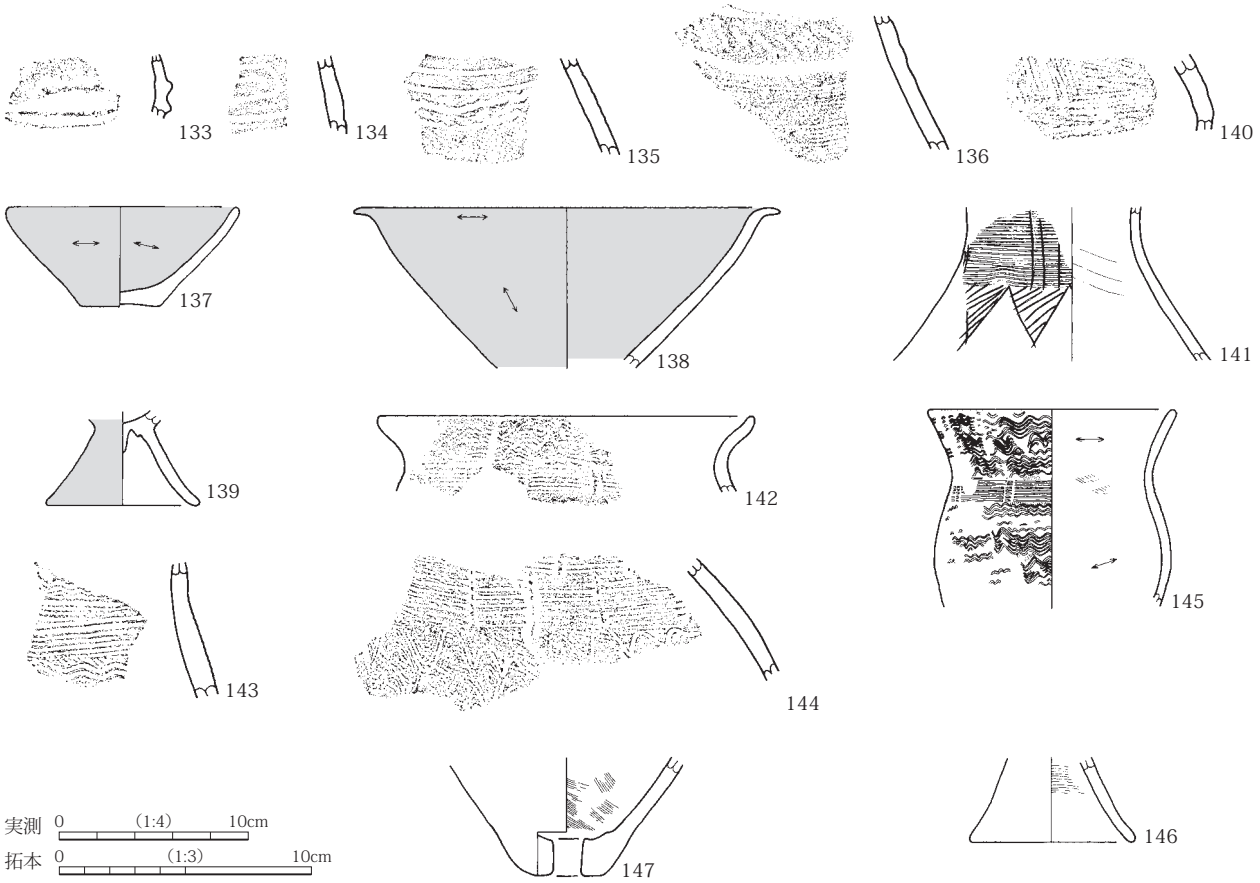
包含層および他時期の遺構から出土した弥生時代の遺物を本項に掲載した。

133 は弥生前期末～中期初頭に相当する、条痕文が施された壺の胴部破片である。

134 ～ 136 は中期に相当する土器である。134 は小形の壺の胴部である。小片であるためはっきりしないが、沈線による変形工字文が施されている。135・136 は壺の頸部付近の破片である。135 は横走する沈線の下位に波状沈線文が施される。136 は横走沈線文により横帯区画された文様の中に櫛状工具による刺突が施され、下位には櫛描きで直線文が施される。

137 ～ 147 は後期の土器である。137 は鉢で内外面とも赤彩される。138・139 は高坏である。138 は鍔縁状口縁高坏の坏部であるが、鍔縁状部の屈曲は不明瞭である。内面は摩耗していてはっきりしないが、内外面とも赤彩されていたと推定される。139 は脚部で赤彩が施される。140・141 は壺である。140 は壺の胴部破片であるが、当該期に所属するかは検討を要する。「土器片加工板」（柳澤 2015）（註１）の可能性が考えられる。141 は頸部の破片で、頸部文様には横走する櫛描直線文を縦方向の垂下文で区画する「T 字文」が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。142 ～ 144 は甕である。142 は口縁部がやや直立する甕の破片で、口縁部には櫛描波状文が施され頸部には簾状文が巡らされる。143 は口縁部と胴部に櫛描波状文が、頸部文様には櫛描直線文が施される。144 は胴部が球胴と推定される甕の破片で、頸部文様には櫛描簾状文が、胴部には櫛描波状文が施される。145・146 は小形の

台付甕で、同一個体と考えられるが接合しない。口縁部と胴部上半に櫛描波状文が充填され、頸部文様には簾状文が施される。147 は後期の甑としたが、当該期に所属するかは検討を要する。



第 57 図　弥生時代後期　遺構外　遺物図

８．小結

弥生時代後期の竪穴住居跡は、約 6,000㎡の面的調査の中で７軒検出された。調査区の中はかく乱により破壊されている部分がある。検出できなかった遺構を考慮すると、実際にはもう数軒の竪穴住居跡があった可能性がある。住居の所属時期は出土遺物から「吉田式期」に限定され、重複関係がないことから、ほぼ一時期の集落であったと考えられる。主軸方向は竪穴住居跡 SB03 のみ北東－南西方向にとるが、ほかは本来の地形の傾斜に沿った北西－南東方向にとる。平面形態は７軒すべて隅丸長方形である。主軸長と直交軸長の比は１：1.43（SB17）、１：1.45（SB03 推定）、１：1.56（SB01）で、住居の規模の大小にかかわらずほぼ一定の比率と考えられる。柱穴は主柱穴が４本柱（SB03 のみ６本柱）で、長方形に配列される（SB01、SB02、SB04、SB09、SB17）。また主軸上で主柱穴の短辺を結ぶ線と壁との間に位置する棟持柱のピット（SB01?、SB03、SB09、B17）や棟持柱のピットと反対側の壁側寄りに２基１対の出入口施設と考えられるピット（SB01、SB09?、SB17）、その脇にある貯蔵穴と考えられるピット（SB09?、SB17）が認められる。炉跡は主軸上で、出入口施設と反対側の主柱穴の短辺の間（SB17）か、やや中心側（SB01、SB04、SB09）に配置される。３軒はやや窪みをもつ地床炉で、SB04 のみ土器埋設炉である。いずれも浅川扇状地遺跡群でみられる弥生時代後期の住居形態と一致しており、一般的な形態といえる。

掘立柱建物跡は独立棟持柱をもち、本遺跡では竪穴住居跡７軒に対して１棟のみ検出された。長軸方向は北西－南東方向で住居跡と同じである。独立棟持柱をもつ掘立柱建物は、後世の神社建築と類似しており、弥生土器・銅鐸に描かれた絵画から、のちの神殿につながるような施設（宮本 1991）、また祖霊祭祀の施設（広瀬 2008）等の特殊な性格をもった建物であった可能性が指摘されている。設楽の分類（註２）

によれば、本遺跡は、「Ⅰ類）居住域に存在し、Ａ類）竪穴住居と混在している」パターンであると考えられる。今回の調査では当該期の明らかな墓跡はみつかっておらず、掘立柱建物跡は墓域に伴わない。数軒の竪穴住居に対して１棟からなる独立棟持柱をもつ掘立柱建物は、弥生時代前期に成立し後期まで続く基本形態であるとされており、周辺遺跡での今後の検出例に期待したい。

土器棺墓は２基検出された。SM02 は３個体の壺と１個体の甕を重ね合わせるようにして埋設されており、周辺遺跡ではほかに例をみない。SM03 は１個体の甕からなる。SM02 は箱清水式期であり、SM03 も同時期の可能性が高い。本遺跡では当該期の住居跡はみつかっていないが、北方約 400m に所在する本村東沖遺跡（長野高校地点）では集落跡がみつかっており、その墓域であると想定される。

註１．埋文センターが調査した､長野市篠ノ井遺跡群（弥生時代後期）（1997）では「土器片製品」､佐久市森平遺跡（弥生時代中期後半）（2014）では「土器片加工円板」と呼称されている。ここでは西近津遺跡群（弥生時代後期）（2015）で「土器片を再加工している土製品」として報告された「土器片加工板」の呼称を用いる。

２．設楽氏は独立棟持柱をもつ掘立柱建物の集落におけるあり方を以下のように分類している（設楽 2009）。

Ⅰ類　居住域に存在している

Ａ類　竪穴住居と混在している

Ｂ類　他の掘立柱建物とともに、あるいは単独で竪穴住居群から独立して存在している

Ｃ類　方形区の中ややや外側に存在している

Ⅱ類　墓域あるいは墓に存在している

Ａ類　墓域の一角に建っている

Ｂ類　墓の上に築かれている

第３節　古墳時代

１．流路跡

調査区北部（１区）を北東－南西方向に延びる流路跡が１条ある。本来は南部（２区）においても流路は連続していたと考えられるが、以前の校舎建設やグランドの造成に伴って削平された可能性が高く検出されない。

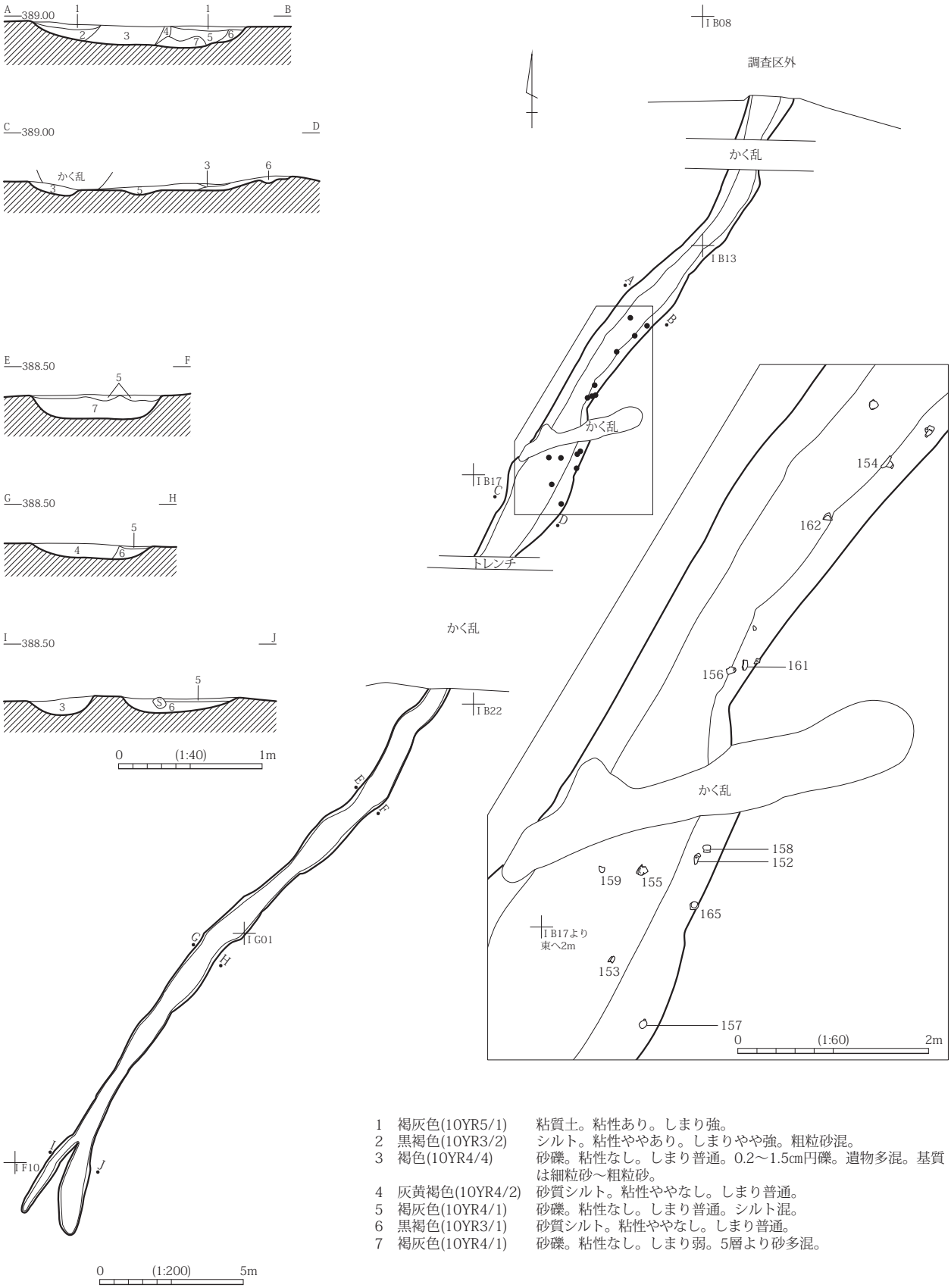
SD01（第 58・59 図　PL16・39）

位置：Ⅰ A25、Ⅰ B07・08・12・13・17・21、Ⅰ F05・10 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面の検出面において、遺物の破片を含む褐色～褐灰色砂礫の帯状の広がりを確認する。北東端は調査区外へ延びている。南西端で二股に分かれ途切れる。**重複関係**：SD10 を切る。**埋土**：砂、砂質シルト、砂礫を主体とする。掘り込みが浅いため詳細は不明だが、一連の流れの中での堆積物で埋まっていると考えられる。G-H 断面における４層、５層堆積物１g 中の珪藻殻数は 6.9×10^2 個および 6.7×10^2 個、完形殻の出現率はいずれも０％で、淡水種からなる。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群は検出されなかったため、堆積環境についての言及は難しい。**構造**：主軸方向は N33° E。全長約 46.7m、溝幅 0.54 ～ 1.75m を測る。検出面からの深さは２～ 18cm。断面形は浅い皿状を呈する。検出面や底面の標高から北東からみて、南西方向に流れていたと考えられる。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片で砂礫部分を主とし埋土中全体に広がる。ただし、Ⅰ B12 グリッドの流路中央部から東側の縁と、Ⅰ B17 グリッドの流路幅がやや広くなった部分の中央部から東側の縁では、摩耗の少ない完形もしくは完形に近い土師器小型丸底土器（157 ～ 159）、土師器高坏（152 ～ 156）の坏部や脚部、土師器壺（161・162）の口縁部や底部が７m ほどの間にまとまって出土している。**時期**：出土遺物から古墳時代中期とする。

出土遺物：掲載した遺物は、すべて埋土からの出土である。148･149 は坏である。150 は須恵器坏蓋である。外面にヘラ書きが認められる。151 ～ 156 は高坏である。151・152 は口縁部が外に開き、外面下部に稜をもつ坏部の破片である。153･154 は裾部が屈曲する脚部、155･156 は「ハ」の字に開く脚部の破片である。157 ～ 159 は小型丸底土器である。159 は胴部下半の一部に縄の圧痕が認められる。160 ～ 163 は壺である。160 は口縁が有段となる。164・165 は甕としたが検討を要する。166 は須恵器瓶としたが、当該期に所属するかは検討を要する。

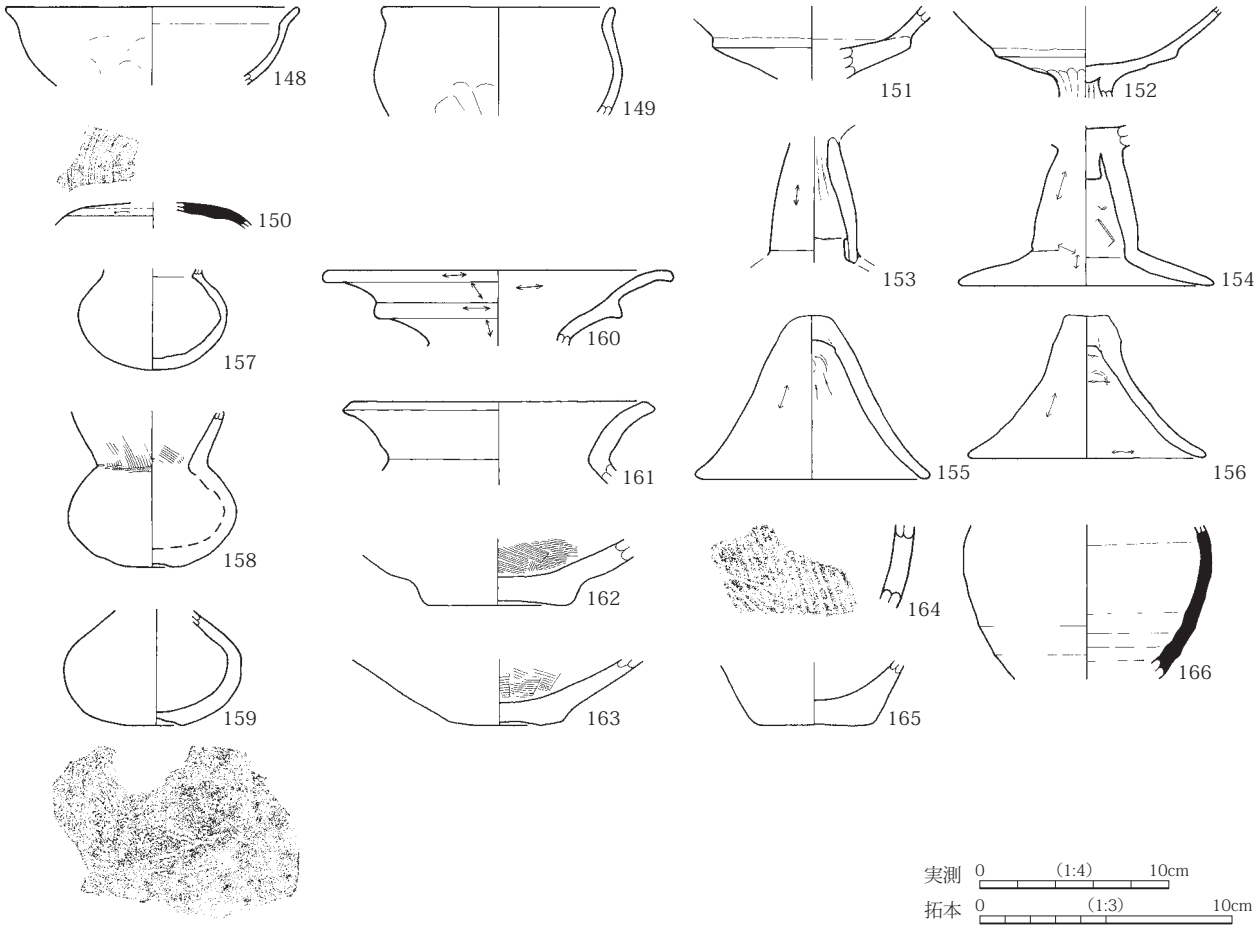
SD01　遺物出土状態中央部北側（西より）

SD01　遺物出土状態中央部南側（西より）



1　褐灰色(10YR5/1)　粘質土。粘性あり。しまり強。
2　黒褐色(10YR3/2)　シルト。粘性ややあり。しまりやや強。粗粒砂混。
3　褐色(10YR4/4)　砂礫。粘性なし。しまり普通。0.2～1.5㎝円礫。遺物多混。基質は細粒砂～粗粒砂。
4　灰黄褐色(10YR4/2)　砂質シルト。粘性ややなし。しまり普通。
5　褐灰色(10YR4/1)　砂礫。粘性なし。しまり普通。シルト混。
6　黒褐色(10YR3/1)　砂質シルト。粘性ややなし。しまり普通。
7　褐灰色(10YR4/1)　砂礫。粘性なし。しまり弱。5層より砂多混。

第 58 図　SD01　遺構図



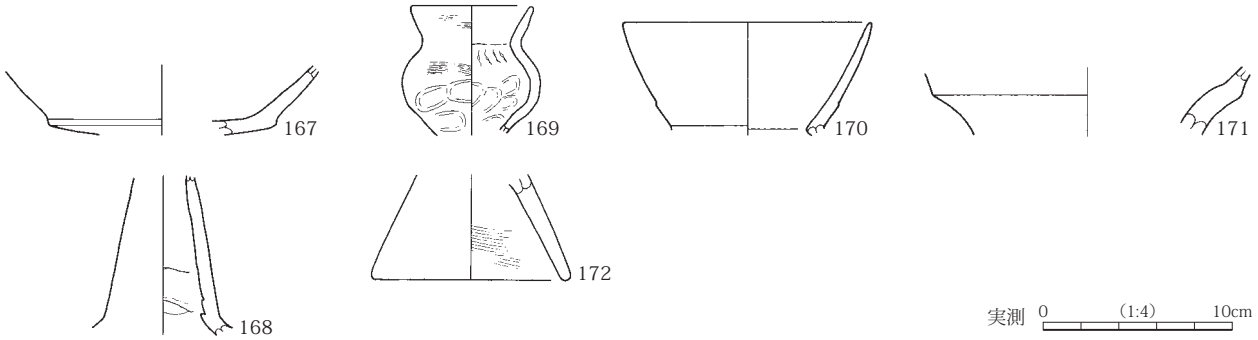
第 59 図　SD01　遺物図

２．遺構外

包含層出土遺物（第 60 図　PL39）

包含層から出土した古墳時代の遺物を本項に掲載した。

167・168 は高坏である。167 は口縁部が外に開き、外面下部に稜をもつ坏部、168 は裾部が屈曲する脚部である。169･170 は小型丸底土器である。171 は口縁が有段となる壺である。172 は台付甕の台部である。



第 60 図　古墳時代　遺構外　遺物図

３．小結

古墳時代の遺構は流路跡１条のみである。埋土中からは多くは摩耗した土器片が含まれるが、摩耗が少なく完形に近い土器が流路の東側の縁７ｍほどの間でまとまってみつかった。小型丸底土器や土師器高坏が目立つことから、ここでなんらかの祭祀的行為が行われたか、付近に祭祀施設がある可能性が考えられる。本遺跡の北方約 400m に所在する本村東沖遺跡（長野高校地点）では、古墳時代中期の大規模集落跡がみつかっており、本遺跡内へ本村東沖遺跡の人々が足を踏み入れていた可能性も考えられる。浅川扇状地上の駒沢祭祀遺跡では湧水地帯に５世紀を主体とした多量の遺物を伴う遺構が検出され、祭祀に関連する遺構と考えられている（長野市 2003）。祭祀遺構は、土坑内に多量の土師器を置いたもの（１号・５号祭祀遺構）、掘り込みをもたずに多量の土師器や石製模造品等を集積した状態のもの（２号・４号祭祀遺構）、破砕した土器片を集積したもの（３号祭祀遺構）、火床の痕跡、湧水を伴う集積が認められ、半径 20m ほどの範囲に集中している。

流路跡内の堆積物中の珪藻化石が非常に少ない点について、堆積物の堆積速度が速く珪藻が取り込まれなかった可能性と、堆積が一時的なもので乾燥が著しいため珪藻が繁茂できなかった可能性が指摘されている。堆積物や遺物の出土状態から、流路が形成された後、祭祀的行為が行われ、その後短期間で遺物を含むような砂礫で埋没したと想定される。断面形状から人為的な掘削とは想定し難く、自然流路と考えるのが妥当であろう。ただし、完形に近い土器がまとまってみつかった部分は流路幅がやや広くなっているため、人為的に拡張されている可能性も考えられる。

SD01　調査（北より）

SD01　市澤理事視察（北より）

第４節　奈良・平安時代

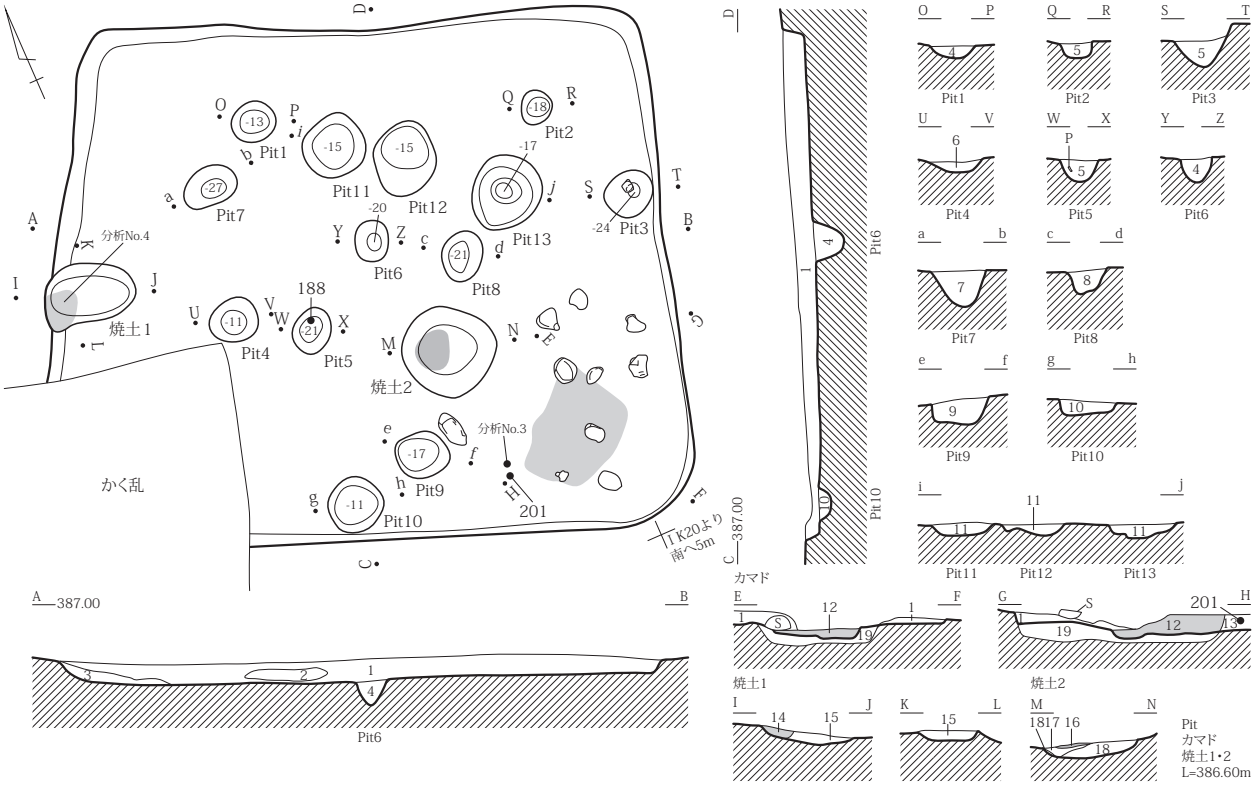
１．竪穴建物跡

SB05（第 61 ～ 63 図　PL17・40・41・49）

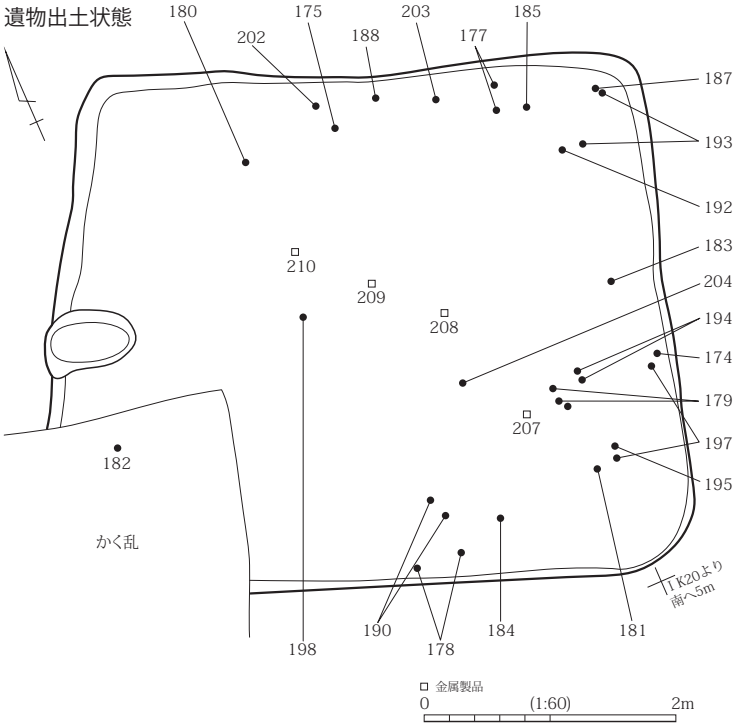
位置：Ⅰ K14・19・20 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物の散布とやや黒色が強い黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で建物南西隅の床面まで破壊されている。**重複関係**：墓跡 SM02、土坑 SK96・101・113・116・122 を切る。**埋土**：黒褐色土を主体とし、壁際に地山の崩落土を含む複層。埋土中に黄褐色土のレンズ状の堆積があることから、本来は黒褐色土は上下に分かれると考えられるが、調査時に分層することができなかった。**構造**：平面ほぼ方形。主軸方向は N113° E。主軸長 3.95m、直交軸長 4.85m。検出面からの深さは 11 ～ 17cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 13 基を床面で確認するが、掘り込みや位置から主柱穴と判断できるものはない。床面からの深さは 11 ～ 27cm である。**カマド**：南東隅の埋土中から多数の直径約 20 ～ 30cm の円礫や焼土、炭化物が広がっていたためカマドと想定する。煙道は不明である。また西壁中央付近でも床面がやや窪み焼土が認められたためカマドと想定する。壁がやや外側に膨らんでいるため煙道があった可能性は高いが、遺構検出時には壁外が焼けた状態は確認できず、煙道の立ち上がりの状態は不明である。切り合いがないため両者の新旧関係は不明であるが、カマドと想定した炭化物・焼土等の検出が明瞭であったか否かで、西カマドを破壊後、南東カマドを構築したと考えた。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から黒色土器Ａ坏Ａ（179）、黒色土器Ａ碗（181）、黒色土器Ｂ碗（182）、土師器坏Ａ（185）、土師器ロクロ甕（192）、土師器甕（195・196）、土師器甕底部（201）、棒状鉄製品（209・210）が出土している。床面からやや浮いた位置で黒色土器Ａ坏Ａ（174・177・178）、黒色土器Ａ碗（180）、土師器坏Ａ（184・188）、灰釉陶器碗（190）、土師器ロクロ甕（194）、土師器甕（197・198）、毛抜き（鑷子）（207）が出土している。また埋土中から刀子（208）が出土している。黒色土器Ａ坏Ａ（174）は内面に灰色（5Y5/1 ～ 4/1）またはオリーブ黒色（5Y3/1）の付着物が認められたため赤外分光分析と蛍光Ｘ線分析を行ったところ、カオリナイト（粘土鉱物）が検出された。カオリナイトは白色顔料の可能性が示された。**時期**：埋土と床面出土の土器から９世紀後半と判断する。南東隅カマド内埋土から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No. ３）の放射性炭素年代測定で 1,143 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（777-790 cal AD（4.1%），807-842 calAD（5.8%），862-974cal AD（85.6%））。また西カマド焼土１から出土した炭化材（広葉樹）（分析 No. ４）は 1,246 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（682-779 cal AD（83.3%），791-829 calAD（7.0%），837-865cal AD（5.1%））。

出土遺物：173 ～ 179 は黒色土器Ａ坏Ａである。179 には暗文がみられる。180・181 は黒色土器Ａ碗である。180 は口縁部外面も磨き調整される。182 は黒色土器Ｂ碗で暗文がみられる。183 ～ 188 は土師器坏Ａである。189 は土師器皿Ａである。190 は灰釉陶器碗である。釉は刷毛塗りされる。191 は土師器坏蓋としたが検討を要する。192 ～ 194 は土師器ロクロ甕である。193 は底部中央に焼成後穿孔が認められる。195 ～ 200 は土師器甕である。199・200 は胴部の破片で叩き調整される。201 は土師器甕の底部の破片としたが検討を要する。202 ～ 204 は須恵器甕である。206 は敲石である。砂岩の自然礫を用い、長軸の片側に敲打痕が認められる。上半部は欠損している。残存する長さは幅の２倍以上である。205 は泥岩の２次加工のある剝片で上部は欠損している。剥離面を打面とし、上部の欠損後に二側縁部に加工を施工している。207 は毛抜き（鑷子）である。幅 0.8cm の薄い鉄板を折り曲げて作られている。全長 10.1cm。208 は刀子である。全長 9.5cm、身幅 1.4cm、背厚 0.5cm、茎長 4.8cm、茎幅 0.4cm でほぼ完形である。209・

210 は棒状製品である。断面は方形であることから釘の可能性が高い。209 は屈曲し頭部は欠損している。210 は頭部は折り曲げられているように見えるが、断面は方形であり欠けている可能性もある。先端は欠損している。残存長 6.4cm。

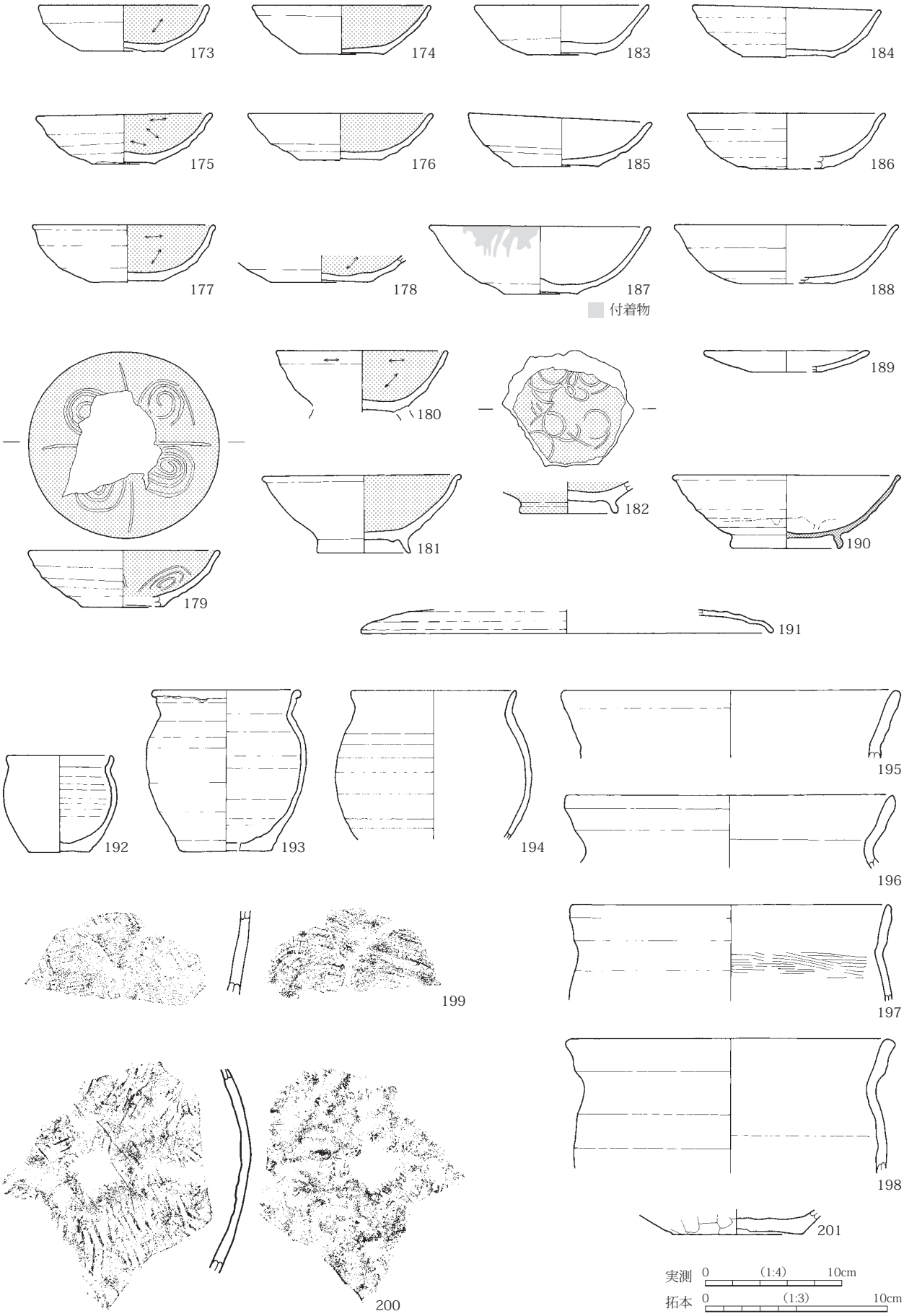


遺物出土状態

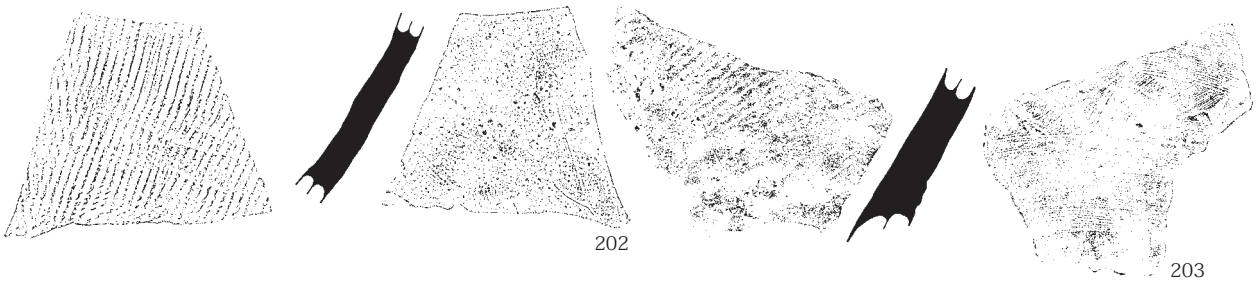


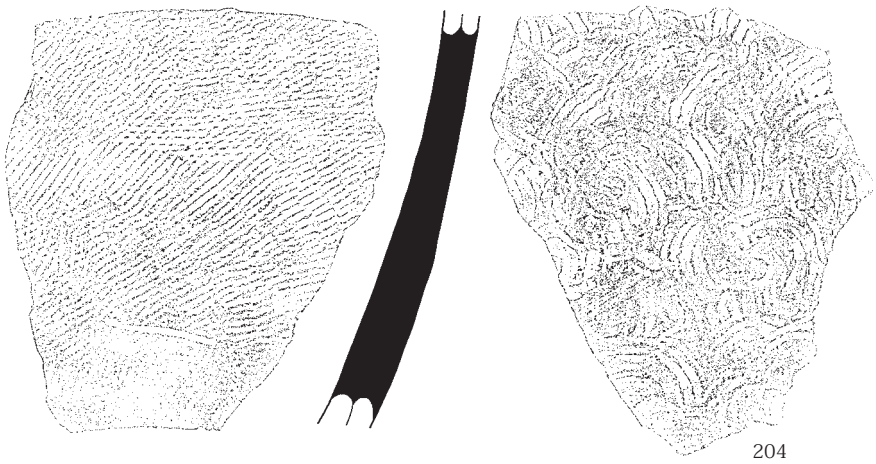
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト。粘性・しまり普通。砂・0.5～3㎝礫混。炭化物混。
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト～砂。粘性なし。しまり普通。0.3～1㎝礫多混。黄褐色砂質シルトブロック、全体に混。北西部に断面レンズ状に分布。
3	褐色(10YR4/4)～黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト。粘性・しまり普通。黒褐色土粒・砂・小礫混。崩落土か。
4	褐灰色(10YR4/1)	粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。
5	褐灰色(10YR4/1)	粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。炭化物・焼土粒混。
6	褐灰色(10YR4/1)	粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。やや暗い。
7	褐灰色(10YR4/1)	粘性ややあり。しまり強。細礫少混。
8	褐灰色(10YR4/1)	砂質土。粘性なし。しまり強。4㎝礫5%混。
9	褐灰色(10YR4/1)	粘性ややあり。しまり強。細礫・炭化物少混。
10	褐灰色(10YR4/1)	砂質土。粘性ややあり。しまり強。4㎝礫5%混。
11	褐灰色(10YR4/1)	粘性ややあり。しまり強。礫微混。
12	黒褐色(10YR2/2)	粘性なし。しまり強。焼土粒・炭化物20%混。
13		12層より明るく焼土粒・炭化物少混。
14		15層よりやや暗く焼土粒・炭化物多混。
15	灰黄褐色(10YR4/2)	砂混シルト質。粘性なし。しまり普通。焼土粒5%混。
16	赤色(10R4/6)	粘性なし。しまり普通。火床。
17	暗褐色(10YR3/3)	粘性なし。しまりやや弱。焼土粒多混。炭化物混。掘方埋土。
18	暗褐色(10YR3/3)	粘性なし。しまりやや弱。焼土粒少混。
19		地山と黒褐色土の混合。掘方埋土。

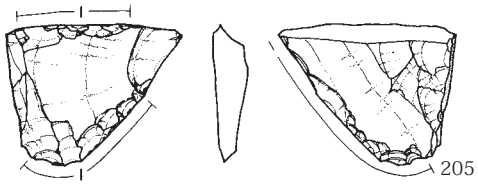
第 61 図　SB05　遺構図

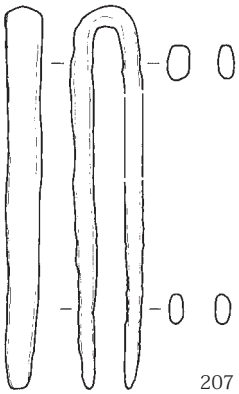


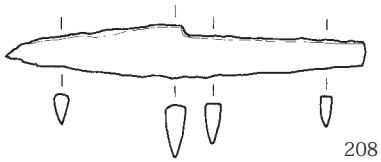
第 62 図　SB05　遺物図（１）

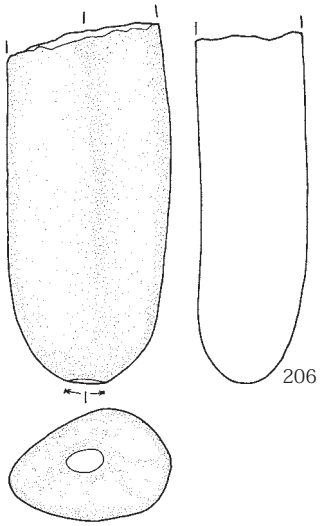












SB05　208 出土状態（西より）

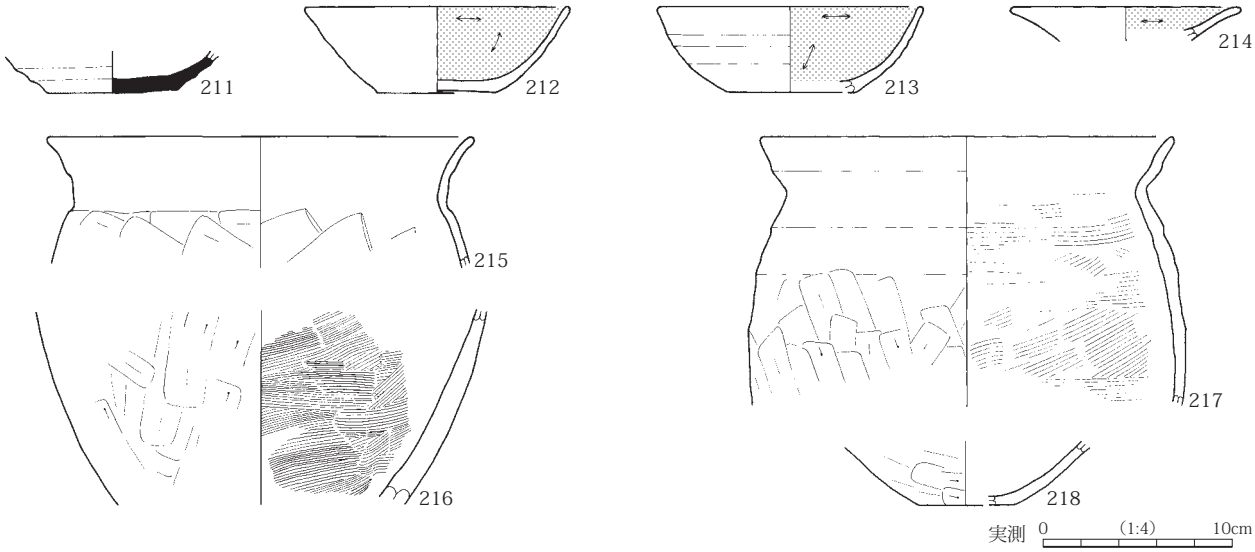
拓本・石器　0　(1:3)　10cm
石器　0　(2:3)　5cm
金属製品　0　(1:2)　5cm

第 63 図　SB05　遺物図（２）

SB06（第 64 ～ 66 図　PL18・41・42）

位置：Ⅰ K20 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物の散布、やや黒色が強い黒褐色土の広がりと煙道部分と思われる焼土を確認する。かく乱で建物南西部は破壊されている。北東部は 2c 区を先行して調査した際にⅣ層上面を検出面としたため掘削してしまった。**重複関係**：SB07 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする。単層。**構造**：平面ほぼ方形。主軸方向は N17° E。主軸長 3.22m、直交軸長推定 3.60m。検出面からの深さは 21 ～ 28cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 1 基を床面で確認するが、掘り込みや位置から主柱穴と判断できない。床面からの深さは 12cm である。**カマド**：北壁の西寄りに位置する。袖は破壊されていて詳細は不明であるが、地山が焼けた火床で両脇に袖石の抜き取り痕跡と考えられる浅い窪みが認められる（第 66 図 SB06 カマド遺物図・掘方図）。煙道は緩やかに立ち上がる。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく埋土中全体に広がる。床面から軟質須恵器坏Ａ（211）が出土している。カマド内から黒色土器Ａ皿（214）、土師器甕（215・217）が出土し、土師器甕（215・217）は SB07 カマド床面よりやや浮いた状態で出土の土器と接合する。黒色土器Ａ坏Ａ（213）はカマド袖石の抜き取り痕跡埋土中から出土している。埋土中から黒色土器Ａ坏Ａ（212）、土師器甕（216）、煙道から土師器甕（218）が出土している。**時期**：SB07 と接合する遺物があることから、切り合いはあるが時期差はほとんどないと考えられる。埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。

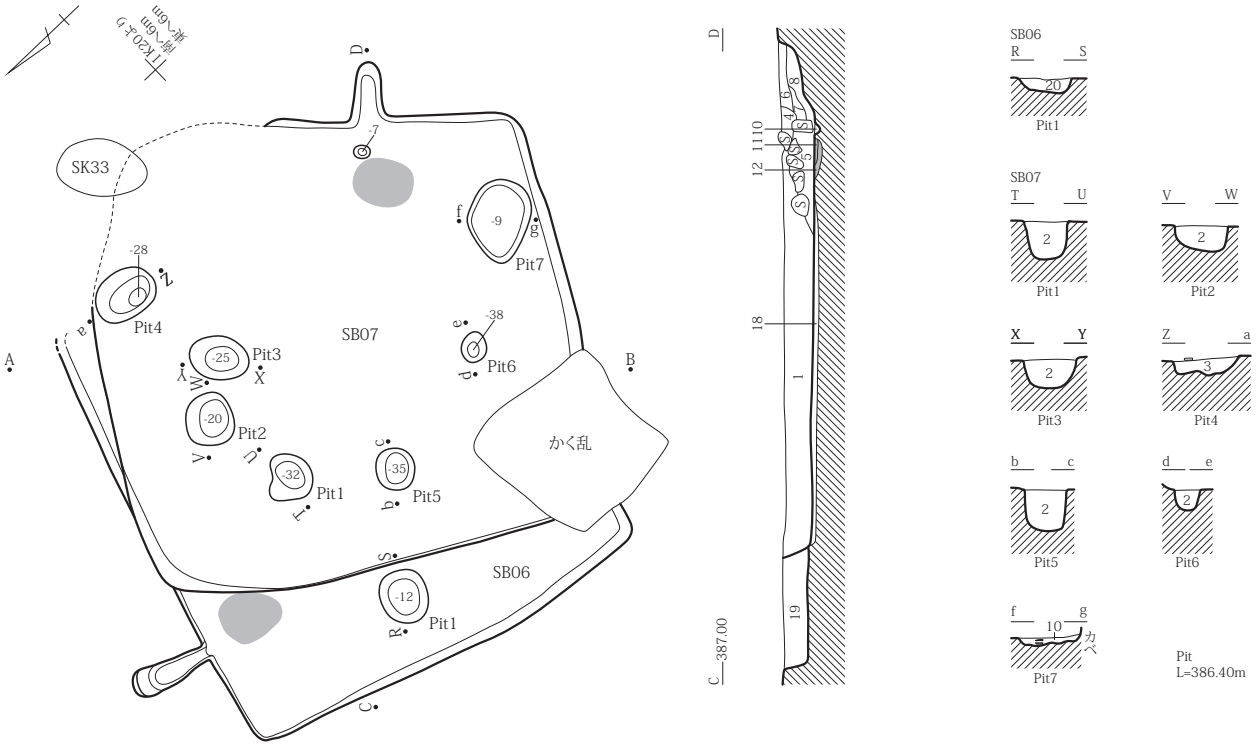
出土遺物：211 は軟質須恵器坏Ａで底部は糸切りである。212・213 は黒色土器Ａ坏Ａである。214 は黒色土器Ａ皿である。215 ～ 218 は土師器甕である。



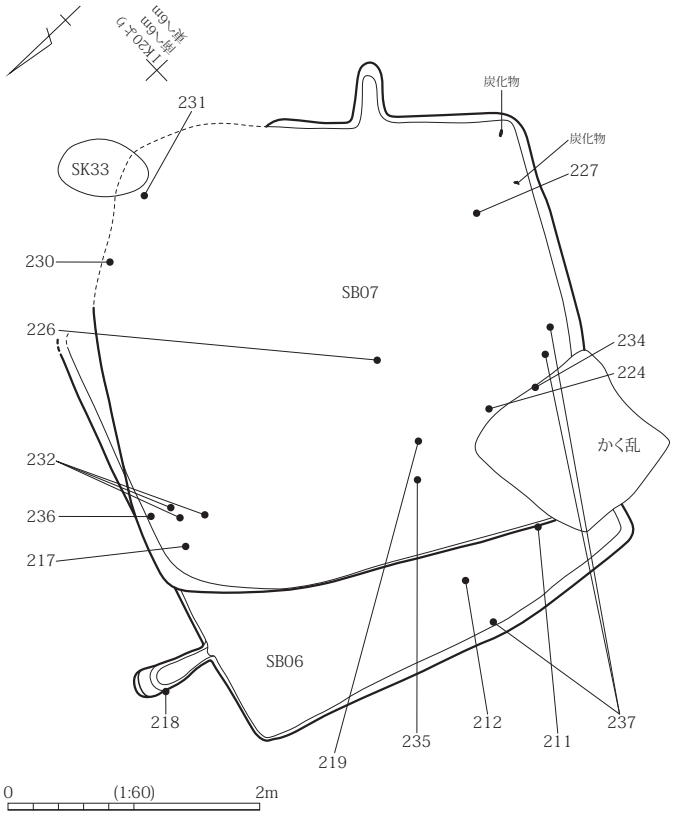
第 64 図　SB06　遺物図

SB06　カマド調査（東より）

SB06 カマド　213 出土状態（南より）



遺物出土状態

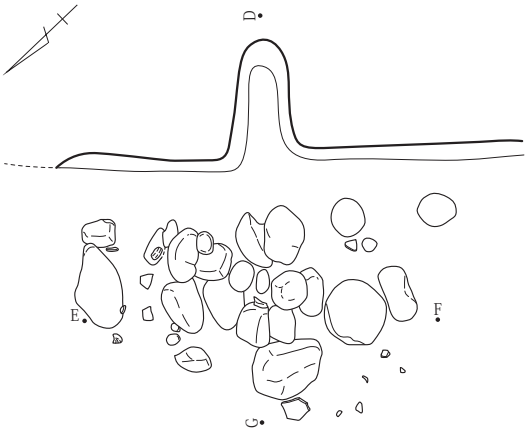


SB07

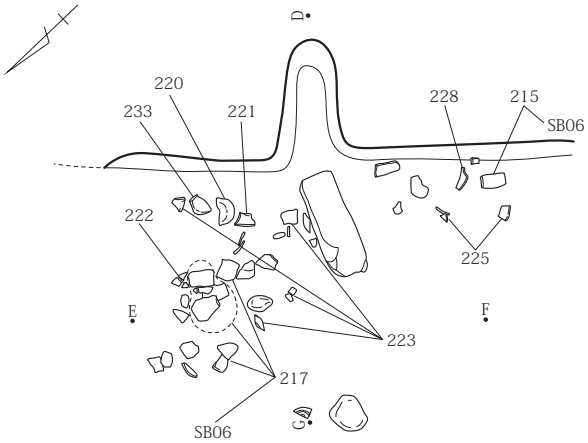
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫少混。1～2㎝炭化物混。カマド付近焼土粒微混。
2	黒褐色(10YR3/1)～黒褐色(10YR3/2)	砂礫多混シルト。粘性なし。しまり普通。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト。粘性あり。しまり普通。土器片あり。
4	黒褐色(10YR3/1)	黒褐色～灰褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫・3㎜焼土ブロック混。
5	褐灰色(10YR4/1)～褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～弱。小礫混。炭化物・焼土粒子多混。
6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫・焼土ブロック混。（4層より少ない）
7	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト。粘性ややあり。しまり普通。にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混。焼土粒・炭化物粒ほとんど含まない。
8	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト。粘性ややあり。しまり普通。焼土ブロック少混。
9		灰。
10	黒褐色(10YR3/1)	シルト。粘性あり。しまり強。焼土粒・炭化物粒混。
11	橙色(5YR6/8)～明赤褐色(5YR5/8)	橙色～明赤褐色砂質シルト。粘性普通。しまり普通～やや強。円礫少混。火床。
12	暗赤褐色(5YR3/2)	暗赤褐色砂質シルト。粘性普通。しまり弱。火床。
13	褐灰色(10YR4/1)	粘性ややあり。しまり普通。橙色焼土ブロック混。火床。
14	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通。掘方埋土。
15	黒褐色	黒褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり強。焼土粒・炭化物粒混。掘方埋土。
16	黒褐色	黒褐色粘質土。粘性あり。しまり強。黄褐色土ブロック混。
17	黄褐色	黄褐色砂質シルト。粘性ややあり。しまりやや強。
18	黒褐色(10YR3/1)～黒褐色(10YR3/2)	砂礫混シルト。粘性普通～ややあり。しまり強。黒褐色シルトブロック・黄褐色砂ブロック・0.2～5㎝円礫混。掘方埋土。

第 65 図　SB06・07　遺構図（1）

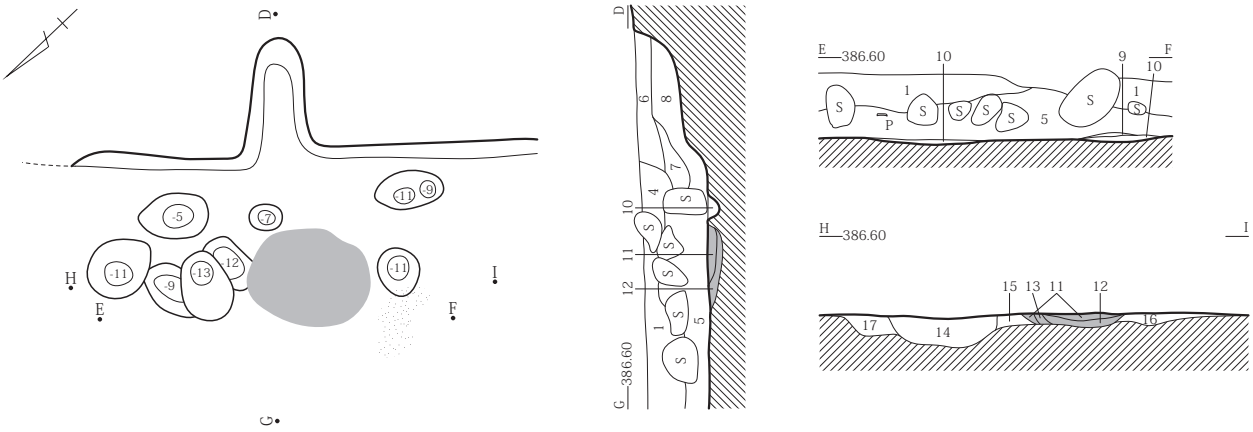
SB07 カマド礫出土状態



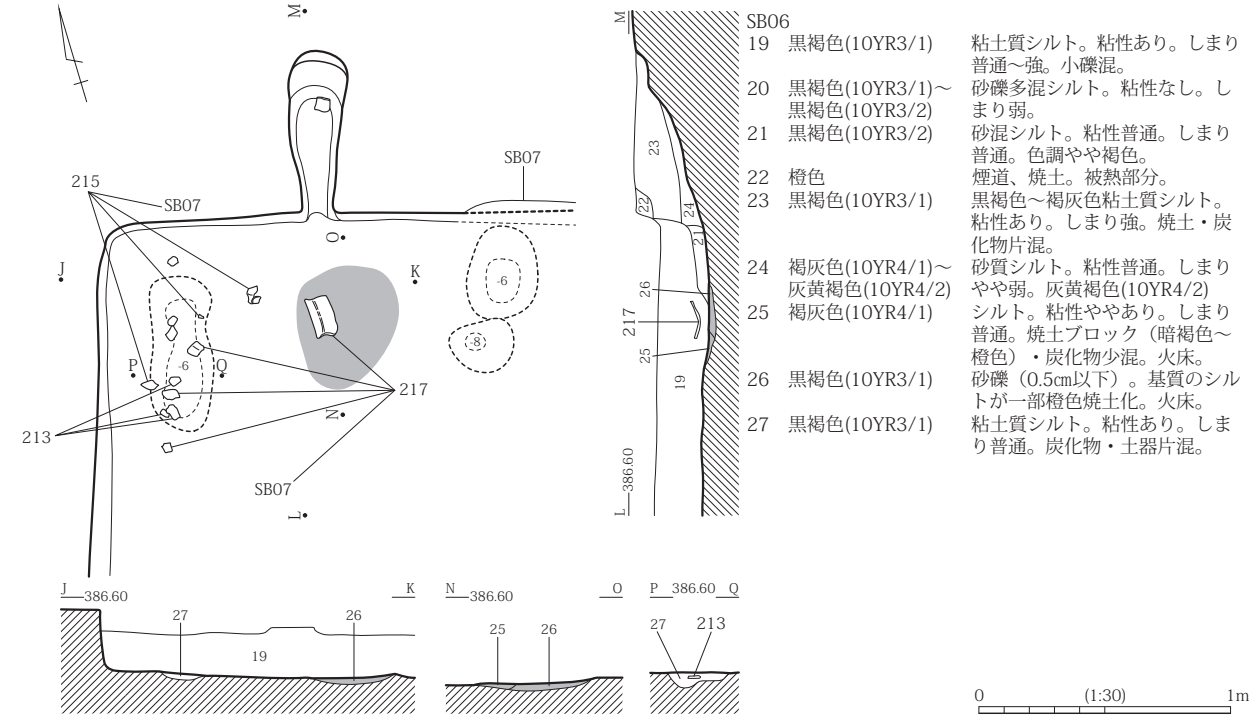
カマド遺物出土状態



カマド掘方



SB06 カマド遺物出土状態・掘方



SB06

19	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。小礫混。
20	黒褐色(10YR3/1)～黒褐色(10YR3/2)	砂礫多混シルト。粘性なし。しまり弱。
21	黒褐色(10YR3/2)	砂混シルト。粘性普通。しまり普通。色調やや褐色。
22	橙色	煙道、焼土。被熱部分。
23	黒褐色(10YR3/1)	黒褐色～褐灰色粘土質シルト。粘性あり。しまり強。焼土・炭化物片混。
24	褐灰色(10YR4/1)～灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト。粘性普通。しまりやや弱。灰黄褐色(10YR4/2)
25	褐灰色(10YR4/1)	シルト。粘性ややあり。しまり普通。焼土ブロック（暗褐色～橙色）・炭化物少混。火床。
26	黒褐色(10YR3/1)	砂礫（0.5㎝以下）。基質のシルトが一部橙色焼土化。火床。
27	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト。粘性あり。しまり普通。炭化物・土器片混。

第 66 図　SB06・07　遺構図（２）

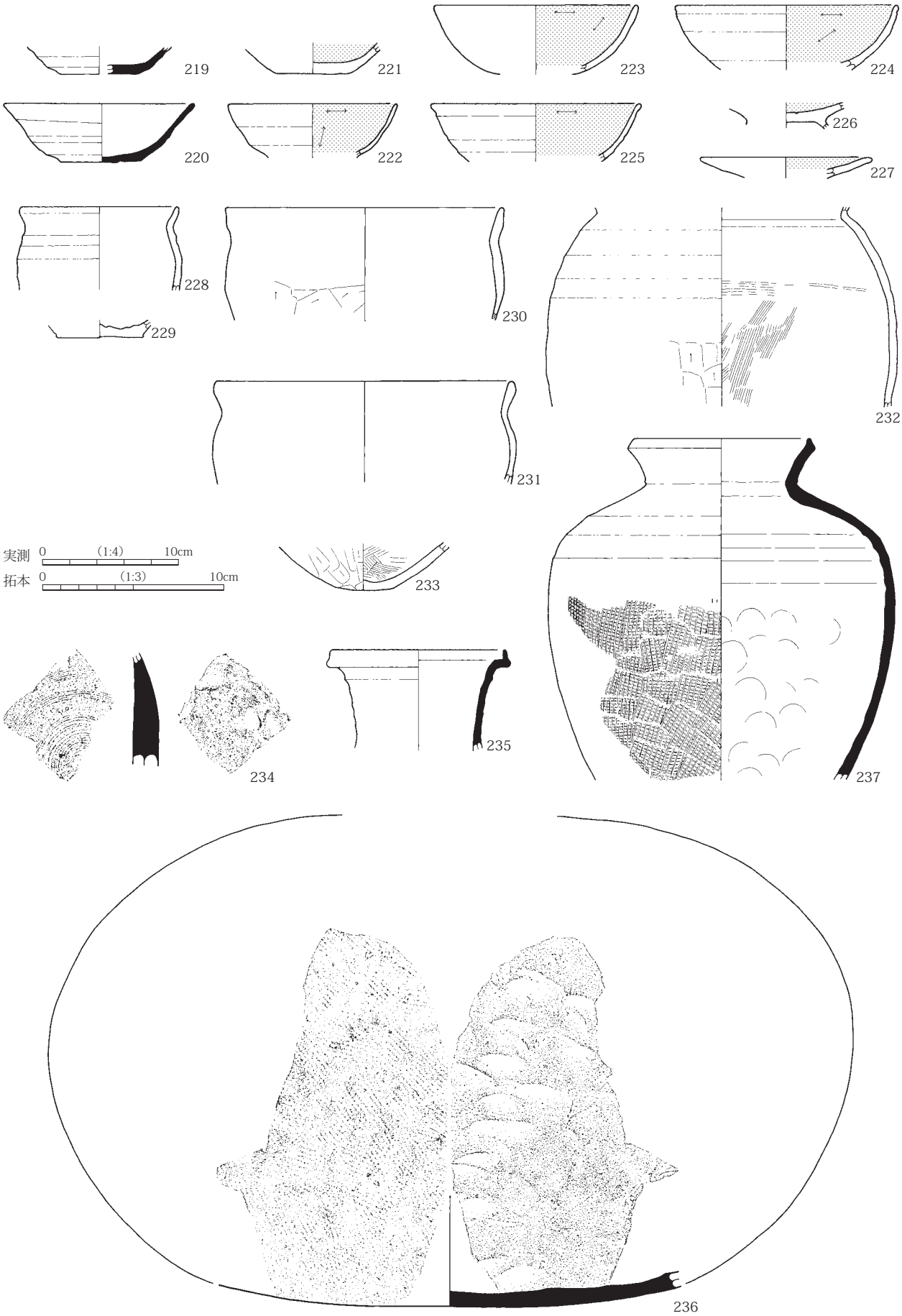
SB07（第 65 ～ 67 図　PL18・19・42・43）

位置：Ⅰ K20 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物と礫の散布、やや黒色が強い黒褐色土の広がりと煙道部分と思われる焼土を確認する。かく乱で建物南西隅が破壊されている。北東隅は 2c 区を先行して調査した際にⅣ層上面を検出面としたため掘削してしまった。ややしまりのよい部分を床面ととらえる。**重複関係**：SB06、SK33・110・112 を切る。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面ほぼ方形。主軸方向は N133°E。主軸長 3.50m、直交軸長 3.70m。検出面からの深さは 21 ～ 29cm。掘方を埋め戻し床を敲き締めている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは７基を床面で確認するが、掘り込みや位置から主柱穴と判断できるものはない。Pit1 ～ Pit6 は床面からの深さが 20 ～ 38cm である。Pit7 はカマド南西側に位置し埋土に焼土粒や炭化物粒を含み床面からの深さが９cm ほどであることから、カマドに関連する可能性がある。**カマド**：南東壁中央よりやや南寄りに位置する。埋土中から径 20 ～ 70cm 程度の多数の安山岩の亜円礫や凝灰岩を直方体に切り出された天井石と考えられる礫が出土している。亜円礫の一部や天井石は被熱部分が観察できる。原位置を保つ袖石や支脚石は確認できず、カマドは破壊されたと考える。壁から離れた位置に火床を検出し周辺には焼土粒や炭化物、灰の広がりが認められる。煙道は緩やかに立ち上がる。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から軟質須恵器坏Ａ（219）、黒色土器Ａ皿（227）、土師器甕（232）が出土している。床面からやや浮いた位置で土師器甕（231）が出土している。須恵器甕（237）は SB06 床面出土土器と接合する。埋土中から黒色土器Ａ坏Ａ（224）、黒色土器Ａ碗（226）、土師器ロクロ甕（229・230）、須恵器横瓶（236）、須恵器瓶類（235）、須恵器提瓶（234）が出土している。カマドの床面から黒色土器Ａ坏Ａ（225）、土師器ロクロ甕（228）が出土している。カマド床面からやや浮いた位置で黒色土器Ａ坏Ａ（221 ～ 223）、カマド埋土中から軟質須恵器坏Ａ（220）、土師器甕（233）が出土している。**時期**：SB06 と接合する遺物があることから、切り合いはあるが時期差はほとんどないと考えられる。埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。

出土遺物：219・220 は軟質須恵器坏Ａで底部は糸切りである。221 ～ 225 は黒色土器Ａ坏Ａである。226 は黒色土器Ａ碗の底部破片である。意図的に打ち欠いたものと推定されるが、二次的な使用痕等は確認できない。227 は黒色土器Ａ皿である。228・229 は土師器ロクロ甕である。同一個体の可能性も考えられるが接合しない。230 ～ 233 は土師器甕である。232・233 は砲弾形となる。234 は須恵器提瓶の胴部破片としたが検討を要する。235 は須恵器瓶類口縁から頸部の破片としたが検討を要する。236 は須恵器横瓶である。237 は須恵器甕である。

SB07　調査（北より）

SB07　237 出土状態（北より）

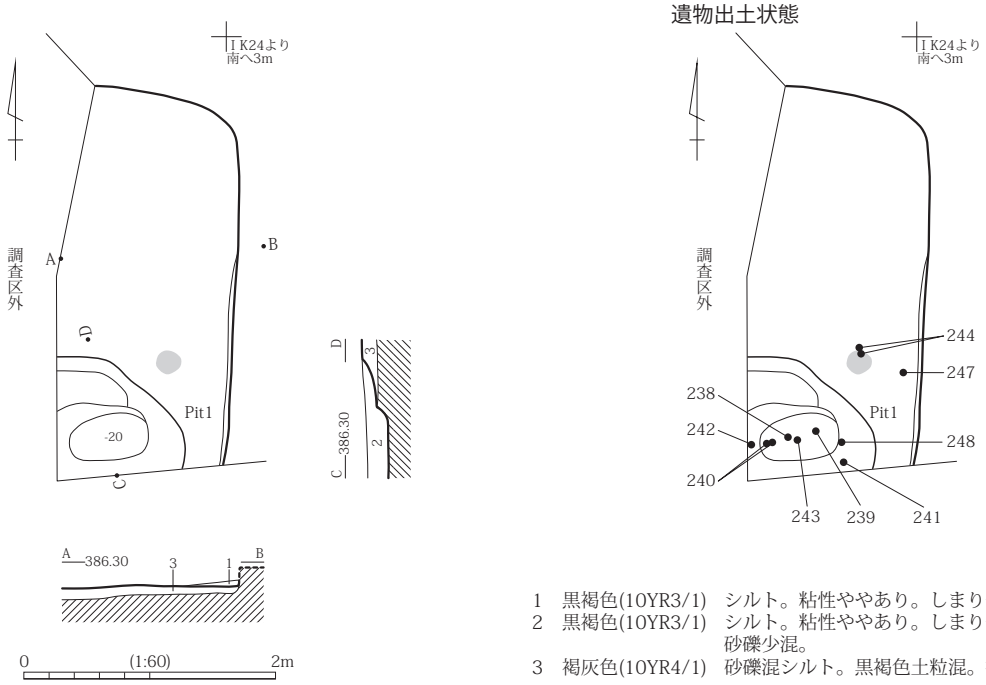


第 67 図　SB07　遺物図

SB08（第 68・69 図　PL20・43）

位置：Ⅰ K23 グリッド。**検出**：調査区南西隅のⅣ層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱の廃棄物も所々混入する。平面形の北東部側を検出できたのみで、残りの部分は調査区外へ広がる。検出時でほぼ床面に達しており、平面図で示した落ち込みは掘方である。**重複関係**：なし。**埋土**：埋土は黒褐色土を主体とする単層。掘方埋土はやや色調の明るい砂礫混じりの褐灰色土である。**構造**：残存する部分から平面はほぼ方形と推定する。主軸方向はほぼ南北方向と推定する。主軸残存長 3.10m、直交軸残存長 1.40m。検出面からの深さは２～ 14cm。掘方を埋め戻し床としているが、硬化面や貼り床はない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは１基を床面で確認するが掘り込みや位置から主柱穴と判断できない。床面からの深さは 20cm である。**カマド**：調査区外にあると考える。Pit1 の北東部の床面で焼土跡を検出したが、壁から離れた位置であることからカマドと判断しない。北東に位置する SB05 もカマド以外の床面で同様な焼土跡が検出されている。使用方法は不明である。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく南部に偏って広がる。床面から黒色土器Ａ坏Ａ（239・241）、土師器ロクロ甕（244）、土師器甕（248）、須恵器甕破片（247）が出土している。床面からやや浮いた位置で土師器甕（245・246・249）が出土している。Pit1 から黒色土器Ａ坏Ａ（240）、土師器坏（238・242・243）、が出土している。**時期**：出土の土器から、９世紀後半と判断する。

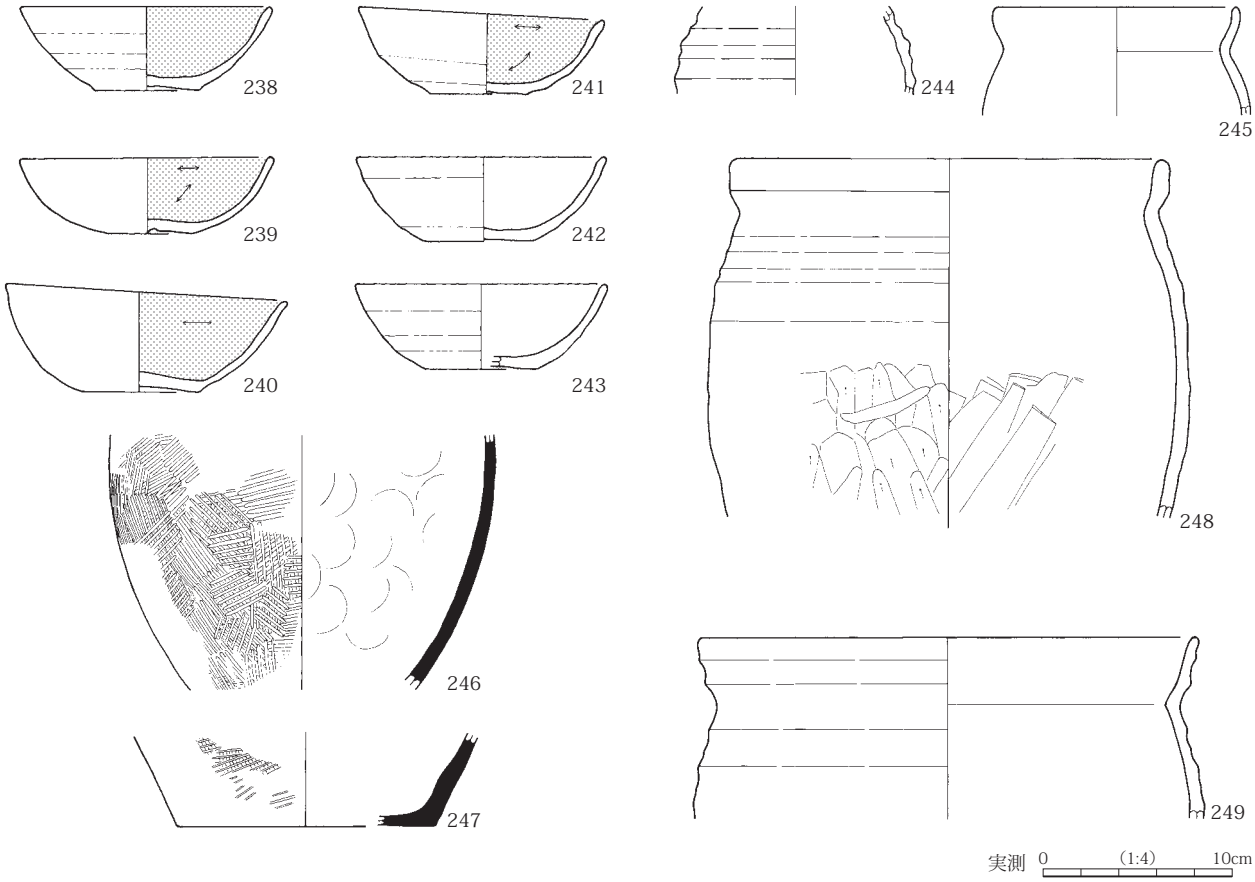
出土遺物：238 ～ 241 は黒色土器Ａ坏Ａである。242・243 は土師器坏Ａである。244・245 は土師器ロクロ甕である。246・247 は須恵器甕である。248・249 は土師器甕で、248 は砲弾形となる。



1　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。
2　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。砂礫少混。
3　褐灰色(10YR4/1)　砂礫混シルト。黒褐色土粒混。掘方埋土。

第 68 図　SB08　遺構図

SB08　遺物出土状態（北より）

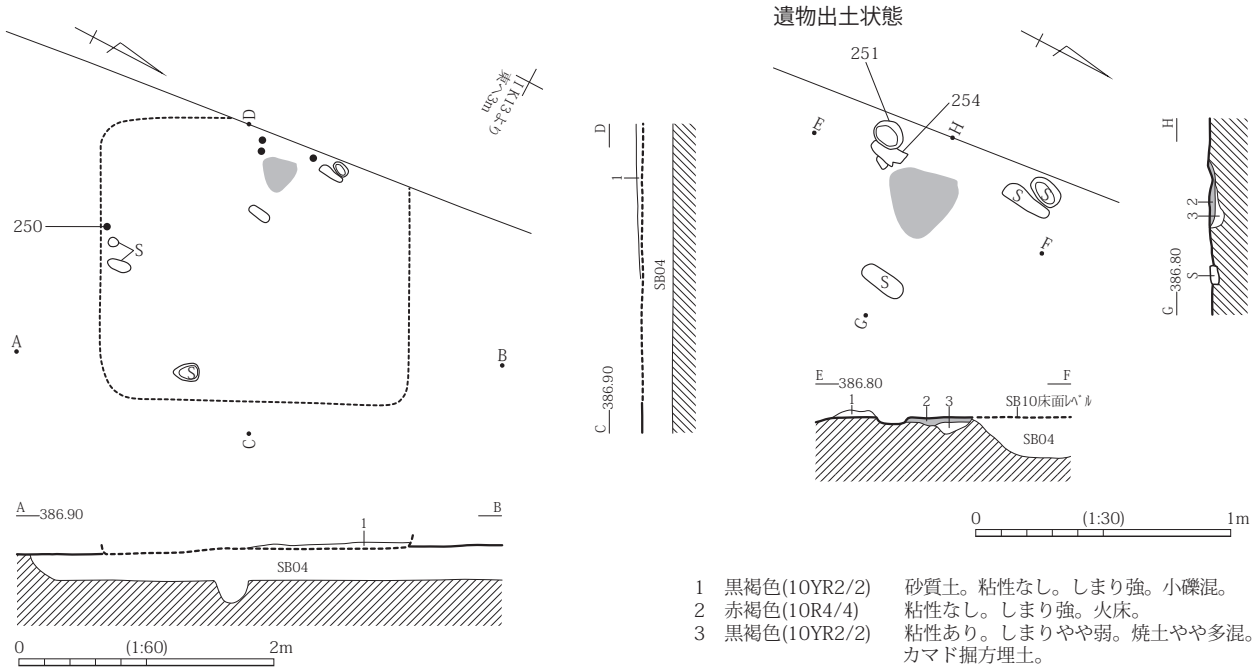


第 69 図　SB08　遺物図

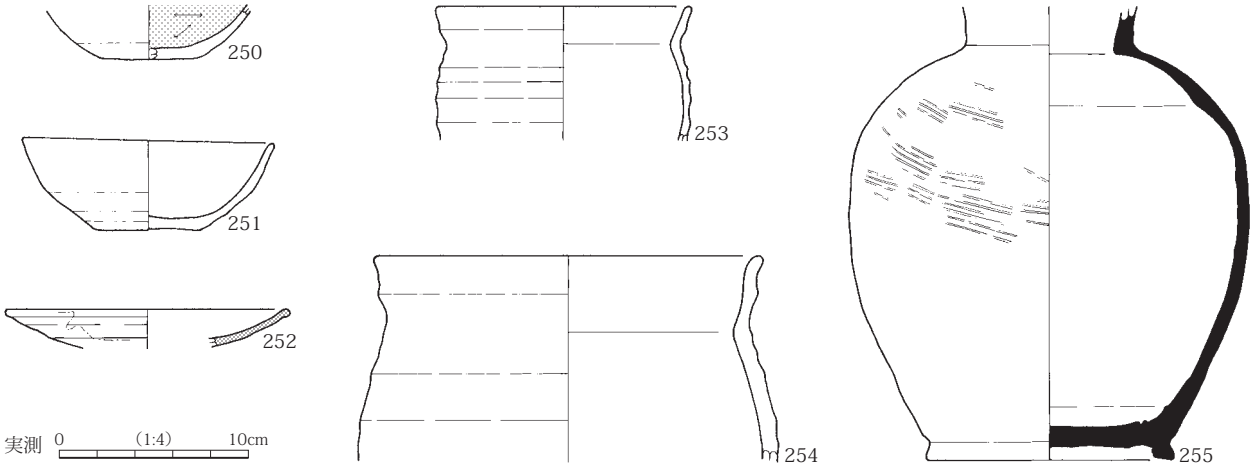
SB10（第 70 図　PL20・44）

位置：Ⅰ K08・13 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりと古代の遺物分布を確認し、当初 SB04 として調査を開始する。先行トレンチを入れ床面を確認したところ、床面から弥生土器が出土することから、SB04 は弥生時代の住居跡と判断する。一方、古代の遺物は埋土上部から出土していることから、弥生時代の住居跡の上に重なるように古代の建物跡（SB10）があると判断する。西側は調査区外に広がる。**重複関係**：SB04 を切る。**埋土**：検出時でほぼ床面に達していたと考えられ、わずかに残る黒褐色土を埋土とする。**構造**：平面は検出できない。西側の一部で硬化面の広がりを確認したこと、遺物の出土位置、カマド跡の位置から方形と推定する。主軸方向は推定 N118° W。検出面からの深さは０～数 cm。硬化面から貼床と推定、壁の立ち上がりは不明である。ピットは確認できない。**カマド**：西側調査区の壁際に焼土の広がりと被熱礫や土器片のまとまりが認められることから、カマドと想定する。煙道は調査区外にあると想定する。**遺物出土状態**：遺物の総量はわずかである。カマド周囲から土師器坏Ａ（251）、土師器甕（254）が出土している。床面からやや浮いた位置で黒色土器Ａ坏Ａ（250）、埋土中から灰釉陶器皿（252）、土師器ロクロ甕（253）、須恵器瓶（255）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。

出土遺物：250 は黒色土器Ａ坏Ａである。251 は土師器坏Ａである。252 は灰釉陶器皿である。口縁部分の小破片であるが釉は刷毛塗りと推定される。253 は土師器ロクロ甕である。254 は土師器甕である。255 は須恵器瓶である。



1　黒褐色(10YR2/2)　砂質土。粘性なし。しまり強。小礫混。
2　赤褐色(10R4/4)　粘性なし。しまり強。火床。
3　黒褐色(10YR2/2)　粘性あり。しまりやや弱。焼土やや多混。カマド掘方埋土。



第 70 図　SB10　遺構図・遺物図

SB10　調査（東より）

SB10　カマド（東より）

SB11（第 71・72 図　PL20・21・44・49）

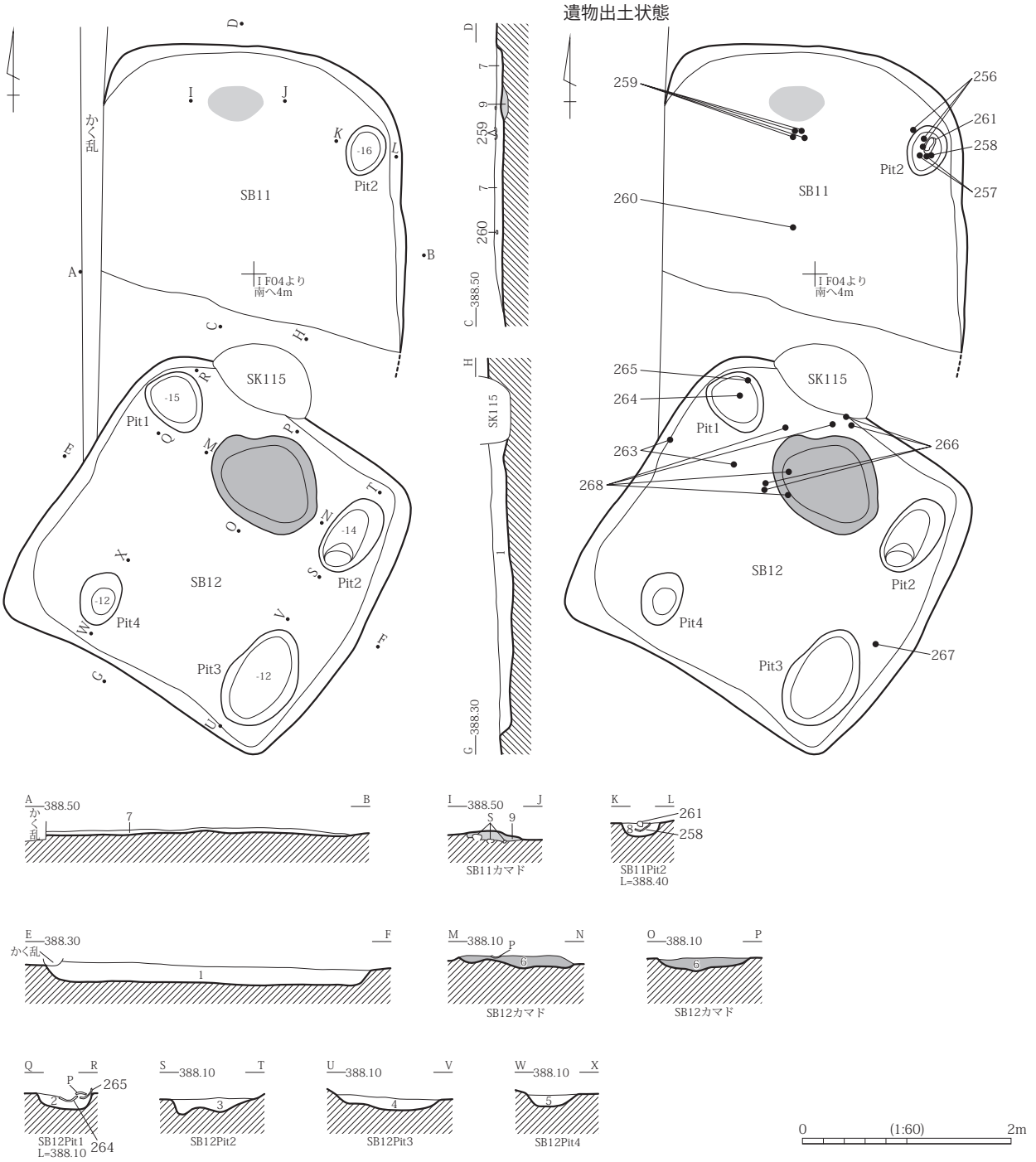
位置：Ⅰ F03・04 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居西壁が破壊、南半分は削平されている。**重複関係**：SB12 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。**構造**：平面隅丸方形。主軸方向は N0°。主軸残存長 2.48m、直交軸残存長 2.83m。検出面からの深さは約５cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット１基（Pit2）を床面で確認し、主柱穴の可能性は高いが１基のみで断定できない。床面からの深さは約 16cm である。**カマド**：北壁中央で壁から約 40cm 離れた床面で焼土の広がりが認められ、カマド火床と想定する。煙道は確認できない。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、埋土中全体に広がる。Pit2 からは軟質須恵器坏Ａ（258）と敲石（261）が出土し、その上位の床面からやや浮いた状態で須恵器坏Ａ（256）、軟質須恵器坏Ａ（257）が出土している。埋土中から須恵器甕（259）、土師器ロクロ甕（260）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。北部埋土から出土した炭化材（広葉樹）（分析 No. ７）の放射性炭素年代測定で 1,302 ± 21yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（662-722 cal AD（65.3%）, 740-768 calAD（30.1%））。また Pit2 埋土中から出土した炭化材（クリ）（分析 No. ８）の放射性炭素年代測定では 1,230 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（693-747 cal AD（34.1%）, 763-781 cal AD（14.2%）, 787-878cal AD（47.0%））。**出土遺物**：256 は須恵器坏Ａである。257・258 は軟質須恵器坏Ａである。259 は須恵器甕としたが、検討を要する。260 は土師器ロクロ甕である。261 は敲石である。安山岩を用い、長軸の端部に敲打痕が認められ、長さは幅の２倍以上である。

SB12（第 71・72 図　PL21・44）

位置：Ⅰ F03･04･08･09 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。**重複関係**：SB11 を切る。SK115 に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。主軸方向は N28° E。主軸長 2.78m、直交軸長 2.92m。検出面からの深さは８～ 14cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット４基（Pit1 ～ Pit4）を床面で確認し、位置から４本方形配列の主柱穴であると考える。床面からの深さは 12 ～ 15cm である。**カマド**：北壁中央付近の床面で炭化物や焼土ブロックの分布を確認し、カマド火床と想定する。煙道は確認できない。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく埋土中全体に広がる。Pit1 から黒色土器Ａ坏Ａ（264・265）、床面からやや浮いた状態で軟質須恵器坏Ａ（263）、土師器甕（266 ～ 268）、埋土中から須恵器坏Ａ（262）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。

出土遺物：262 は須恵器坏Ａである。263 は軟質須恵器坏Ａである。264・265 は黒色土器Ａ坏Ａである。265 体部外面に文字あるいは記号と思われる線刻が認められる。266 ～ 268 は土師器甕で砲弾形となる。267・268 は同一個体の可能性も考えられるが、接合しない。

短期大学生見学



1　黒褐色(10YR3/1)　細礫混砂質土。粘性ややあり。しまり普通。5～8㎝礫集中あり。

2　黒褐色(10YR2/2)　砂混シルト。粘性あり。しまり弱。1～5㎝礫3%・1㎝炭化物1%・2～3㎝褐色焼土ブロック1%混。

3　黒褐色(10YR2/2)　シルト。粘性ややあり。しまり弱。3～5㎝礫20%混。

4　黒褐色(10YR2/2)　粘土質シルト。粘性あり。しまりやや弱。1～7㎝礫3%・1㎝褐色粗粒砂（粘性なし。しまり弱。）ブロック3%混。

5　黒色(10YR2/1)　粘質土。粘性あり。しまり弱。3～5㎝礫5%・1㎝黄褐色粗粒砂（粘性なし。しまり強。）ブロック1%混。

6　黒褐色(10YR2/2)　礫混粘土。粘性ややあり。しまりやや弱。1～5㎝褐色砂質土（粘性あり。しまりやや強。）ブロック10%・1～7㎝礫40%・1～3㎝炭化物1%・3～10㎝褐色焼土ブロック30%混。上部に1～3㎝礫多混。

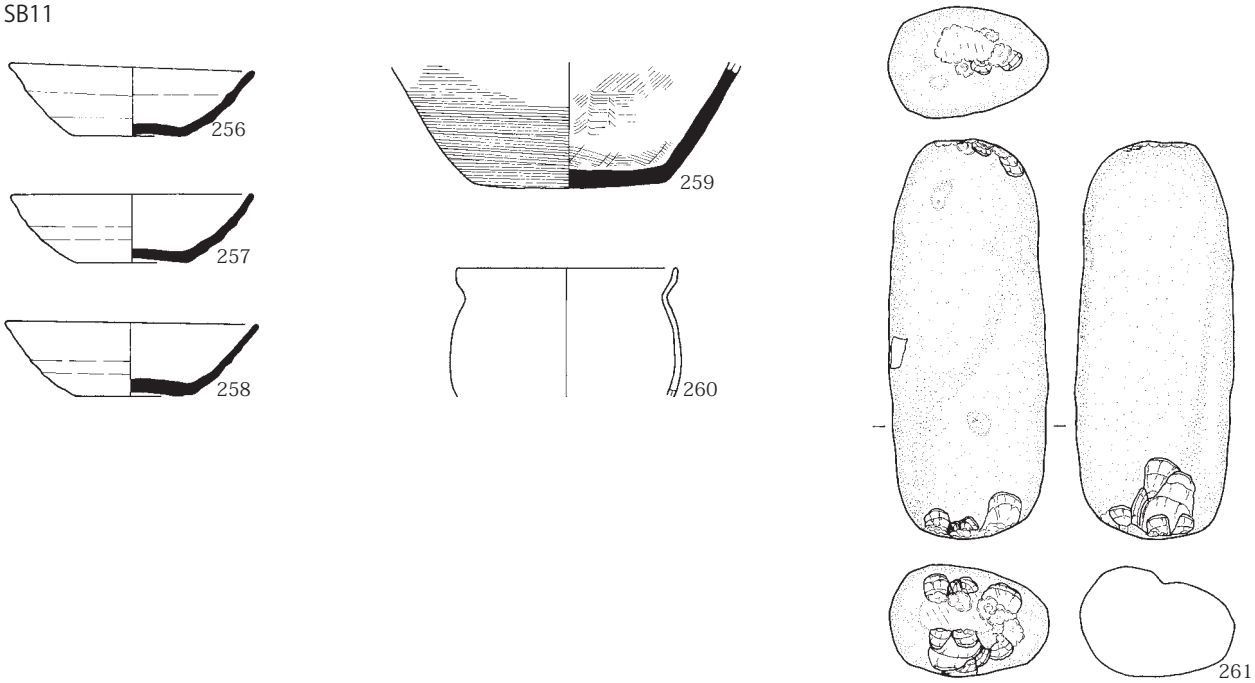
7　黒褐色(10YR2/3)　粗粒砂混シルト。粘性あり。しまりやや弱。0.5～7㎝礫20～30%・1～3㎝明赤褐色焼土ブロック5%・1～5㎝炭化物5%混。西側に0.5～7㎝礫40%・0.5㎝暗褐色粗粒砂（粘性なし。しまり強。）ブロック30～50%混。

8　黒褐色(10YR3/2)　細礫混シルト。粘性あり。しまりやや弱。1～3㎝炭化物1%・褐色焼土3%混。

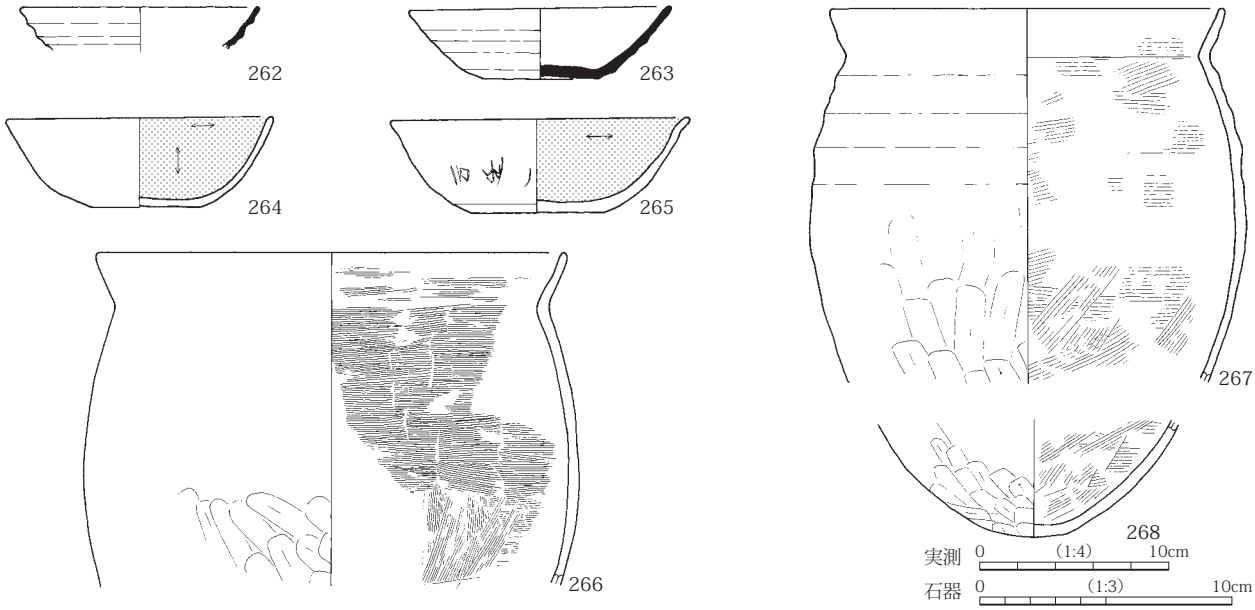
9　明赤褐色(5YR5/6)　焼土。

第 71 図　SB11・12　遺構図

SB11



SB12



第 72 図　SB11・12　遺物図

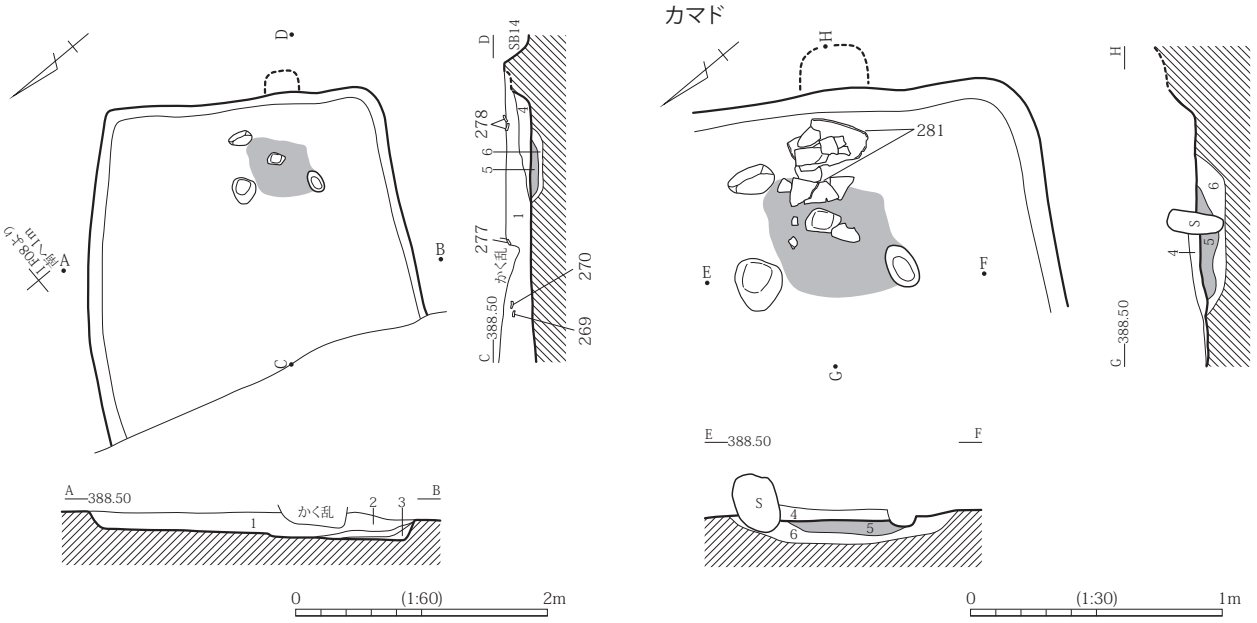
SB11　調査（西より）

SB12　調査（西より）

SB13（第 73・74 図　PL22・45）

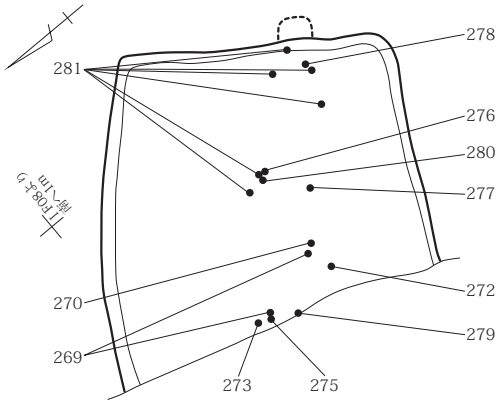
位置：Ⅰ F07・08 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で遺物の分布と黒褐色土の広がりを確認する。埋設管によるかく乱で埋土中まで破壊されている。西壁は調査区外へ延びる。**重複関係**：SB14 に煙道付近を破壊される。**埋土**：黒褐色土を主体とし、南壁際に崩落土を含む複層。**構造**：平面ほぼ方形と推定。主軸方向は N129° E。主軸残存長 2.60m、直交軸長 2.50m。検出面からの深さは 13 ～ 22cm。床は地山敲きでややしまりがよい。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットはない。**カマド**:南東壁中央よりやや南寄りに位置する。火床と北側の袖石、支脚石が原位置で、南側には袖石の抜き取り痕跡が確認されることから石組カマドと考えられる。袖石・支脚石ともに安山岩の円～亜円の自然礫で、熱を受け赤褐色に変色している。粘土が貼り付けられていたかどうかは不明である。検出時と断面トレンチ掘削時にわずかに東壁外のⅣ層が焼けている部分を観察し煙道ありと判断するが、カマド精査時では不明瞭で平面形を確認できなかった。**遺物出土状態**：遺物は埋土中全体に広がる。床面から黒色土器Ａ坏Ａ（272）、須恵器坏Ａ（269）、須恵器坏Ｂ（275）、土師器甕（281）が出土している。埋土中から土師器坏Ａ（273）、須恵器坏Ａ（270）、軟質須恵器坏Ａ（271）、軟質須恵器坏Ｂ（274）、須恵器甕（277）、土師器甕（278 ～ 280）、土師器鉢（276）が出土している。須恵器坏Ａ（269）は埋土中の､土師器甕（281）はカマド内や埋土中の土器と接合する。**時期**:埋土と床面出土の土器から、須恵器坏Ｂ（275）は硬質で須恵器の終了する頃、軟質須恵器坏Ａは出現期の頃、土師器は出現期の頃、黒色土器Ａは他の遺構と比較して割合が少ないなどのことから、９世紀中頃と判断する。

出土遺物：269・270 は須恵器坏Ａである。271 は軟質須恵器坏Ａである。272 は黒色土器Ａ坏Ａである。273 は土師器坏Ａである。274･275 は須恵器坏Ｂである。276 は土師器鉢である。277 は須恵器甕としたが、検討を要する。278 ～ 281 は土師器甕である。281 は砲弾形となる。

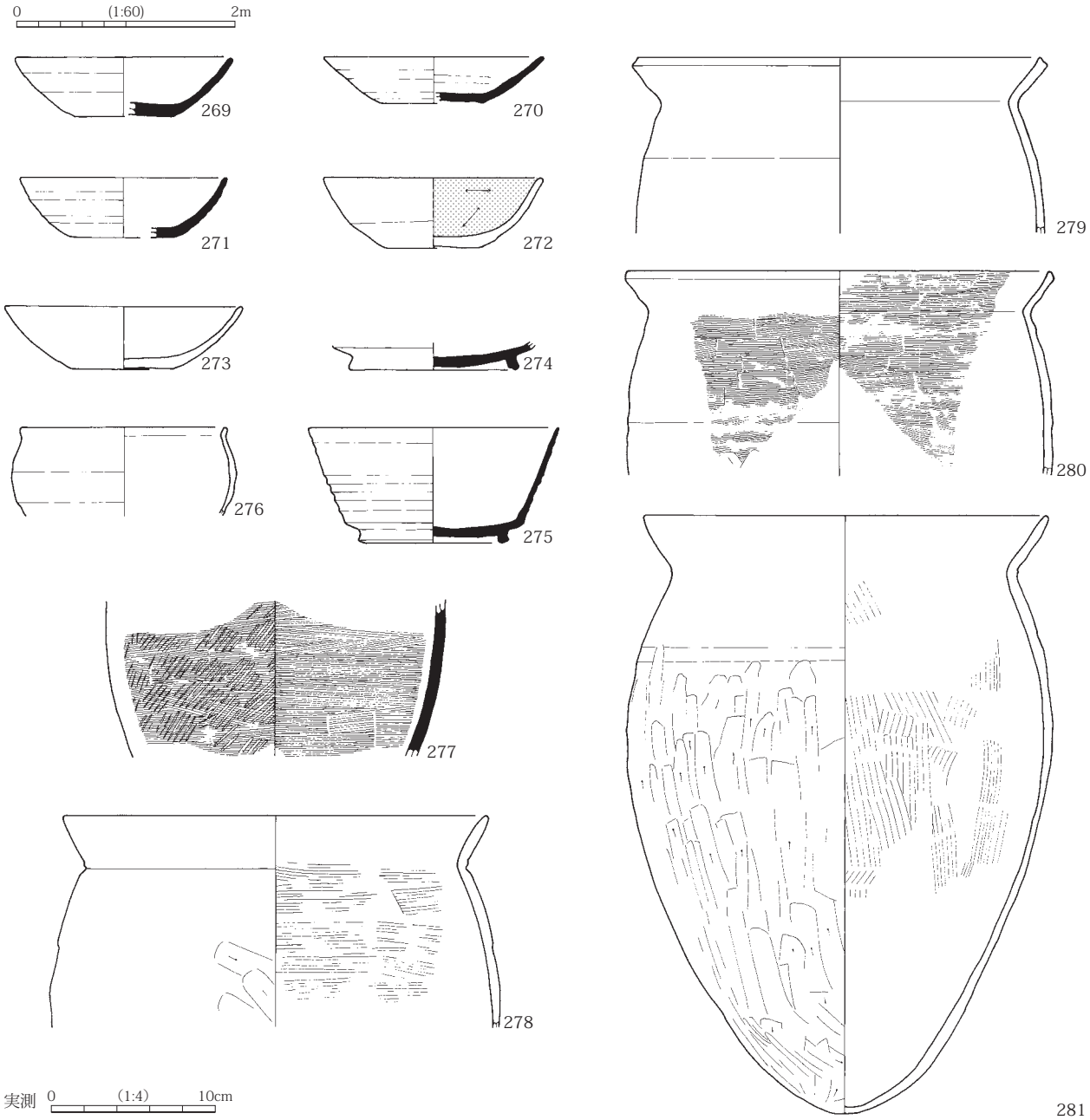


第 73 図　SB13　遺構図（１）

遺物出土状態



1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性普通～やや弱。
　　しまり普通。20㎝以下円礫混。
2　黒褐色(10YR3/2)　砂質シルト。粘性普通。しまり普通。
　　1～2㎝橙色焼土ブロック・褐灰色シルトブロック混。
　　土器片混。
3　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性なし。 しまりやや弱。
4　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。砂礫少混。
　　橙色焼土ブロック・炭化物混。
5　橙色　　シルト。粘性ややあり。しまりやや強。火床。
6　黒褐色(10YR3/1)　シルト。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。
　　カマド掘方埋土。

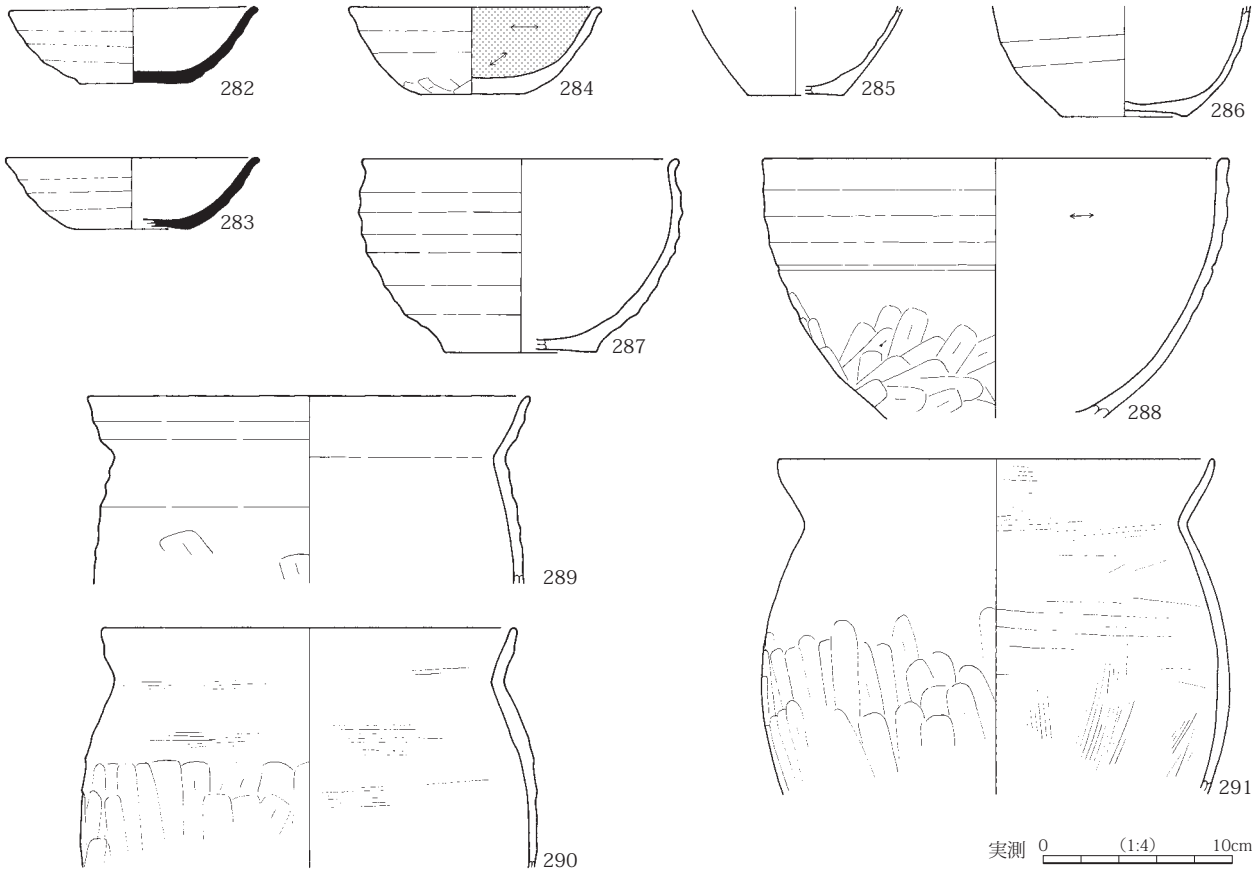


第 74 図　SB13　遺構図（２）・遺物図

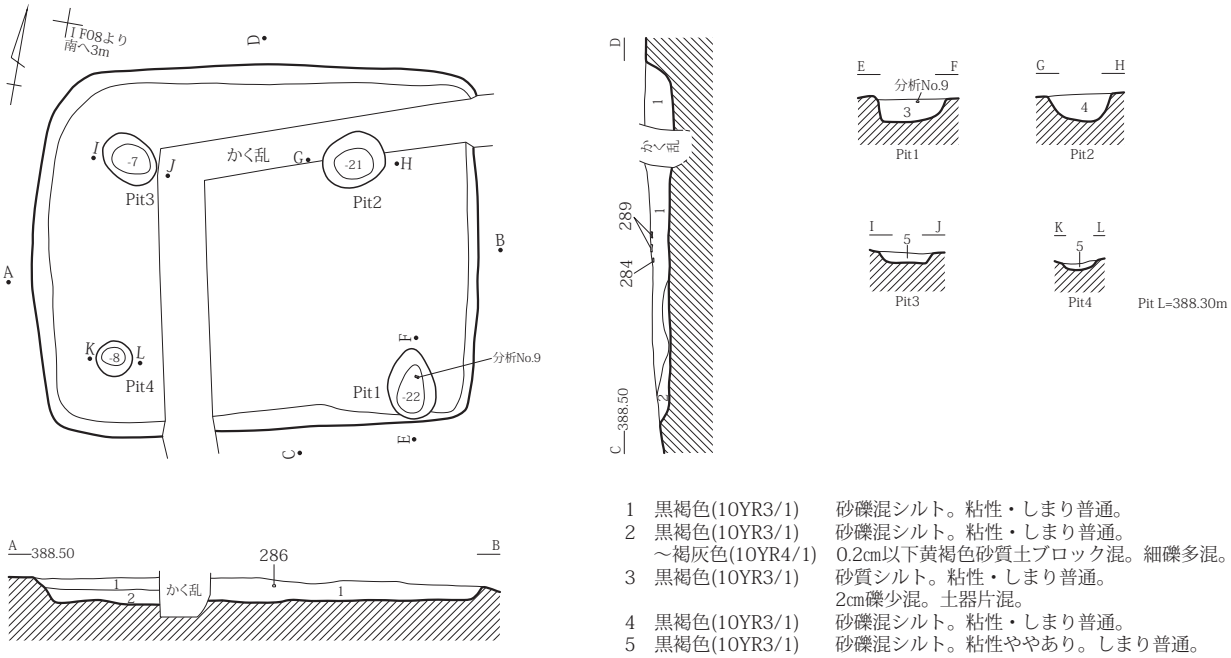
SB14（第 75・76 図　PL22・23・45・46）

位置：Ⅰ F08 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で北東壁と南壁が破壊されている。**重複関係**：SB13 の煙道部分を破壊している。**埋土**：黒褐色土を主体とする。南西部には黄褐色砂質土のブロックを含む黒～灰褐色の崩落土（地山）の流れ込みが分布する。複層。**構造**：平面ほぼ方形。主軸方向は N9° W。主軸長 2.60m、直交軸長 3.32m。検出面からの深さは６～ 20cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット４基を床面で確認し、位置から Pit2 ～ Pit4 を主柱穴と判断する。床面からの深さは７～ 21cm である。Pit1 は南東隅の壁際に位置し、埋土中に炭化物や土器片を含み他のピットと異なることから貯蔵穴の可能性が考えられる。住居としての機能はもたないと考えられる。**カマド**：ない。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが中央部から南東部の埋土中に広がる。床面から土師器鉢（287）が出土している。埋土中から黒色土器Ａ坏Ａ（284）、軟質須恵器坏Ａ（282・283）、土師器鉢（288）、土師器甕（289 ～ 291）、Pit1 の土師器ロクロ甕（285・286）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。Pit1 埋土から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析 No. ９）の放射性炭素年代測定で 1,220 ± 20yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（713-744 cal AD（14.3%），765-885 calAD（81.1%））。

出土遺物：282・283 は軟質須恵器坏Ａである。284 は黒色土器Ａ坏Ａである。285・286 は土師器ロクロ甕である。287・288 は土師器鉢である。289 ～ 291 は土師器甕で、砲弾形となる。

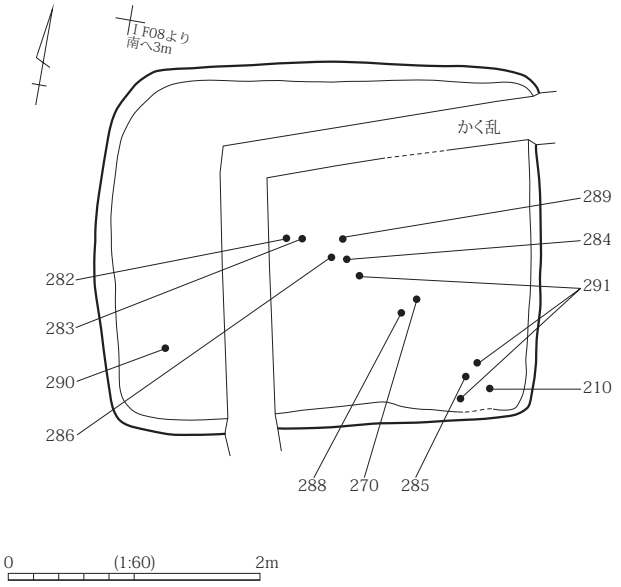


第 75 図　SB14　遺物図



1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
2　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
　～褐灰色(10YR4/1)　0.2㎝以下黄褐色砂質土ブロック混。細礫多混。
3　黒褐色(10YR3/1)　砂質シルト。粘性・しまり普通。
　　2㎝礫少混。土器片混。
4　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
5　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通。

遺物出土状態



第 76 図　SB14　遺構図

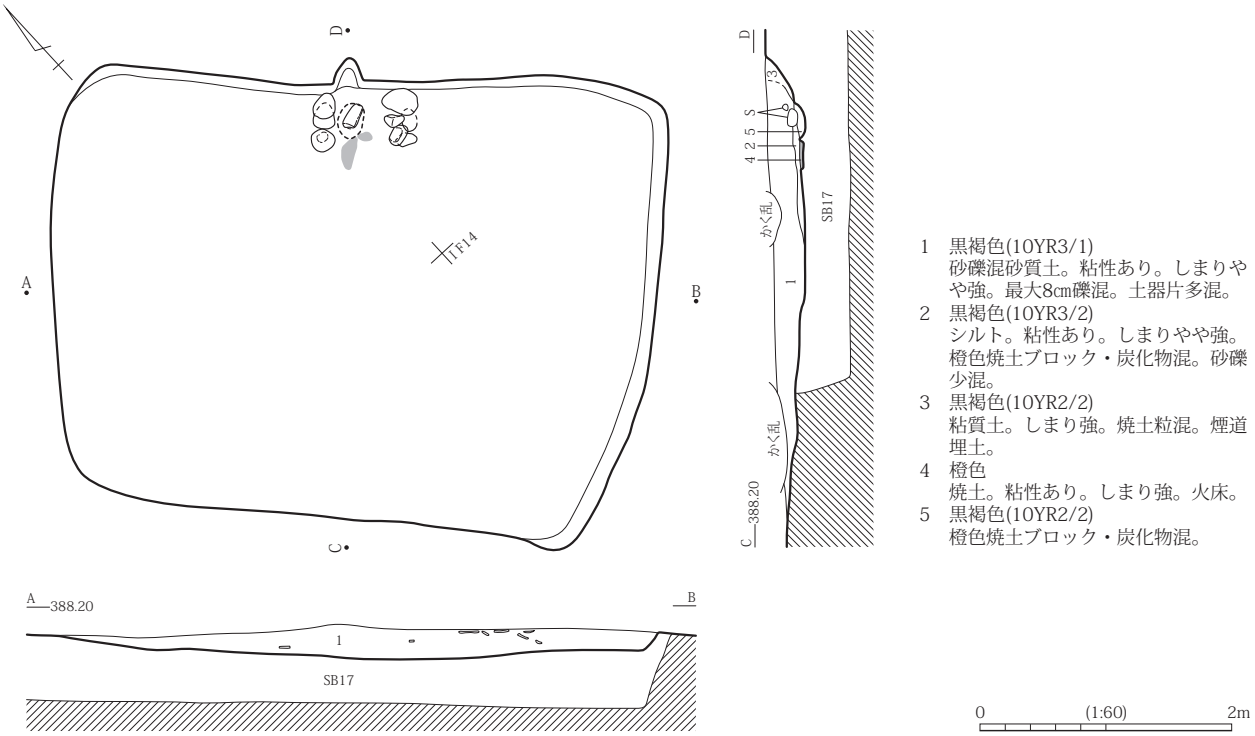
SB13　調査（東より）

SB14　調査（北東より）

SB15（第 77 ～ 79 図　PL23・24・46・47・49）

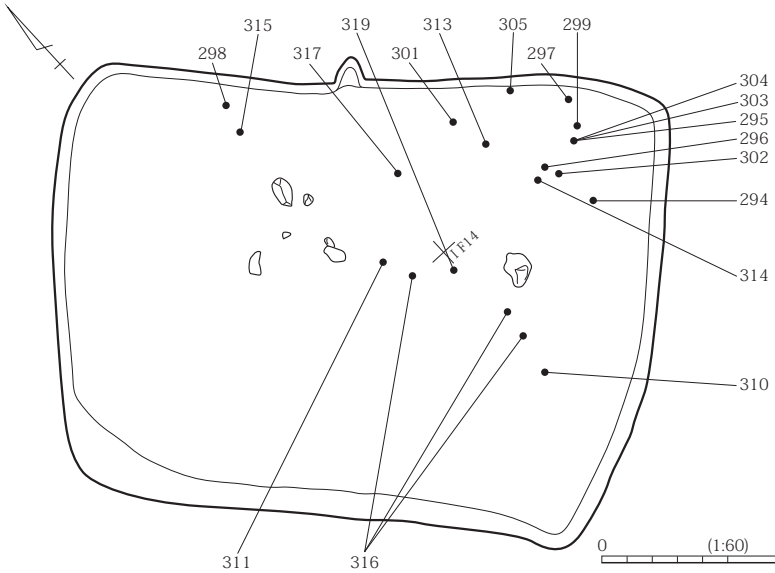
位置：Ⅰ F08・09・13・14 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物の散布とやや黒色が強い黒褐色土の広がり、煙道部分と考えられる焼土を確認する。**重複関係**：SB17 を切る。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面長方形。主軸方向は N43° E。主軸長 3.40m、直交軸長 4.67m。検出面からの深さは２～ 27cm。床は SB17 埋め戻し土上と地山上に位置するが、明確な硬化面はない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは確認できない。**カマド**：北東壁中央からやや北寄りに位置し、煙道、石組の袖石、火床が残存する。支脚石は倒れた状態で、また天井石として用いられたと考えられる被熱痕のある凝灰岩の亜角礫はカマド南西側に散っている。袖石は安山岩、チャート、支脚石は安山岩の自然礫を用い、いずれも被熱痕がある。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から黒色土器Ａ坏Ａ（294 ～ 296）、土師器坏Ａ（302 ～ 304）、土師器甕（315）、須恵器瓶（319）が出土した。黒色土器Ａ坏Ａ（295）と土師器坏Ａ（303・304）は３個体が重なった状態である。土師器甕（315）は埋土からの出土土器と接合する。カマド内から黒色土器Ａ坏Ａ（300）、土師器皿Ｂ（309）、土師器甕（317・318）が出土した。土師器皿Ｂ（309）は床面からの、土師器甕（317）は埋土からの出土土器と接合する。床面からやや浮いた位置で土師器坏Ａ（301・305）が出土している。埋土中から須恵器坏Ａ（292）、軟質須恵器坏Ａ（293）、黒色土器Ａ坏Ａ（297 ～ 299）、土師器坏Ａ（305）、須恵器坏蓋Ｂ（306）、黒色土器Ａ碗（307）、灰釉陶器皿（308）、土師器盤Ｂ（310）、黒色土器Ａ鉢（311）、須恵器瓶（312）、土師器ロクロ甕（313・314）、土師器甕（316）、剥片（320）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、９世紀後半と判断する。

出土遺物：292 は須恵器坏Ａである。293 は軟質須恵器坏Ａである。294 ～ 300 は黒色土器Ａ坏Ａである。301 ～ 305 は土師器坏Ａである。303 は底部に×印のヘラ書きが認められる。306 は須恵器坏蓋Ｂである。307 は黒色土器Ａ碗である。308 は灰釉陶器皿である。309 は土師器皿Ｂである。310 は土師器盤Ｂとしたが検討を要する。311 は黒色土器Ａ鉢である。312 は須恵器瓶で底部高台内にヘラ書きが認められる。313・314 は土師器ロクロ甕である。315 ～ 318 は土師器甕で砲弾形となる。319 は須恵器甕である。320 は泥岩の剥片である。使用痕は認められない。



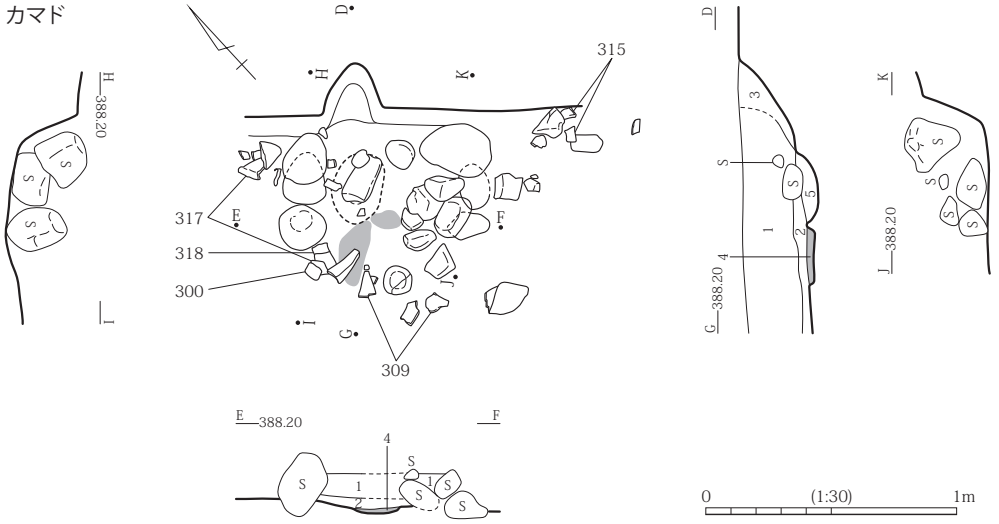
第 77 図　SB15　遺構図（１）

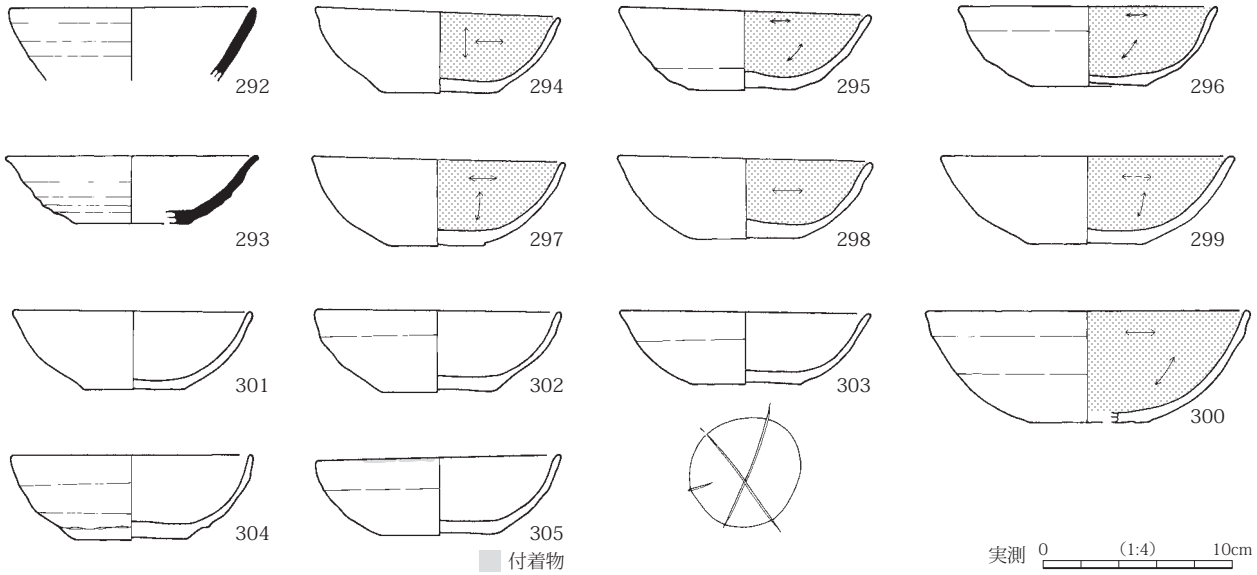
遺物出土状態



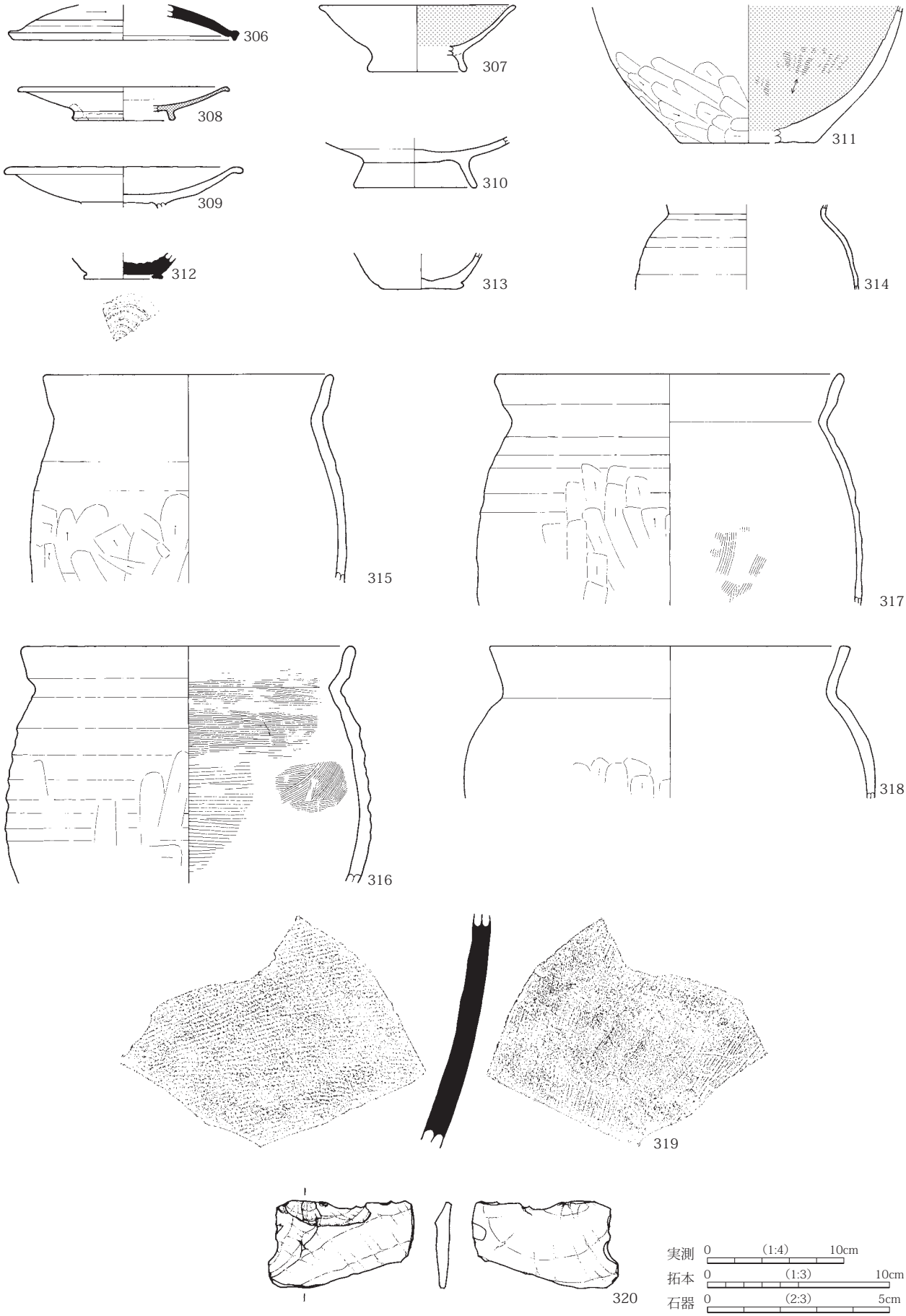
SB15　295・303・304 出土状態（東より）

カマド





第 78 図　SB15　遺構図（２）・遺物図（１）



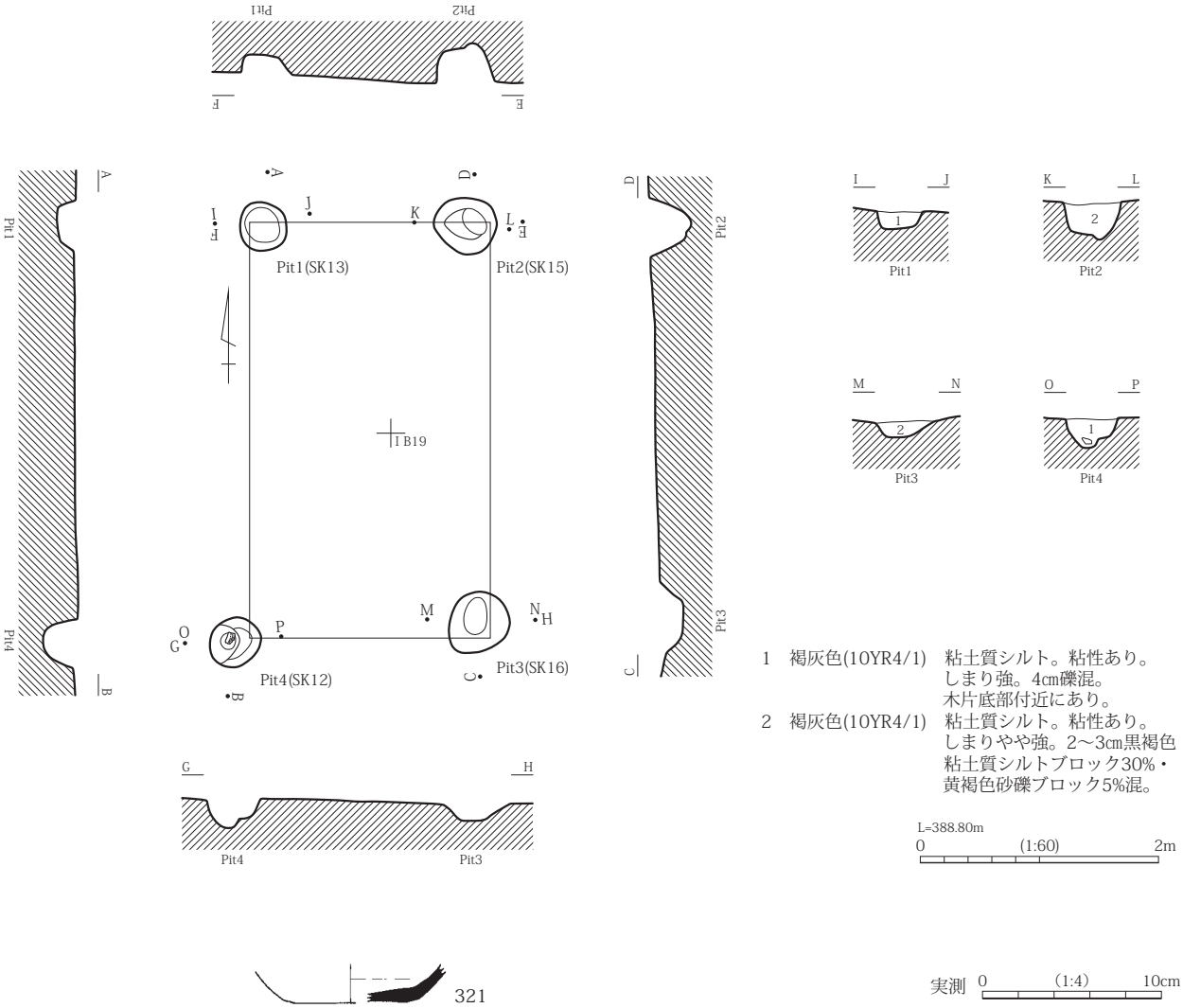
第 79 図　SB15　遺物図（２）

２．掘立柱建物跡

ST02（第 80 図　PL24・25・47）

位置：Ⅰ B13・14・18・19 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で褐灰色土の落ち込みを確認する。当初単独の土坑として調査を開始したが、それぞれの形状と埋土が類似し、等間隔に並ぶことから掘立柱建物跡の柱穴と判断した。**重複関係**：流路跡 SD03 を切る。**埋土**：褐灰色土を主体とする単層。**構造**：棟方向 N0°、側柱建物。１間×１間、長軸長 3.40m、短軸長 1.92m。柱穴は平面形が径 42 × 50cm ～ 42 × 55cm の円形～楕円形で、検出面からの深さが 14 ～ 32cm である。埋土は単層で、柱痕は認められない。**遺物出土状態**：遺物の総量はわずかで破片である。Pit3（旧 SK16）から須恵器坏Ａ破片（321）が出土している。Pit4（旧 SK12）から材片が出土している。厚さ１cm 程度の板材であるが、腐食が進み加工の有無や樹種は不明である。**時期**：SD03 より新しいことと出土遺物から平安時代と考えられる。

出土遺物：321 は須恵器坏Ａ底部の破片である。



第 80 図　ST02　遺構図・遺物図

３．流路跡

調査区北部（１区）を南北に縦断する流路跡が２条ある。本来は南部（２区）に延びていたと考えられるが、かつての校舎建設やグランドの造成に伴って削平された可能性が高く、確認できなかった。

SD02（第 81・82 図　PL25）

位置：Ⅰ B13・18・23、Ⅰ G03・08 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面の検出面において、褐色砂礫の帯状の広がりを確認する。Ⅰ B13・18 グリッドでは SD03 の西側の立ち上がり付近に位置し、Ⅰ B23、Ⅰ G03・08 では不連続であるが SD03 の中央付近と完全に重なる。検出された中央部分はかく乱で破壊されている。南端もかく乱で破壊されている。SD03 の埋没後に砂礫を伴う流れがあったと考えられる。**重複関係**：SD03 を切る。**埋土**：褐色砂礫を主体とする。**構造**：検出面において、南北方向に全長約 38.5m 延び、流路幅 0.33 ～ 0.87m を測る。検出面からの深さは４～ 14cm。断面形は浅い皿状である。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片が埋土中全体に広がる。**時期**：出土遺物と遺構の切り合いから、平安時代とする。

SD03（第 81・82 図　PL25・26・47）

位置：Ⅰ B08・09・13・14・18・19・23、Ⅰ G03・04・08 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面の検出面において、黒褐色土の帯状の広がりを確認する。北端は調査区外へ延びる。検出された中央部分はかく乱で破壊されている。南端もかく乱で破壊されている。**重複関係**：SD02、掘立柱建物跡 ST02（Pit1・Pit3・Pit4）に切られる。**埋土**：下位よりシルト～砂質シルト層（４層）、砂礫層（３層）、黒褐色の粘土質シルト層（２層）の大きく３層に区分できる。上層、中層、下層ともそれぞれラミナを挟み、含有物により細分されるが、トレンチ間のラミナの対比は困難である。E - F 断面における２層、３層、４層、５層、Ⅳ層堆積物１g 中の珪藻殻数は 2.9×10^5 個、8.8×10^4 個、1.3×10^5 個、1.6×10^4 個、2.5×10^4 個、完形殻の出現率は 48.0％、49.0％、42.2％、42.6％、55.7％で、主に淡水種からなり、汽水種と海水種をわずかに伴う。堆積物中の珪藻殻数はやや少ない～やや多い。環境指標種群では、中～下流性河川指種群（K）と陸生珪藻Ａ群（Qa）が多く、最下流性河川指標種群（L）、沼沢湿地付着生指標種群（O）、高層湿原指標種群（P）などの淡水種と海水種や汽水種をわずかに伴う。環境指標種群の特徴からジメジメとした陸域や中～下流性河川などの淡水域環境が推定される。**構造**：検出面において、主軸方向はほぼ南北で、東西方向に緩やかに蛇行している。全長約 44.0m、流路幅 2.70 ～ 4.40m を測る。検出面からの深さは 47 ～ 95cm である。立ち上がりは緩やかで、底面はやや凹凸がある。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片が埋土中全体に広がる。Ⅰ B08･13 グリッドでは２層からウマの歯破片が散らばって出土している。Ⅰ B08・13・14・18・19 グリッド（1a 区）では３層から須恵器坏Ａ（322）、須恵器高盤（323）、須恵器長頸壺（324）、などが、Ⅰ B23、Ⅰ G03･08 グリッド（1c 区）では土師器甕底部（326）が出土している。Ⅰ B23、Ⅰ G03・08 グリッド（1c 区）では４層から材が出土している。**時期**：埋土中の遺物から奈良～平安時代とする。遺存状態の良好なものについて樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。分析 No.11 は針葉樹の丸木？と判断され、1,536 ± 20yrBP（暦年較正年代）の結果を得た（428-497 cal AD（47.0%），506-583 cal AD（48.4%））。分析 No.12 は炭化材で亜炭？と判断され、44,288 ± yrBP（暦年較正年代）の結果を得た（46,592-44,637 cal BC（95.4%））。分析 No.12 については遺構の推定時期よりも大幅に古い年代であり、地層中に埋没していた古い木材が流路の形成で露出した可能性などが考えられる。

出土遺物：掲載した遺物は、すべて埋土からの出土である。322 は須恵器坏Ａである。323 は須恵器高盤である。324 は須恵器長頸壺としたが検討を要する。325 は土師器甑の把手である。326 は土師器甕で内

外面とも磨き調整される。701 から 711 はすべてウマ臼歯（前臼歯又は臼歯）永久歯破片だが、性別や年齢の推定はできなかった（第９表）。703 は右上顎歯で１本、705・710 は上顎歯、707・709 は下顎歯、706 は下顎歯？で、他は部位不明である。部位が明らかな６資料について観察したところ、咬耗が進んでいないことから、比較的若い個体の可能性が高い。705・710 は 703 と同程度に咬耗が進んでいるので、同一個体の可能性がある。また 707 と 706・709 の咬耗の程度が類似するので、同一個体の可能性がある。しかし１個体をこの場で廃棄していればある程度原位置を保って出土すると考えられるので、解体された個体が付近で廃棄され埋没したと想定できる。上顎骨や下顎骨、他の部位の骨が出土しないのは、埋没後に溶けてしまった可能性が高い。

（註）動物骨については、茂原信生氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏のご教示による。

第９表　SD03 出土歯骨一覧

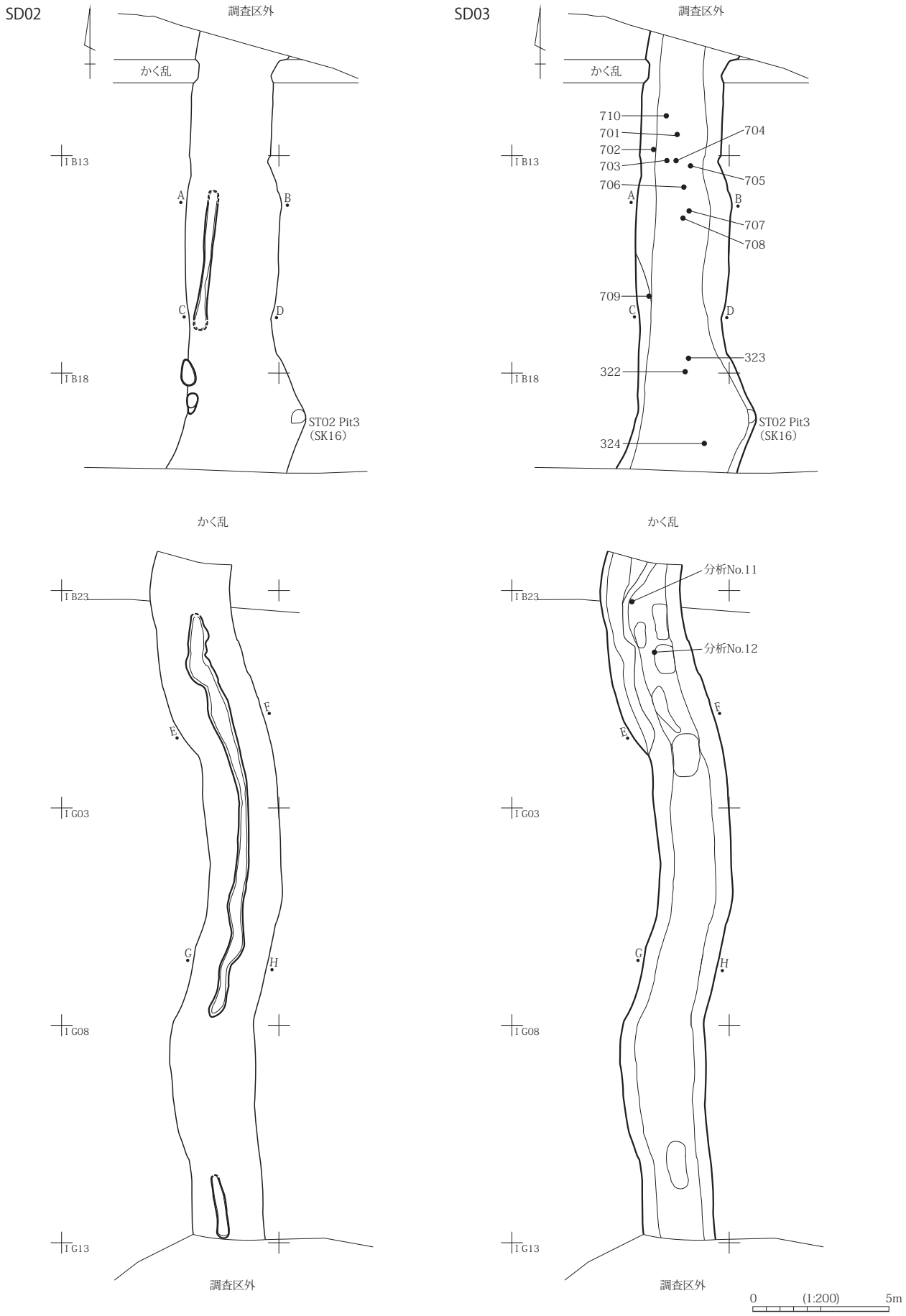
管理No.	遺構	取り上げNo.	出土層	種類	時期	部位	部位詳細	右左	備考	年齢
701	SD03	No.1	２層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
702	SD03	No.2	２層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
703	SD03	No.3	２層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片	右	１本	永久歯。咬耗少なく、萌出直後か。
704	SD03	No.4	２層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
705	SD03	No.5	２層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片		No.703 と同一か。	
706	SD03	No.6	２層	ウマ	平安時代	下顎歯？	臼歯破片		No.707 と同一か。	
707	SD03	No.7	２層	ウマ	平安時代	下顎歯	臼歯破片			
708	SD03	No.8	２層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
709	SD03	No.9	２層	ウマ	平安時代	下顎歯	臼歯破片		No.707 と同一か。	
710	SD03	No.12	２層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片		１本 No.703 と同一か。	
711	SD03	No.13	-	ウマ	平安時代		臼歯破片			

SD03　調査（北より）

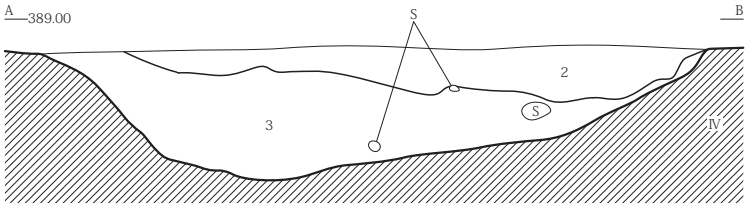
SD03　323 出土状態（東より）

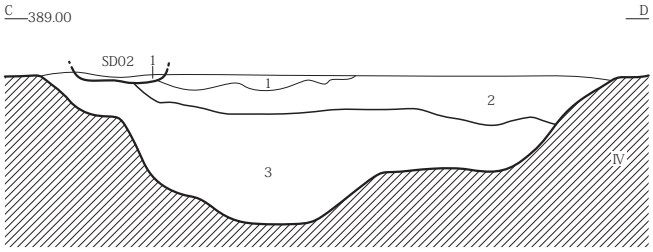
SD 検出（北より）

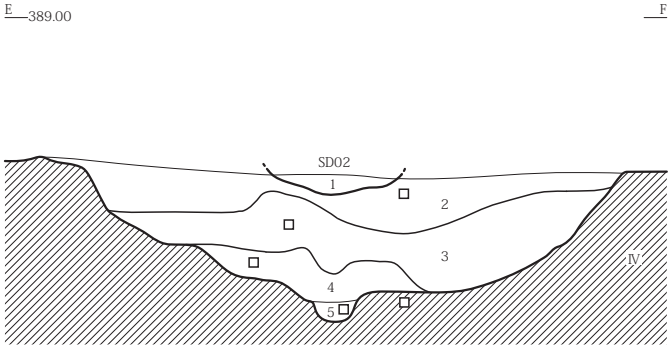
SD02・03　調査（南東より）



第 81 図　SD02・03　遺構図（１）





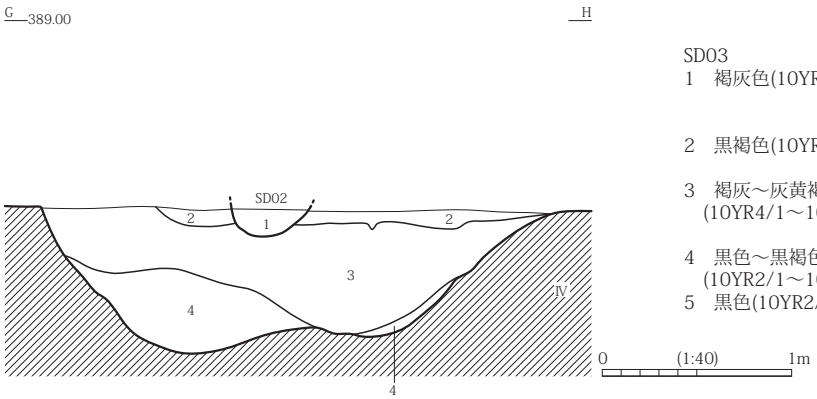


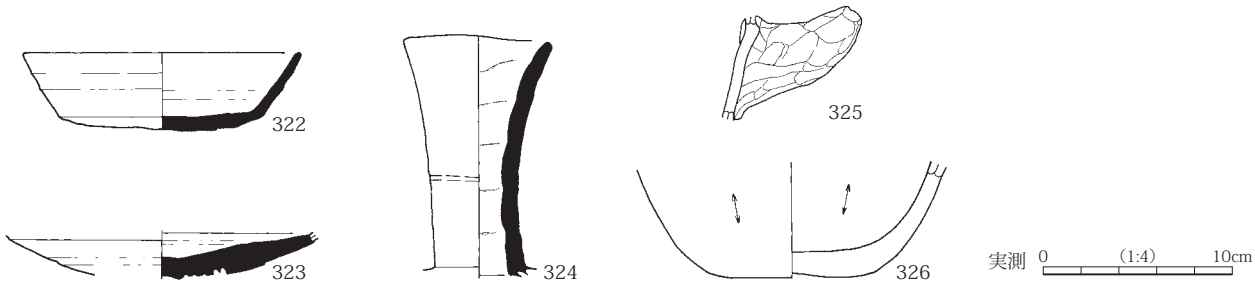
□ 珪藻分析土壌サンプル採取

SD02・03　完掘（北より）

SD02
1　褐色(10YR4/4)　砂礫。粘性なし。しまり普通。基質粗粒砂。0.5㎝以下礫混。

SD03
1　褐灰色(10YR4/1)　砂礫混シルト。粘性ややあり。しまりやや強。1㎝以下白色亜角礫混。粗粒砂ラミナ状に混。
2　黒褐色(10YR3/1)　粘土質シルト。粘性あり。しまり強。歯破片出土。
3　褐灰～灰黄褐色(10YR4/1～10YR4/2)　砂礫。粘性・しまり弱。黒褐色・灰褐色砂質シルト～シルトを層状・ラミナ状に混。黒褐色シルトブロック混。
4　黒色～黒褐色(10YR2/1～10YR3/1)　シルト。粘性・しまり弱。灰褐色シルト、細粒砂～砂礫をラミナ状に混。
5　黒色(10YR2/1)　粘土。粘性あり。しまり弱。材出土。





第 82 図　SD02・03　遺構図（２）・遺物図

４．土坑

平安時代の遺物を出土する土坑はSK62とSK232、SK233、SK237の４基である。いずれも破片で掲載する遺物はない。SK236、SK239はSK237と、SK234、SK238はSK233と平面形や埋土が類似し、付近に平安時代の竪穴建物跡SB11～15が位置することから同時期の土坑の可能性が高い。

SK62（第83・84図）

位置：Ⅰ L16グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で暗褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：粘性やしまりのある灰黄褐色砂礫混粘質土と、粘性がややあり、しまりのある黒褐色砂礫混シルトからなる複層。**構造**:掘り込みは主軸方向N67° E、主軸長53cm、直交軸長50cm。平面形は円形で、壁は垂直に立ち上がる。底面は平らである。検出面からの深さは32cmである。**遺物出土状態**：土師器破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器から平安時代と考えられる。

SK232（第83・84図）

位置：Ⅰ F03グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造**：掘り込みは主軸方向N46° E、主軸長70cm、直交軸長68cm。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平らである。検出面からの深さは32cmである。**遺物出土状態**：土師器破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

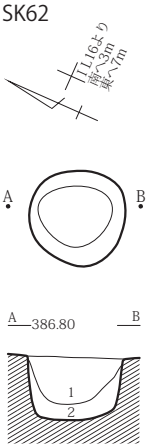
SK233（第83・84図）

位置：Ⅰ F03グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造**：掘り込みは主軸方向N41° W、主軸長40cm、直交軸長36cm。平面形は円形で、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はやや丸く窪む。検出面からの深さは23cmである。**遺物出土状態**：土師器破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

SK237　（第83・84図）

位置：Ⅰ F03グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造**：掘り込みは主軸方向N21° E、主軸長63cm、直交軸長62cm。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや丸く窪む。検出面からの深さは27cmである。**遺物出土状態**：須恵器破片が埋土中から出土している。**時期**：出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

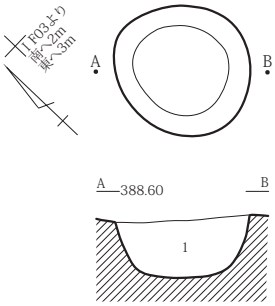
SK62



1　黒褐色(10YR3/2)　粘性ややあり。しまりあり。黄褐色粒10%混。10cm礫混。

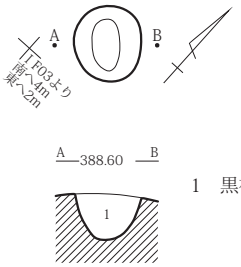
2　灰黄褐色(10YR4/2)　粘性・しまりあり。粗砂・小礫混。

SK232



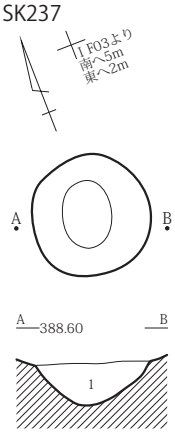
1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性・しまり普通。5cm円礫少混。

SK233



1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性・しまり普通。5cm円礫少混。土器片混。

SK237



1　黒褐色(10YR3/1)　砂礫混シルト。粘性普通。しまり普通。5cm円礫少混。下半部ブロック土混。黄褐色砂礫土地山。

0　(1:40)　1m

第 83 図　SK062・232・233・237　遺構図

SK62 完掘（南より）

SK232 完掘（北より）

SK233（左）完掘（南東より）

SK237 完掘（北より）

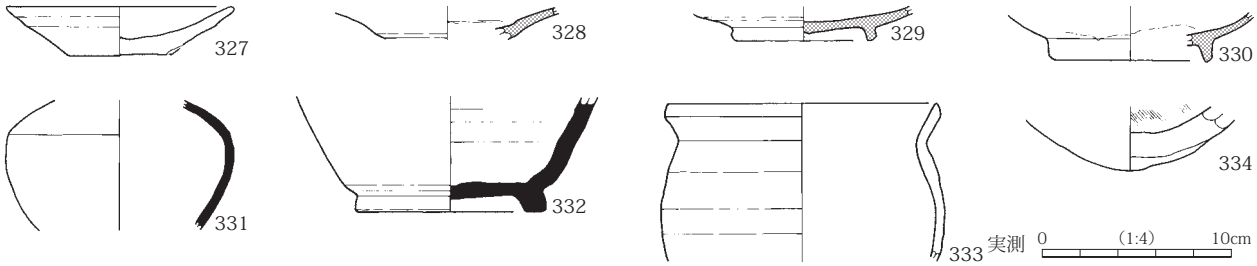
第 84 図　奈良・平安時代　溝跡・土坑分布図

５．遺構外

包含層出土遺物（第 85 図　PL47）

包含層から出土した古代の遺物を本項に掲載した。

327 は土師器皿Ａである。328 は灰釉陶器段皿である。329・330 は灰釉陶器碗である。330 は焼成時に高台が付着した痕跡が内面に認められる。331 は須恵器瑳としたが検討を要する。332 は須恵器瓶である。333 は土師器ロクロ甕である。334 は土師器甕である。



第 85 図　奈良・平安時代　遺構外　遺物図

６．小結

竪穴建物跡は 10 軒検出された。調査区の中はかく乱により破壊されている部分があるので、検出できなかった遺構を考慮すると、実際にはもう数軒の竪穴建物跡あった可能性がある。建物の所属時期は出土遺物から平安時代９世紀後半に限定され、重複関係があるものの出土遺物の時期差がほとんどないことから、ほぼ一時期の集落であったと考えられる。形状はほぼ方形で、床の状態はさまざまである。また柱穴はあるものの主柱穴が不明な建物や柱穴が検出されない建物もある。カマドの位置は壁中央より隅へ片寄っていて、西側、南東側、北側、北東側とさまざまである。埋文センターで調査中の浅川扇状地遺跡群吉田田町遺跡、桐原宮北遺跡、桐原牧野遺跡では当該期の竪穴建物跡はほぼ北側（北西・北東を含む）にカマドが位置しているため、本遺跡での状況が意味するところは不明である。

掘立柱建物跡は１棟検出されている。竪穴建物跡とはやや離れており、埋土から須恵器坏破片が出土する。竪穴建物跡と同時期の建物であるかは不明であるが、流路跡 SD03 と重複しており、埋没後建物が建てられたと考えるのが妥当である。SD03 は埋土中から奈良時代８世紀末から９世紀初頭の遺物が出土しているため、竪穴建物が営まれていた時期には、埋没していたか、ウマを廃棄するような窪地であったと考えられる。

SD03 は全層で中～下流性河川指標種群が多い傾向があり、水流を伴う水域環境が成立していた可能性がある。またⅣ層では陸生珪藻Ａ群が少ないため、地山であるⅣ層の堆積時は比較的安定した水流が存在していたと思われる。５層から上位層は陸生珪藻Ａ群が多くなり、周辺土壌の流れ込みなどによって乾燥した時もあったと考えられる。さらに、多産傾向にあった中～下流性河川指標種群の Planothidium lanceolatum は有機汚濁が比較的少ない水流において高い相対頻度で出現する好清水種であるという報告がある（渡辺・浅井，1992）。よって流水環境下では、比較的汚濁の少ない淡水域環境が成立していた可能性がある。

信濃国では仁和四年（888 年）五月八日、仁和の大洪水が発生し、佐久、小県、埴科、更級、水内、高井の各６郡が大規模な洪水被害に遭う（『類聚三代格』巻十七）。浅川扇状地は水内郡に属するが、この仁和の洪水により被害を受けた状況は発掘では認められていない。

第４章　総括

第１節　浅川扇状地遺跡群の後期弥生式土器の位置づけ

１．本村南沖遺跡出土の後期弥生式土器

本村南沖遺跡（以下、「本遺跡」と併用する）で出土した弥生式土器は、前期併行に位置づけられる氷式土器一個体（土器棺 SQ02）を除くと、中期栗林式土器の小破片３点があるのみで、ほかすべての土器が後期である。そのうち、土器棺以外は後期初頭の土器で、1970 年笹沢浩（註１）によって「吉田式土器」と命名された土器にあたる。

発掘調査では、竪穴住居跡に切り合い関係はなく、すべての住居跡がほぼ同時期に存在した可能性は高い。しかしながら、資料的に少量であるが、住居跡出土土器（壺形土器）に施文手法の違いがみられること、竪穴住居跡 SB03（以下、SB03 の表記法で示す）では、「吉田式土器」とともに、それ以後に編年される箱清水式土器が１例混じって出土したことから、本遺跡における住居跡出土土器に時期差あるいは土器形式上の段階差（型式差）を設けられるのではないかと考えた。

まず施文手法であるが、壺形土器頸部への施文法の違いがあげられる。SB02 と SB16 出土資料では、頸部に篦状工具で平行沈線文（横走平行線、註２）を施し、その下に同様な工具で鋸歯文を付加する。SB03 と SB04 では、主に櫛歯状工具で平行沈線文を施し、以下に篦状工具で鋸歯文を付加する。この２者を同時期のバラエティと捉える見方も多いが、篦描文の多用は「吉田式土器」以前の栗林式土器の特徴であり、櫛描文の盛行は以後の箱清水式土器の特徴となるので、壺形土器文様に用いられる描画手法が、篦描文から櫛描文へと質的に推移していくのであれば、時間的差異を考えてよい。

２つ目の課題、SB03 で「吉田式土器」に１例の箱清水式土器が混在したこと。このことは考古学的手法で確認しきれなかった調査上の課題がまったくないわけではないが、出土分布をみる限り、わずかな偏りはあるけれども、ほとんど同一レベルで混在して出土している。SB03 出土土器は、櫛描きの平行沈線文と鋸歯文で飾られた壺形土器の資料である。厳密な一括資料とはいえないが、「吉田式土器」の終末頃に新しい要素の土器がすでに成立しており、両者は混在したと解釈してよいのか。数点の資料で土器変遷を語る危険性はあろうが、以上２つの点を考慮し、「吉田式土器」には古い様相と新しい様相を示す土器があり、それを段階差・時期差まで止揚できるのであれば、一見、単純・同一時期にみえた住居跡群に時期差を与えることができ、集落の捉え方も変わる。

本遺跡出土土器を、以上の視点から住居跡単位に整理し様相の違いを想定したのが第 86 図である。

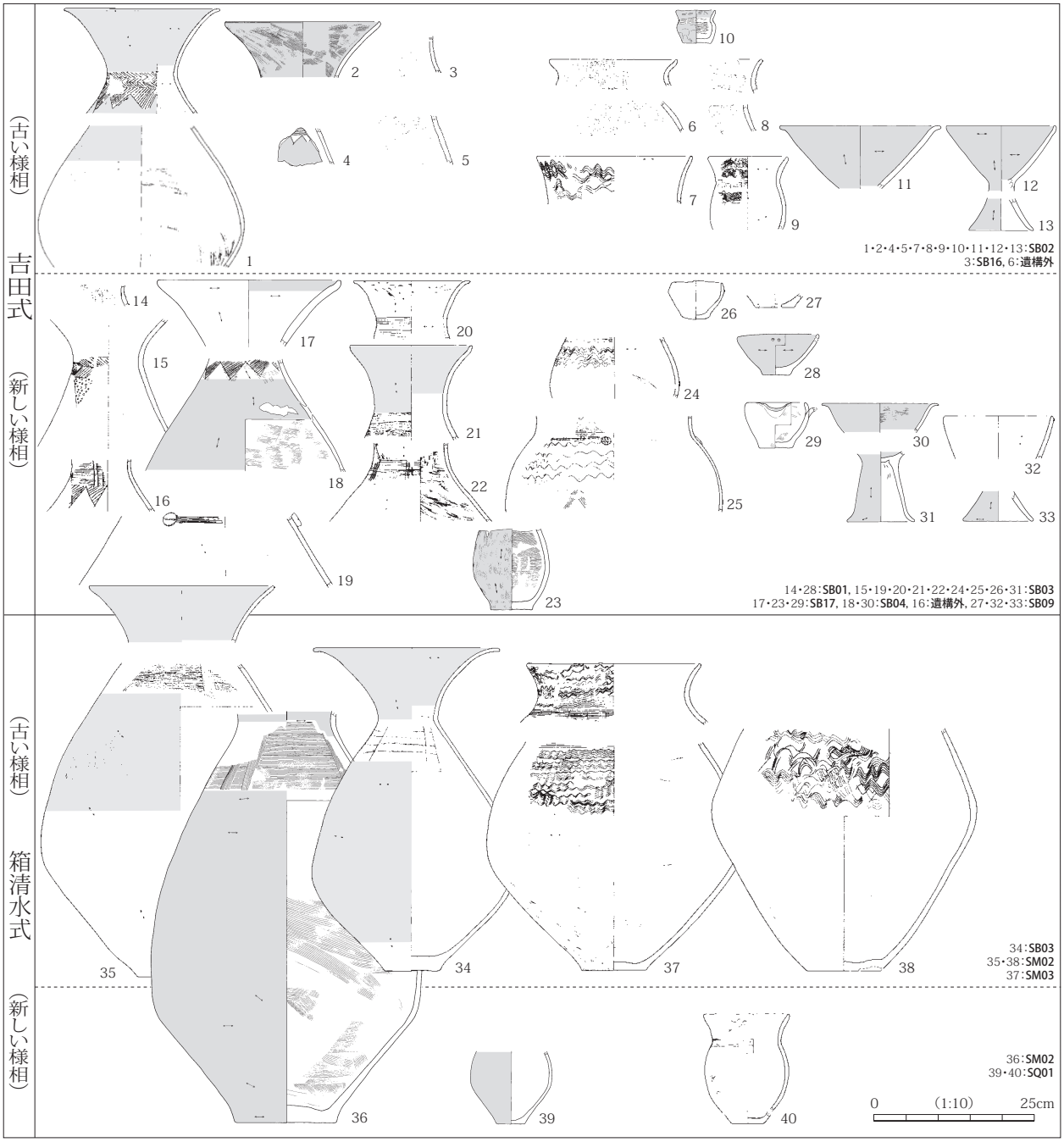
（1）古い様相を示すと考えられる土器

篦描平行沈線のみを用いた壺形土器が SB02 と SB16 にある。壺形土器はラッパ状に小さく開口するいちじく形の形態で、無彩もあるが器面のほぼ全面に赤彩が施され、口縁外面は縦方向の磨き調整で仕上げられる。頸部は篦状工具で平行沈線を帯状に施す例（第 86 図３）、これに鋸歯文を加える例（第 86 図４・５）がある。また頸部の平行沈線を幅広く設け、その間を斜線あるいは矢羽状に篦描きする例（第 86 図１）もある。甕形土器は胴部卵形をした資料が少なく、その主体を占める小形例は底部付近を欠損した資料の場合、台付甕形土器との差異が不明瞭となる（第 86 図９）。胴部さらには口縁部外面に櫛描きで波状

文が施され、頸部は櫛描きの簾状文でまとめられる。また口縁部直行または緩い受け口状で球胴形を呈する例（第 86 図６～８）もある。緩い受け口例は「吉田式土器」以前から継承される古い要素と考えられるので、遺構外資料（第 86 図６）も図に加えた。鉢形や甑形、片口鉢形等は今回の出土資料には該当例がない。高坏形土器は口縁端部が水平に強く屈曲する、いわゆる鍔縁状を呈する例（第 86 図 11）とロート形に開口する例（第 86 図 12・13）の２者がある。坏部は内外面ともに赤彩が施される。

（２）新しい様相を示すと考えられる土器

箆描平行沈線文のほか、櫛描平行沈線文を主体的に用いる壺形土器がある。SB01・SB03・SB09・SB17 に出土例があり、その形態は古い様相と概ね同一だが、頸部文様は箆描きのみならず、櫛描きによる簾状文（第 86 図 14）および平行沈線文が用いられる（第 86 図 16・19 ～ 22）。平行沈線文を箆状工具で縦位に区分する「Ｔ字文Ｂ」（笹沢 1970）も新しい要素として加わる（第 86 図 21・22）。このほか、筒形を



第 86 図　本村南沖遺跡　出土土器の様相

した壺形土器の出土がある（第 86 図 23）。甕形土器は器面全体に櫛描波状文を施す球胴形（第 86 図 24・25）で、頸部の簾状文直下にボタン状貼付を施す例（第 86 図 25）もある。壺形土器（第 86 図 19）にも同様な貼付が観察されるので、新しい要素と捉えられるのか。鉢形土器は栗林式土器に系統を追える形態のもので、内外面とも赤彩されるが、２孔一対の穴は１箇所のみに認められる（第 86 図 28）。甑形土器は底部の破片資料で全体形は不明だが、一穴式で鉢形とみられる（第 86 図 27）。片口鉢形土器は注口部の大きな椀形例が１点ある（第 86 図 29）。高坏形土器には２種の形態（第 86 図 30 ～ 33）があり、古相とほぼ同じ特徴をもつ。

（３）箱清水式土器

壺形土器の頸部文様に採用される櫛描きの平行沈線文「Ｔ字文Ｃ」の成立をもって、箱清水式土器と判断する（笹沢 1970）。本遺跡では竪穴住居跡 SB03、土器棺 SM02 と SM03 および土器集中 SQ01 が該当する。壺形土器はいちじく形を継承するものの、口縁部はラッパ状に大きく外反し、頸部は「く」の字状に屈曲、胴部上半部に文様が施される（第 86 図 34）。櫛描き平行沈線文は「Ｔ字文Ｃ」を構成し、１本（第 86 図 34・35）と２本一対の例（第 86 図 36）がある。SB03 出土土器は当該型式の土器と考えるべきだが、いちじく形のプロポーションを留めること、「吉田式土器」と混在して出土したこと等から古い段階に位置づけらける。この１例を除くほかすべてが土器棺およびその関連資料で、住居跡出土例はない。SM03 は球胴の甕形土器（第 86 図 37）単体による埋葬で、SM02 は壺形土器３点と甕形土器１点を重ねた埋葬である。特に SM02 の最も外側に置かれた土器（第 86 図 36）は、胴部最大径を境に底部へ向けて内側にすぼまり、箱清水式の新しい要素・特徴の萌芽がみえる。入れ子状に重ねられた出土状態から、この土器の段階で埋設されたと考えられ、箱清水式の古い様相を示す土器（第 86 図 35）と伴出していることから、両者にさほどの時間差のないこと（同時期使用も含め）が証明される。SM02 近くで発見された SQ01（第 86 図 39・40）も当該期を推定したい。

以上、本遺跡から出土した「吉田式」とされる土器について観察された様相の違いをまとめた。この新古様相差が土器型式の差として段階的に位置づけられるか否か、また浅川扇状地遺跡群を始め、周辺遺跡に同様な様相を抽出できるか否か、少し視点を広げ当該期資料を検討したい（註３）。その際、検討の軸を中期後半の栗林式土器から後期初頭の「吉田式」とされる土器、さらに後期前半の箱清水式土器までとし、壺形土器を指標に、甕形土器や高坏形土器を交えた形式変化、様相の違いを整理し、型式的な変化の方向性を模索する。ただし本稿の目的は､本遺跡出土土器の時間的位置づけを明確にすることにあるため、新たな型式区分を与え、無用な混乱を招かないためにも、時間的区分の目安として、古いと考えられる様相のものから順次、１段階、２段階のように仮称して論を進める。

２．中期後半から後期前半の弥生式土器変遷試案

中期後半に位置づく栗林式土器は、藤森栄一のⅠ式・Ⅱ式の型式区分（藤森 1955）以後、多くの研究者により分類され、今日では寺島孝典（寺島 1999、2014）や石川日出志（石川 2012）の分類案が活用されることが多い。本稿では、本遺跡出土土器の理解に必要と思われる段階、寺島や石川の設定する栗林２式新段階とされる土器を１段階として取り上げ、「吉田式土器」の成立に直接関わる栗林３式とされる土器を２段階および３段階と扱う。紙数の関係上、１段階については関連する土器実測図のみを図示し、検討結果の記述は２段階から入ることにする。

（１）２段階（第 87 図１～ 11、第 88 図１～ 12、第 89 図１～８）

栗林式土器の終焉は、長野市松原遺跡高速道地点（長野県埋文 1998 － 2000）、中野市南大原遺跡（長野県埋文 2016）に良好な資料がある。いずれの遺跡も栗林式から「吉田式土器」成立期までの時間幅が

ある。当段階の土器には、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器、甑形土器、蓋形土器等がある。壺形土器は、最大径が胴部下半近くまで下がるいちじく形で、頸部は細くしまり、口縁部はラッパ状に開く形態（壺Ａ類第87図１～５）を主体とする。口縁部形態には受け口状もあるが、数は少ない。Ａ類よりも小形で頸部の太い広口の形態（壺Ｂ類第87図７）と壺Ａ類を小形にした徳利形に近い形態（壺Ｃ類第87図６）がほかにある。壺Ａ類は器面に施される文様の多寡により区別し、いわゆる「舌状垂下文」を施す装飾性の高い１類（第87図１）、多段の横帯装飾や頸部・胴部に装飾文様を施す２類（第87図２）、頸部のみに横帯文を施す３類（第87図３・４）、無文の４類（第87図５）がある。壺Ｂ類と壺Ｃ類は無文が基本で、特に後者は全面に赤彩される例がある。器形から短頸壺や甕形土器に類別されることのある器種には、加飾される１類（第87図８）と無文で赤彩されることの多い２類（第87図９）がある。蓋形土器は１段階に比べつまみ部の発達が目立つ（第87図10）。甕形土器は、卵形あるいは胴の張る形態で、口縁は「く」の字状に外反する例と受け口状がある。頸部は無文例もあるが、平行沈線文や間隔を置いて複数止めする簾状文がみられ、胴部文様には羽状文（第88図１）や波状文（第88図４・５）、襷状文（第88図３）や粗い縄文（第88図６）、「コの字」重ね文（第88図７・８）が施される。甑形土器は深い鉢形で口縁部直行する一穴例（第89図１）。鉢形土器は、小さな椀形例を中心に３種ぐらいの容量差がある。口縁やや内湾する形態のＡ類（第89図２・３）と強く外反する形態のＢ類（第89図４）がある。Ａ類は無文赤彩の１類が主体だが、ボウル状の大形例には口縁部に縄文や鋸歯文を施す２類（第89図５）がある。またＡ１類およびＡ２類のいずれにも口縁端部に注ぎ口をもつ片口鉢形（第89図６・７）の形態がほかにある。高坏形土器は、坏部が椀形で低脚、坏部内外面は赤彩される（第89図８）。

本段階の特徴は、器種全体にわたり口唇部への押圧や縄文施文が減り、器表面の施文の乱れと無文化が進むことである。１段階に中野・飯山地域で発達した壺Ａ２類は減少し、長野・佐久地域を中心に壺Ａ３類が主体を占めるようになる。甕形土器では頸部に施される櫛描の平行沈線文が、複数止めの簾状文へと変化する。また注口形土器と無頸壺、鉢形土器の一部に消失化が起こる。代表的な遺跡（遺構）に、長野市松原遺跡（SB328・SB364・SB1103等）、中野市南大原遺跡（SB14・SD02下層）がある。

（２）３段階　（第87図12～19、第88図13～19、第89図９～11）

本段階の土器は、南大原遺跡SB04および松原遺跡SB231、SB359の資料を基準に抽出した。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等、２段階とほぼ同様な器種がある。壺形土器は概ね前段階の形態的特徴を継承し、ラッパ状に開口する直行単口縁が主体である。受け口状口縁はわずかに組成するものの、広口口縁や筒形状の形態はみられなくなる。装飾のある壺Ａ１類およびＡ２類は消失し、Ａ３類では頸部に箆描き平行沈線文と山形文や鋸歯文を施す例（第87図12～15）に絞られてくる。頸部に施された縄文はほぼ消失し、「オオバコ文」と呼ばれる新たな原体による施文で代用される（第87図13・15）。短頸壺の類は無文赤彩の２類（第87図18）のみが残る。甕形土器は、前段階と同様、卵形と球胴形の２者に絞られ、羽状文や波状文の粗雑化が一層進む（第88図13～17）。文様の粗雑化は台付甕形土器にも起こり、受け口状口縁に無文化がみられる（第88図19）。その一方、口縁部の伸張化により施文部が幅広となる例（第88図18）が登場する。鉢形土器には良好な資料が少ないが、前段階同様にＡ類とＢ類が主体となるものの、片口鉢形土器（第89図10）には口縁外面に文様を施す例はみられなくなる。高坏形土器および甑形土器も前段階の形状を継承するとみられる。

本段階の特徴は、縄文施文の激減にある。壺形土器ではＡ１類およびＡ２類が完全に消失し、甕形土器では、縄文や「コの字」重ね文を施文する例が少なくなる。口縁部に文様をもつ鉢形土器や浅い鉢形の片口鉢形土器も消滅する。代表的な遺跡（遺構）は、長野市松原遺跡（SB231・SB352等）、同市本村東沖遺跡（市教委1993b）（102号住居址）、中野市南大原遺跡（SB04）等がある。

（３）４段階（第 87 図 20 ～ 29、第 88 図 20 ～ 27、第 89 図 12 ～ 18）

「吉田式土器」の栗林式と箱清水式をつなぐ編年的位置については、現在も変更がない。この型式の成立期は概ね本稿の４段階にあたり、南大原遺跡 SB13 や吉田高校グランド遺跡（市教委 1987c、2001a）19 号住居址、松原遺跡 SB228 出土土器に求められる。土器には壺形土器、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等の器種がある。壺形土器は、ラッパ状に開口する形態と緩い受け口状口縁例の２者があり、頸部の文様は太い箆描きによる平行沈線文やこれに櫛描波状文が加わる例がある（第 87 図 20 ～ 23）。また簾状文で頸部を飾る例（第 87 図 25）や箆描きで鋸歯文を付加する例（第 87 図 20）もあり、特に鋸歯文は前段階で成立（第 87 図 14）し、本段階へ継承したとみられる。縄文および「オオバコ文」は消失する。外削ぎ状の口縁端部外面に櫛描波状文を施す例がみられ、施文後にナデ消す例（第 87 図 24）もある。甕形土器は、全体形を前段階から継承し、わずかながら口縁部に伸張化がある。第 88 図 24・25 は、本段階から次段階にかけての資料と考えられ、これらを参考とすれば口縁部は無文化（第 88 図 20・22）が主体になるようである。資料の絶対数が少なくこの点については定かではない。緩い受け口状の口縁は、さらに形骸化が進む（第 88 図 22）。台付甕形土器は、胴部に加え口縁部外面全体に波状文を施す例 (第 88 図 26・27）が主体を占める。鉢形土器は、口縁やや内湾するＡ類（第 89 図 13）と強く外反するＢ類（第 89 図 14）があり、いずれも無文赤彩例に集約され、片口鉢形土器（第 89 図 15）は深さのある形態に変わる。高坏形土器は、口縁端部が屈折外反する鉢形を坏部とするＡ類（鍔縁状口縁、第 89 図 16）と口縁部が内湾する鉢形を坏部とするＢ類（第 89 図 17・18）があり、いずれも坏部内外面に赤彩が施される。

成立段階と捉えた本段階資料の特徴は、縄文施文の消滅と櫛描文の増加にある。壺形土器頸部の文様は、箆描文が主体で、これに櫛描文が加わり、本村南沖遺跡で確認できなかった簾状文や波状文も存在する。甕形土器および台付甕形土器では、口縁部の伸張化がわずかにみられ、無文が主体のようで、大形で球胴形、小形の卵形を呈する例に櫛描波状文を幅広く施文する例が目立つようになる。胴部文様は羽状文を継承するものの、波状文が主体となり、ほかの文様モチーフは消失する。本村南沖遺跡の古い様相の土器（SB02 ほか）には、壺形土器頸部に箆描きの平行沈線を斜線文や矢羽状文で埋めるモチーフ（第 86 図１）があること、甕形土器口縁部に幅広の無文例がない（第 86 図６～９）ことから、本段階もしくは、これよりも新しい段階に位置づけられる。代表的な遺跡（遺構）には、長野市の吉田高校グランド遺跡（10・15・19 号住居址等）や松原遺跡（SB228）、中野市南大原遺跡（SB19）がある。このうち、住居跡数のまとまった遺跡は吉田高校グランド遺跡のみで、ほかの２遺跡は３段階同様に竪穴住居跡２～３軒程度を確認するに留まる。ただし吉田高校グランド遺跡の住居跡群を、本稿で試案する土器変遷で時間的に区切るとすれば、本段階の住居跡数は３～４軒程度となる。

（４）５段階（第 87 図 30 ～ 39、第 88 図 28 ～ 32、第 89 図 19 ～ 27）

本遺跡で古い様相を示すと考えられる土器は、この段階に相当する。ほかに吉田高校グランド遺跡（６・７・24・25・27 号住居址等）が該当し、竪穴住居跡の切り合い関係（24 号住居址と 25 号住居址）と近接した住居設営関係（６号住居址と７号住居址、17 号住居址と 25 号住居址）から時間差が認められる。土器の特徴から、それを説明するのが本稿の目的でもあるが、結論は難しい。出土資料に恵まれない 24 号住居址と 25 号住居址については明言できず、17 号住居址と 25 号住居址では前者が新しい傾向（６段階に相当）にある。６号住居址と７号住居址は、前者に４段階の様相が強く後者よりも古いとみられる。しかしながら本稿では、第 87 図 31 に示す壺形土器頸部の文様モチーフを暫定的ながらも本段階と捉えるため、６号住居址を本段階として扱い、それの出土がない７号住居址を４段階から本段階にかけてと解釈した。今後、第 87 図 31 同様の資料が４段階に確実視できれば、土器全体の様相を捉え６号住居址を古く、７号住居址を新しく位置づけ直すべきと考える。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高

坏形土器、鉢形土器等、４段階とほぼ同様な器種がある。壺形土器はラッパ状に開口する直行単口縁のみに絞られる。開口度の弱い形態も本段階にある。頸部文様は、篦描きの平行沈線文（第 87 図 32）と平行沈線文を細い篦状工具で埋める斜線文や矢羽状文（第 87 図 30・31）、櫛描きの簾状文（第 87 図 33・34）や篦描きで鋸歯文を施す例（第 87 図 30）がある。また広口のＢ類（第 87 図 37）と徳利形のＣ類（第 87 図 35・36）も継承される。甕形土器は前段階のプロポーションを継承し、緩やかに弧状に内湾する無文の口縁例（第 88 図 28・30）や球胴状の器体で口縁部を含め櫛描波状文を施すとみられる例（第 88 図 29）がある。法量から小形に区分できる甕類は、全体形が台付甕形土器に類似し、欠損状態では区別がつかないほど似る。第 88 図 31 等はその例であろう。台付甕形土器は、頸部に簾状文を巡らし、口縁部および胴部に波状文を施す例に絞られてくる。高坏形土器は坏部内外面に赤彩が施され、前段階同様にＡ類（第 89 図 22 ～ 24）とＢ類（第 89 図 26・27）があり、さらにはロート形をしたＣ類（第 89 図 25）が新たに加わる。

本段階の特徴は、壺形土器に篦状工具を用いた平行沈線文や鋸歯文がみられるほか、櫛歯状工具による平行沈線文や簾状文が発達すること。特に簾状文は多段化し、間隔を置いて止める節の部分が上下に重なり１本の区切り線（第 87 図 33・34）のようにみえ、次段階に出現する「Ｔ字文Ｂ」につながる効果が現れること。また高坏形土器に形態的なバラエティーが生じ、Ｃ類が加わるのも本段階頃と考えられる。

本村南沖遺跡で古い様相とした土器（SB02 ほか）には、篦描きの矢羽状文や鋸歯文の施された壺形土器がみられること、櫛描文の例は前述したように認められないながら、高坏形土器にＡ類とＣ類がみられること等から、資料数は限定的であるが、本段階に位置づける。しかしながら、SB16 とともに遺跡内での住居跡分布をみても、ほかとの違いは見出せない。俯瞰すれば同時期に存在したとしても、なんら不自然さはないので、土器様相の違いが意味するものは極めて近い時間差でしかない。吉田高校グランド遺跡の住居跡分布をみても、やはり同様な評価を与えることができると考えたい (註４)。

（５）６段階（第 87 図 40 ～ 49、第 88 図 33 ～ 42、第 89 図 28 ～ 36）

本遺跡で新しい様相を示すと考えられる土器は、この段階で、ほかに前段階に続き吉田高校グランド遺跡がある。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等がある。壺形土器は、大きくラッパ状に開口する口縁（第 87 図 43・46）と開口度の弱い口縁（第 87 図 44）がある。頸部は櫛描きの平行沈線文（第 87 図 42 ～ 44）が主体となり、篦描きの斜線文や矢羽状文、鋸歯文は本段階までみられるものの（第 87 図 40 ～ 42）、篦描きの平行沈線のみの施文はみられなくなる。広口の形態例（第 87 図 47）は継承される。本段階を設定する最大の理由は、櫛描きの平行沈線を篦描き沈線１本または２本対で縦位に区分する手法、「Ｔ字文Ｂ」（笹沢 1970）が出現することにある（第 87 図 45・46）。笹沢が指摘するように、この「Ｔ字文Ｂ」の手法が篦描きから櫛描きに置き換わり、「Ｔ字文Ｃ」が成立して次の箱清水式となる。甕形土器には前段階との大きな変化はみられないが、卵形を呈した形態（第 88 図 33・34）に中・小形が増加し、大形例（第 88 図 36・38）では球胴化が進んでいるようにみえる。文様は栗林式以来の縦羽状文が残存するものの、櫛描波状文を施す例が多くを占めるようになる。台付甕形土器の文様も櫛描波状文に絞られる（第 88 図 41・42）。甑形土器は鉢形の一穴例（第 89 図 28）で、片口の鉢形土器も深さのある形態（第 89 図 34）となる。鉢形土器は、Ａ類に全面赤彩で容量差の違う３種程度（第 89 図 29 ～ 31）が確認でき、Ａ類は栗林式以来、容量変化せずに３種が継承されたと考えられる。Ｂ類は本段階まで残る（第 89 図 32・33）。高坏形土器は坏部内外面に赤彩が施され、Ａ類（第 89 図 35）とＢ類（第 89 図 36）があり、前段階に登場したＣ類も存在する。

本段階の特徴は、篦状工具を用いた平行沈線文が消失し、櫛描文が主流となる点である。特に壺形土器の頸部文様では、多段の簾状文が減少し、櫛描平行沈線文を篦状工具で縦位に区分する「Ｔ字文Ｂ」が出

現する。また壺形土器の形態においても前段階まで継承されてきた、口があまり開かない形態は衰退する。甕形土器では、大形例に胴部卵形と球胴形の２者が揃い、栗林式以来胴部文様を飾った櫛描きの羽状文が本段階でほぼ消滅する。高坏形土器では、鍔縁状口縁のＡ類が本段階で消滅する。

本村南沖遺跡では、SB01・SB03・SB09・SB17 出土資料が該当する。SB01 の壺形土器には頸部に簾状文があり古い様相とみられるが、「Ｔ字文Ｂ」の土器も伴出しており本段階に含めた。本章１の（１）で述べたように、これらの住居跡すべてに櫛描平行沈線文と「Ｔ字文Ｂ」の要素がみられる中、それのない SB02 や SB16 は異質であり、そこに時間差を想定した。また SB03 からは箱清水式土器の出土があり、住居の使用時期を直接示すものではないが、出土土器に関して箱清水式成立段階までの時間幅を考える必要がある。「吉田式土器」とは若干分布範囲を異にするものの、同一レベルの出土であり、さほどの時間差は感じられない。ただし SB03 だけ、ほかの住居跡とは長軸の向きに違いがあり、今後、その意味を追究していく必要がある。代表的な遺跡（遺構）に、吉田高校グランド遺跡（３・４・20・22・23・28 号住居址等）、二ツ宮遺跡（市教委 2008b）（６号住居址・12 号住居等）があげられる。

（６）７段階　（第 87 図 50 ～ 57、第 88 図 43 ～ 51、第 89 図 37 ～ 43）

箱清水式土器は、「吉田式土器」の設定時に笹沢により定義された壺形土器頸部文様に採用される「Ｔ字文Ｃ」の成立（笹沢 1970）をもって判断する。頸部文様の流れは、櫛描きの簾状文から櫛描平行沈線文を篦状工具で縦位に区分する「Ｔ字文Ｂ」へ、さらに篦状工具ではなく櫛歯状工具で縦位に区分する「Ｔ字文Ｃ」へと説明される。同様に篦描平行沈線文から櫛描平行沈線文への推移も概ね理解でき、実態としては「吉田式土器」から箱清水式土器への移行と重なる部分がある。そうした時間的前後関係を土器出土状況から裏付けることは、今のところできないが、施文手法の流れを形式ごとに整理し、土器の変遷を辿る見方は理解しやすい。土器の種類には、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等がある。壺形土器の形態は、「吉田式土器」と同様ないちじく形である。口縁部は大きくラッパ状に開口し、端部は水平に伸びる。頸部は「く」の字状に屈曲し、胴上半部はやや膨らみのある、なで肩状を呈する（第 87 図 50）。開口度の弱い形態は前時期で消滅すると考えるが、残存例（第 87 図 52）もある。頸部文様は、胴部上半の肩部に施されるため、むしろ胴部文様となる。櫛描きの平行沈線文と「Ｔ字文Ｃ」で、縦位に区分する櫛描きは１本（第 87 図 50・51）または２本一対（第 87 図 53・54）がある。外面はほぼ全体にわたり赤彩される。甕形土器は、卵形を呈する形態例に中・大形が目立つようになる（第 88 図 43 ～ 45）。球胴形の大形例も継承されるが、櫛描波状文が密になる傾向がある（第 88 図 46）。胴部が強く「く」の字形に曲がる形態（第 88 図 47）もあり、前段階（第 88 図 39）を継承する。台付甕形土器は甕部がスマートになり、櫛描波状文は甕形土器（第 88 図 48・49）同様に密となる（第 88 図 51）。鉢形土器はＡ類が存続（第 89 図 38 ～ 40）し、甕形の短頸壺（第 87 図 56）が新しく登場する。高坏形土器は、鍔縁状口縁例（Ａ類）の消失後、これに代わり新たに有稜の高坏（第 89 図 41）が登場するが、依然として数は少ない。坏部は深い鉢形で、口縁端部は緩やかに外反する。

本段階の特徴は、櫛描文が主流となり、特に壺形土器に「Ｔ字文Ｃ」が出現することである。甕形土器は、口縁部の伸張化と器表面への波状文の密接施文が主流となる。球胴形に変わり卵形を呈した土器が法量分化し、増加する傾向にある。また全面赤彩される甕形の短頸壺の登場と有稜高坏の萌芽がみられる。

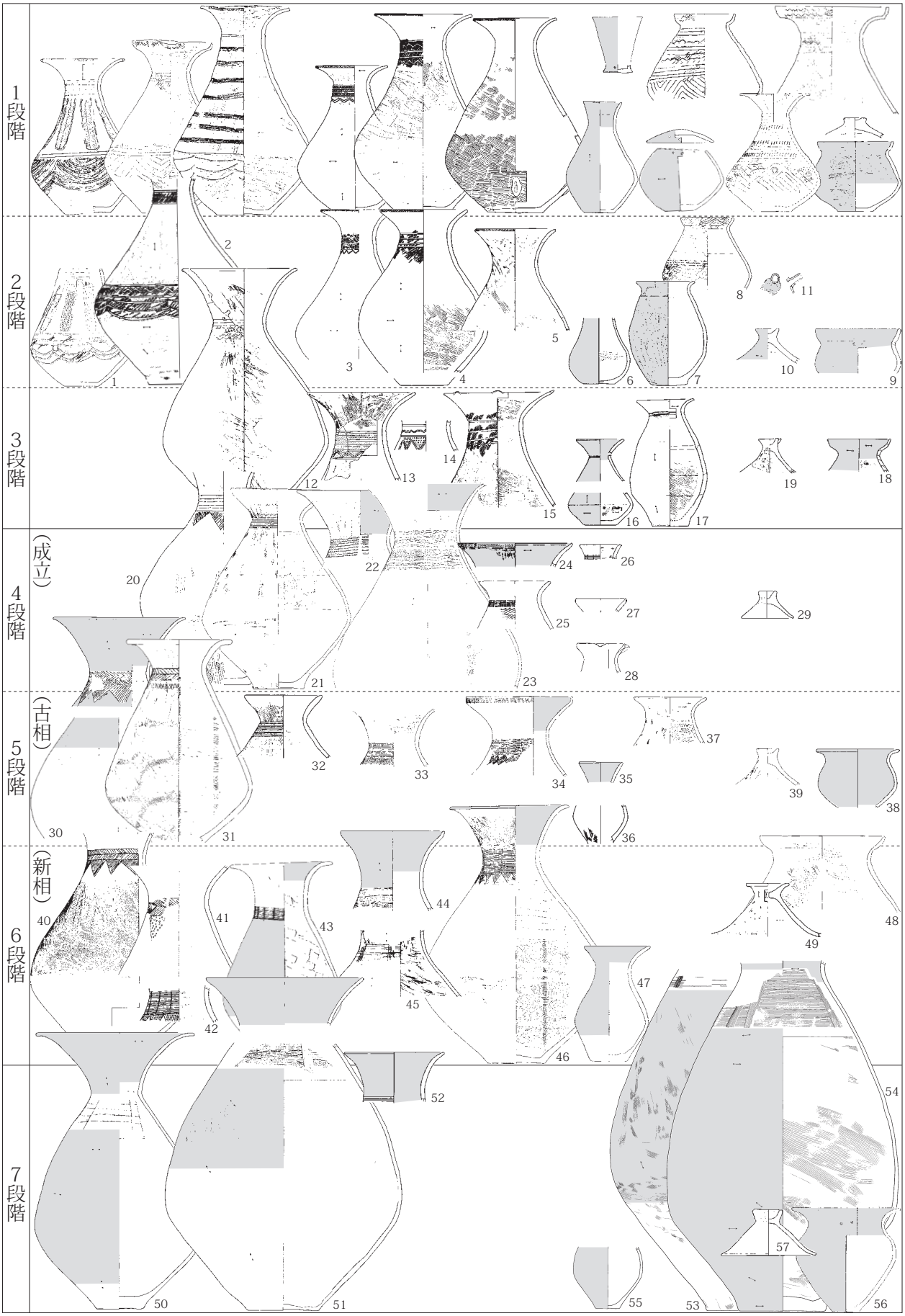
本村南沖遺跡では、土器棺 SM02・03 出土資料、土器集中 SQ01 が本段階である。つまり竪穴住居跡のすべてが「吉田式」の時期とみられ、土器棺のすべてが当該期にあたる。居住に関わる施設と墓には時間差がある。住居跡出土土器で最も新しい SB03 と墓跡 SM02 等の関係は、時間的に連続し、わずかな時間差があることは、当時の人びとの生活していた段階と埋葬された段階の差に求められるといえる。では該期の居住施設の中心はどこにあるのか。本遺跡の北側 400m の本村東沖遺跡（長野高校地点）の集落跡が、

まさに当該段階に営まれており、そこが居住施設であった可能性は十分ある。本段階を示す代表的な遺跡（遺構）には、本村東沖遺跡（11・19・45・61 号住居址等）、松原遺跡（SB172・SB379 等）、檀田遺跡（市教委 2005b）等があげられる。

３．まとめ

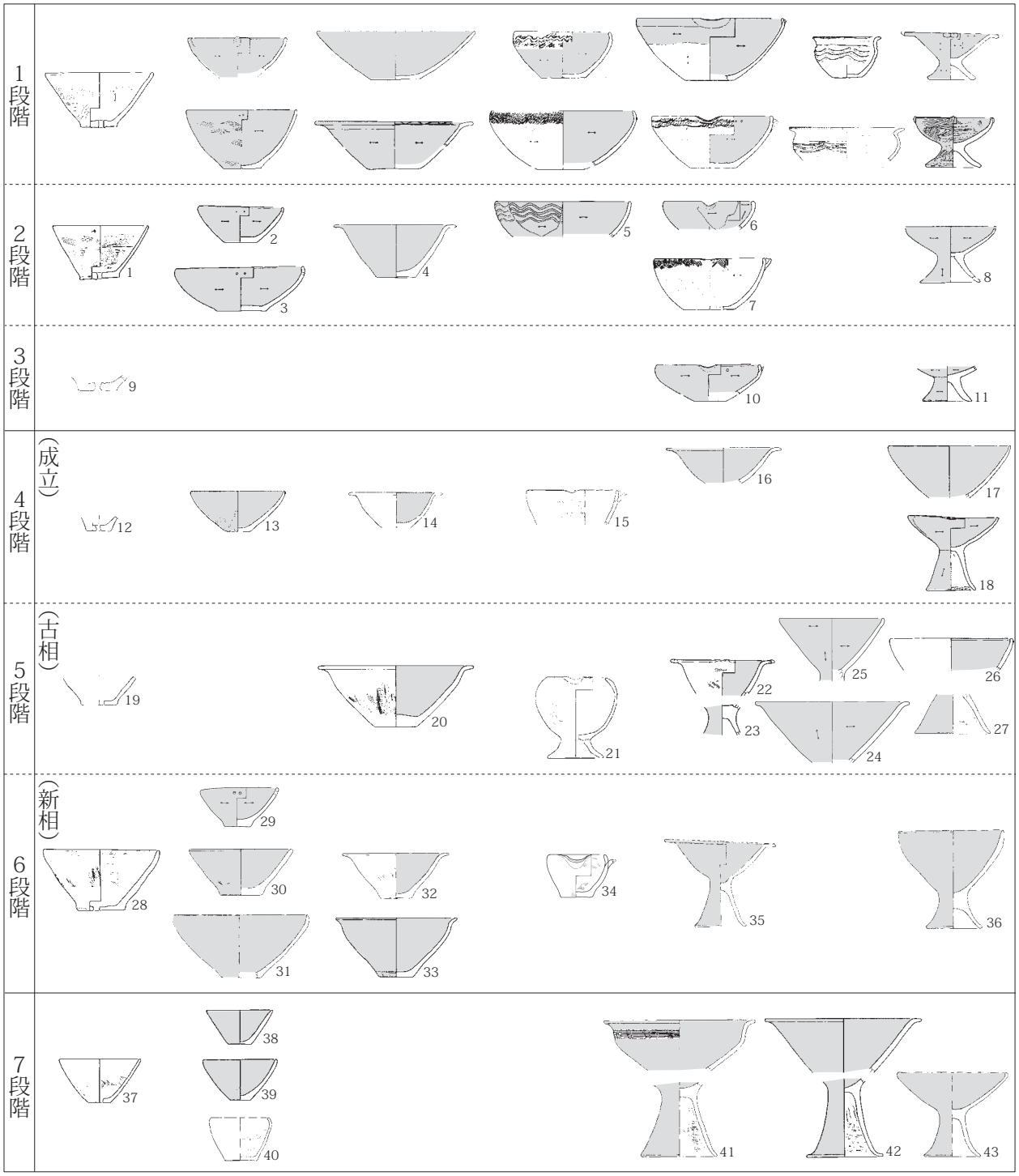
本村南沖遺跡出土土器の所属時期を明らかにするため、「吉田式土器」および前後の土器群に関して、周辺遺跡出土資料を整理した。その結果、中期後半の栗林式期後半から後期前半の箱清水式期前半に至るまで、およそ７つの段階に分けて考えることができ、このうちの４段階から６段階が「吉田式」とされる土器に相当する。したがって「吉田式土器」は３つの段階に区分でき、それを成立段階、古い様相、新しい様相と呼称すれば、５段階が古い様相に、６段階が新しい様相になる。本遺跡の竪穴住居跡は、判断のつかない１軒を除き、２軒が古い様相に、４軒が新しい様相にあたり、成立段階はないと判断される。いずれの住居跡にも切り合い関係がなく、土器の段階差が時間を区切る指針であるとすれば、極めて短い時間幅での移り変わりと結論づけられる。また一方で、墓跡としての土器棺は７段階の箱清水式土器成立段階にあたり、竪穴住居等居住施設の廃絶時あるいは廃絶直後に設置されたと理解できる。「吉田式」期の居住施設の終焉（移転）とともに、かつての故地が墓跡として利用される。こうした土地と人間との営みの連鎖が地域史を構築しているものと考える。

「吉田式」期の集落は、冒頭で述べたとおり、複数の住居を構えた遺跡の発見例が少なく、集落跡としては把握し難い。その中で浅川扇状地上にある吉田高校グランド遺跡や二ツ宮遺跡、そして本村南沖遺跡は、集落を追究できる稀有な事例である。今回の調査では、竪穴住居跡以外に、掘立柱建物跡や墓跡もみつかった。短期的ながらも時間差のある集落変遷をつかむことが可能となれば、本村南沖遺跡と本村東沖遺跡のように、別個に調査された２つの遺跡間を結びつけて、歴史史料として考察していくことができると考える。本村南沖遺跡の記録保存が、長野県の地域史研究にとって大きな貢献材料となるよう、調査研究を深めていく必要がある。



第 87 図　壺形土器の変遷

第 88 図　甕形土器の変遷



第87図　壺形土器の変遷
1・8・9・10・11(SB14),6・7(SD02),13・18・19(SB04),23・24・29(SB13)：**南大原**
2・4(SB328),3(SB364),5(SK1333),14・16(SB1112),15・17(SB359),22(SB228),49(SB172)：**松原**
12(SQ30)：**柳沢**
20(NR1b)：**川久保**
21・26・27・28(19号住),25(10号住),31・32・36(6号住),33・37・39(24号住),34(13号住),35・38(5号住),40(12号住),42(22号住),43・47(2号住),46(23号住),48(11号住)：**長野吉田高校グランド**
30(SB02),41・44・45・50(SB03),51・53・54(SM02),55(SQ01)：**本村南沖**
52(45号住),56(11号住),57(58号住)：**本村東沖**

第88図　甕形土器の変遷
1・2(SB404),3(SB328),5・12(SB1103),10(SD1215),15・19(SB352),16・18(SB1112)：**松原**
4・7・9(SD02),6・8・11(SB14),13・14・17(SB04),23・27(SB13)：**南大原**
20・26(10号住),21(15号住),22(19号住),24・25(7号住),28(6号住),30(13号住),32(27号住),33(28号住)34・42(2号住),36(3号住),39(28号住),40・41(12号住)：**長野吉田高校グランド**
35(12号住)：**二ツ宮**
29・31(SB02),37・38(SB03),46(SM03),47(SM02),50(SQ01)：**本村南沖**
43(11号住),44(45号住),45・49(19号住),48(61号住),51(58号住)：**本村東沖**

第89図　鉢形土器・高坏形土器の変遷
1・3・7(SB1103),2(SB364),8(SB328),10(SB352),11(SB231)：**松原**
4・6(SD02),5(SB14),9(SB04),18(SB13)：**南大原**
12・16(10号住),13・15(19号住),14(7号住),17(15号住),19(5号住),20(6号住)22・23(13号住),26(27号住),27(24号住),28(2号住),30・35(3号住),31・36(12号住),32(23号住),33(17号住)：**長野吉田高校グランド**
21(NR1b)：**川久保**
24・25(SB02),29(SB01),34(SB17)：**本村南沖**
37・39(58号住),38(11号住)40・41・43(61号住),42(19号住)：本村東沖

第 89 図　鉢形土器・高坏形土器の変遷

第２節　浅川扇状地遺跡群の弥生時代集落の変遷

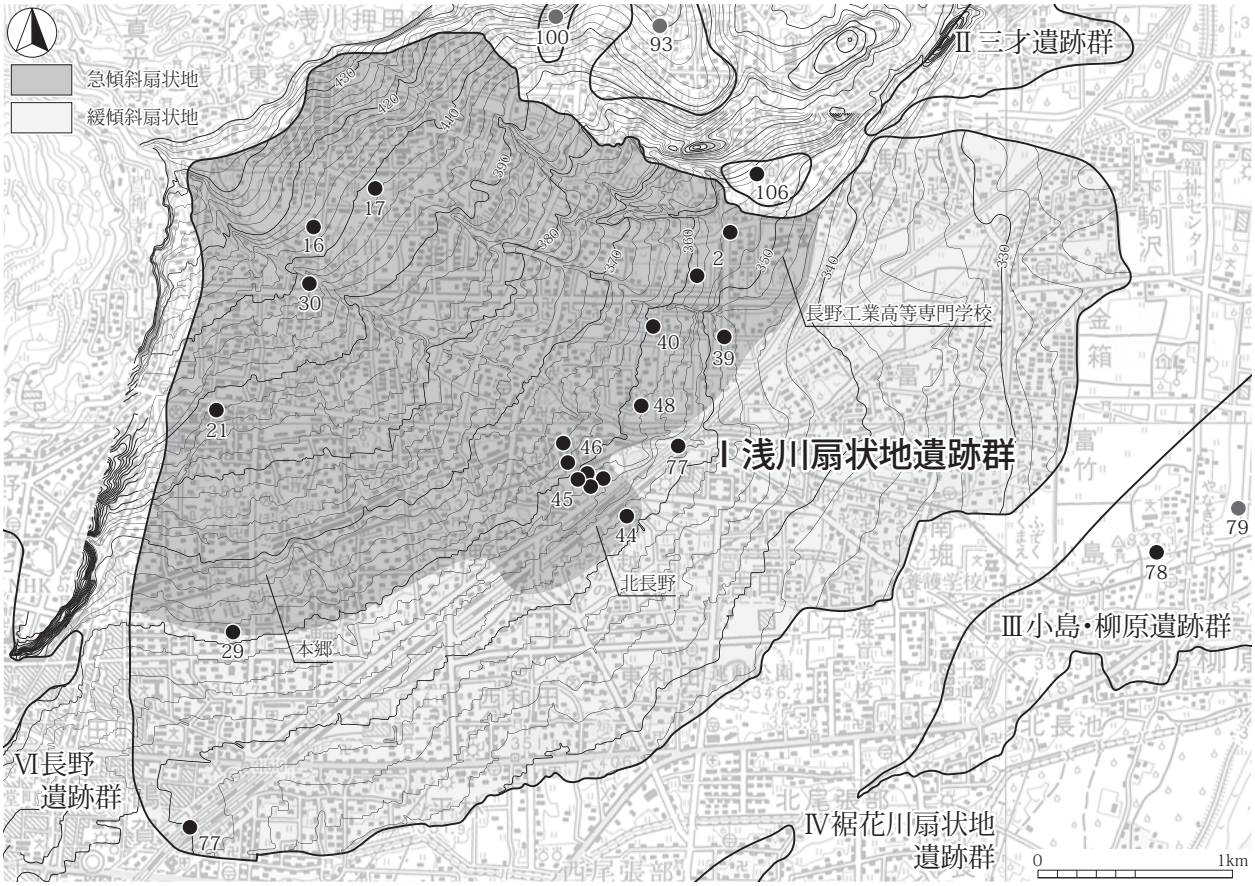
浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡周辺の弥生時代の遺跡について、主に集落の変遷を概観し、調査成果の理解の一助としたい（第 90 図～第 92 図）。なお遺跡の番号については、第８図、第８表と一致する。

１．浅川扇状地と弥生時代の遺跡の立地

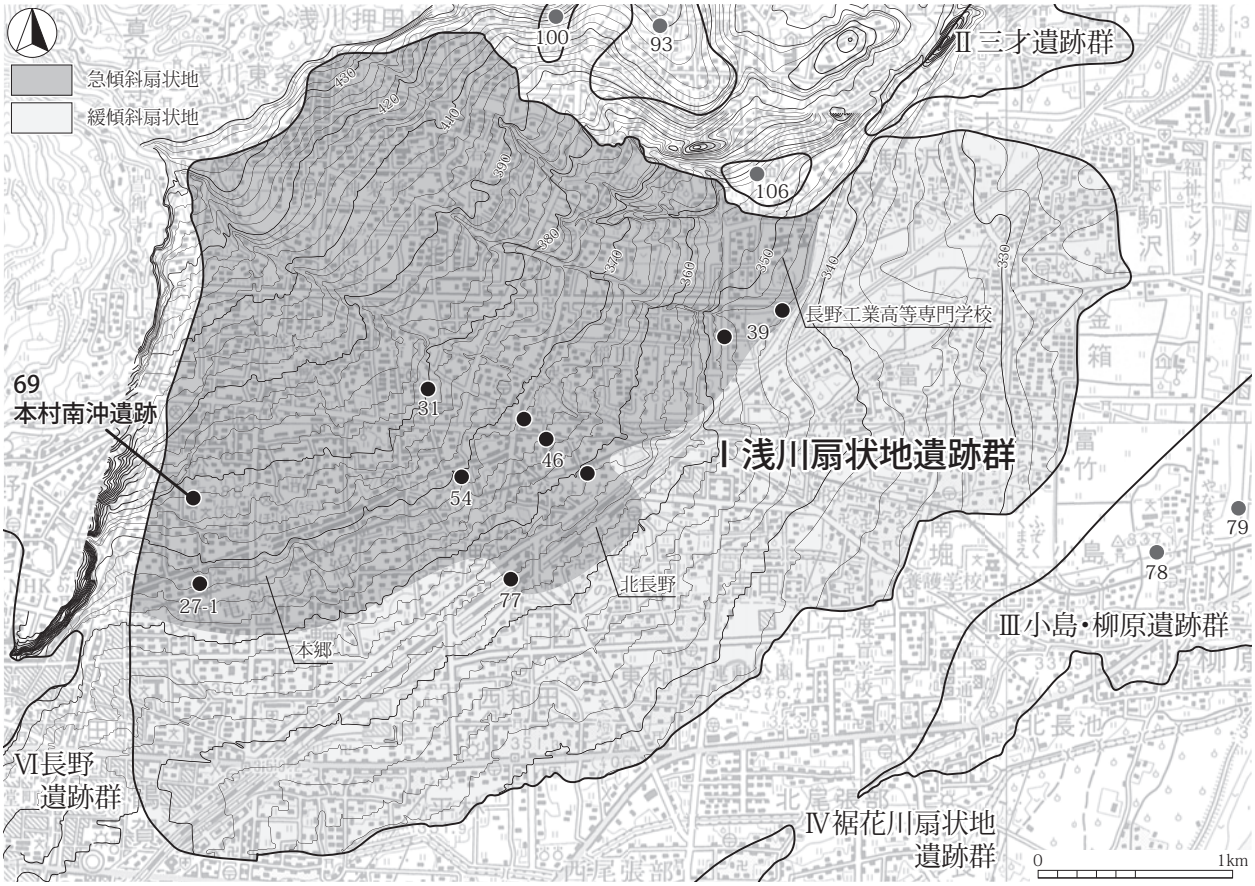
浅川が形成する扇状地地形については、第２章第１節で述べたとおりである（第４・５図）が、地形図と浅川扇状地上でこれまでに調査された遺跡と重ね合わせたところ、集落の立地に特徴がみられた。

等高線から浅川扇状地を概観すると、扇頂から本郷－北長野－長野工業高等専門学校を結ぶ辺りまでは１km で約 25m 下がり、それより下流の扇端側で裾花川の旧河道や千曲川の後背湿地に接する部分までは１km で約 20m 下がり、傾斜に違いがある。（前者を「急傾斜扇状地」、後者を「緩傾斜扇状地」と呼ぶ。）弥生時代の遺跡は、このうち急傾斜扇状地上の範囲に分布している。吉田の JR 北長野駅付近では、急傾斜扇状地が南東へ突出している。これはかつて浅川が形成した微高地であり、本来浅川の本流は扇状地のほぼ中央部を北西から南東方向へ流れ裾花川の旧流路と合流し千曲川へ流れ込んでいたことを示すものである。また等高線からは浅川本流以外の幾筋かの流路（以下「支流」という。）が扇状地上を開析したと考えられる谷状地形が認められる。

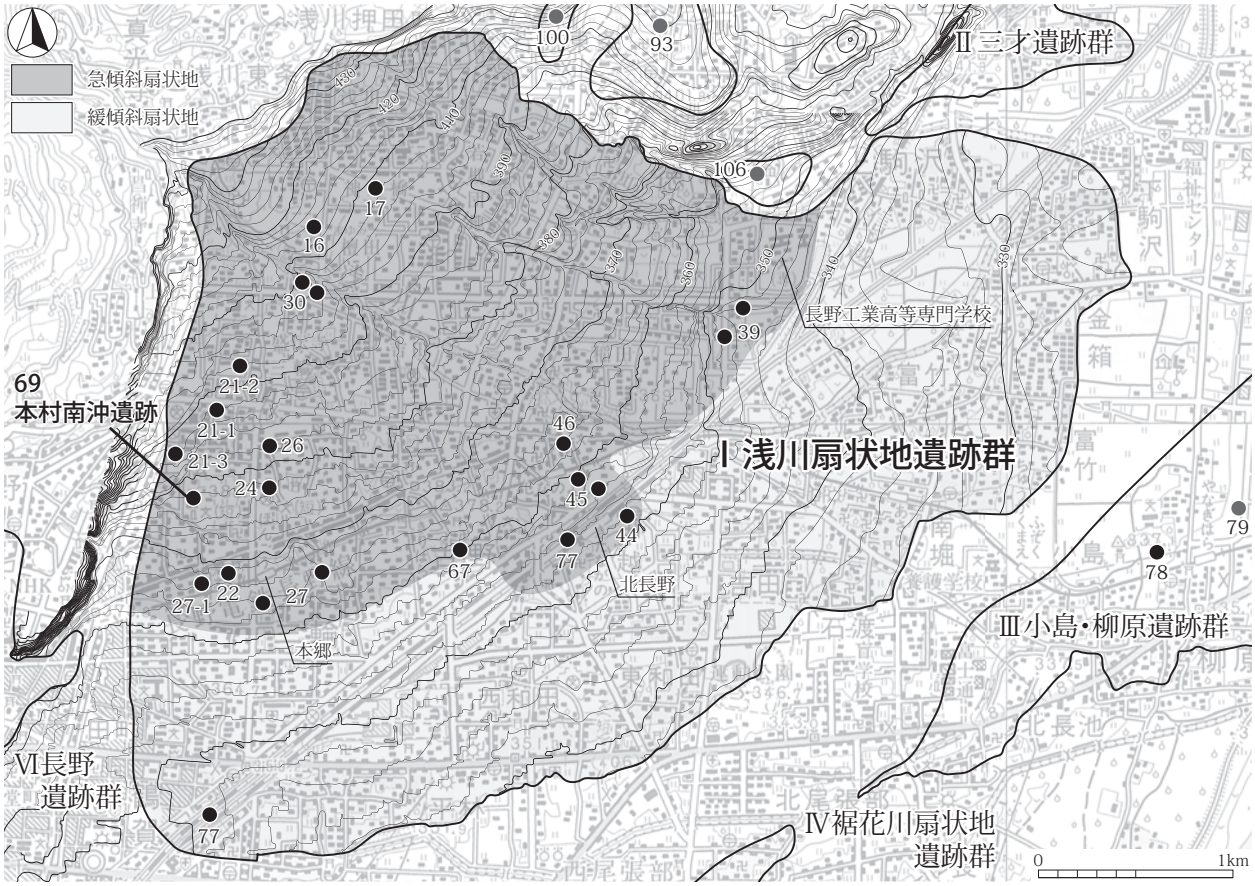
浅川は渇水期には水量が著しく減少するが、大雨や雪解けで増水があれば急流となり土砂があふれ出す荒れ川である。本流に近い場所ではあふれた土砂で微高地が形成される。なお現在の地表や等高線からは判読できない支流跡や遺構の希薄な部分が発掘調査では確認されていて、大きく地形を変化させるほどで



第 90 図　弥生時代中期　栗林式期の遺跡



第 91 図　弥生時代後期　吉田式期の遺跡



第 92 図　弥生時代後期　箱清水式期の遺跡

はないが、昭和の浅川の記録（長野県浅川改良事務所 2007）から一時的に地表を流れ集落の形成に影響を与えた浅川とその支流の氾濫があったことが想定できる。一般に扇状地での地下水は、扇央部は伏流して地下水位が深く、扇端部で湧水となる。急傾斜扇状地と緩傾斜扇状地との境付近は、急傾斜扇状地の扇端部に相当し湧水が認められる。微高地上でかつ水を得やすい場所が集落を営む上で好まれるであろう。

弥生時代前期は土器の出土がごくわずかで、報告のあるものは本村南沖遺跡（69）で出土した墓跡 SQ02 の深鉢と本村東沖遺跡（21）上松東団地地点の土坑 SK01（報告書では縄文時代晩期）から出土した条痕文を施した深鉢のみである。出土状態から土器棺墓と考えられ、近隣に居住域があった可能性が予想される。いずれも急傾斜扇状地西側の扇央から扇端部に位置するが、集落がみつかっていないため、立地について言及できない。

弥生時代中期の集落跡は、急傾斜扇状地扇央部で浅川左岸の檀田遺跡（16）（中期後半）、浅川右岸の浅川端遺跡（30）、徳間川左岸の神楽橋遺跡（17）、扇央部西側の本村東沖遺跡長野高校地点（21）（中期栗林式期終末）と扇端部で浅川右岸の吉田町東遺跡（46）・吉田古屋敷遺跡（45）・吉田四ツ屋遺跡（44）・辰巳池遺跡（33）・新幹線浅川（77）（W13・W 14 区）、扇端部西側の本郷前遺跡（29）（弥生中期後葉）、扇端部東側の本堀遺跡（40）・二ツ宮遺跡（39）・徳間柳田遺跡（２）でみつかっている。全体として急傾斜扇状地の扇央と扇端部に集落域が分布する。検出された住居跡数から檀田遺跡、神楽橋遺跡は栗林式期の中心的な集落域と考えられる。なお、新幹線浅川（W2A・W2B・W2C 区）は緩傾斜扇状地の扇端部際で裾花川の旧河道に面している。長野遺跡群（Ⅳ）と同様裾花川との関連性が高く、浅川扇状地との境界は明確に引けないが、裾花川扇状地上の立地と考えた方がよいだろう（第 90 図）。

弥生時代後期初頭吉田式期の集落跡は、急傾斜扇状地扇端部で浅川右岸の吉田高校グランド遺跡（31）・吉田町東遺跡・桐原宮北遺跡（54）・新幹線浅川（W10B 区）、扇端部西側の本村南沖遺跡、三輪遺跡保育園地点（27-1）、扇端部東側の二ツ宮遺跡でみつかっている。全体として急傾斜扇状地の扇端部中央、西側、東側に分かれて集落域が集中する。検出された住居跡数から中央部の吉田高校グランド遺跡が中心的な集落域と考えられる（第 91 図）。吉田式期の住居跡は、どの遺跡でも切り合いがなく吉田高校グランド遺跡で 33 軒中２軒の切り合いが確認されるほかは、ほぼ一時期に限定される。集落の継続期間は短かったと予想できる。吉田高校グランド遺跡以外は出土土器の量が少ない。

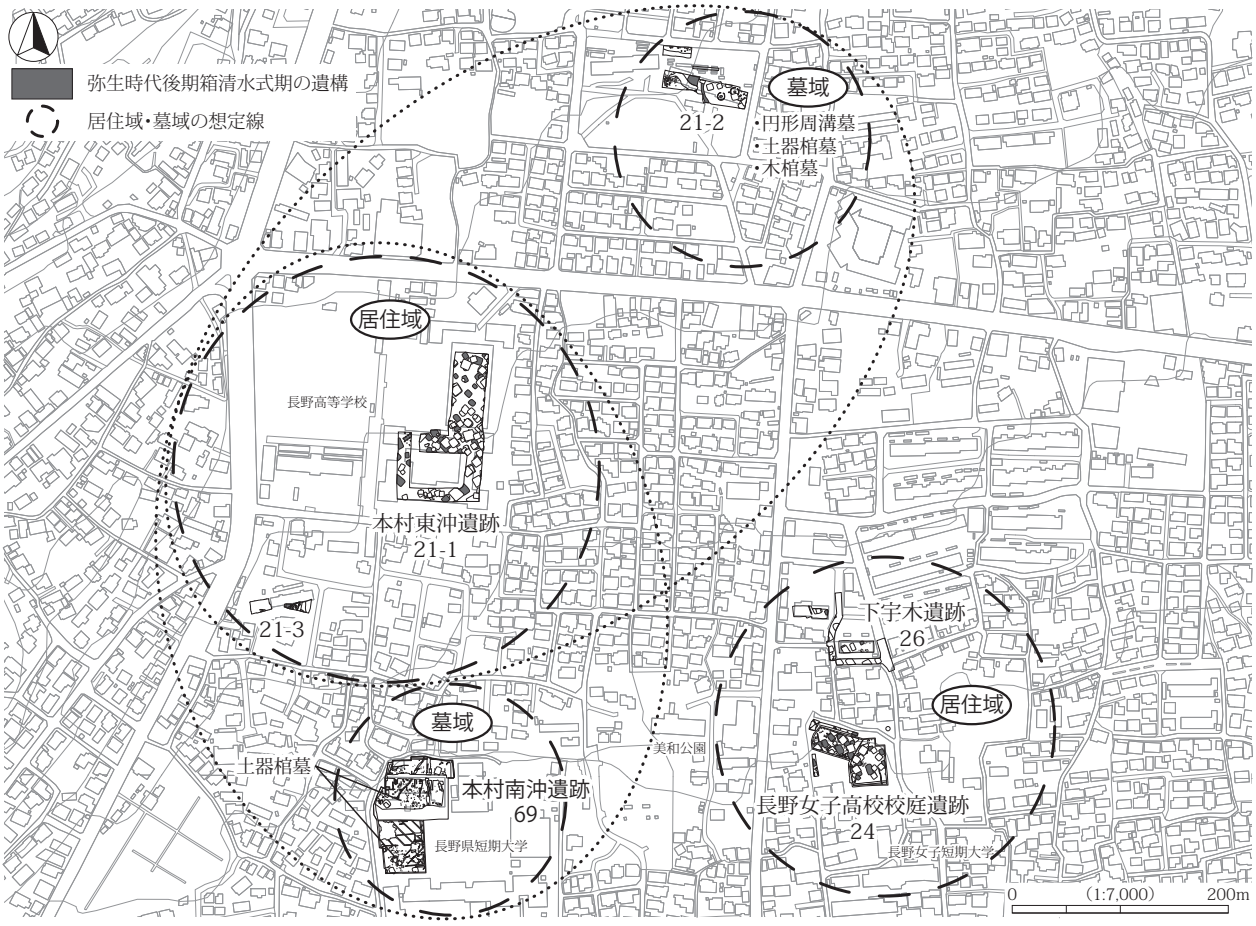
弥生時代後期前半～後半箱清水式期の集落跡は、急傾斜扇状地扇央部で浅川左岸の檀田遺跡、浅川右岸の浅川端遺跡、扇央部西側の本村東沖遺跡、扇央部東側で徳間川右岸の神楽橋遺跡、扇端部西側の下宇木遺跡（26）・長野女子高校校庭遺跡（24）・三輪小学校遺跡（22）・三輪遺跡（27）、扇端部で浅川右岸の吉田町東遺跡・吉田古屋敷遺跡・吉田四ツ屋遺跡・桐原牧野遺跡（57）・新幹線浅川（W10B 区）、扇端部東側の二ツ宮遺跡でみつかっている。全体として急傾斜扇状地の扇央と扇端部に集落域が分布する。検出された住居数から本村東沖遺跡、長野女子高校校庭遺跡、檀田遺跡が中心的集落と考えられる（第 92 図）。

吉田式期の集落は、急傾斜扇状地の扇端部中央、西側、東側に分かれて集中し、特に中央部の浅川右岸の微高地は中心的な集落域になるであろう。吉田式期の遺構の検出数は栗林式期、箱清水式期と比べて少なく、今後の調査事例の増加に期待したい。

２．本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期遺跡の様相

本村南沖遺跡（69）から南へ 600m ほど離れた三輪遺跡保育園地点（27-1）では吉田式期の住居跡が１軒検出されている。検出数がわずかであるが、住居形態は浅川扇状地遺跡群でみられる弥生時代後期の一般的な形態であり、主軸方向は北西－南東方向にとること、出土遺物は吉田式の新しい様相を呈することから、両遺跡は同じ集落域の可能性を指摘する。

箱清水式期の最も古い段階は本村東沖遺跡長野高校地点（21-1）で住居跡が分布するが、土器の様相から、南へ400m離れた本村南沖遺跡が墓域となる可能性がある。本村東沖遺跡長野高校地点の集落が最大規模となる段階の墓域は北東へ300m離れた上松東団地地点（21-2）となる。ここでは円形周溝墓や木棺墓・土器棺墓が検出されている。また本村東沖遺跡長野高校地点から南西へ200m離れたサーパス上松地点(21-3)は長野高校地点と同一の居住域になろう。さらにその後の中心となる長野女子高校校庭遺跡(24)は隣接する下宇木遺跡（26）と同一の居住域となるが、セットになる墓域はみつかっていない（第93図）。箱清水式期の中心的集落である檀田遺跡（16）は居住域と墓域が明らかに隔たれた場所でみつかっている。吉田四ツ屋遺跡（44）・吉田古屋敷遺跡（45）では住居跡と墓跡がみつかっている。本村南沖遺跡周辺の居住域と墓域のあり方も同様であり、遺跡名は異なるが１つの集落としてとらえることが出来るだろう。



第93図　本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期箱清水式期の遺構分布

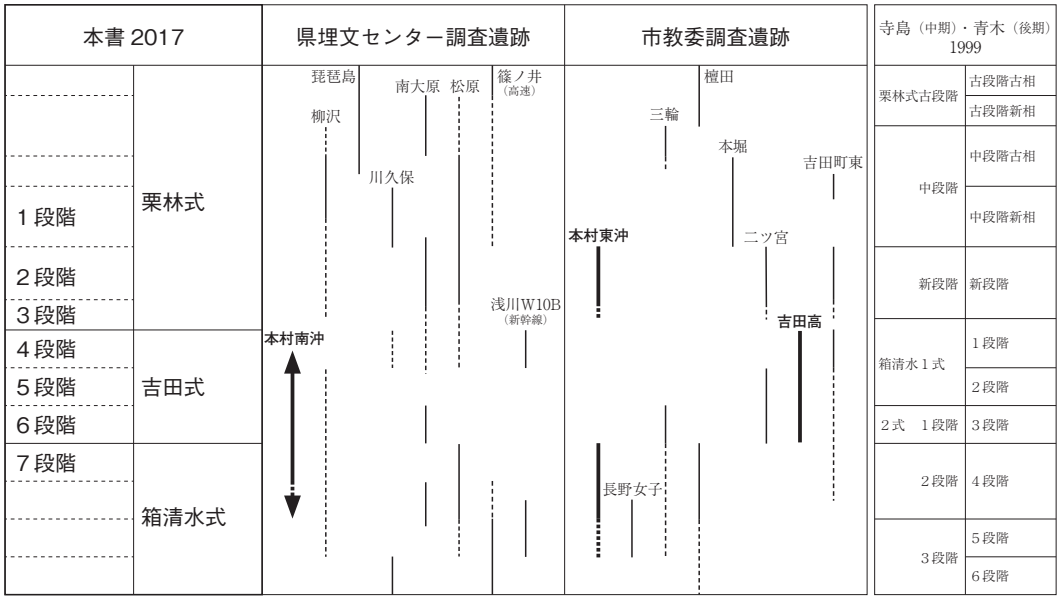
註１．文中敬称を略。

２．土器説明の用語は、吉田式土器設定に関わる笹沢論文（笹沢1970）にもとづくが、それ以降の研究動向により、必ずしも一致させていない。「横走平行線」は、「平行沈線文」と、「有段口縁」は今日的に使用頻度の高い「受け口状口縁」を選択した。

３．「吉田式土器」期と評価される集落遺跡は、長野市松原遺跡や中野市南大原遺跡等、そのほとんどが極めて断片的（１～２軒程度の住居跡数）で、複数の住居跡が集合する栗林２式期に比して特異である。そうした中、浅川扇状地遺跡群内では複数の住居跡で構成される集落遺跡が確認できる。

４．浅川扇状地遺跡群での「吉田式」期の住居跡は切り合い関係がほとんどなく、土器の型式変化も十分に整理が尽くされていないため、集落の時間的変化がみえない。一見、同時期にみえる集落跡の時間的推移を模索する試案が本稿であるが、それでも吉田高校グランド遺跡では６号住居址と７号住居址の関係のように段階が的確に定まらない。同様に12号住居址には５段階の様相があり、５号住居址および13号住居址は６段階の様相と近い。まだまだ混沌としており、本試案が「吉田式」の考古学研究に少しでも関与できれば幸いである。

註　付表



引用・参考文献

青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年」99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』p76-85 長野県考古学会

赤羽貞幸・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司 1992『中野地域の地質 地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』地質調査所 106p

石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100 合併号 p54-80 長野県考古学会

石川日出志 2012「栗林式土器編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市 柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100 p182-191

一志茂樹 編 1979『長野県の地名』日本歴史地名大系 20

加藤碩一・赤羽貞幸 1986『長野地域の地質 地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』地質調査所 120p

活断層研究会 1980『日本の活断層－分布図と資料』東海大学出版会 363p

活断層研究会 1991『新編日本の活断層 分布図と資料』東京大学出版会 437p

黒岩隆 2016「磨痕をもつ土器片」『琵琶島遺跡・壁田遺跡・ねごや遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 112 p142-143

国史大辞典編集委員会 1989『国史大辞典』第 10 巻

小林幹男 1996「峠の祭祀と古東山道」『長野女子短期大学研究紀要』第 3 号 p8-23

笹沢浩 1970a「長野市下宇木遺跡 B 地点出土の土師器」『長野県考古学会誌』8 号 p61-65 長野県考古学会

笹沢浩 1970b「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』第 22 巻第 11 号 信濃史学会

笹沢浩 2011「信州における弥生中期文化研究の到達点と課題（抄）」『長野県考古学会誌』138・139 合併号 p146-149 長野県考古学会

笹澤浩 2013「信州弥生文化研究の現状と課題－「信州における弥生社会のあり方」の理解に向けて－」『文化の十字路信州』p12-20 日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集

（財）長野県埋蔵文化財センター 1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 34

信濃史料刊行会 1968『信濃史料』第 2 巻

信濃毎日新聞社 1981『長野県百科事典 補訂版』

設楽博己 2009「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集 p55-89

須坂市 2016『遺跡詳細分布図』埋蔵文化財包蔵地について 須坂市オフィシャル WEB サイト

千野浩 1989「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』第 41 巻第 4 号 p44-56 信濃史学会

寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』p67-75 長野県考古学会

寺島孝典 2013「栗林式土器の成立と展開－栗林式土器編年の再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで－」『文化の十字路信州』p285-290 日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集

冨澤恒雄 1991「Ⅵ 善光寺地震」『長野盆地のおい立ちと地震』

直井雅尚 2014「周辺から見た栗林式土器の実質と変化」『長野県考古学会誌』138・139 合併号 p50-66 長野県考古学会

長野県浅川改良事務所 2007『信濃川水系長野圏域河川整備計画（浅川）』

長野県考古学会 1999『長野県の弥生土器編年』（冬季大会資料）
長野県史刊行会 1982『長野県史』考古資料編 / 全 1 巻（2）主要遺跡（北・東信）昭和 57 年
長野県史刊行会 1989「序章－三 古東山道から令制東山道へ」「第三章－四 水内郡」『長野県史 通史編』第 1 巻 原始・古代
長野県地質図活用普及事業研究会編著 2015『長野県デジタル地質図 2015』
長野縣町村誌刊行會 1936『長野縣蔵版 長野縣町村誌』第 1 巻 北信篇
長野県埋蔵文化財センター 1997『篠ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
長野県埋蔵文化財センター 1998,1999,2000『松原遺跡 弥生中期・弥生後期・古墳前期（第 1 分冊～第 6 分冊）』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
長野県埋蔵文化財センター 2013『川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99
長野県埋蔵文化財センター 2012『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
長野県埋蔵文化財センター 2014『佐久市森平遺跡・寄塚遺跡・今井西原遺跡・今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107
長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
長野市 2016『遺跡地図（埋蔵文化財）』長野市行政地図情報 長野市オンラインサービス（2016 現在）
長野市教育委員会 1975『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第 2 集
長野市教育委員会 1980a『四ツ屋遺跡（第 1 次～ 3 次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第 3 次）』長野市の埋蔵文化財第 9 集
長野市教育委員会 1980b『三輪遺跡・付水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡調査報告』長野市の埋蔵文化財第 6 集
長野市教育委員会 1981a『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第 10 集
長野市教育委員会 1981b『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』長野市の埋蔵文化財第 11 集
長野市教育委員会 1982『牟礼バイパス A・E 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第 12 集
長野市教育委員会 1983『迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財第 13 集
長野市教育委員会 1984『箱清水遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 15 集
長野市教育委員会 1986『牟礼バイパス B・C・D 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第 17 集
長野市教育委員会 1987a『三輪遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 20 集
長野市教育委員会 1987b『芹田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第 21 集
長野市教育委員会 1987c『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第 22 集
長野市教育委員会 1988a『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第 29 集
長野市教育委員会 1988b『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第 30 集
長野市教育委員会 1991a『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第 38 集
長野市教育委員会 1991b『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第 41 集
長野市教育委員会 1992a『二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡（第 1 分冊）（第 2 分冊）』長野市の埋蔵文化財第 47 集
長野市教育委員会 1992b『中俣遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 48 集
長野市教育委員会 1993a『三輪遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第 49 集
長野市教育委員会 1993b『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第 50 集
長野市教育委員会 1993c『駒沢新町遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 55 集
長野市教育委員会 1994a『三輪遺跡（5）・上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第 62 集
長野市教育委員会 1994b『牟礼バイパス B 地点（2）』長野市の埋蔵文化財第 65 集
長野市教育委員会 1995a『本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 67 集
長野市教育委員会 1995b『徳間本堂原遺跡』長野市の埋蔵文化財第 69 集
長野市教育委員会 1995c『八幡田沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第 70 集
長野市教育委員会 1995d『二ツ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』長野市の埋蔵文化財第 71 集
長野市教育委員会 1996a『吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6）・棗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第 75 集
長野市教育委員会 1996b『駒沢城跡・中俣遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第 76 集
長野市教育委員会 1996c『松ノ木田遺跡』長野市の埋蔵文化財第 77 集
長野市教育委員会 1997a『水内坐一元神社遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 80 集
長野市教育委員会 1997b『松ノ木田遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 82 集
長野市教育委員会 1997c『吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第 84 集
長野市教育委員会 1997d『寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第 86 集

長野市教育委員会 1998a『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第 88 集
長野市教育委員会 1998b『西方遺跡・中沢城跡館跡』長野市の埋蔵文化財第 91 集
長野市教育委員会 1998c『小板屋遺跡』長野市の埋蔵文化財第 94 集
長野市教育委員会 2001a『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 97 集
長野市教育委員会 2001b『徳間榎田遺跡』長野市の埋蔵文化財第 99 集
長野市教育委員会 2003『浅川端遺跡（2）・差出遺跡・三合塚西古墳・石川条里遺跡（10)』長野市の埋蔵文化財第 102 集
長野市教育委員会 2004a『篠ノ井南条遺跡・辰巳池遺跡・本郷前遺跡』長野市の埋蔵文化財第 103 集
長野市教育委員会 2005a『天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第 104 集
長野市教育委員会 2005b『檀田遺跡（2）（第 1 分冊）（第 2 分冊)』長野市の埋蔵文化財第 105 集
長野市教育委員会 2004b『西方遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 107 集
長野市教育委員会 2005c『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡（2）・吉田古屋敷遺跡（2）・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第 108 集
長野市教育委員会 2005d『石川条理遺跡（11）・本村東沖遺跡（3）・上長畑遺跡』長野市の埋蔵文化財第 111 集
長野市教育委員会 2006a『吉田東町遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 112 集
長野市教育委員会 2006b『水内坐一元神社遺跡（4)』長野市の埋蔵文化財第 113 集
長野市教育委員会 2007a『平林東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第 116 集
長野市教育委員会 2007b『吉田古屋敷遺跡（3)』長野市の埋蔵文化財第 118 集
長野市教育委員会 2007c『吉田古屋敷遺跡（4）・田牧居帰遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 119 集
長野市教育委員会 2008a『吉田古屋敷遺跡（5)』長野市の埋蔵文化財第 120 集
長野市教育委員会 2008b『二ツ宮遺跡（3）・浅川端遺跡（3)』長野市の埋蔵文化財第 122 集
長野市教育委員会 2010a『水内坐一元神社遺跡（5）・中俣遺跡（4)』長野市の埋蔵文化財第 125 集
長野市教育委員会 2010b『吉田町東遺跡（3）・駒沢新町遺跡（3)』長野市の埋蔵文化財第 126 集
長野市教育委員会 2011a『大門遺跡・駒沢城跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 127 集
長野市教育委員会 2011b『芹田東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第 129 集
長野市教育委員会 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第 130 集
長野市教育委員会 2013『御所遺跡』長野市の埋蔵文化財第 132 集
長野市教育委員会 2014a『長野女子高校校庭遺跡』長野市の埋蔵文化財第 134 集
長野市教育委員会 2014b『押鐘遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 136 集
長野市教育委員会 2014c『御所遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 137 集
長野市教育委員会 2014d『平林東沖遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 138 集
長野市教育委員会 2015a『徳間本堂原遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 139 集
長野市教育委員会 2015b『三輪遺跡（7）・三輪遺跡（8)』長野市の埋蔵文化財第 140 集
長野市誌編さん委員会 2003『長野市誌』第 12 巻 資料編 原始・古代・中世
長野市立博物館 1997『第 39 回特別展 古代・中世人の祈り －善光寺信仰と北信濃－』
長森英明・古川竜太・早津賢二 2003『戸隠地域の地質 地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅)』産総研地質調査総合センター 109p
花岡邦明 2004「浅川扇状地」・「浅川」『長野の大地 見どころ 100 選』p52-53,62-63 地学団体研究会長野支部 長野の大地編集委員会
馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集
広瀬和雄 2008「弥生墳墓と神殿－前方後円墳祭祀と弥生墳墓祭祀－」『国士舘考古学』第 4 号 p1-19 国士舘大学考古学会
福島正樹 2002「古代における善光寺平の開発について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 96 集 p69-86
藤森栄一 1955「中部高地・北陸」『日本考古学講座 4 弥生時代』河出書房
宮本長二郎 1991「弥生・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』p33-54 埋蔵文化財研究会 第 29 回研究集会実行委員会
柳澤亮 2015「土器片加工板」『西近津遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104 p90-92

第 10 表　竪穴住居跡一覧（弥生時代）

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模							炉		柱穴				諸施設	出土遺物掲載 No.	重複遺構 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長（m)	床面積 (㎡)	深さ (cm)	埋土	位置	形態	主柱穴数	平面形	柱穴間隔 (m)	棟持柱					
第 26 図	PL5	SB01	Ⅰ L11･12･16･17	隅丸長方形	N42.5° W	6.10	3.90	23.79	10 ～ 16	単層	北側主柱穴間	-	4	円形・楕円形	3.05 ～ 3.13	あり？	出入口施設	26 ～ 40		弥生後期	
第 29 図	PL5･6	SB02	Ⅰ L21･22	隅丸長方形	N22° W	(4.30)	4.80	(20.64)	12 ～ 25	単層	-	-	4	円形	1.95	なし	-	41 ～ 62		弥生後期	
第 31･32 図	PL6･7	SB03	Ⅰ B14･15･19･20	隅丸長方形	N22° E	(7.45)	5.15	(38.00)	10 ～ 25	複層	-	-	6	円形	2.00 ～ 2.15	あり	-	63 ～ 86	▼ SK35･36	弥生後期	
第 36 図	PL8	SB04	Ⅰ K08･13	隅丸長方形	N26.5° W	5.05	<4.00>	<20.20>	20 ～ 30	複層	北側主柱穴間	土器埋設炉（壺上部逆位）	3	円形・楕円形	2.70	なし	-	87 ～ 93	▼ SB10	弥生後期	
第 38 図	PL8･9	SB09	Ⅰ K24	隅丸長方形	N26° W	<6.00>	4.24	<25.44>	32 ～ 48	複層	北側主柱穴間	地床炉	4	円形	1.66 ～ 1.80	あり	出入口施設または貯蔵穴	94 ～ 105		弥生後期	
第 39 図	PL10	SB16	Ⅰ A20	(隅丸長方形)	N27° W	(1.45)	<2.70>	(3.92)	22 ～ 24	複層	-	-	-	-	-	-	-	106,107		弥生後期	かく乱により破壊
第 41 図	PL10･11	SB17	Ⅰ F08･09･13･14	隅丸長方形	N45° W	6.40	4.45	28.48	50 ～ 60	複層	北側主柱穴間	地床炉	4	円形・楕円形	2.96 ～ 3.00	あり	出入口施設・貯蔵穴	108 ～ 119	▼ SB15	弥生後期	

第 11 表　竪穴建物跡一覧（平安時代）

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模							カマド			柱穴			出土遺物掲載 No.	重複遺構 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長（m)	床面積 (㎡)	深さ (cm)	埋土	位置	構築	その他	主柱穴数	平面形	柱穴間隔 (m)				
第 61 図	PL17	SB05	Ⅰ K14･19･20	方形	N113° E	3.95	4.85	19.16	11 ～ 17	複層	西壁	-	焼土のみ	-	不整円形・楕円形	-	173 ～ 210	△ SM02 △ SK96･101･113･116･122	平安	
											南東隅	石組み？	焼土							
第 65･66 図	PL18･19	SB06	Ⅰ K20	(方形)	N17° E	3.22	<3.60>	<11.59>	21 ～ 28	単層	北壁西寄り	石組み？	火床、袖石抜取痕	-	-	-	211 ～ 218	▼ SB07	平安	
第 65･66 図	PL18･19	SB07	Ⅰ K20	方形	N133° E	3.50	3.70	12.95	21 ～ 29	単層	南東壁南寄り	石組み	火床、天井石、袖石抜取痕	-	円形・楕円形	-	219 ～ 237	△ SB06 △ SK33･110･112	平安	SB06 の建て替え、またはｶﾏﾄﾞの作り替えか
第 68 図	PL20	SB08	Ⅰ K23	(方形)	-	(3.10)	(1.40)	(4.34)	2 ～ 14	単層	-	-		-	-	-	238 ～ 249		平安	
第 70 図	PL20	SB10	Ⅰ K08･13	(方形)	N118° W	-	-	-	-	-	西壁	-	礫と焼土	-	-	-	250 ～ 255	△ SB04	平安	
第 71 図	PL20･21	SB11	Ⅰ F03･04	(隅丸方形)	N0°	(2.48)	(2.83)	(7.01)	5	単層	(北壁)	-	焼土	1	-	-	256 ～ 261	▼ SB12	平安	南半分を削平されている
第 71 図	PL21	SB12	Ⅰ F03･04･08･09	方形	N28° E	2.78	2.92	8.12	8 ～ 14	単層	(北壁)	-	-	4	楕円形	1.70 ～ 2.10	262 ～ 268	△ SB11 ▼ SK115	平安	
第 73･74 図	PL22	SB13	Ⅰ F07･08	(方形)	N129° E	(2.60)	2.50	(6.50)	13 ～ 22	複層	南東壁やや南寄り	石組み	火床、袖石、支脚石	-	-	-	269 ～ 281	▼ SB14	平安	
第 76 図	PL22･23	SB14	Ⅰ F08	方形	N9° W	2.60	3.32	8.63	6 ～ 20	複層	-	-	-	3	円形・楕円形	1.58	282 ～ 291	△ SB13	平安	Pit1 は貯蔵穴か
第 77･78 図	PL23･24	SB15	Ⅰ F08･09･13･14	長方形	N43° E	3.40	4.67	15.88	2 ～ 27	単層	北壁中央	石組み	火床、袖石、煙道、支脚石	-	-	-	292 ～ 320	△ SB17	平安	

第 12 表　掘立柱建物跡一覧

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	規模・形態							柱間間隔		柱穴掘方				出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				構造	棟方向	平面形	桁行×梁行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積 (㎡)	桁行 (m)	梁行 (m)	平面形	深さ (cm)	断面形	埋土				
第 43 図	PL12 13	ST01	Ⅰ B24･25 Ⅰ G05	側柱 棟持柱	N17° W	長方形	2 間× 1 間	5.40	2.03	10.96	2.46 ～ 2.94	2.00 ～ 2.07	円形・楕円形・不正楕円形	42 ～ 57	B･E	褐灰色（10YR3/1 ～ 4/1）砂礫多混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通～弱。	120		弥生後期	
第 80 図	PL24 25	ST02	Ⅰ B13･14･18･19	側柱	N 0°	長方形	1 間× 1 間	3.40	1.92	6.53	3.30 ～ 3.50	1.78 ～ 2.05	円形・楕円形	14 ～ 32	A･C･E･F	褐灰色（10YR4/1）粘土質ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。	321	△ SD03	平安	

第 13 表　墓跡一覧

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	長軸方向	長軸（m）	直行軸（m）	深さ（cm）					
第 44 図	PL13	SM01	Ⅰ B10･15	隅丸長方形	N50° W	2.10	0.80	31 ～ 33	黒褐色を主体とする複層			弥生後期	
第 45 ～ 49 図	PL13 14	SM02	Ⅰ K14･15･19 ･20	楕円形	N31° E	1.24	0.83	17 ～ 23	黒褐色土	121,122,123, 124	▼ SB05	弥生後期	
第 50 図	PL14	SM03	Ⅰ F10	楕円形	N63° E	0.70	0.58	12 ～ 19	土器棺内：黒褐色土を主体とする単層	125		弥生後期	

第 14 表　溝・流路跡一覧

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	規模・形態				埋土	出土遺物掲載 No.	重複遺構 △切る ▼切られる	時代	備考
				長軸方向	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）					
第 58 図	PL16	SD01	IA25,IB07･08 ･12･13･17･21 IF05･10	N33° E	46.70	0.54 ～ 1.75	2 ～ 18	複層。褐色（10YR4/4 ～ 10YR4/1）砂礫～砂質シルト。黒褐～灰黄褐～褐灰色の砂質シルトを含む。	148 ～ 166	△ SD10	古墳中期	
第 81･82 図	PL25	SD02	IB13･18･23 IG03･08	N 0°	38.50	0.33 ～ 0.87	4 ～ 14	褐色（10YR4/4）砂礫。粘性なし。しまり普通。		△ SD03	平安	
第 81･82 図	PL25 26	SD03	IB08･09･13･ 14･18･19･23 IG03･04･08	N 0°	44.00	2.70 ～ 4.40	47 ～ 95	複層。上層：黒褐色（10YR3/1）シルト主体。中層：褐灰色（10YR4/1）砂礫主体。下層：褐灰色（10YR5/1）砂質シルト主体。ラミナをはさむ。	322 ～ 326, 701 ～ 711	▼ SD02 ▼ ST02	奈良～平安	
第 52 図	PL14	SD04	IB15 IC06･11	N49° E	3.90	0.35 ～ 0.80	11 ～ 35	黒色（10YR2/2）粗砂。粘性なし。しまりやや弱。2 ～ 5cm 礫 5% 混。			弥生後期？	

第 15 表　土坑一覧

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長（cm）	直交軸長（cm）	深さ（cm）					
		SK01	Ⅰ B11	円形	B	20	20	19	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり強。暗褐色（10YR3/4）砂質ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。0.5 ～ 1cm 礫混。				
		SK02	Ⅰ B12	楕円形	C	20	17	7	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり強。暗褐色（10YR3/4）砂質ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ混。0.5 ～ 1cm 礫混。				
		SK03	Ⅰ B07	円形	A	34	30	10	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下砂礫を全体に混。				
		SK04	Ⅰ B12	円形	C	24	22	12	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混。				
		SK05	Ⅰ B12	楕円形	C	41	35	11	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混。				
		SK06	Ⅰ B13	楕円形	C	31	15	11	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混。				
		SK07	Ⅰ B13	円形	C	22	22	11	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通。SK01 ～ 06 より砂礫多混。				
		SK08	Ⅰ B17･18	円形	C	34	30	19	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。1 ～ 1.5cm 礫混。				
		SK09	Ⅰ B18	楕円形	C	75	48	17	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。1 ～ 1.5cm 礫混。				
		SK10	Ⅰ B18	円形	C	40	34	16	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。1 ～ 1.5cm 礫混。				
		SK11	Ⅰ B18	円形	C	26	23	13	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。1 ～ 1.5cm 礫混。				
		SK14	Ⅰ B14	円形	B	25	23	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混。				
		SK17	Ⅰ K20	円形	A	32	30	8	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。				
		SK18	Ⅰ K20	楕円形	A	24	22	9	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。浅い凹み。				
		SK19	Ⅰ K20 Ⅰ L16	楕円形	F	70	56	32	1. 黒褐～黒色（10YR3/1 ～ 2/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。0.2 ～ 1.5cm 礫混。2. 黒褐～黒色（10YR3/1 ～ 2/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。0.2 ～ 1.5cm 礫混。褐色ｼﾙﾄの細かいﾌﾞﾛｯｸ土混。				
		SK20	Ⅰ L11	楕円形	C	32	22	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。				
		SK21	Ⅰ K20	楕円形	B	36	26	22	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。0.2 ～ 1cm（最大径 3 ～ 5cm）礫混。				
		SK22	Ⅰ K20 Ⅰ L16	円形	C	62	60	23	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。全体に暗褐色。				
		SK23	Ⅰ L16	楕円形	C	38	29	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。				
		SK24	Ⅰ K20	円形	C	38	36	17	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性、しまり普通。0.2 ～ 1.5cm 礫少混。砂混。				
		SK25	Ⅰ K20	円形	C	36	32	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。礫径 0.2cm 程度混。SK17 より多混。				
		SK26	Ⅰ K20	楕円形	C	48	43	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/1）ｼﾙﾄのﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性普通。しまりやや強。礫径 0.2cm 程度混。SK17 より多混。				
		SK27	Ⅰ K20	楕円形	B	31	26	18	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫全体に混。				
		SK28	Ⅰ K20	円形	C	40	39	20	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/4）ｼﾙﾄの 5cm ﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性、しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混。				
		SK29	Ⅰ K20	楕円形	B	40	16	22	黒褐色～黒色（10YR3/1 ～ 2/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。礫微混。				
		SK30	Ⅰ K25	楕円形	C	34	30	24	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/4）ｼﾙﾄの 5cm ﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性、しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混。				
		SK31	Ⅰ K25	楕円形	C	52	40	19	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。0.2 ～ 1.5cm 礫全体に混。				
		SK32	Ⅰ K25	楕円形	C	44	34	16	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄと褐色（10YR4/4）ｼﾙﾄの 5cm ﾌﾞﾛｯｸ土混合。粘性、しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混。				
		SK33	Ⅰ K20	楕円形	C	70	46	16	黒褐色（10YR3/3）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2cm 以下黄褐色砂礫全体に混。		▼ SB07		
		SK34	Ⅰ B14	円形	C	37	34	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性普通～ややあり。しまり普通。小礫混。				
		SK35	Ⅰ B14	円形	A	27	24	11	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。		△ SB03		

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長 (cm)	直交軸長 (cm)	深さ (cm)					
		SK36	Ⅰ B15	円形	A	40	40	11	黒褐色(10YR3/1)ｼﾙﾄ。粘性普通。しまり強。0.5 ～ 2cm 亜円礫混。やや浅い凹み。		△ SB03		
		SK37	Ⅰ B20	楕円形	C	46	35	18	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性普通。しまり普通～やや強。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。				
		SK38	Ⅰ B15	円形	C	45	43	17	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。0.2 ～ 2cm 礫全体に混。				
		SK39	Ⅰ B15	円形	A	46	46	22	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。3cm 礫、0.2cm 以下砂礫混。底部は黄褐色砂ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK40	Ⅰ B20	円形	B	27	24	11	黒褐色(10YR3/2)ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.5cm 以下砂礫全体に混。				
		SK41	Ⅰ B20	楕円形	C	26	19	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。0.5 ～ 5cm 礫混。				
		SK42	Ⅰ B20	楕円形	B	46	41	24	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。下部は黄褐色ｼﾙﾄ～砂粒混。				
		SK43	Ⅰ B20	楕円形	E	76	62	39	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性普通。しまり強。0.2 ～ 3cm（最大 8cm）礫混。黄褐色砂全体に混。				
		SK44	Ⅰ B20	楕円形	A	53	37	23	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。0.5 ～ 5cm 礫混。				
		SK45	Ⅰ B20	楕円形	C	28	20	8	黒褐色(10YR3/2)ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.5cm 以下砂礫全体に混。				
		SK46	Ⅰ B20	楕円形	A	50	28	14	黒褐色(10YR3/2)ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.5cm 以下砂礫全体に混。				
		SK47	Ⅰ B20	（楕円形）	C	72	-	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 1cm 砂礫混。				
		SK48	Ⅰ B20	不整楕円形	C	(74)	47	25	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 1cm 砂礫混。				
		SK49	Ⅰ B15	不整楕円形	C	115	42	30	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。砂礫層。0.2 ～ 4cm 礫多混。地山より暗色。				
		SK50	Ⅰ B15	楕円形	C	55	28	11	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。砂礫層。0.2 ～ 4cm（最大 10cm）礫多混。地山より暗色。				
		SK51	Ⅰ K15	楕円形	C	41	32	22	1. 黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。 2. 黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。小礫少混。1 と 2 の間は漸移的。				
		SK52	Ⅰ K15	円形	B	60	54	31	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。小礫少混。				
		SK53	Ⅰ K15	円形	A	35	33	15	黒褐色(10YR3/1)砂混ｼﾙﾄ。粘性普通。しまりやや強。3cm 円礫多混。				
		SK54	Ⅰ K15	楕円形	B	50	40	22	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。2 ～ 3cm 円礫少混。				
		SK55	Ⅰ K15	楕円形	A	36	30	12	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。2 ～ 3cm 円礫少混。				
		SK56	Ⅰ K15	円形	C	40	37	18	黒褐色(10YR3/1)ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。円礫少混。				
		SK57	Ⅰ K15 Ⅰ L11	不整円形	A	38	30	11	黒褐色(10YR3/1)ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。円礫少混。				
		SK58	Ⅰ L11	円形	B	19	16	27	黒褐色(10YR3/1)ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ、砂混。0.2cm 円礫混。				
		SK59	Ⅰ K15	楕円形	A	45	27	9	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。0.2cm 黄褐色土ブロック多混。				
		SK60	Ⅰ L11	円形	C	35	32	17	黒褐色(10YR3/1)砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。2 ～ 3cm 円礫多混。				
		SK61	Ⅰ L11	円形	B	66	60	30	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。円礫少混。下半部は砂礫多混。粘性ややあり。しまり普通。漸移的。				
第 83 図		SK62	Ⅰ L16	円形	C	53	50	32	1. 黒褐色土（10YR3/2）。粘性ややあり。しまり強。黄褐色土粒 10% 混。10cm 礫混。2. 灰黄褐色土(10YR4/2)。粘性あり。しまり強。粗砂、小礫混。			平安	
		SK63	Ⅰ L16	楕円形	C	46	38	31	1. 暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり強。2 ～ 5cm 礫 5% 混。 2. 暗褐色土（10YR3/3）。粘性なし。しまり強。礫少混。				
		SK64	Ⅰ L16	楕円形	C	56	40	22	1. 暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり強。2 ～ 5cm 礫 5% 混。 2. 暗褐色土（10YR3/3）。粘性なし。しまり強。5cm 礫多混。				
		SK65	Ⅰ K20	円形	B	45	40	28	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒 10% 混。				
		SK66	Ⅰ K20	楕円形	C	58	50	26	1. 黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒 5% 混。 2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。粘性なし。しまり強。5cm 礫 5% 混。				
		SK67	Ⅰ L21	楕円形	C	47	35	23	黒色土（10YR2/1）。粘性ややあり。しまり強。				
		SK68	Ⅰ L11	円形	C	37	35	13	黒褐色土（10YR2/2）。粘性なし。しまり強。5 ～ 8cm 礫 20% 混。				
		SK69	Ⅰ K09	不整円形	B	62	53	27	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。2cm 以下礫混。				
		SK70	Ⅰ K14	円形	C	40	38	14	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄとにぶい黄褐色（10YR5/4）砂質ｼﾙﾄの小ﾌﾞﾛｯｸ土混。粘性、しまり普通。2cm 以下礫混。				
		SK71	Ⅰ K14	不整円形	C	45	42	12	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。2cm 以下礫混。				
		SK72	Ⅰ K14	円形	A	47	43	16	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄとにぶい黄褐色（10YR5/4）砂質ｼﾙﾄの小ﾌﾞﾛｯｸ土混。粘性、しまり普通。2cm 以下礫混。				
		SK73	Ⅰ K14	楕円形	C	78	50	17	黒褐色（10YR3/1）砂礫。粘性なし。しまり普通。0.2 ～ 1cm（最大 3cm）礫混。				
		SK74	Ⅰ K09	円形	C	45	42	14	黒褐色（10YR3/1）砂礫。粘性なし。しまり普通。0.2 ～ 1cm（最大 3cm）礫混。				
		SK75	Ⅰ K14	円形	C	39	39	23	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 0.5cm 礫混。				
		SK76	Ⅰ K14	円形	C	44	40	20	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 0.5cm 礫混。底部は黄褐色砂礫少混。				
		SK77	Ⅰ K14	楕円形	C	67	45	15	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 1cm（最大 2cm）礫混。				
		SK78	Ⅰ K10	楕円形	B	35	27	20	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 0.5cm 礫混。				
		SK79	Ⅰ K15	円形	B	50	47	18	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3 ～ 5cm 礫混。				
		SK80	Ⅰ K15	楕円形	B	43	34	15	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 0.5cm 礫混。				
		SK81	Ⅰ K15	楕円形	C	62	43	21	黒褐色土（10YR3/1）。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。下部ほど黄褐色砂粒混。				
		SK82	Ⅰ K14･15	楕円形	C	61	50	33	黒褐色土（10YR3/1）。粘性、しまり普通。0.2 ～ 3cm 砂礫混。				
		SK83	Ⅰ K15	楕円形	B	25	22	21	黒褐色土（10YR3/1）。粘性、しまり普通。0.2 ～ 0.5cm 砂礫混。黄褐色土粒混。				
		SK84	Ⅰ K15	楕円形	A	52	45	21	黒褐色土（10YR3/1）。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。				
		SK85	Ⅰ K15	円形	A	45	43	15	黒褐色土（10YR3/1）。粘性、しまり普通。砂礫混。黄褐色土粒混。				

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長 (cm)	直交軸長 (cm)	深さ (cm)					
		SK86	Ⅰ K15	円形	A	43	42	15	黒褐色土（10YR3/1）。粘性、しまり普通。砂礫混。				
		SK87	Ⅰ K15	円形	C	35	33	15	黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫混。				
		SK88	Ⅰ K23･24	円形	C	50	50	18	黒褐色土（10YR3/1）。粘性、しまり普通。0.5 ～ 3cm 砂礫混。				
		SK89	Ⅰ K24	円形	A	90	84	19	黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.2 ～ 2cm（最大 5 ～ 8cm）砂礫混。				
		SK90	Ⅰ K25	楕円形	B	40	33	23	黒褐色土(10YR3/1 ～ 3/2)。粘性､しまり普通。0.2 ～ 2cm 礫多混。				
		SK91	Ⅰ K25	円形	C	30	28	12	黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。				
		SK92	Ⅰ K25	楕円形	A	52	44	14	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫混。				
		SK93	Ⅰ K25	楕円形	C	36	30	12	黒褐色(10YR3/2)ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒混。				
		SK94	Ⅰ K25	方形	A	27	25	20	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。				
		SK95	Ⅰ K25	楕円形	B	34	25	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。				
		SK96	Ⅰ K19	円形	C	34	30	22	黒褐色土（10YR3/2）。粘性なし。しまり強。砂礫混。		▼ SB05		
		SK97	Ⅰ K19	楕円形	C	68	62	22	暗褐色土（10YR3/3）。粘性なし。しまり普通。砂礫混。				
		SK98	Ⅰ K14	円形	A	30	26	6	暗褐色土（10YR3/4）。粘性なし。しまり普通。砂礫混。				
		SK99	Ⅰ K14	円形	B	24	22	25	黒褐色土（10YR2/3）。粘性あり。しまり強。細礫 5% 混。				
		SK100	Ⅰ K14	楕円形	A	50	35	19	黒褐色土（10YR2/3）。粘性ややなし。しまり強。細礫 5% 混。				
		SK101	Ⅰ K19	楕円形	C	45	34	15	黒褐色土（10YR2/3）。粘性あり。しまり強。細礫 10% 混。		▼ SB05		
		SK102	Ⅰ K19	円形	C	37	32	17	黒褐色土（10YR2/3）。粘性あり。しまり強。細礫 10% 混。				
		SK103	Ⅰ K19	円形	C	40	33	18	暗褐色土（10YR3/3）。粘性ややあり。しまり強。5cm 礫 10% 混。				
		SK104	Ⅰ K19･24	楕円形	C	40	34	13	暗褐色土（10YR3/3）。粘性ややあり。しまり強。5cm 礫 10% 混。				
		SK105	Ⅰ K19	円形	A	36	34	13	暗褐色土（10YR3/3）。粘性ややあり。しまり強。礫少混。				
		SK106	Ⅰ K20	円形	A	25	24	13	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。粘性あり。しまり強。				
		SK107	Ⅰ K20	円形	B	22	22	25	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。粘性あり。しまり強。				
		SK108	Ⅰ K20	楕円形	B	21	16	15	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。粘性あり。しまり強。				
		SK109	Ⅰ K20･25	楕円形	F	56	40	27	黒褐色土（10YR2/2）。粘性なし。しまり普通。3cm 礫 5% 混。				
		SK110	Ⅰ K20	楕円形	A	47	34	7	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。		▼ SB07		
		SK111	Ⅰ K20	円形	A	30	28	14	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。粘性あり。しまり強。				
		SK112	Ⅰ K20	円形	C	36	35	14	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。		▼ SB07		
		SK113	Ⅰ K20	楕円形	C	40	29	10	黒褐色（10YR2/3）砂礫混シルト。粘性あり。しまり強。		▼ SB05		
		SK114	Ⅰ K20	円形	C	40	40	21	黒褐色土（10YR2/3）。粘性あり。しまり強。細礫 5% 混。				
		SK115	Ⅰ F03･04	楕円形	C	103	68	45	黒色（10YR2/1）砂礫混シルト。		△ SB12		
		SK116	Ⅰ K20	楕円形	C	48	34	18	黒褐色（10YR2/3）礫少混。		▼ SB05		
		SK117	Ⅰ K20	楕円形	C	60	35	12	黒褐色（10YR2/3）礫少混。				
		SK118	Ⅰ K15	円形	F	70	70	31	黒褐色（10YR2/3）礫微混。				
		SK119	Ⅰ K15	円形	C	54	48	17	黒褐色（10YR2/3）細礫微混。				
		SK120	Ⅰ K14	円形	B	41	38	20	黒褐色（10YR2/3）細礫微混。				
		SK121	Ⅰ K14	円形	B	24	26	25	黒褐色（10YR2/3）細礫微混。				
		SK122	Ⅰ K14･19	楕円形	C	168	94	34	黒褐色（10YR2/3）砂質土。粘性ややあり。しまり強。		▼ SB05		
		SK124	Ⅰ F04	（円形）	C	60	（30）	16	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性､しまり普通。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK125	Ⅰ F04	円形	B	42	44	22	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK126	Ⅰ F04	楕円形	B	42	27	21	黒褐色（10YR3/1）砂質土。粘性なし。しまり普通。黄褐色砂質土粒子全体に混。		△ SK134		
第 53 図		SK127	Ⅰ F04	楕円形	E	52	43	40	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ少混。	126	△ SK134	弥生後期	
		SK128	Ⅰ F04	不整楕円形	F	56	48	24	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性､しまり普通。最大 5cm 砂礫混。				
		SK129	Ⅰ F04	楕円形	C	36	22	18	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり普通。				
		SK130	Ⅰ F04	楕円形	B	28	25	20	黒褐色土（10YR3/1）。黒褐～褐灰色砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。最大 3cm 円礫混。				
		SK131	Ⅰ F04	円形	B	18	16	19	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK132	Ⅰ F09	楕円形	C	115	94	17	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。最大 3cm 礫混。				
		SK133	Ⅰ F09	長方形	C	104	80	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。礫少混。				
		SK134	Ⅰ F04	不整楕円形	B	60	48	28	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土粒混。		▼ SK126 ▼ SK127		
		SK135	Ⅰ A25	楕円形	C	23	18	11	褐灰色（10YR4/4）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色ｼﾙﾄ混。				
		SK136	Ⅰ A25	楕円形	C	24	20	10	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色土粒混。				
		SK137	Ⅰ A25	楕円形	C	22	16	12	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。黄褐色土粒混。				
		SK138	Ⅰ A25	楕円形	C	64	36	20	褐灰色（10YR4/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり普通。黄褐色土粒混。				
		SK139	Ⅰ A25	楕円形	C	36	28	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄～白色砂礫混。				
		SK140	Ⅰ A25	楕円形	C	21	18	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄～白色砂礫混。				
		SK141	Ⅰ A25	楕円形	C	28	22	12	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄～白色砂礫混。				
		SK142	Ⅰ A25	円形	C	20	20	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり普通。				
		SK143	Ⅰ A25	円形	C	16	16	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄～白色砂礫混。				

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長 (cm)	直交軸長 (cm)	深さ (cm)					
		SK144	Ⅰ A25	楕円形	A	50	40	9	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK145	Ⅰ A25	不整円形	B	31	26	19	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土粒混。				
		SK146	Ⅰ F05	円形	C	20	18	10	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。褐色鉄分沈着多い。				
		SK147	Ⅰ F05	円形	C	42	41	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK148	Ⅰ F05	楕円形	C	48	36	9	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK149	Ⅰ F05	楕円形	C	36	25	8	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK150	Ⅰ A25	楕円形	C	50	26	18	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性普通。しまりやや強。底部に礫多混。				
		SK151	Ⅰ A25	楕円形	A	50	26	18	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性普通。しまりやや強。				
		SK152	Ⅰ A25	楕円形	B	25	16	10	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫少混。				
		SK153	Ⅰ B21	楕円形	C	38	26	13	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり弱。小礫多混。				
		SK154	Ⅰ B21	楕円形	C	40	32	13	黒褐色（10YR3/2）シルト。粘性なし。しまり弱。小礫多混。				
		SK155	Ⅰ B21	楕円形	C	27	22	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK156	Ⅰ B16	円形	B	14	14	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK157	Ⅰ B21	円形	B	17	14	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。礫少混。				
		SK158	Ⅰ B21	円形	B	20	20	10	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK159	Ⅰ B21	円形	A	26	25	9	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK160	Ⅰ G01	円形	C	22	23	39	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。				
		SK161	Ⅰ G01	楕円形	B	30	21	34	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。小礫混。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。			弥生？	弥生土器片出土
		SK162	Ⅰ G01	楕円形	D	70	60	24	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK163	Ⅰ B21	円形	C	50	43	22	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK164	Ⅰ G01	円形	C	30	25	30	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。礫多混。				
		SK165	Ⅰ G01	円形	B	35	31	19	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫全体に混。黄褐色土粒混。				
		SK166	Ⅰ G01	円形	C	30	30	33	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。				
		SK167	Ⅰ G01	円形	C	30	28	37	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。円礫混。				
		SK168	Ⅰ G01	円形	B	26	24	23	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。0.5 ～ 1cm 礫混。				
		SK169	Ⅰ G01	円形	F	55	53	30	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫少混。				
		SK170	Ⅰ G06	楕円形	A	46	38	19	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫少混。				
		SK171	Ⅰ G06	楕円形	A	50	36	13	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫少混。				
		SK172	Ⅰ G06	楕円形	C	48	40	20	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫多混。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK173	Ⅰ G01	楕円形	A	50	17	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫混。				
		SK174	Ⅰ G01	楕円形	F	60	38	22	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫混。				
		SK175	Ⅰ G06	楕円形	E	70	54	30	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫混。				
		SK176	Ⅰ B22	楕円形	C	58	20	14	黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ全体に混。				
		SK177	Ⅰ B22	楕円形	C	62	30	20	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。小礫混。				
		SK178	Ⅰ B22	円形	B	48	46	20	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫全体に混。				
		SK179	Ⅰ B22	円形	B	30	30	18	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫全体に混。				
		SK180	Ⅰ G02	円形	C	30	30	24	黒褐色(10YR3/1)ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土粒混。円礫少混。				
		SK181	Ⅰ G02	楕円形	B	34	24	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土粒混。円礫やや多混。				
		SK182	Ⅰ G02	円形	B	26	25	19	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土粒混。円礫やや多混。				
		SK183	Ⅰ G07	楕円形	A	26	18	11	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK184	Ⅰ G02	楕円形	C	32	21	31	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。下部は砂礫混。				
		SK185	Ⅰ G01	不整円形	C	90	82	42	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫多混。				底部に浅い凹み柱痕跡か
		SK186	Ⅰ G02	隅丸方形	C	84	73	29	黒褐色(10YR3/1)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK187	Ⅰ G07	円形	C	28	26	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫少混。				
		SK188	Ⅰ B22	楕円形	C	55	40	17	黒褐～褐灰色（10YR3/1 ～ 4/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり普通。				
		SK189	Ⅰ B22	円形	C	37	36	14	黒褐～褐灰色(10YR3/1 ～ 4/1)ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり強。亜角礫混。				
		SK190	Ⅰ B22	円形	C	26	24	12	黒褐色（10YR3/2）砂質ｼﾙﾄ。地山との漸移層に類似。				
		SK191	Ⅰ G02	楕円形	C	65	34	21	黒褐色（10YR3/1）砂質ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫少混。				
		SK192	Ⅰ G02	楕円形	E	80	26	22	1. にぶい黄褐色土（10YR2/5 ～ 3/5）。粘性あり。しまり普通。砂、小礫混。2. にぶい黄褐色土(10YR2/5 ～ 3/5)。粘性あり。しまり普通。				
		SK193	Ⅰ G02	円形	C	43	42	16	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。小礫少混。				
		SK194	Ⅰ G02	楕円形	B	78	68	41	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり弱。（上部はやや固くなる）				底部中央凹む柱痕跡か
		SK195	Ⅰ G02	楕円形	A	38	20	12	黒褐色（10YR3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。				
		SK196	Ⅰ B23 Ⅰ G03	楕円形	C	40	26	33	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通。砂礫多混。				
		SK197	Ⅰ G03	楕円形	C	32	22	43	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまり普通。				
		SK198	Ⅰ G03	楕円形	C	50	36	16	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫微混。				
		SK199	Ⅰ G03	不整楕円形	E	45	38	21	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂礫少混。				

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長 (cm)	直交軸長 (cm)	深さ (cm)					
		SK200	Ⅰ G03	円形	C	35	31	20	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通。				
		SK201	Ⅰ G02	楕円形	C	64	50	25	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。		△ SK202		
		SK202	Ⅰ G02	楕円形	B	44	(26)	24	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。		▲ SK201		
		SK203	Ⅰ G07	楕円形	B	28	20	14	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK204	Ⅰ G02	楕円形	B	24	20	15	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。礫多混。		△ SK205		
		SK205	Ⅰ G02	楕円形	B	22	18	13	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまりやや強。礫少混。		▲ SK204		
		SK206	Ⅰ G03	円形	B	40	40	32	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。礫多混。		△ SK207		
		SK207	Ⅰ G03	楕円形	C	(35)	28	12	黒褐色（10YR3/1 ～ 3/2）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通～やや強。小礫～砂全体に混。		▲ SK206		
		SK208	Ⅰ G07	楕円形	C	30	24	20	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。西側と底部に砂礫混。黒色土ﾌﾞﾛｯｸと黄褐色砂質土混。				
		SK209	Ⅰ G07	楕円形	B	36	17	31	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。				
		SK210	Ⅰ G07	楕円形	E	68	55	48	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円～亜円礫全体に混。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。				底部西側凹む柱痕跡か
		SK211	Ⅰ G08	円形	C	45	42	17	黒褐色（10YR3/1）土ブロック、明黄褐色（10YR6/6）土ブロック、円礫の混合。粘性なし。しまり弱。				
		SK212	Ⅰ G04	楕円形	A	40	33	12	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性あり。しまりやや強。				
		SK213	Ⅰ B24	楕円形	B	25	20	14	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。底部中央尖る。				
		SK214	Ⅰ G04	円形	A	30	27	13	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。			弥生？	埋土類似
		SK215	Ⅰ G04	楕円形	A	60	46	14	褐灰色（10YR4/1）砂礫多混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通～弱。1cm 以下礫混。			弥生？	埋土類似
第 53 図	PL15	SK220	Ⅰ G05	円形	B	52	52	30	褐灰色（10YR3/1 ～ 4/1）砂礫多混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり普通～弱。1cm 以下（最大 3cm）礫混。	127 128		弥生後期	
		SK224	Ⅰ B22 Ⅰ G02	楕円形	C	65	52	28	黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂粒混。		△ SD07		
		SK225	Ⅰ G02	楕円形	B	50	40	54	上部：黒褐色（10YR3/2）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。砂粒混。下部：黄褐色砂質土。粘性ややなし。しまりやや弱。黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。		△ SD07		
		SK226	Ⅰ A25	円形	B	32	28	12	黒褐色(10YR3/1 ～ 3/2)ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。周囲よりやや暗色。				
		SK227	Ⅰ A25	不整楕円形	F	74	50	20	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。砂礫少混。				
		SK228	Ⅰ A25	楕円形	C	56	21	28	黒褐色（10YR3/1）礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3cm 円礫混。				
		SK229	Ⅰ A25	楕円形	C	22	35	7	黒褐色（10YR3/1）礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 以下円礫混。				
		SK230	Ⅰ F05	円形	B	30	27	17	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3cm 以下円礫少混。				
		SK231	Ⅰ F05	楕円形	B	41	32	19	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3cm 以下円礫少混。				
第 83 図		SK232	Ⅰ F03	円形	C	70	68	32	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫少混。			平安	
第 83 図		SK233	Ⅰ F03	円形	B	40	36	23	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫少混。			平安	
		SK234	Ⅰ F03	円形	B	36	36	16	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫少混。			平安？	埋土類似
		SK235	Ⅰ F03	不整楕円形	B	50	28	25	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。灰黄褐色砂質土ﾌﾞﾛｯｸ混。5cm 以下円礫少混。				
		SK236	Ⅰ F03	楕円形	C	82	58	37	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫少混。壁際底部に灰黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ多混。			平安？	埋土類似
第 83 図		SK237	Ⅰ F03	円形	B	63	62	27	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫少混。下半部にﾌﾞﾛｯｸ土全体に混。			平安	
		SK238	Ⅰ F03	円形	B	36	30	18	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。			平安？	埋土類似
		SK239	Ⅰ F03･08	楕円形	C	98	90	54	上半部：黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。5cm 円礫混。下半部：灰黄褐色(10YR4/3)砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ多混。5cm 円礫混。			平安？	埋土類似
		SK241	Ⅰ A14	楕円形	C	76	68	18	黒褐色(10YR3/1)砂混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。3cm 円礫混。				
		SK242	Ⅰ A19	円形	C	32	30	17	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。灰黄褐色砂、ﾌﾞﾛｯｸ土混。円礫混。				
		SK243	Ⅰ A15	円形	C	42	40	21	黒褐色（10YR3/1）砂混ｼﾙﾄ。粘性ややあり。しまり普通。円礫、灰黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ少混。				
		SK244	Ⅰ A20	円形	A	41	40	15	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり弱。黄褐色砂ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK245	Ⅰ A20	楕円形	C	36	30	17	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性なし。しまり弱。黄褐色砂ﾌﾞﾛｯｸ混。				
		SK246	Ⅰ A20	楕円形	C	50	33	19	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。にぶい黄褐色土粒混。				
		SK247	Ⅰ A15	円形	C	56	56	25	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3cm 以下円礫混。にぶい黄褐色土粒混。				
		SK248	Ⅰ A15	楕円形	C	50	38	19	褐灰色（10YR4/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性普通～なし。しまり普通～弱。3cm 以下円礫多混。				
		SK249	Ⅰ A15	楕円形	C	42	38	15	黒褐色（10YR3/1）砂礫混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。にぶい黄褐色土粒混。				
		SK250	Ⅰ A15 Ⅰ B11	楕円形	C	54	47	18	黒褐色（10YR3/2）砂混ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3cm 以下円礫少混。にぶい黄褐色土粒混。				
		SK251	Ⅰ B16	円形	C	34	34	13	褐灰色（10YR4/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。にぶい黄褐色土粒全体に混。				
		SK252	Ⅰ A19	円形	A	42	38	16	黒褐色（10YR3/1）砂質土ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。円礫少混。				
		SK253	Ⅰ A19	楕円形	B	96	69	37	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3 ～ 5cm 以下円礫～亜円礫多混。				
		SK254	Ⅰ A14	(楕円形)	C	(25)	56	21	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。1cm 以下小礫多混。				
		SK255	Ⅰ A19	楕円形	C	78	61	21	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。1cm 以下小礫多混。				
		SK256	Ⅰ A19	楕円形	C	79	65	33	黒褐色（10YR3/1）ｼﾙﾄ。粘性、しまり普通。3 ～ 5cm（最大 10cm）円礫～亜円礫多混。				
		SK257	Ⅰ F10	楕円形	B	40	24	23	黒褐色土(10YR2/2)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色粒 3% 混。3cm 細礫微混。				
		SK258	Ⅰ F10	楕円形	C	50	42	18	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり強。黄褐色粒 5% 混。5cm 礫下層に混。				

図版番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模					埋土	出土遺物掲載 No.	重複関係 △切る ▼切られる	時代	備考
				平面形	断面形	主軸長 (cm)	直交軸長 (cm)	深さ (cm)					
		SK259	Ⅰ F10	円形	B	22	22	20	黒褐色土(10YR2/2)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色粒 3% 混。				
		SK260	Ⅰ F10	楕円形	C	40	30	17	黒褐色土(10YR2/2)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色粒 3% 混。3cm 細礫微混。				
第 53 図		SK261	Ⅰ F10 Ⅰ G06	楕円形	C	49	34	17	黒褐色シルト（10YR2/2）。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色粒 3% 混。3cm 細礫微混。	129		弥生後期	
		SK262	Ⅰ G06	不整円形	E	60	55	21	黒褐色土（10YR2/2）。粘性ややあり。しまり強。3 ～ 5cm 細礫 10% 混。				
		SK263	Ⅰ G06	楕円形	C	44	38	16	黒褐色土（10YR2/2）。粘性ややあり。しまり強。3 ～ 5cm 細礫 10% 混。				
		SK264	Ⅰ G06	楕円形	B	58	52	35	黒褐色土(10YR2/2)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒混。3cm 細礫微混。				
		SK265	Ⅰ G06	楕円形	A	41	24	15	黒褐色土(10YR2/2)。粘性ややあり。しまり強。3 ～ 5cm 礫 10% 混。				
		SK266	Ⅰ G06･07	楕円形	A	40	30	20	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK267	Ⅰ G07	円形	B	18	16	11	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK268	Ⅰ G07	円形	B	24	22	14	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK269	Ⅰ G06･07	楕円形	D	70	36	17	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒 5% 混。				
		SK270	Ⅰ G07	円形	A	20	20	10	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK271	Ⅰ G06･07	楕円形	C	40	31	12	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK272	Ⅰ G07	楕円形	C	40	26	12	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK273	Ⅰ G07	不整楕円形	A	46	30	12	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK274	Ⅰ G06	不整楕円形	A	54	42	8	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK275	Ⅰ G06	円形	A	32	30	12	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK276	Ⅰ G07	円形	C	20	19	15	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK277	Ⅰ G07	円形	C	21	23	17	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK278	Ⅰ G07	楕円形	B	20	17	15	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK279	Ⅰ G07･12	不整円形	C	40	38	15	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				底面に浅い凹み 2 か所あり
		SK280	Ⅰ G07	円形	A	72	70	16	黒色土（10YR2/1）。粘性なし。しまり強。				
		SK281	Ⅰ G12	不整円形	A	24	20	10	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK282	Ⅰ G07	不整楕円形	A	74	62	17	黒色土（10YR2/1）。粘性なし。しまり強。				底面に浅い凹み 2 か所あり
		SK283	Ⅰ G07	楕円形	C	54	44	29	暗褐色土(10YR3/4)。砂礫。粘性なし。しまり普通。3cm 礫 10% 混。				
		SK284	Ⅰ G07･12	楕円形	B	50	44	28	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり普通。				
		SK285	Ⅰ G08･13	不整楕円形	F	(175)	118	68	黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。しまり強。3cm 細礫微混。		SK286（新旧不明）		
		SK286	Ⅰ G08･13	(楕円形)	C	(96)	(62)	41	黒褐色（10YR2/3）砂混シルト質。粘性なし。しまり普通。		SK285（新旧不明）	弥生？	埋土類似
第 53 図	PL15	SK287	Ⅰ G09	楕円形	C	128	96	63	黒褐色シルト(10YR3/2)。粘性なし。しまり普通。3cm 細礫微混。	130		弥生後期	
		SK288	Ⅰ G09	楕円形	A	88	70	19	黒褐色土（10YR3/2）。粘性なし。しまり普通。3cm 細礫微混。			弥生？	埋土類似
		SK289	Ⅰ G09	楕円形	C	102	68	21	黒褐色土（10YR3/2）。粘性なし。しまり強。3cm 細礫 10% 混。			弥生？	埋土類似
		SK290	Ⅰ G09･10	円形	C	(78)	75	23	黒褐色土（10YR3/2）。粘性なし。しまり普通。3cm 礫微混。		△ SK291	弥生？	埋土類似
		SK291	Ⅰ G10	不整楕円形	F	(132)	94	50	黒褐色土(10YR3/2)。粘性なし。しまり普通。1 ～ 3cm 細礫 20% 混。		▼ SK290 ▼ SK292	弥生？	埋土類似
		SK292	Ⅰ G10	楕円形	C	70	58	20	黒褐色土（10YR3/2）。粘性なし。しまり普通。3cm 礫微混。		△ SK291	弥生？	埋土類似
		SK293	Ⅰ G11	楕円形	A	42	36	15	黒色(10YR2/1)砂混シルト。粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK294	Ⅰ G11	円形	C	26	24	13	黒色(10YR2/1)砂混シルト。粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。礫少混。				
		SK295	Ⅰ G11	円形	C	30	30	14	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK296	Ⅰ G11	不整楕円形	A	46	26	16	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK297	Ⅰ G06･11	不整楕円形	F	55	30	20	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色粒 3% 混。				
		SK298	Ⅰ G11	円形	C	37	34	20	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK299	Ⅰ G11･12	楕円形	C	56	48	17	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。		△ SK300		
		SK300	Ⅰ G11･12	楕円形	A	(42)	28	11	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。		▼ SK299		
		SK301	Ⅰ G06･07	円形	A	20	20	12	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK302	Ⅰ G06･07	円形	A	15	13	12	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK303	Ⅰ G12	楕円形	C	41	20	19	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK304	Ⅰ G12	楕円形	E	63	48	33	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK305	Ⅰ G12	円形	B	28	26	20	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK306	Ⅰ G12	円形	B	21	20	15	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。粗砂少混。				
		SK307	Ⅰ G12	楕円形	C	60	36	24	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
		SK308	Ⅰ G13	楕円形	A	70	18	11	暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒 3% 混。				
第 54･55 図	PL15	SD06	IG03	長楕円形	C	166	75	44	暗褐色土（10YR3/4）砂混シルト。粘性なし。しまり強。1 ～ 3cm 細礫 10% 混。黄褐色粒 3% 混。			弥生～古墳？	
第 54･55 図	PL15	SD07	IB22 IG02	長楕円形	C	228	92	52	黒褐色土（10YR3/1）粘性やや強。しまり強。黄褐色土 3% 混。5cm 礫少混。		▼ SK224 ▼ SK225	弥生～古墳？	
第 54･55 図	PL15	SD08	IB22	長楕円形	D	187	60	33	黒褐色土（10YR3/1）粘性やや強。しまり強。黄褐色土 3% 混。5cm 礫少混。上部細礫多混。			弥生～古墳？	
第 54･55 図	PL15	SD09	IA25	長楕円形	F	260	120	55	黒褐色(10YR3/1)砂混シルト。粘性なし。しまり強。黄褐色土 5% 混。上層に 3 ～ 7cm 細礫多混。			弥生～古墳？	
第 54･55 図	PL15	SD10	IF05	長楕円形	F	263	90	35	黒褐色(10YR3/1)砂混シルト。粘性なし。しまり強。黄褐色土 5% 混。礫少混。		▼ SD01	弥生～古墳？	

第 16 表　縄文土器一覧

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	破片数	重量（g）							
第 25 図 2	PL30	270	1c	遺構外	SD02･03	縄文前期前半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	5.0	10YR2/1 黒色	10YR2/2 黒褐色	白色粒子少、石英微、繊維多	良	沈線 2 本横方向		繊維含む
第 25 図 3	PL30	283	1c	遺構外	SD03 下層	縄文前期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	29.9	7.5YR4/3 褐色	5YR5/6 明赤褐色	赤褐色粒子多、白色粒子 ･2 ～ 3mm 礫少、石英微	良	条痕文	ナデ ?･ 摩耗	諸磯 b
第 25 図 4	PL30	343	1c	遺構外	Ⅰ F9 検	縄文中期	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	-	-	1	4.8	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良			折り返し口縁
第 25 図 5	PL30	296	2a	遺構外	SB04No.9	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	-	-	1	28.3	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	5mm 礫多、石英微	良	隆線左右区画内部磨消縄文	口唇部圧痕	キャリパー形、加曾利ＥⅢ
第 25 図 6	PL30	377	2c	遺構外	Ⅲ層	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	-	-	1	40.1	5YR5/6 明赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子 ･2mm 礫少、石英微	良	口縁部斜縄文、圧痕隆帯		加曾利ＥⅢ
第 25 図 7	PL30	284	1c	遺構外	SD03, Ⅲ層	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	-	-	5	197.1	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	赤褐色粒子・白色粒子多、石英・雲母微	良	口縁部上面刺突、沈線文→隆帯、摩耗	剥離、摩耗	唐草文系
第 25 図 8	PL30	285	1a	遺構外	SD03	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	2	21.8	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英微	良	縄文・摩耗	ナデ ?･ 摩耗	加曾利ＥⅢ
第 25 図 9	PL30	340	1c	遺構外	検	縄文中期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	31.0	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/2 明褐灰色	白色粒子・石英少、2 ～ 5mm 礫微	良	斜縄文・摩耗		
第 25 図 10	PL30	298	2a	遺構外	SB04 北東	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	6.8	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR6/6 橙色	2 ～ 3mm 礫少、赤褐色粒子・石英微	良	斜縄文	摩耗	
第 25 図 11	PL30	342	1c	遺構外	Ⅲ層	縄文中期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	10.5	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	白色粒子・石英 ･2mm 礫微	良	斜縄文		
第 25 図 12	PL30	311	1c	遺構外	SB17 東 2 層	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	16.2	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子多、赤褐色粒子 ･2mm 礫少	良	斜縄文		
第 25 図 13	PL30	299	2a	遺構外	SB04	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	8.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/6 橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	斜縄文	剥離	
第 25 図 14	PL30	287	1a	遺構外	SD03	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	4	44.7	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR4/3 褐色	白色粒子・石英微	良	斜縄文		
第 25 図 15	PL30	360	2a	遺構外	Ⅲ層	縄文中期後半	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	67.0	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子多、赤褐色粒子・石英 ･2 ～ 3mm 礫少	良	斜縄文→縦縄文、U 字区画内磨消		加曾利ＥⅢ
第 25 図 16	PL30	339	1c	遺構外	Ⅲ層	縄文中期前半	縄文土器	台付？深鉢	接合部	10%	-	-	(2.9)	2	60.4	5YR5/6 明赤褐色	10YR5/1 褐灰色	白色粒子多、2 ～ 3mm 礫少、石英微	良	縦沈線文、横沈線文	胴部側ナデ？高台側ナデ？	五領ヶ台
第 25 図 17	PL30	031	2c	遺構外	SB02 北西	縄文後期	縄文土器	深鉢？	胴部	-	-	-	-	1	8.4	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR3/2 黒褐色	白色粒子微	良	斜縄文	ハケ・ナデ	
第 25 図 18	PL30	286	1a	遺構外	SD03	縄文後期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	2	18.8	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子・石英 ･4mm 礫微	良	斜縄文・摩耗		
第 25 図 19	PL30	297	2a	遺構外	SB04 北東	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	6.0	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	白色細粒子少、雲母微	良	条痕文・摩耗		
第 25 図 20	PL30	305-1	1c	遺構外	SB15 南	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	9.3	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR4/2 灰褐色	白色粒子少、石英・雲母微	良	条痕文・摩耗	摩耗	
第 25 図 21	PL30	305-2	1c	遺構外	SB15	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	7.9	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	2 ～ 4mm 礫多、赤褐色粒子・石英微	良	条痕文・摩耗	摩耗	
第 25 図 22	PL30	306	1c	遺構外	SB15No.46	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	10.2	7.5YR6/6 橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・褐色粒子少・石英微	良	条痕文・摩耗	ナデ ?･ 摩耗	
第 25 図 23	PL30	344-2	1c	遺構外	Ⅲ層	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	11.7	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、2mm 礫微	良	条痕文		
第 25 図 24	PL30	344-1	1c	遺構外	Ⅲ層	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	2	18.4	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	2mm 礫多、白色粒子・赤褐色粒子少、石英微	良	条痕文		
第 25 図 25	PL30	345	1c	遺構外	検	縄文晩期	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	-	1	15.7	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色粒子・褐色粒子 ･2 ～ 4mm 礫少、石英微	良	細密条痕文		

第 17 表　弥生土器一覧

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 24 図 1	PL5 30	090	1c	SQ02	SQ02,1c 表	弥生前期	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	50%	<16.4>	-	(19.8)	470.6	<17.2>	2.5YR4/6 赤褐色	5YR4/4 にぶい赤褐色	白色細粒子多、赤褐色粒子微	良	口縁部摩耗・不明、胴部ハケ→波状文？・摩耗	口縁部ナデ、胴部ナデ		
第 27 図 26	PL5 30	012	2c	SB01	No.1	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	12.3	4.2	6.2	210.0	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色粒子多、赤褐色粒子・雲母少、石英・2mm 礫微	良	横ミガキ・摩耗、底面ナデ？摩耗	横ミガキ・摩耗	内外面	口縁部円孔一対
第 27 図 27	PL30	007	2c	SB01	SB1	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	14.0	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	石英・褐色粒子・白色粒子・雲母微	良	横ミガキ、櫛描簾状文	横ミガキ		
第 27 図 28	PL30	006	2c	SB01	No.4	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	10%	<20.8>	-	(5.1)	34.1	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5R4/6 赤色	褐色粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	横ミガキ？摩耗	横ミガキ・摩耗	内面	
第 27 図 29	PL30	009	2c	SB01	床	弥生後期	弥生土器	甕（台付？）	頸部～胴部	-	-	-	-	10.3	-	10YR4/2 灰黄褐色	10YR5/1 褐灰色	白色粒子少、石英微	良	ハケ、頸部櫛描簾状文、胴部櫛描波状文	摩耗		
第 27 図 30	PL30	010	2c	SB01	北東床	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	<23.0>	-	-	26.1	-	10YR3/3 暗褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	褐色粒子・石英・雲母微	良	櫛描波状文	摩耗		
第 27 図 31	PL30	011	2c	SB01	南東	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	-	-	-	-	30.3	-	7.5YR4/3 褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	褐色粒子少、雲母微	良	ハケ、頸部櫛描 T 字文、胴部櫛描波状文	ナデ		破片下部一側面に磨痕
第 30 図 42	PL31	027	2c	SB02	No.3,No.10, 北西	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～体部	10%	<22.8>	-	(11.4)	162.2	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色細粒子少、雲母・石英微	良	ミガキ・摩耗	横ミガキ	内外面	
第 30 図 43	PL31	028	2c	SB02	No.8, 北東	弥生後期	弥生土器	高坏	坏部	10%	<20.8>	-	(4.0)	32.9	-	7.5R4/6 赤色	7.5R4/6 赤色	白色粒子多、石英微	良	横ミガキ	口唇ナデ・横ミガキ・摩耗、坏部ハケ？横ミガキ・摩耗	内外面	
第 30 図 44	PL30	025	2c	SB02	No.7, 北西	弥生後期	弥生土器	高坏	口縁部～接合部	40%	<16.6>	-	(10.0)	280.7	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色細粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	上半横ミガキ、下半縦ミガキ	横ミガキ？摩耗	内外面	
第 30 図 45	PL30	026	2c	SB02	No.5	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部	10%	-	-	(3.7)	78.5	-	10R4/6 赤色	坏部 10R4/6 赤色、脚部 7.5YR7/6 橙色	白色細粒子少、褐色粒子・黒色粒子微	良	ハケ？縦ミガキ・摩耗	坏側ナデ・ミガキ・摩耗、坏裏側ナデ、脚側ハケ	内外面	
第 30 図 46	PL30	017	2c	SB02	No.8	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	10%	-	9.8	(4.8)	69.5	-	7.5R4/6 赤色	10YR4/2 灰黄褐色	白色細粒子少、雲母・石英微	良	縦ミガキ	ナデ	外面	
第 30 図 47	PL30	030	2c	SB02	No.7	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部～脚部	10%	-	-	(7.3)	196.6	-	2.5YR5/6 赤褐色	坏部 7.5YR6/4 にぶい橙色 脚部 2.5YR4/4 にぶい赤褐色	白色細粒子少、赤褐色粒子・雲母・石英微	良	ハケ	接合部坏側ハケ→ミガキ、脚側ハケ		
第 30 図 48	PL31	029	2c	SB02	No.3,No.6, 北西 , 北東	弥生後期	弥生土器	高坏	坏部	10%	<24.4>	-	(9.7)	178.7	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	口唇ナデ？ミガキ？摩耗、坏部ミガキ？摩耗、縦ミガキ・摩耗	横ミガキ	内外面	鍔縁状口縁
第 30 図 49	PL31	019	2c	SB02	No.1	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	27.2	-	7.5R3/6 暗赤色	10YR3/2 黒褐色	白色細粒子・石英少、褐色粒子・雲母微	良	ミガキ、箆描直線文、鋸歯文	摩耗	外面	
第 30 図 50	PL31	016	2c	SB02	南東	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	74.5	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・石英微	良	ミガキ、箆描直線文、鋸歯文	ハケ・摩耗		
第 30 図 51	PL30	014	2c	SB02	No.4,No.7,No.9, No.10, 南西 ,2c Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20%	<23.6>	-	(8.6)	423.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5R4/6 赤色	10YR7/2 にぶい黄橙色 7.5R4/6 赤色	白色粒子・褐色粒子・雲母・石英微	良	口唇ナデ・沈線、口縁部ハケ	ハケ	内外面	
第 30 図 52	PL6 30	013	2c	SB02	No.11	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	30%	<23.6>	-	(16.1)	633.0	-	7.5YR7/3 にぶい橙色 7.5R4/6 赤色	7.5YR5/1 褐灰色 7.5R4/6 赤色	白色粒子・褐色粒子・石英微	良	口唇横ミガキ、口縁部縦ミガキ・摩耗、頸部ハケ・ミガキ、箆描横羽状文・鋸歯文	口縁部横ミガキ・摩耗、頸部ハケ・横ミガキ、ハケ・ナデ	外面、口縁部内面	
第 30 図 53	PL31	015	2c	SB02	No.13, 南東 , 北東 , 北西	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	30%	-	-	(22.0)	1045.8	<32.2>	10YR5/3 にぶい黄褐色 7.5R4/8 赤色	10YR5/1 褐灰色	白色粒子・褐色粒子少、雲母微	良	上半縦ミガキ・摩耗、下半摩耗	上半横ハケ・ナデ、下半縦ハケ・ナデ・摩耗	胴部上半外面	
第 30 図 54	PL31	018	2c	SB02	No.8	弥生後期	弥生土器	赤彩深鉢	底部	10%	-	5.6	(1.8)	42.0	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色細粒子・石英少	良	ナデ・ミガキ・摩耗、底面ナデ？	ナデ・ハケ・ミガキ・摩耗	内外面	
第 30 図 55	PL31	023	2c	SB02	北西	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	-	-	-	8.5	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色細粒子・赤褐色粒子微	良	口唇圧痕、櫛描波状文・摩耗	ハケ・ナデ・摩耗		

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 30 図 56	PL31	020-1	2c	SB02	北東	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～頸部	-	<27.0>	-	-	31.0	-	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	赤褐色粒子・白色細粒子微	良	口縁部櫛描波状文、頸部櫛描簾状文	横ミガキ		
第 30 図 57	PL31	020-2	2c	SB02	No.8, 北東	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	-	-	-	-	16.4	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色細粒子微	良	頸部櫛描波状文、櫛描簾状文、ハケ→櫛描波状文	横ミガキ		
第 30 図 58	PL31	021	2c	SB02	北西 ,2c Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴部	10%	<12.0>	-	(11.3)	86.3	<11.6>	5YR3/2 暗赤褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色細粒子少・雲母、石英微	良	口唇ナデ、口縁部櫛描波状文 8 本下→上、頸部櫛描簾状文 8 本、胴部上半ハケ→櫛描波状文 8 本下→上、胴部下半剥離	ハケ・ミガキ		
第 30 図 59	PL31	022	2c	SB02	No.7,9	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～頸部	10%	<23.6>	-	(7.2)	103.7	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色細粒子、赤褐色細粒子・石英・雲母微	良	口唇圧痕、口縁部櫛描波状文 4 本上→下・下→上	口唇ナデ・ミガキ・摩耗、口縁部ハケ・ミガキ？摩耗		
第 30 図 60	PL6 31	024	2c	SB02	No.12	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	90%	5.7	4.2	5.0	80.6	5.9	7.5R4/6 赤色	7.5R4/6 赤色 2.5YR5/6 明赤褐色	白色細粒子 ·2mm 礫少、石英・雲母微	良	口縁部櫛描波状文、頸部櫛描簾状文、胴部工具によるナデ・ハケ、底面ナデ	口縁部ハケ・ナデ、頸部工具によるナデ、胴部ハケ、底部ナデ	外面 口縁部内面	ミニチュア
第 33 図 63	PL31 33	048	1b	SB03	Pit5, 南西	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	10%	-	12.6	(6.9)	140.4	-	10R4/6 赤色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色細粒子・赤褐色粒子・石英微	良	縦ミガキ、摩耗	ハケ→ナデ	外面	
第 33 図 64	PL33	050	1b	SB03	Pit2,SB2 No.15	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	10%	-	<13.8>	(7.5)	76.6	-	10R4/6 赤色	7.5YR4/2 灰褐色	白色粒子少、褐色粒子 ·2mm 礫・石英・雲母微	良	ミガキ	ハケ・ナデ	外面	
第 33 図 65	PL31 33	049	1b	SB03	No.31	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部～脚部	20%	-	<10.2>	(10.7)	248.2	-	10R4/6 赤色	7.5YR6/3 にぶい褐色	白色粒子少、石英・赤褐色粒子・黒褐色粒子微	良	ミガキ	接合部坏側剥離、脚側上部ナデ工具痕、下部ナデ	外面 内面部分的に残存	
第 33 図 66	PL33	038	1b	SB03	北西	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	51.0	-	10R4/8 赤色 10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/3 にぶい橙色	白色粒子・石英・雲母微	良	櫛描 T 字文（直線文＋垂下文 2 本）	ハケ→ナデ	胴側外面	
第 33 図 67	PL33	041	1b	SB03	No.44, 北東床下	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	56.1	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・黒褐色粒子・石英微	良	櫛描直線文、櫛描波状文	摩耗		
第 33 図 68	PL33	037	1b	SB03	No.14,No.32, No.41, 北西 , 北東床下	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	10%	-	-	(15.3)	175.3	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色細粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	ハケ、ハケ→櫛描 T 字文、ハケ→ミガキ	ハケ・ミガキ・摩耗・剥離、ハケ・摩耗・剥離	口縁部内面	
第 33 図 69	PL31 32	036	1b	SB03	No.16,No.41,Pit10	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	10%	<17.8>	-	(9.0)	198.1	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	石英・白色粒子・赤褐色粒子微	良	口唇ナデ→横ミガキ、口縁ハケ→上半斜めミガキ・下半縦ミガキ、頸部櫛描直線文（7 本 1 単位）	ハケ→横ミガキ、頸部部分的剥離		
第 33 図 70	PL31 32	035	1b	SB03	No.5,No.6,No.8, No.15,No.43, No.44,Pit10, 北西	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	10%	18.4	-	(14.5)	512.2	-	10R4/6 赤色 5YR5/6 明赤褐色	10R4/6 赤色 5YR5/6 明赤褐色	5mm 礫・白色粒子多、赤褐色粒子少、石英微	良	縦ミガキ、櫛描直線紋、櫛描波状文	ハケ・ミガキ・摩耗、ハケ	口縁部内外面	
第 33 図 71	PL31 32	034	1b	SB03	No.9,No.10,No.11, No.12,No.32, No.41,Pit10, 北東 , 北西	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	20%	-	-	(12.2)	301.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/2 灰褐色	白色粒子・褐色粒子少、石英・雲母微	良	ハケ→ミガキ・摩耗、櫛描 T 字文、ハケ・ミガキ、ミガキ	ハケ		
第 33 図 72	PL31 32	032	1b	SB03	No.15,No.34, No.41,No.43, No.44,Pit10, 南西 , 北西 , 北東	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	10%	-	-	(20.0)	356.7	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・白色細粒子・石英・雲母微	良	ハケ摩耗、ハケ→篦描横羽状文、鋸歯文（内部刺突）、ハケ	ハケ・ミガキ？摩耗、ハケ・ナデ？摩耗、ハケ		
第 33 図 73	PL33	039	1b	SB03	No.41, 北西	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	10%	-	-	(11.5)	204.4	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	白色粒子・石英微	良	櫛描 T 字文・円形浮文、ミガキ	ナデ、ハケ		
第 33 図 74	PL33	033	1b	SB03	No.1,No.16,No.21, No.27,No.29, 北西 ,SB3	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	10%	-	-	(29.8)	748.8	<48.0>	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色細粒子・赤褐色粒子・石英微	良	縦ミガキ、ハケ→縦ミガキ	横ハケ、ハケ摩耗、ハケ		
第 33 図 75	PL31 33	040	1b	SB03	No.18	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	11.6	(6.8)	721.5	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色細粒子・雲母・石英・赤褐色粒子微	良	ミガキ、削り 底面削り	ハケ→ナデ？		

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 33 図 76	PL33	043	1b	SB03	No.25	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	<4.9>	(2.1)	28.1	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・褐色粒子・石英・雲母微	良	ミガキ 底面ミガキ	ハケ・ナデ		
第 33 図 77	PL33	042	1b	SB03	No.16	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	5.0	(3.3)	77.3	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母・石英微	良	ハケ・ナデ・摩耗、工具によるナデ	ナデ、ハケ・ミガキ？		底面に穀物？の圧痕有り
第 33 図 78	PL33	047	1b	SB03	No.1	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	9.7	(13.2)	239.0	-	7.5YR5/6 明褐色	10YR7/3 にぶい黄橙色	3mm 礫、赤褐色粒子・白色細粒子・石英・雲母微	良	ハケ→ミガキ、底面ナデ	摩耗		
第 34 図 79	PL31 32	001	1b	SB03	No.19,No.20, No.21,No.24, No.27,No.33, No.36,No.37, No.38,No.42,SB3 南東 ,SB3	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～底部	60%	27.5	8.8	50.1	3264.0	<31.9>	10R4/6 赤色 5YR6/6 橙色	10R4/6 赤色 7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒子多、白色粒子少、石英・雲母微	良	口縁部ハケ→縦ミガキ、頸部櫛描Ｔ字文、胴部ハケ→横ミガキ、縦ミガキ	口縁部横ミガキ、頸部～胴部ハケ・摩耗、底部ハケ	口縁部内外面、胴部外面	
第 34 図 80	PL31 33	045	1b	SB03	No.4,No.6,No.34, No.43, 北西	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴部	10%	-	-	(9.4)	161.8	<20.0>	2.5YR4/6 赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	白色細粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	櫛描簾状文、摩耗、櫛描波状文、摩耗、ハケわずか	ハケ→ミガキ・摩耗		
第 34 図 81	PL31 33	044	1b	SB03	No.2,No.3,No.11, No.32,No.43	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴部	20%	-	-	(14.9)	201.0	<33.6>	7.5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	ハケ・櫛描波状文、櫛描簾状文、円形浮文、ハケ･櫛描波状文、櫛描縦羽状文	ナデ？摩耗、ハケ・ナデ？摩耗		
第 34 図 82	PL33	046	1b	SB03	No.11	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴部	-	-	-	-	94.6	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	白色粒子・褐色粒子・雲母・石英微	良	櫛描簾状文、櫛描波状文・摩耗？、ハケ？摩耗	ハケ？摩耗		
第 34 図 83	PL31 33	051	1b	SB03	No.41,No.46, 北西	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	70%	7.4	4.2	5.9	93.1	8.4	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・石英微	良	口縁指押え痕・ナデ、下半工具によるナデ、底面工具によるナデ	ハケ→ナデ		
第 35 図 87	PL33	057	2a	SB04	No.1, 北西 ,SB04	弥生後期	弥生土器	高坏	坏部	10%	<17.6>	-	(4.4)	80.8	口縁部最大径<18.0>	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色細粒子少、石英・雲母微	良	口唇～坏部摩耗	ハケ	内外面	鍔縁状口縁
第 35 図 88	PL8 33	052	2a	SB04	No.2,No.3,PitNo.1, SB4	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	20%	-	-	(17.3)	1521.3	-	10R4/6 赤色 10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・白色粒子・石英・雲母微	良	頸部ハケ→鋸歯文・ミガキ、ハケ→縦ミガキ	ハケ→ナデ	外面	胴部穿孔
第 35 図 89	PL33	055	2a	SB04	Pit2No.1	弥生後期	弥生土器	赤彩深鉢	底部～台部	10%	-	8.2	(5.4)	170.7	-	10R4/6 赤色	深鉢側 10YR7/3 にぶい黄橙色 台側 7.5YR5/4 にぶい褐色	白色細粒子多、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	剥離	接合部深鉢側ナデ・爪？圧痕、台側ナデ	外面	
第 35 図 90	PL33	054	2a	SB04	南西	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	15.8	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR5/6 明赤褐色	赤褐色粒子・白色粒子・石英微	良	箆描直状文、鋸歯文	ハケ、ナデ		
第 35 図 91	PL33	056	2a	SB04	北西	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	-	-	-	2.8	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	櫛描波状文	ナデ		
第 37 図 94	PL34	069	2a	SB09	No.12	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～体部	10%	<16.6>	-	(6.6)	24.9	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	ハケ＋ナデ？摩耗	ハケ→ミガキ・摩耗		
第 37 図 95	PL34	070	2a	SB09	北東	弥生後期	弥生土器	高坏	脚裾部	10%	-	<10.6>	(4.6)	31.8	-	10R4/6 赤色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・褐色粒子少、雲母・石英微	良	ミガキ・摩耗	ナデ・摩耗	外面	
第 37 図 96	PL34	071	2a	SB09	No.9	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部～脚部	30%	-	<10.7>	(10.6)	280.9	-	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	ミガキ・摩耗	坏側ミガキ・摩耗、脚側ナデ、ハケ、ナデ	内外面	
第 37 図 97	PL34	067	2a	SB09	北西	弥生後期	弥生土器	甑	底部	10%	-	<6.0>	(2.1)	15.6	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子・石英微	良	工具によるナデ・削り・摩耗、底面削り？摩耗	ナデ＋ミガキ？摩耗		
第 37 図 98	PL34	058	2a	SB09	床下北東	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	10%	-	-	(9.0)	90.6	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	10R4/6 赤色 7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・石英少、赤褐色粒子微	良	口縁ミガキ、頸部ハケ・箆描Ｔ字文	口縁ミガキ、頸部ナデ・剥離	口縁部内面	
第 37 図 99	PL34	061	2a	SB09	南東	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	<7.0>	(3.6)	36.8	-	10R4/6 赤色 10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・褐色粒子・石英･4mm 礫（褐色粒子）少	良	ミガキ・摩耗	ハケ？部分的剥離、底面ナデ	外面	

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 37 図 100	PL34	060	2a	SB09	No.13,14, 床下北西	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	20%	-	-	(17.1)	389.1	<32.3>	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子・褐色粒子少、赤褐色粒子・雲母・石英微	良	ハケ→ミガキ	胴上半ハケ、胴最大ナデ、胴下半ハケ	内面一部付着	
第 37 図 101	PL34	068	2a	SB09	床下北東	弥生後期	弥生土器	甕	胴部	-	-	-	-	12.1	-	10YR3/1 黒褐色	10YR4/2 灰黄褐色	白色粒子・石英・雲母微	良	ハケ・櫛描縦羽状文	ハケ＋ミガキ		
第 37 図 102	PL34	064	2a	SB09	Pit8	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	-	-	-	8.0	-	7.5YR3/3 暗褐色	5YR4/4 にぶい赤褐色	白色粒子・褐色粒子・石英微	良	口唇ナデ、櫛描波状文	ナデ、ミガキ		
第 37 図 103	PL34	065	2a	SB09	南東	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	-	-	-	10.8	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR3/1 黒褐色	白色粒子・石英・雲母微	良	口唇ナデ、櫛描波状文	ミガキ		
第 37 図 104	PL34	066	2a	SB09	北西	弥生後期	弥生土器	甕	胴部	-	-	-	-	6.5	-	7.5YR2/2 黒褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・石英・雲母微	良	櫛描波状文	摩耗・豆粒大の圧痕		
第 37 図 105	PL34	063	2a	SB09	南東	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	-	-	-	-	10.1	-	2.5Y3/2 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色	白色粒子・雲母・石英微	良	櫛描簾状文、ハケ・櫛描斜状文	ミガキ		
第 39 図 106	PL34	072	1c	SB16	SB16	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	26.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/6 明褐色	白色細粒子・赤褐色細粒子少、石英微	良	篦描直線文、篦描鋸歯文、摩耗	ナデ・摩耗		
第 39 図 107	PL34	073	1c	SB16	北東	弥生後期	弥生土器	甕	頸部	-	-	-	-	25.0	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子多、石英・雲母少	良	櫛描簾状文、櫛描波状文	ハケ＋ナデ？、摩耗		
第 40 図 108	PL10 34	086	1c	SB17	No.2	弥生後期	弥生土器	片口鉢	口縁部～底部	90%	9.1	5.2	6.9	215.5	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色粒子多、赤褐色粒子・2mm 礫・石英少、雲母微	良	ハケ・ミガキ？・摩耗底面ナデ・摩耗	ハケ・ミガキ？・摩耗		
第 40 図 109	PL34	085	1c	SB17	西 1 層	弥生後期	弥生土器	高坏	接合部～脚部	10%	-	-	(4.8)	43.8	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	7.5YR5/6 明褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	ハケ→ミガキ？摩耗	ハケ→ナデ		
第 40 図 110	PL10 34	081	1c	SB17	No.3, 東 2 層	弥生後期	弥生土器	壺	胴部～底部	20%	-	6.4	(12.5)	542.0	11.0	7.5R4/6 赤色	7.5YR7/4 にぶい橙色	白色細粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	ハケ→縦ミガキ・摩耗底面ナデ・ミガキ	ハケ、ミガキ	外面	小形、頸部より上方欠損
第 40 図 111	PL34	077	1c	SB17	西 1 層 , 北 1 層	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	10%	<19.6>	-	(6.7)	67.5	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR4/3 にぶい赤褐色	赤褐色粒子・白色細粒子少、石英微	良	口唇ナデ・横ミガキ、ハケ→縦ミガキ	ハケ・横ミガキ、頸側剥離		口縁端部わずかに内湾
第 40 図 112	PL34	075	1c	SB17	北 2 層 , 東 2 層 , 南 2 層	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	10%	<27.6>	-	(10.1)	820.0	口縁部最大径 28.4	7.5YR6/6 橙色	7.5R4/6 赤色 10YR7/4 にぶい黄橙色	石英少、2mm 礫・白色細粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	口唇横ミガキ、縦ミガキ	口唇ナデ、横ミガキ	内面口縁端部	口縁端部わずかに内湾
第 40 図 113	PL34	076	1c	SB17	No.1, 西 1 層	弥生後期	弥生土器	壺	底部	10%	-	<11.0>	(4.9)	285.5	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、3mm 礫・石英・雲母微	良	胴側剥離、ミガキ？工具によるナデ・工具痕？底面ナデ・削り	ナデ？摩耗		
第 40 図 114	PL34	079	1c	SB17	西 1 層	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	36.6	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5R4/6 赤色	白色細粒子少、黒色粒子微	良	ハケ、ハケ→櫛描直線文	ハケ→ミガキ	内面	
第 40 図 115	PL34	078	1c	SB17	西 1 層	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	27.8	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	櫛描T字文、鋸歯文	ハケ・ナデ？		
第 40 図 116	PL34	080	1c	SB17	西 1 層	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	21.5	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色細粒子・赤褐色細粒子少、雲母・石英微	良	櫛描T字文、ハケ・ミガキ・鋸歯文	上部剥離、ナデ		
第 40 図 117	PL34	084	1c	SB17	北 2 層	弥生後期	弥生土器	甕	胴部	-	-	-	-	9.5	-	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	櫛描波状文、ミガキ？摩耗	ミガキ		
第 40 図 118	PL34	082	1c	SB17	SB17	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	-	-	-	20.3	-	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR2/2 黒褐色	白色粒子・石英微	良	口唇ナデ、櫛描波状文	ナデ＋横ミガキ		
第 40 図 119	PL34	083	1c	SB17	北 2 層	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	<17.5>	-	(3.4)	23.9	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色細粒子少、石英微	良	櫛描波状文	ナデ･横ミガキ、ハケ･横ミガキ		
第 42 図 120	PL12 34	246	1c	ST01	Pit5No.1,1c Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	10%	-	-	(14.4)	566.1	-	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	2mm 礫・白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	ハケ→縦ミガキ	横ハケ、下部一部剥離		
第 46 図 121	PL13 14 35	002	2a	SM02	SM02,2a 表	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	70%	-	14.0	(62.1)	11700.0	43.8	10R3/6 暗赤色 7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	頸部櫛描T字文・摩耗、胴上半ハケ→縦ミガキ・摩耗、胴下半ハケ→ミガキ、ハケ・ナデ・摩耗	ハケ→ナデ、ハケ、ハケ・摩耗、底部ナデ	外面	胴部焼成後穿孔有り

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 47 図 122-1	PL13 14 36	003-1	2a	SM02	SM02	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	60%	<28.4>	-	（8.6）	587.0	-	10R4/6 赤色 5YR6/6 橙色	10R4/6 赤色 10YR5/3 にぶい黄褐色	白色細粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	ハケ？、ミガキ？・摩耗・不明	ミガキ？・摩耗・不明	内外面かすかに赤彩残る	
第 47 図 122-2	PL13 14 36	003-2	2a	SM02	SM02	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	60%	-	12.8	（48.6）	3500.0	43.2	10R4/6 赤色 5YR5/6 明赤褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	白色細粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	頸部櫛描Ｔ字文、胴上半ハケ→ミガキ、胴下半ミガキ	ハケ、胴部最大部分剥離	外面	
第 48 図 123	PL13 14 37	004	2a	SM02	SM02	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	40%	-	15.8	（63.9）	5500.0	<42.1>	10R3/6 暗赤色 10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・黒褐色粒子・石英・雲母微	良	ミガキ、櫛描Ｔ字文、ミガキ	ミガキ、ハケ→ナデ、ハケ、底部ナデ	内外面	
第 49 図 124	PL13 14 36	005	2a	SM02	SM02	弥生後期	弥生土器	甕	胴部～底部	60%	-	<11.4>	（37.6）	3100.0	<41.0>	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・2mm 礫少、石英微	良	胴上半ハケ→櫛描波状文、胴下半ハケ	ハケ		
第 51 図 125-1	PL14 38	087-1	1c	SM03	No.13	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	30%	<26.6>	-	（9.3）	200.0	-	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	白色粒子少、赤褐色粒子・黒色粒子・石英微	良	ハケ→櫛描波状文、櫛描簾状文、櫛描波状文	ナデ・ハケ		
第 51 図 125-2	PL14 38	087-2	1c	SM03	No.5,No.6,No.7, No.8,No.9,No.10, No.11,No.12, SM3	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～底部	30%	-	10.0	（35.4）	1910.0	<39.4>	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	白色粒子少、赤褐色粒子・黒色粒子・石英微	良	櫛描簾状文、胴上半ハケ→櫛描波状文、胴下半ハケ→ミガキ、底部ハケ・削り	ナデ・ハケ、底部ナデ		
第 53 図 127	PL34	289	1c	SK220	SK220	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～体部	10%	<23.0>	-	（3.7）	25.6	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	白色粒子・石英少、2mm 礫・雲母微	良	横ミガキ	横ミガキ	内外面	器種名要検討
第 53 図 128	PL34	288	1c	SK220	SK220	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～頸部	10%	<13.0>	-	（3.5）	14.1	-	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR3/3 暗赤褐色	白色細粒子少、2mm 礫・石英微	良	櫛描波状文、櫛描簾状文	ナデ		小形
第 53 図 129	PL34	290	1c	SK261	SK261	弥生後期	弥生土器	甕	胴部～底部	10%	-	<9.2>	（4.2）	23.9	-	5YR5/6 明赤褐色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英微	良	ハケ・櫛状工具による斜条文、摩耗･不明、底面木葉痕	ハケ、ナデ		
第 56 図 131	PL15 34	089	2a	SQ01	SQ01	弥生後期	弥生土器	壺	胴部～底部	30%	-	<4.3>	（11.1）	95.1	<12.6>	10R4/6 赤色 7.5YR7/6 橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	2mm 礫少、白色粒子・褐色粒子・石英微	良	摩耗・不明	摩耗・不明	外面かすかに	小形
第 56 図 132-1	PL15 34	088-1	2a	SQ01	SQ01	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴部	30%	<12.8>	-	（15.1）	135.8	<13.0>	2.5YR4/6 赤褐色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子・赤褐色粒子 ･2mm 礫少、石英微	良	口縁部櫛描波状文、頸部櫛描簾状文、胴部櫛描波状文	摩耗・不明		小形
第 56 図 132-2	PL15 34	088-2	2a	2a	表	弥生後期	弥生土器	甕	底部	10%	-	<4.9>	（1.3）	32.6	-	2.5YR4/6 赤褐色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子・赤褐色粒子 ･2mm 礫少、石英微	良	底面摩耗・不明	底部摩耗・ナデ		小形
第 57 図 133	PL38	307	1c	遺構外	SB15 東	弥生前期末～中期初頭	弥生土器	壺	胴部	-	-	-	-	9.0	-	10YR8/1 灰白色	10YR5/2 灰黄褐色	2 ～ 3mm 白色礫少、石英微	良	剥離、条痕文・摩耗	ハケ、摩耗・不明		条痕文
第 57 図 134	PL38	302	1c	遺構外	SB15 北	弥生中期	弥生土器	壺	胴部	-	-	-	-	7.6	-	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	白色粒子（最大径 3mmm）少、赤褐色粒子・石英微	良	変形工字文	摩耗・不明		
第 57 図 135	PL38	301	1c	遺構外	SB15 北	弥生中期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	21.6	-	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・褐色粒子・石英・雲母 ･2mm 礫微	良	横走沈線文、ハケ・波状沈線文	剥離・摩耗		
第 57 図 136	PL38	346	1c	遺構外	表	弥生中期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	-	31.5	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	横走沈線文、櫛状工具による刺突文、横走沈線文、櫛描直線文	ナデ・摩耗・不明		
第 57 図 137	PL38	322	1c	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	70%	11.8	4.2	5.2	154.8	-	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	石英少、白色細粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	横ミガキ、底面ミガキ	横ミガキ	内外面 底面	
第 57 図 138	PL38	353	1c	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	高坏	口縁部～坏部	20%	<19.4>	-	（8.9）	285.5	口縁部最大径 <20.1>	10R4/6 赤色 10YR4/2 灰黄褐色	10R4/6 赤色 10YR4/2 灰黄褐色	白色粒子少、褐色粒子・石英・雲母微	良	ミガキ・摩耗	口縁部横ミガキ・摩耗、坏部縦ミガキ・摩耗	内外面（内面摩耗不明瞭）	鍔縁状口縁（屈曲不明瞭）
第 57 図 139	PL38	366	2a	遺構外	表	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	10%	-	<7.5>	（4.9）	47.3	-	10R4/6 赤色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色細粒子・赤褐色細粒子・石英微	良	ミガキ	坏部ミガキ？･摩耗、台部ナデ?、摩耗・不明	坏部内面、脚部外面	
第 57 図 140	PL38	279	1a	SD03	SD3	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	-	-	-	-	23.6	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	ハケ	ハケ		土器片加工板？

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整（施文含む）	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	重量（g）	胴部最大径（cm）								
第 57 図 141	PL38	347	1c	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	-	-	-	(8.1)	69.5	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	櫛描 T 字文、鋸歯文、ミガキ・ナデ？・摩耗	工具によるナデ・摩耗		
第 57 図 142	PL38	350	1c	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	-	<19.5>	-	(3.9)	43.2	-	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	白色粒子・雲母少、赤褐色粒子・石英微	良	櫛描波状文、櫛描簾状文、櫛描波状文	ハケ→横ミガキ？摩耗		
第 57 図 143	PL38	282	1a	SD03	SD3	弥生後期	弥生土器	甕	胴部	-	-	-	-	24.5	-	10YR5/2 灰黄褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	櫛描波状文、櫛描直線文？櫛描簾状文?、櫛描波状文	ハケ→ミガキ？摩耗		
第 57 図 144	PL38	352	1c	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴部	-	-	-	-	75.7	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	櫛描簾状文、櫛描波状文	ハケ		
第 57 図 145	PL38	364	2a	遺構外	表	弥生後期	弥生土器	台付甕	口縁部～胴部	40%	<12.8>	-	(10.3)	162.2	<12.4>	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	白色細粒子・褐色粒子・石英・雲母微	良	口縁部ハケ→櫛描波状文、頸部ハケ→櫛描簾状文、胴部ハケ→櫛描波状文、剥離	ハケ→横ミガキ・摩耗		146 と同一個体
第 57 図 146	PL38	362	2a	遺構外	表	弥生後期	弥生土器	台付甕	台部	10%	-	8.6	(4.4)	65.3	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色細粒子少、褐色粒子・石英・雲母微	良	摩耗・不明	ハケ、摩耗・不明		145 と同一個体
第 57 図 147	PL38	336	1a	遺構外	Ⅲ層	弥生後期	弥生土器	甑	胴部～底部	10%	-	3.7	(6.3)	139.5	3.4	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母・2mm 礫微	良	摩耗・不明	ハケ→ナデ		1 つ穴

第 18 表　古墳・奈良・平安・中世土器一覧

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 59 図 148	PL39	249	1a	SD01	1aSD01	古墳	土師器	坏	口縁部～体部	10%	<15.1>	-	(4.0)	16.6	-	5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	回転ナデ・摩耗、ケズリ？・ナデ？・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 59 図 149	PL39	250	1a	SD01	1aSD01	古墳	土師器	坏	口縁部～体部	10%	<12.0>	-	(5.7)	25.8	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子・石英少、赤褐色粒子・雲母微	やや不良	回転ナデ？・摩耗、ケズリ？・摩耗	回転ナデ？・摩耗	
第 59 図 150	PL39	266	1a	SD01	1aSD01 1 層	古墳	須恵器	坏蓋	体部	10%	-	-	(1.4)	9.7	-	N6/0 灰色	N6/0 灰色	白色粒子・黒色粒子少	良	回転ケズリ、回転ナデ	ナデ	外面ヘラ書き
第 59 図 151	PL39	256	1a	SD01	1aSD01 2 層	古墳	土師器	高坏	坏体部	20%	-	-	(3.9)	76.4	-	7.5YR4/4 褐色	7.5YR4/4 褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少	良	ハケ→ミガキ・摩耗・不明	ミガキ・放射状ミガキ・摩耗	
第 59 図 152	PL16 39	253	1a	SD01	No.9	古墳	土師器	高坏	坏体部～接合部	10%	-	-	(4.7)	65.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒子多、白色粒子・黒褐色粒子・雲母少、石英微	良	ナデ?･ミガキ?･摩耗･不明、脚部貼り付け・ナデ	坏部摩耗・不明、接合部絞り痕	
第 59 図 153	PL39	255	1a	SD01	No.11	古墳	土師器	高坏	脚部	20%	-	-	(6.5)	83.8	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英微	良	接合部剥離、ハケ→縦ミガキ、裾部貼り付けナデ・剥離	絞り痕･接合痕、ナデ、裾部貼り付けナデ	
第 59 図 154	PL39	251	1a	SD01	No.2	古墳	土師器	高坏	接合部～裾部	40%	-	12.8	(8.4)	241.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR8/3 浅黄橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英・微	良	ミガキ・摩耗	工具によるナデ、ナデ？摩耗	植物繊維痕
第 59 図 155	PL39	252	1a	SD01	No.8	古墳	土師器	高坏	脚部	30%	-	<12.0>	(8.5)	180.1	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR6/6 橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	接合部剥離、ハケ・ミガキ、ナデ・ミガキ	指押さえ・絞り痕、工具によるナデ？・摩耗・不明	
第 59 図 156	PL39	254	1a	SD01	No.7	古墳	土師器	高坏	脚部	20%	-	<12.2>	(7.3)	112.3	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	接合部剥離、ミガキ・摩耗	輪積み痕、工具によるナデ？・摩耗、ミガキ・摩耗	植物繊維痕
第 59 図 157	PL39	258	1a	SD01	No.12	古墳	土師器	小型丸底	頸部～底部	60%	-	-	(5.2)	79.2	7.8	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	白色粒子多、赤褐色粒子・石英少、雲母･2mm 礫微	良	摩耗・不明	ナデ	
第 59 図 158	PL16 39	260	1a	SD01	No.10	古墳	土師器	小型丸底	口縁部～底部	90%	-	2.3	(8.2)	263.6	8.8	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	白色粒子少、褐色粒子・石英微	良	ハケ→ナデ・摩耗、ケズリ→ナデ?･摩耗･不明､底面ナデ?摩耗･不明	ハケ→ナデ・摩耗、ナデ、工具によるナデ	
第 59 図 159	PL39	259	1a	SD01	No.13	古墳	土師器	小型丸底	胴部～底部	30%	-	3.0	(6.1)	88.8	<9.4>	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子・石英多、赤褐色粒子少	良	ミガキ？・摩耗、ナデ?・圧痕・摩耗、ケズリ・摩耗、ナデ？	ナデ、指ナデ	
第 59 図 160	PL39	257	1a	SD01	1aSD01,1a Ⅲ層	古墳	土師器	壺	口縁部	10%	<18.0>	-	(3.9)	66.4	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR6/2 灰褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少	良	ナデ→縦ミガキ、横ミガキ？、ミガキ	ナデ→横ミガキ、摩耗・不明	有段口縁
第 59 図 161	PL39	262	1a	SD01	No.6	古墳	土師器	壺	口縁部	10%	<15.4>	-	(4.3)	82.9	<16.4>	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	回転ナデ・摩耗	ミガキ？・摩耗・不明	口唇部面取り 植物繊維痕
第 59 図 162	PL39	261	1a	SD01	No.3	古墳	土師器	壺	胴部～底部	10%	-	<7.2>	(3.5)	147.1	-	10YR6/2 灰黄褐色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子多、赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	摩耗・不明	ハケ	
第 59 図 163	PL39	264	1c	SD01	1c SD01	古墳	土師器	壺	胴部～底部	10%	-	5.8	(3.4)	180.0	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子多、石英少、雲母微	良	摩耗・不明	摩耗・不明、ハケ	植物繊維痕
第 59 図 164	PL39	265	1a	SD01	1a SD01	古墳	土師器	甕	胴部	-	-	-	-	19.3	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	ハケ	摩耗・不明	器種名要検討
第 59 図 165	PL39	263	1a	SD01	No.14	古墳	土師器	甕	胴部～底部	10%	-	5.8	(3.3)	127.2	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子多、石英少	良	摩耗・不明	摩耗・不明	器種名要検討
第 59 図 166	PL39	267	1c	SD01	1c SD01	古墳	須恵器	瓶	胴部	10%	-	-	(8.2)	85.3	-	10YR4/2 灰黄褐色	N6/0 灰色	白色粒子少	良	回転ナデ	回転ナデ	外面自然釉
第 60 図 167	PL39	354	1c	遺構外	表	古墳	土師器	高坏	坏部	10%	-	-	(3.6)	45.0	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色細粒子･2mm 礫・石英・雲母微	良	摩耗・不明	摩耗・不明	
第 60 図 168	PL39	318	2a	遺構外	表	古墳	土師器	高坏	脚部	20%	-	-	(8.3)	100.3	-	7.5YR6/6 橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	摩耗・不明	輪積み	
第 60 図 169	PL39	379	1a	遺構外	ｶｸ	古墳	土師器	小型丸底	口縁部～胴部	30%	<5.6>	-	(6.7)	49.5	<8.0>	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色細粒子・褐色細粒子少、石英・雲母微	良	口縁部～胴部上半ハケ→ナデ？摩耗、胴部下半指押さえ痕→ナデ	口縁部ナデ？摩耗・不明、胴部下半指押さえ痕	

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 60 図 170	PL39	326	1a	遺構外	Ⅲ層	古墳	土師器	小型丸底	口縁部～頸部	10%	<13.0>	-	(5.9)	25.9	-	5YR7/6 橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	白色細粒子少、赤褐色細粒子・石英微	良	剥離、摩耗・不明	口唇部剥離、摩耗・不明	
第 60 図 171	PL39	328	1a	遺構外	Ⅲ層	古墳	土師器	壺	口縁部	10%	-	-	(3.5)	43.4	-	5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	白色細粒子少、赤褐色細粒子 ·2 ～ 4mm 礫・石英・雲母微	良	摩耗・不明	摩耗・不明	
第 60 図 172	PL39	323	1c	遺構外	Ⅲ層	古墳	土師器	台付甕	台部	10%	-	<10.0>	(5.5)	100.1	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR4/4 にぶい赤褐色	白色細粒子多、褐色粒子・石英・雲母 ·3mm 礫微	良	摩耗・不明	ハケ→ナデ・摩耗	
第 62 図 173	PL41	103	2a	SB05	北東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	50%	<12.2>	6.1	3.3	72.9	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	N2/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ、底面回転糸切	ミガキ	内面黒色処理
第 62 図 174	PL40	094	2a	SB05	No.19	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	40%	<12.7>	<6.1>	3.6	64.9	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ、底面回転糸切	口唇部ナデ＋横ミガキ・摩耗、ナデ＋縦ミガキ？摩耗	内面付着物あり 分析試料
第 62 図 175	PL41	102	2a	SB05	No.46	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	60%	12.7	4.6	3.4	104.1	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	工具によるミガキ	内面黒色処理
第 62 図 176	PL41	098	2a	SB05	南東 , 南西	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	40%	<13.2>	6.1	3.4	89.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	口唇部ナデ＋横ミガキ・摩耗、ナデ＋縦ミガキ？摩耗	
第 62 図 177	PL40	101	2a	SB05	No.12,No.48, 南東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	80%	13.0	5.3	4.1	144.1	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	N3/0 暗灰色	白色粒子多、赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	口唇部ナデ＋横ミガキ、縦ミガキ	口唇部～内面黒色処理
第 62 図 178	PL41	100	2a	SB05	No.34,No.35, 北東	平安	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	20%	-	7.1	(1.9)	76.1	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	N2/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	放射状縦ミガキ	内面黒色処理
第 62 図 179	PL40	096	2a	SB05	No.25, 南東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	80%	13.6	<5.9>	4.1	129.9	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ、底面回転糸切？	口唇部回転ナデ・横ミガキ？摩耗・暗文、回転ナデ・ミガキ？摩耗・暗文	
第 62 図 180	PL41	105	2a	SB05	No.44	平安	黒色土器 A	碗	口縁部～底部（高台欠く）	60%	<12.2>	-	(4.5)	104.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	N2/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	口唇部横ミガキ、回転ナデ·ミガキ？摩耗、底面回転糸切→ナデ？摩耗、高台剥離痕	口唇部横ミガキ、放射状縦ミガキ	内面黒色処理
第 62 図 181	PL40	104	2a	SB05	No.22, ｶﾏﾄﾞ南西 , ｶﾏﾄﾞ北西	平安	黒色土器 A	碗	口縁部～高台部	80%	14.2	6.6	5.6	178.0	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR2/1 黒褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ・摩耗、ナデ＋ミガキ？摩耗	内外面一部煤？付着
第 62 図 182	PL40	106	2a	SB05	No.51	平安	黒色土器 B	碗	体部～高台部	20%	-	6.9	(2.3)	87.6	-	N2/0 黒色	N2/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	ミガキ、底面回転糸切、高台貼り付け・ナデ	放射状ミガキ→暗文	内外面黒色処理
第 62 図 183	PL40	093	2a	SB05	No.16	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	80%	12.5	5.1	3.6	126.3	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子多、赤褐色粒子・黒色粒子・石英・雲母少	やや不良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 62 図 184	PL40	091	2a	SB05	No.53	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	90%	13.5	6.7	3.6	160.6	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR3/3 暗赤褐色	白色粒子・石英・雲母多、赤褐色粒子少	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 62 図 185	PL40	092	2a	SB05	No.11	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	100%	13.1	6.3	3.5	165.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子多、赤褐色粒子・石英・雲母少	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	糸切に失敗か？ 底部に亀裂
第 62 図 186	PL17 41	099	2a	SB05	Pit5 No.1	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	30%	<14.2>	<5.4>	<4.0>	57.7	-	2.5YR6/4 にぶい橙色	5YR4/1 褐灰色	赤褐色粒子・雲母多、白色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ、底面不明	摩耗・不明	内面煤？付着
第 62 図 187	PL41	097	2a	SB05	No.5, 北東 , 南東	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	50%	15.8	5.3	4.9	131.8	-	7.5YR3/2 黒褐色	7.5YR3/2 黒褐色	白色粒子少、赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ・摩耗	外面口縁部黒色付着物？
第 62 図 188	PL41	095	2a	SB05	No.13,No.47, 北東 , 北西	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	50%	<16.2>	<6.6>	<4.2>	142.2	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	7.5YR4/2 灰褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転ヘラケズリ	回転ナデ	外面煤付着？
第 62 図 189	PL40	108	2a	SB05	ｶﾏﾄﾞ南西 ,SB05	平安	土師器	皿 A	口縁部～底部	30%	<11.8>	<5.0>	(1.5)	43.9	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 62 図 190	PL40	107	2a	SB05	No.40,No.41,Pit3, 北東 , 南西 , 南東	平安	灰釉陶器	碗	口縁部～高台部	30%	<16.2>	7.8	5.3	95.2	-	釉 2.5GY7/1 明オリーブ灰色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒子微	良	口唇部玉縁、回転ナデ、ケズリ、底面ケズリ→ナデ、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ	内外面釉ハケ塗り、三日月高台
第 62 図 191	PL40	109	2a	SB05	南東	平安	土師器	坏蓋	体部～口縁部	10%	<29.8>	-	(1.7)	13.3	-	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	白色粒子・茶褐色粒子・石英微	良	回転ナデ	回転ナデ	器種名要検討

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 62 図 192	PL40	115	2a	SB05	No.10	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～底部	80%	<7.6>	4.5	7.0	139.7	8.2	5YR6/3 にぶい橙色	5YR6/3 にぶい橙色	白色粒子・赤褐色粒子少、雲母・石英微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	回転ナデ	外面内面に穀物圧痕跡あり
第 62 図 193	PL40	117	2a	SB05	No.6,No.8, 北東	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～底部	40%	<10.4>	<6.8>	11.7	153.9	<11.6>	5YR4/3 にぶい赤褐色	5YR1.7/1 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母・石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	底部中央焼成後穿孔
第 62 図 194	PL41	116	2a	SB05	No.23,No.24, ｶﾏﾄﾞ, 南東	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	40%	<11.8>	-	(10.8)	147.1	<14.2>	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母・石英・2mm 礫微	良	回転ナデ	回転ナデ・摩耗	
第 62 図 195	PL40	113	2a	SB05	No.21	平安	土師器	甕	口縁部	10%	23.9	-	4.9	96.1	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	雲母少、白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 62 図 196	PL40	114	2a	SB05	No.21	平安	土師器	甕	口縁部	10%	<23.6>	-	(5.3)	71.0	-	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR4/1 褐灰色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母・石英微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 62 図 197	PL41	112	2a	SB05	No.18,No.21, ｶﾏﾄﾞ南西, 南東	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<22.8>	-	(7.0)	157.0	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	赤褐色粒子少、白色粒子・雲母・石英微	良	回転ナデ	口縁部回転ナデ、胴部ハケ	
第 62 図 198	PL40	110	2a	SB05	No.43, 南東	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<23.0>	-	(9.9)	153.0	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	赤褐色粒子少、白色粒子・雲母・石英微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 62 図 199	PL41	120	2a	SB05	南東, ｶﾏﾄﾞ南西	平安	土師器	甕	胴部	-	-	-	-	34.9	-	7.5YR5/8 明褐色	5YR3/4 暗赤褐色	白色粒子・黒色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	タタキ・ケズリ・摩耗	当て具痕？ナデ？	
第 62 図 200	PL41	119	2a	SB05	南東	平安	土師器	甕	胴部	-	-	-	-	65.9	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・雲母・石英微	良	タタキ	当て具痕	
第 62 図 201	PL40	125	2a	SB05	ｶﾏﾄﾞ No.2	平安	土師器	甕	底部	10%	-	9.4	(1.8)	168.5	-	7.5YR4/1 褐灰色	7.5YR4/1 褐灰色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少	良	工具によるナデ、底面ナデ・剥離	回転ナデ	器種名要検討
第 63 図 202	PL41	122	2a	SB05	No.45	平安	須恵器	甕	胴部	-	-	-	-	135.8	-	N2/0 黒色	N5/0 灰色	白色粒子・暗青灰色粒子微	良	タタキ	当て具痕	
第 63 図 203	PL41	123	2a	SB05	No.14	平安	須恵器	甕	胴部	-	-	-	-	190.1	-	10YR5/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子・石英・3mm 礫微	良	タタキ・ナデ	ハケ	
第 63 図 204	PL41	121	2a	SB05	No.42	平安	須恵器	甕	胴部	-	-	-	-	600.0	-	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/1 褐灰色	白色粒子・石英微	良	タタキ	当て具痕	
第 64 図 211	PL41	129	2a	SB06	No.3	平安	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	10%	-	<6.8>	(2.2)	31.0	-	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒子少、石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ・摩耗	
第 64 図 212	PL41	126	2a	SB06	No.1	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	<13.6>	6.2	4.5	89.3	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5Y2/1 黒色	石英・雲母少、白色粒子・赤褐色粒子微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切→ナデ・摩耗	口縁部横ミガキ・摩耗、体部縦ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 64 図 213	PL42	127	2a	SB06	ｶﾏﾄﾞ No.10, ｶﾏﾄﾞ	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～体部	20%	<13.8>	<6.8>	<4.5>	45.7	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	N2/0 黒色	白色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ	口縁部横ミガキ？摩耗、体部ミガキ？摩耗	内面黒色処理
第 64 図 214	PL42	130	2a	SB06	ｶﾏﾄﾞ	平安	黒色土器 A	皿	口縁部～体部	10%	<11.7>	-	(1.7)	11.0	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	N3/0 暗灰色	白色粒子少、赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	回転ナデ	横ミガキ	内面黒色処理
第 64 図 215	PL41	133	2a	SB06	ｶﾏﾄﾞ No.4, ｶﾏﾄﾞ No.5, ｶﾏﾄﾞ No.7, ｶﾏﾄﾞ ,SB7 ｶﾏﾄﾞ No.30	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<22.2>	-	(6.8)	121.2	-	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・石英・雲母微	良	口縁部回転ナデ・摩耗、胴部ケズリ・摩耗	口縁部回転ナデ、胴部工具ナデ	
第 64 図 216	PL42	131	2a	SB06	北西 ,SB6	平安	土師器	甕	胴部	10%	-	-	(10.2)	166.0	-	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	黄白色粒子・赤褐色粒子・石英多、雲母微	良	ケズリ	ハケ、下部黒変	外面煤付着
第 64 図 217	PL41	132	2a	SB06	ｶﾏﾄﾞ No.4, ｶﾏﾄﾞ No.6, ｶﾏﾄﾞ No.7, ｶﾏﾄﾞ No.8, SB7No.3, SB7 ｶﾏﾄﾞ No.12,No.21	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	<21.6>	-	(14.1)	437.8	23.0	5YR7/4 にぶい橙色	5YR4/2 灰褐色	白色粒子・石英少、赤褐色粒子・雲母微	良	口縁部～胴部上半回転ナデ・摩耗、胴部ケズリ	口縁部回転ナデ・摩耗、胴部ハケ	
第 64 図 218	PL42	134	2a	SB06	ｶﾏﾄﾞ No.1	平安	土師器	甕	胴部～底部	10%	-	<5.0>	(3.2)	23.8	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR3/1 黒褐色	石英多、白色粒子・赤褐色粒子少	良	ケズリ	ナデ	内面煤付着？
第 67 図 219	PL42	140	2a	SB07	No.8	平安	軟質須恵器	坏 A	底部	20%	-	<5.8>	(2.0)	23.7	-	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	白色粒子・褐色粒子・石英・雲母微	不良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 67 図 220	PL42	138	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.2, ｶﾏﾄﾞ	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	50%	<13.7>	6.0	4.2	73.4	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	2 ～ 6mm 礫少、白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 67 図 221	PL42	135	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.3, ｶﾏﾄﾞ	平安	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	20%	-	5.8	(2.2)	50.6	-	7.5YR7/2 明褐灰色	7.5YR1.7/1 黒色	黒色粒子多、白色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	ミガキ・摩耗	内面黒色処理

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 67 図 222	PL42	137	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.15, ｶﾏﾄﾞ	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～体部	20%	<12.2>	-	(3.9)	26.9	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR1.7/1 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ・摩耗	ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 67 図 223	PL42	139	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.1, ｶﾏﾄﾞ No.5, ｶﾏﾄﾞ No.19, ｶﾏﾄﾞ	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～体部	40%	<14.7>	-	(5.0)	94.7	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR1.7/1 黒色	3 ～ 4mm 礫・白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ・摩耗	ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 67 図 224	PL42	141	2a	SB07	No.11	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～体部	10%	<16.0>	-	(4.7)	28.4	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR1.7/1 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗	ミガキ	内面黒色処理
第 67 図 225	PL42	136	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.28, ｶﾏﾄﾞ No.34	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～体部	20%	<15.2>	-	(4.2)	27.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR1.7/1 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ	ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 67 図 226	PL42	142	2a	SB07	No.15	平安	黒色土器 A	碗	底部	10%	-	-	(1.9)	67.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR1.7/1 黒色	2 ～ 8mm 礫・白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底部回転糸切、高台貼り付けナデ	ミガキ、円形に凹みが残る	意図的に欠いている 内面黒色処理
第 67 図 227	PL42	143	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.32, ｶﾏﾄﾞ 床	平安	黒色土器 A	皿	口縁部～体部	20%	<12.2>	-	(1.5)	36.3	-	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ	ミガキ？・摩耗・不明	内面黒色処理？
第 67 図 228	PL42	147	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.29, ｶﾏﾄﾞ	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	20%	<11.3>	-	(6.1)	28.1	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	石英少、2mm 礫・白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 67 図 229	PL42	148	2a	SB07	南東	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	底部	10%	-	<6.0>	(1.3)	36.3	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	2.5YR7/4 淡赤橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	良	ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 67 図 230	PL42	144	2a	SB07	No.18	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<20.0>	-	(8.3)	75.9	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	雲母・石英少、白色粒子・赤褐色粒子微	良	口縁部回転ナデ、胴部ケズリ	回転ナデ	
第 67 図 231	PL42	145	2a	SB07	No.19	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<21.6>	-	(7.5)	30.2	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	2 ～ 7mm 礫・白色粒子・赤褐色粒子少、石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 67 図 232	PL42	146	2a	SB07	No.2,No.4,No.21	平安	土師器	甕	頸部～胴部	20%	-	-	(14.6)	126.8	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄橙色	石英多、2 ～ 5mm 礫少、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	上半回転ナデ・摩耗、下半ケズリ・摩耗	上半ナデ、下半ハケ	砲弾形
第 67 図 233	PL42	149	2a	SB07	ｶﾏﾄﾞ No.2	平安	土師器	甕	胴部～底部	10%	-	<4.0>	(3.4)	41.0	-	5YR4/6 赤褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	赤褐色粒子・黄白色粒子・石英少、白色粒子微	良	ケズリ	ハケ	砲弾形
第 67 図 234	PL43	153	2a	SB07	No.12	平安	須恵器	提瓶	胴部	-	-	-	-	56.0	-	N4/0 灰色	N7/0 灰白色	白色粒子・黒色粒子少、石英微	良	自然釉・カキ目	指押さえ・ナデ	器種要検討
第 67 図 235	PL42	152	2a	SB07	No.7	平安	須恵器	瓶類	口縁部～頸部	10%	<12.5>	-	(7.3)	70.6	-	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR4/1 褐灰色	白色粒子・赤褐色粒子微	良	回転ナデ、口唇部自然釉有	回転ナデ、自然釉	器種要検討
第 67 図 236	PL43	151	2a	SB07	No.1	平安	須恵器	横瓶	胴部（底部）	20%	-	-	(6.0)	312.5	<27.0>	N6/0 灰色	N5/0 灰色	白色粒子・黒色粒子 ·2 ～ 5mm 礫少、石英微	良	平行タタキ・摩耗、一部自然釉	当て具痕・ナデ	
第 67 図 237	PL42	150	2a	SB07	No.12, 南東, SB6No.2	平安	須恵器	甕	口縁部～胴部	20%	<12.8>	-	(25.0)	651.7	<25.3>	N6/0 灰色	N5/0 灰色	白色粒子少、2 ～ 4mm 礫微	良	口縁部～胴部上半回転ナデ、頸部自然釉・ナデ、胴部下半格子状タタキ	口縁部～胴部上半回転ナデ、胴部下半当て具痕→ナデ、口縁部・胴下部自然釉	
第 69 図 238	PL43	158	2a	SB08	Pit1 No.4	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	<13.0>	<5.4>	4.4	68.2	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、2 ～ 4mm 礫・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	ミガキ？摩耗・不明	内面黒色処理
第 69 図 239	PL43	155	2a	SB08	No.7	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	50%	13.2	4.5	4.0	96.8	-	5YR7/6 橙色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子少、2 ～ 4mm 礫・石英・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	ミガキ・摩耗・不明	内面黒色処理
第 69 図 240	PL43	156	2a	SB08	Pit1 No.3	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	14.6	6.1	5.2	78.5	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	N2/0 黒色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	ミガキ	内面黒色処理
第 69 図 241	PL43	154	2a	SB08	No.2	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	100%	12.6	5.1	4.2	162.6	-	2.5YR6/8 橙色	7.5YR3/1 黒褐色	白色粒子・赤褐色粒子少、2 ～ 6mm 礫・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	口縁部横ミガキ、体部放射状ミガキ	内面黒色処理
第 69 図 242	PL43	157	2a	SB08	Pit1 No.1,SB8	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	90%	12.9	5.6	4.4	155.4	-	5YR7/3 にぶい橙色	5YR7/1 明褐灰色	白色粒子・石英少、2 ～ 3mm 礫微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 69 図 243	PL43	159	2a	SB08	Pit1 No.5	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	20%	<13.0>	<5.9>	4.4	45.5	-	10YR6/2 灰黄褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	白色粒子少、2mm 礫・石英・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切？摩耗・不明	回転ナデ・摩耗	
第 69 図 244	PL43	162	2a	SB08	No.5	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	胴部	10%	-	-	(4.6)	33.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR4/2 灰褐色	石英少、黄白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ	回転ナデ	

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 69 図 245	PL43	165	2a	SB08	Pit1	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	10%	<12.6>	-	(5.6)	40.2	-	7.5YR6/3 にぶい褐色	10YR5/2 灰黄褐色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子・黄白色粒子・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗	回転ナデ	
第 69 図 246	PL43	164	2a	SB08	SB8,2a 表	平安	須恵器	甕	胴部	10%	-	-	(13.4)	120.7	-	7.5YR4/4 褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	黄白色粒子少、白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	タタキ	当て具→ナデ	
第 69 図 247	PL43	166	2a	SB08	No.8	平安	須恵器	甕	胴部～底部	10%	-	<13.5>	(4.9)	76.9	-	N4/0 灰色	N6/0 灰色	白色粒子少	良	タタキ→ナデ・一部ケズリ、底面ナデ？	当て具痕→ナデ、底部ナデ	外面自然釉、内面底部わずかに自然釉
第 69 図 248	PL43	161	2a	SB08	No.3	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<22.4>	-	(18.9)	214.5	-	10YR4/1 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	石英少、2～4mm 礫・雲母微	良	上半回転ナデ、下半ケズリ	上半回転ナデ、下半工具によるナデ	砲弾形
第 69 図 249	PL43	163	2a	SB08	SB8,2a 表	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<26.0>	-	(9.5)	118.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒子・石英多、白色粒子・雲母微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 70 図 250	PL44	167	2a	SB10	No.3	平安	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	20%	-	<5.2>	(2.8)	30.7	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	回転ナデ 底面回転糸切	上半横ミガキ、下半放射状ミガキ	内面黒色処理
第 70 図 251	PL44	168	2a	SB10	No.6	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	70%	13.0	5.5	4.7	145.2	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	白色粒子少、赤褐色粒子・2～3mm 礫・石英・雲母微	良	回転ナデ 底面回転糸切	回転ナデ	
第 70 図 252	PL44	169	2a	SB10	2a 表	平安	灰釉陶器	皿	口縁部～体部	10%	<14.5>	-	(1.9)	10.4	-	胎土 N 8/0 灰白色	5Y7/1 灰白色	黒色粒子少	良	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	内外面釉 ハケ塗り？
第 70 図 253	PL44	172	2a	SB10	SB4	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	10%	<13.2>	-	(7.0)	38.1	<13.4>	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	白色粒子・赤褐色粒子多、石英・雲母微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 70 図 254	PL44	170	2a	SB10	No.1	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<20.0>	-	(10.8)	101.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒子多、白色粒子・黒色粒子・石英微	良	回転ナデ・摩耗	回転ナデ・摩耗	内面　褐色に変色
第 70 図 255	PL44	173	2a	SB10	SB4	平安	須恵器	瓶	頸部～高台部	30%	-	高台部<12.2>	(23.8)	748.8	<21.0>	N5/0 灰色	10YR4/1 褐灰色	白色粒子多、2～8mm 礫少	良	一部タタキ→回転ナデ、底面ナデ、高台貼り付けナデ	回転ナデ	
第 72 図 256	PL44	174	1c	SB11	No.10	平安	須恵器	坏 A	口縁部～底部	90%	12.6	5.8	3.6	128.5	-	N5/0 灰色	N5/0 灰色	白色粒子多	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 72 図 257	PL44	175	1c	SB11	No.10	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	30%	<12.5>	<5.8>	3.5	54.5	-	10YR7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒子・石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 72 図 258	PL21 44	176	1c	SB11	Pit2No.1	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	90%	13.1	5.7	3.8	103.4	-	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	灰色粒子多、白色粒子・石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 72 図 259	PL44	177	1c	SB11	No.3	平安	須恵器	甕	胴部～底部	10%	-	10.0	(6.4)	324.2	-	N6/0 灰色	N6/0 灰色	白色粒子少、石英微	良	ナデ・カキ目、 底面ケズリ→ナデ	ハケ・ナデ	
第 72 図 260	PL44	178	1c	SB11	No.7	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	10%	<11.6>	-	(6.7)	17.5	<12.1>	2.5YR5/8 明赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ・摩耗	回転ナデ・摩耗	小形
第 72 図 262	PL44	182	1c	SB12	南東	平安	須恵器	坏 A	口縁部～体部	10%	<12.4>	-	(2.2)	5.5	-	N5/ 灰色	N5/ 灰色	白色粒子微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 72 図 263	PL44	181	1c	SB12	No.5,No.6, SB11 床	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	80%	13.5	6.1	3.7	113.3	-	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	灰色粒子少、白色粒子・石英・2～4mm 礫微	不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	回転ナデ・摩耗	
第 72 図 264	PL21 44	180	1c	SB12	Pit1No.1	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	60%	13.8	5.9	4.7	133.7	-	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y5/1 黄灰色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、2～3mm 礫・雲母微	やや不良	回転ナデ、ケズリ、底面回転糸切	口縁部横ミガキ、体部縦ミガキ	内面黒色処理
第 72 図 265	PL21 44	179	1c	SB12	Pit1No.2, 北東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	90%	15.5	6.8	4.9	216.3	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	N2/ 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ、底面回転ケズリ	口唇部回転ナデ、横ミガキ、ミガキ摩耗	内面黒色処理、体部外面に線刻
第 72 図 266	PL44	184	1c	SB12	No.1,No.7, 北西	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<24.4>	-	(17.5)	258.8	<26.6>	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・石英多、白色粒子少、雲母微	やや不良	口縁部～胴部上半回転ナデ、胴部下半ケズリ	口縁部回転ナデ、胴部ハケ	砲弾形
第 72 図 267	PL44	185	1c	SB12	No.9, 南東 ,1c Ⅲ 層	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<20.4>	-	(19.7)	181.9	<23.0>	7.5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	赤褐色粒子多、石英少、白色粒子・2mm 礫・雲母微	良	口縁部～胴部上半回転ナデ、胴部下半ケズリ・摩耗	ハケ・摩耗	外面煤？付着、内面下半付着物有、砲弾形
第 72 図 268	PL44	186	1c	SB12	No.3,No.4,No.8, 北東 , 北西 ,PitNo.3,SB11 床	平安	土師器	甕	胴部～底部	10%	-	3.1	(6.0)	129.1	-	10YR5/2 灰黄褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子・2～5mm 礫・雲母微	良	ケズリ、煤？付着	ハケ・摩耗	砲弾形

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 74 図 269	PL45	190	1c	SB13	No.16,No.21	平安	須恵器	坏 A	口縁部～底部	50%	<13.0>	<6.0>	3.5	62.7	-	5Y7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	白色粒子微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	内外面火襷
第 74 図 270	PL45	189	1c	SB13	No.23, 床 ,SB14No.7	平安	須恵器	坏 A	口縁部～底部	60%	<13.2>	6.1	2.8	86.8	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	白色粒子少、赤褐色粒子・2 ～ 3mm 礫微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	内外面火襷
第 74 図 271	PL45	191	1c	SB13	ｶﾏﾄﾞ床下	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	20%	<12.4>	<6.0>	3.6	32.8	-	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	白色粒子・黒褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 74 図 272	PL45	187	1c	SB13	No.15, 南西	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	100%	13.1	5.9	4.3	174.6	-	10YR5/2 灰黄褐色	N1.5/0 黒色	白色粒子・暗赤褐色粒子・石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切？摩耗	黒色処理・ミガキ	外面一部に煤付着
第 74 図 273	PL45	188	1c	SB13	No.20	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	60%	<14.2>	6.0	3.7	113.8	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒子少、白色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 74 図 274	PL45	193	1c	SB13	南西	平安	須恵器	坏 B	底部～高台部	50%	-	<9.9>	(1.6)	39.5	-	N6/0 灰色	N6/0 灰色	白色粒子・石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切→回転ナデ、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ	高台の一部に自然釉
第 74 図 275	PL45	192	1c	SB13	No.21	平安	須恵器	坏 B	口縁部～高台部	60%	<15.1>	8.4	7.0	187.6	-	5Y6/1 灰色	N5/0 灰色	白色粒子少、赤褐色粒子・2mm 礫微	良	回転ナデ、底面回転ケズリ、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ	
第 74 図 276	PL45	200	1c	SB13	No.9	平安	土師器	鉢	口縁部～体部	10%	<12.3>	-	(5.3)	11.8	<13.6>	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	黄白色粒子多、白色粒子・黒色粒子・赤褐色粒子・石英少	良	回転ナデ・摩耗	摩耗・不明	
第 74 図 277	PL45	202	1c	SB13	No.14	平安	須恵器	甕	胴部	10%	-	-	(9.4)	107.3	-	N5/0 灰色	N4/0 灰色	白色粒子・石英少、黒色粒子微	良	平行タタキ→ハケ	回転ハケ	器種名要検討
第 74 図 278	PL45	198	1c	SB13	No.3	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<25.4>	-	(12.7)	216.1	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR4/3 褐色	白色粒子・赤褐色粒子多、2 ～ 7mm 礫・石英・雲母微	良	口縁部～胴部上半回転ナデ？摩耗、胴部ケズリ・摩耗	口縁部回転ナデ？摩耗、胴部ハケ→ナデ・摩耗	
第 74 図 279	PL45	195	1c	SB13	No.19	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<24.2>	-	(10.6)	101.0	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・石英多、白色粒子微	良	回転ナデ・摩耗	口縁部回転ナデ・摩耗、胴部摩耗・不明	
第 74 図 280	PL45	197	1c	SB13	No.9	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<25.6>	-	(12.3)	93.8	<25.7>	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	石英多、赤褐色粒子・黄白色粒子少	良	口縁部～頸部回転ナデ、胴部ハケ状工具による回転ナデ、ケズリ	ハケ状工具による回転ナデ	
第 74 図 281	PL45	194	1c	SB13	No.1,No.3,No.4, No.5,No.8,No.9, ｶﾏﾄﾞ No.1, ｶﾏﾄﾞ No.6, ｶﾏﾄﾞ北東 , 南東 ,SB13	平安	土師器	甕	口縁部～底部	60%	24.2	-	36.3	1041.2	25.5	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒子・石英多、2 ～ 4mm 礫少、白色粒子微	良	口縁部～頸部回転ナデ、胴部～底部ケズリ→ナデ	口縁部回転ナデ、胴部上半ハケ→ナデ・摩耗、下半ナデ	砲弾形
第 75 図 282	PL45	205	1c	SB14	No.2	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	80%	<12.8>	5.6	3.9	105.4	-	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	2 ～ 3mm 礫多、白色粒子・石英・雲母微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 75 図 283	PL45	204	1c	SB14	No.1	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	90%	13.0	6.0	3.7	119.9	-	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/1 灰白色	2 ～ 4mm 礫多、白色粒子少、茶褐色粒子・石英・雲母微	不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 75 図 284	PL45	203	1c	SB14	No.3	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	12.9	5.6	4.5	82.7	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	N1.5/0 黒色	赤褐色粒子・2mm 礫少、白色粒子・石英・雲母微	やや不良	口縁部～体部回転ナデ・摩耗、底部ヘラケズリ・摩耗、底面ヘラケズリ	ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 75 図 285	PL45	209	1c	SB14	No.11	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	胴部～底部	10%	-	<5.0>	(4.6)	36.9	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR7/3 にぶい黄橙色	石英多、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	摩耗・剥離・不明、底面回転糸切	回転ナデ	
第 75 図 286	PL45	212	1c	SB14	No.3	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	胴部～底部	20%	-	6.6	(5.8)	138.5	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英少、2 ～ 5mm 礫・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	外面底部付近煤付着、内面胴部変色
第 75 図 287	PL45	210	1c	SB14	No.12	平安	土師器	鉢	口縁部～底部	40%	<16.5>	<8.0>	10.2	219.8	体部最大径 <17.0>	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒子多、白色粒子・石英・2mm 礫微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切？摩耗・不明	回転ナデ・摩耗	
第 75 図 288	PL46	211	1c	SB14	No.7	平安	土師器	鉢	口縁部～体部	40%	<24.4>	-	(13.6)	335.8	<24.4>	7.5YR6/6 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	2 ～ 5mm 礫多、白色粒子・赤褐色粒子・石英少、雲母微	やや不良	回転ナデ・工具によるナデ？・摩耗、ケズリ、体部下部剥離・不明	工具によるナデ・ミガキ・摩耗	
第 75 図 289	PL46	208	1c	SB14	No.3	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<23.0>	-	(9.8)	152.5	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	黄白色粒子・赤褐色粒子・石英多、2mm 礫微	やや不良	回転ナデ・摩耗、ケズリ？・摩耗	回転ナデ・摩耗、摩耗・不明	砲弾形

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 75 図 290	PL46	206	1c	SB14	No.14	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<21.7>	-	(12.6)	260.4	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR5/2 灰黄褐色	2 ～ 4mm 礫多、白色粒子・赤褐色粒子・石英・雲母少	良	回転ナデ→ナデ消し・摩耗、ケズリ・摩耗	回転ナデ→ナデ消し・摩耗	砲弾形
第 75 図 291	PL45	207	1c	SB14	No.4,No.11	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	<22.6>	-	(17.6)	264.2	<24.5>	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	赤褐色粒子・石英多、黄白色粒子微	やや不良	回転ナデ、ケズリ、上半部全体に摩耗	ハケ→ナデ・摩耗	砲弾形
第 78 図 292	PL47	224	1c	SB15	東	平安	須恵器	坏 A	口縁部～体部	10%	<13.3>	-	(3.8)	11.5	-	N5/0 灰色	N5/0 灰色	白色粒子微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 78 図 293	PL46	228	1c	SB15	東 , 南	平安	軟質須恵器	坏 A	口縁部～底部	40%	<13.4>	<6.0>	3.5	42.8	-	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	白色粒子・石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 78 図 294	PL46	218	1c	SB15	No.23	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	100%	12.7	5.9	4.2	134.1	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	N1.5/0 黒色	白色粒子・暗赤褐色粒子・石英少	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	縦ミガキ・横ミガキ	内面黒色処理
第 78 図 295	PL46	217	1c	SB15	No.61	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	90%	13.0	5.5	4.1	181.5	-	5YR6/4 にぶい橙色	N3/0 暗灰色	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	放射状ミガキ→横ミガキ	内面黒色処理 口縁部付着物
第 78 図 296	PL46	219	1c	SB15	No.26	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	90%	13.4	6.1	4.1	153.3	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	N2/0 黒色	白色粒子多、赤褐色粒子少、石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切？	縦ミガキ・横ミガキ・摩耗・不明	外面煤付着？内面モミ？圧痕、黒色処理
第 78 図 297	PL46	220	1c	SB15	No.18,No.58, 東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	90%	13.1	4.9	4.4	139.3	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子 ·2mm 礫微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	ミガキ	内面黒色処理
第 78 図 298	PL46	221	1c	SB15	No.7, 北 ,SB15	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	90%	13.1	5.8	4.2	142.1	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・礫微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	ミガキ	内面黒色処理
第 78 図 299	PL46	222	1c	SB15	No.20, 東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	<15.1>	6.0	4.5	118.0	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	N1.5/0 黒色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切・摩耗	ミガキ	内面黒色処理
第 78 図 300	PL46	223	1c	SB15	ｶﾏﾄﾞ No.5, ｶﾏﾄﾞ, 北 , 東	平安	黒色土器 A	坏 A	口縁部～底部	30%	<16.7>	<6.4>	5.8	68.7	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR3/1 黒褐色	白色粒子・赤褐色粒子・石英・礫微	やや不良	回転ナデ、底面回転糸切・摩耗	ミガキ・摩耗	内面黒色処理
第 78 図 301	PL46	227	1c	SB15	No.14, 南 , 東	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	90%	12.3	5.2	4.1	121.3	-	5Y7/1 灰白色	10YR7/1 灰白色	白色粒子・石英微	不良	回転ナデ・摩耗 底面摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 78 図 302	PL46	213	1c	SB15	No.27	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	100%	12.7	5.9	4.2	162.8	-	7.5YR7/2 明褐灰色	10YR7/3 にぶい黄橙色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子・雲母微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	外面煤付着、外面底部豆？圧痕
第 78 図 303	PL46 47	216	1c	SB15	No.60	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	100%	13.0	5.8	3.8	143.9	-	10YR1.7/1 黒色	10YR2/1 黒色	白色粒子・石英・雲母少、赤褐色粒子微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	内面口縁部付着物、底部×印ヘラ書き
第 78 図 304	PL46	214	1c	SB15	No.62	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	100%	12.6	6.0	4.4	153.7	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/2 明褐灰色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、底面回転糸切	回転ナデ	内外面付着物
第 78 図 305	PL46 47	215	1c	SB15	No.56	平安	土師器	坏 A	口縁部～底部	100%	12.7	6.2	4.0	149.9	-	7.5YR7/2 明褐灰色	10YR5/2 灰黄褐色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	口唇部～内面煤付着
第 79 図 306	PL47	225	1c	SB15	東	平安	須恵器	坏蓋 B	体部～口縁部	10%	<16.2>	-	(2.5)	30.5	-	N6/0 灰色	N6/0 灰色	白色粒子微	良	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	
第 79 図 307	PL46	230	1c	SB15	東	平安	黒色土器 A	碗	口縁部～高台部	20%	<14.0>	<6.8>	(4.8)	29.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	N2/0 黒色	白色粒子・石英微	やや不良	回転ナデ・摩耗、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ・摩耗	内面黒色処理
第 79 図 308	PL47	232	1c	SB15	東 ,SB15	平安	灰釉陶器	皿	口縁部～高台部	10%	<14.7>	<7.1>	2.5	17.9	口縁部最大径<15.4>	2.5Y6/1 黄灰色	5Y7/1 灰白色	白色粒子・黒色粒子微	良	回転ナデ、回転ケズリ、高台貼り付け・ナデ、ナデ？	回転ナデ	口縁部内外面施釉
第 79 図 309	PL46 47	231	1c	SB15	ｶﾏﾄﾞ No.6, ｶﾏﾄﾞ No.9, 東	平安	土師器	皿 B	口縁部～高台部	20%	<16.5>	-	(2.9)	97.9	口縁部最大径<17.8>	10YR5/1 褐灰色	7.5YR5/2 灰褐色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子・雲母微	良	回転ナデ・摩耗、回転ヘラケズリ？摩耗、高台貼り付けナデ、底面回転ヘラケズリ？摩耗	回転ナデ・摩耗	
第 79 図 310	PL46 47	245	1c	SB15	No.45	平安	土師器	盤 B	体部～高台部	20%	-	8.7	(3.6)	118.5	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子 ·2 ～ 4mm 礫微	良	回転ナデ・摩耗、回転ケズリ、高台付け·ナデ、底面工具によるナデ	工具による回転ナデ・摩耗	
第 79 図 311	PL46 47	240	1c	SB15	No.30	平安	黒色土器 A	鉢	体部～底部	20%	-	<9.4>	(10.0)	218.0	-	7.5YR6/3 にぶい褐色	N2/0 黒色	赤褐色粒子多、3 ～ 7mm 礫少、白色粒子・石英微	良	回転ナデ、ケズリ・摩耗	剥離、ハケ→ミガキ、剥離	内面黒色処理
第 79 図 312	PL47	241	1c	SB15	東	平安	須恵器	瓶	胴部～高台部	10%	-	<5.5>	(1.4)	28.8	-	N5/0 灰色	2.5Y7/1 灰白色	白色粒子少、5mm 礫微	良	回転ナデ、高台貼り付け・ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	底部ヘラ書き？

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
			地区	遺構・地点	注記記号（帰属遺構・地点名は省略）						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	胴部最大径(cm)							
第 79 図 313	PL46 47	238	1c	SB15	No.15	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	底部	20%	-	5.2	(2.5)	71.8	-	10YR3/1 黒褐色	10YR8/2 灰白色	白色粒子・石英微	良	回転ナデ、底面回転糸切	回転ナデ	
第 79 図 314	PL47	237	1c	SB15	No.25	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	頸部～胴部	10%	-	-	(6.1)	16.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	白色粒子微	良	回転ナデ	回転ナデ	
第 79 図 315	PL47	236	1c	SB15	No.6, ｶﾏﾄﾞ No.14, ｶﾏﾄﾞ No.15, 東	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<20.7>	-	(15.1)	228.0	<22.3>	5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	石英少、白色粒子・赤褐色粒子微	良	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	砲弾形
第 79 図 316	PL46	233	1c	SB15	No.32,No.39, No.40, 東 , 南 ,SB15	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	30%	<23.6>	-	(17.2)	506.1	<26.4>	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR4/1 褐灰色	赤褐色粒子・石英少、白色粒子 ·2 ～ 5mm 礫微	良	回転ナデ→工具によるナデ、ケズリ	回転ナデ→工具によるナデ、細いハケ、太いハケ	砲弾形
第 79 図 317	PL46	234	1c	SB15	No.8, ｶﾏﾄﾞ No.1, ｶﾏﾄﾞ No.5	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	<25.0>	-	(16.8)	338.0	<28.1>	5YR6/6 橙色	5YR4/6 赤褐色	白色粒子・石英少、赤褐色粒子・雲母 ·2 ～ 4mm 礫微	良	回転ナデ、ケズリ、摩耗・不明	ケズリ、ハケ、摩耗・不明	外面口縁部付着物有、頸部煤？付着、砲弾形
第 79 図 318	PL47	239	1c	SB15	ｶﾏﾄﾞ No.5	平安	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	<26.0>	-	(11.0)	90.6	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色多、白色粒子・石英少、雲母 ·2 ～ 3mm 礫微	良	摩耗・不明、ケズリ	工具による回転ナデ・摩耗	砲弾形
第 79 図 319	PL46 47	242	1c	SB15	No.59	平安	須恵器	甕	胴部	-	-	-	-	22.5	-	N5/0 灰色	N5/0 灰色	白色粒子・石英 ·2 ～ 3mm 礫微	良	タタキ→ナデ	当て具痕→ハケ	
第 80 図 321	PL47	291	1a	ST02	Pit3（SK16）	平安	須恵器	坏 A	体部～底部	10%	-	<6.1>	(2.1)	23.1	-	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	白色細粒子少、黒色粒子微	良	回転ナデ、底面回転糸切？	回転ナデ	
第 82 図 322	PL47	271	1a	SD03	No.15,SD3	奈良	須恵器	坏 A	口縁部～底部	70%	<14.4>	7.9	4.0	129.0	-	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	
第 82 図 323	PL47	274	1a	SD03	No.14	奈良	須恵器	高盤	坏部	40%	-	-	(2.4)	258.2	-	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	石英少、白色粒子・褐色粒子・黒褐色粒子・雲母 ·3mm 礫微	良	回転ナデ、工具による回転ナデ、回転ナデ	回転ナデ	
第 82 図 324	PL47	275	1a	SD03	No.16	奈良	須恵器	長頸壺	口縁部～頸部	10%	7.6	-	(12.6)	280.5	-	7.5YR4/2 灰褐色	5Y3/2 オリーブ黒色	白色粒子・石英 ·2mm 礫微	良	回転ナデ、輪積痕有り	回転ナデ、輪積痕有り	
第 82 図 325	PL47	278	1a	SD03	SD3	古墳	土師器	甑	把手	-	-	-	-	122.2	-	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英 ·2 ～ 3mm 礫少、雲母微	良	ナデ	工具によるナデ・摩耗	
第 82 図 326	PL47	276	1a	SD03	1c SD3	平安	土師器	甕	底部	10%	-	<7.0>	(6.0)	200.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	灰色粒子・褐色細粒子・石英少、雲母微	良	縦ミガキ、底面ミガキ	縦ミガキ・摩耗	
第 85 図 327	PL47	372	2a	遺構外	Ⅲ層	平安	土師器	皿 A	口縁部～底部	30%	<11.8>	<5.4>	2.5	76.9	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	白色粒子・赤褐色粒子・石英微	良	回転ナデ？剥離、底面回転糸切	回転ナデ？・摩耗・不明	
第 85 図 328	PL47	317	2a	遺構外	表	平安	灰釉陶器	段皿	体部	10%	-	-	(1.7)	6.2	-	5Y5/2 灰オリーブ色（釉）	5Y7/1 灰白色	黒色細粒子微	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面施釉
第 85 図 329	PL47	370	2a	遺構外	表	平安	灰釉陶器	碗	体部～高台部	10%	-	<6.8>	(1.8)	31.4	-	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	黒色細粒子微	良	回転ナデ、高台貼り付け・ナデ、底面回転ナデ	回転ナデ	高台部一部に圧痕、内外面施釉
第 85 図 330	PL47	371	2a	遺構外	表	平安	灰釉陶器	碗	体部～高台部	10%	-	<8.0>	(2.6)	21.4	-	5Y7/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	白色細粒子微	良	回転ナデ、高台貼り付け・ナデ	回転ナデ	内外面施釉
第 85 図 331	PL47	321	1c	遺構外	Ⅲ層	奈良	須恵器	甕	胴部	10%	-	-	(6.8)	40.6	<12.0>	N5/0 灰色	5PB6/1 青灰色	白色細粒子多	良	回転ナデ	回転ナデ	器種名要検討
第 85 図 332	PL47	315	2a	遺構外	表	平安	須恵器	瓶	胴部～高台部	20%	-	9.8	(6.0)	277.5	-	7.5Y5/1 灰色	7.5Y6/1 灰色	白色粒子 ·2 ～ 3mm 礫微	良	回転ナデ、高台貼り付け・ナデ、高台底部圧痕	回転ナデ	
第 85 図 333	PL47	358	1c	遺構外	Ⅲ層 , ｶｸ	平安	土師器	ﾛｸﾛ甕	口縁部～胴部	10%	<14.0>	-	(8.3)	56.3	<15.0>	5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	白色粒子・赤褐色粒子 ·2 ～ 3mm 礫・石英・雲母微	良	回転ナデ	摩耗・不明	
第 85 図 334	PL47	373	2a	遺構外	Ⅲ層	平安	土師器	甕	底部	10%	-	-	(3.3)	166.3	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色細粒子少、白色粒子・石英・雲母微	良	ナデ？摩耗・不明	ハケ→ナデ？摩耗	
（写真のみ）335	PL47	337	1a	遺構外	Ⅲ層	鎌倉	陶磁器	青磁碗	体部	-	-	-	-	5.3	-	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	灰白色	良	-	-	龍泉窯、蓮弁文 13C ～

第 19 表　石器一覧

図版番号	写真図版	管理番号	出土位置			器種	材質	色調	残存率	法量				平面形	断面形	備考
			地区	遺構	注記記号（帰属遺構は省略）					長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）			
第 27 図 32	PL48	502	2c	SB01	南東	楔形石器	泥岩	暗灰色	100%	45.0	54.0	8.0	22.5	-	-	両極打撃痕二対有　挟み打ちによるもの
第 27 図 33	PL48	505	2c	SB01	南東	石核	泥岩	暗灰色	-	63.0	50.0	23.0	67.0	-	-	楔状　両極打撃有り
第 27 図 34	PL48	501	2c	SB01	南西	砕片	黒耀石	黒色透明	-	11.0	14.5	3.5	0.5	-	-	裏面風化有り 剥片剥離に伴う砕片ではない可能性有り
第 27 図 35	PL48	504	2c	SB01	北東	剥片	流紋岩	黄灰色	-	34.0	41.0	6.5	7.9	-	-	使用痕確認されない
第 27 図 36	PL5 48	508	2c	SB01	No.2	剥片	泥岩	暗灰色	-	46.5	100.5	9.5	32.4	-	-	横長剥片　使用痕なし　欠損有（風化）
第 28 図 37	PL48	503	2c	SB01	北東	剥片	泥岩	暗灰色	-	31.0	38.5	6.0	5.2	-	-	38 ～ 41 と接合
第 28 図 38	PL48	506	2c	SB01	南東床	剥片	泥岩	暗灰色	-	44.0	29.5	5.5	8.2	-	-	37・39 ～ 41 と接合
第 28 図 39	PL48	507-2	2c	SB01	床	剥片	泥岩	暗灰色	-	35.0	44.0	5.0	7.3	-	-	37・38・40・41 と接合
第 28 図 40	PL48	507-1	2c	SB01	No.3	剥片	泥岩	暗灰色	-	61.0	76.0	6.0	27.3	-	-	37 ～ 39・41 と接合
第 28 図 41	PL48	512	2c	SB02	検	剥片	泥岩	暗灰色	-	33.0	45.5	5.5	9.6	-	-	37 ～ 40 と接合
第 28 図 37 ～ 41	PL48	503・ 506・ 507・ 512	2c	SB01 SB02	-	剥片	泥岩	暗灰色	-	76.0	126.0	9.0	57.6	-	-	37 ～ 41 を接合
第 30 図 61	PL48	509	2c	SB02	No.19	凹石	安山岩	灰白色	90%	126.0	89.0	71.0	860.0	楕円形	楕円形	正面凹み
第 30 図 62	PL48	510	2c	SB02	No.20	敲石	安山岩	灰色	90%	130.0	77.0	42.0	607.7	台形	楕円形	下面タタキ
第 34 図 84	PL49	515	1b	SB03	No.39	剥片	泥岩	暗灰色	-	49.0	69.0	11.5	32.4	-	-	剥離面打面　微弱な剥離認められるも使用痕とは断定できず　1/2 欠は出土時に欠けた
第 34 図 85	PL49	513	1b	SB03	No.22	凹石	安山岩	灰白色	70%	140.0	105.0	55.0	1020.1	楕円形	楕円形	正面・裏面凹み
第 34 図 86	PL49	514	1b	SB03	No.23	凹石	安山岩	灰白色	90%	116.0	88.0	72.0	711.3	楕円形	楕円形	正面凹み　裏面凹み×２
第 35 図 92	PL49	516	2a	SB04	北西	磨製石鏃	泥岩	暗灰色	90%	（29.5）	26.5	2.5	2.8	-	-	未製品　表裏面に研磨痕有　側面は研磨後再加工して刃付に入るのか
第 35 図 93	PL49	517	2a	SB04	-	磨製石鏃	緑色片岩	緑灰色	-	48.0	25.0	7.0	10.9	-	-	素材　両極打撃による挟み打ち　右側面は折り取りによる（擦り切り痕は確認できない）
第 53 図 126	PL49	529	1c	SK127	-	磨石	粗粒玄武岩	灰色	100%	131.0	51.0	27.0	314.0	長楕円形	楕円形	正面・裏面スリ
第 53 図 130	PL15 49	531	1c	SK287	-	打製石斧	泥岩	暗灰色	100%	123.0	65.0	31.0	211.9	分銅形	厚手	頭部円形～尖　刃部円形～平 刃部に使用による摩耗痕有　風化著しい
第 63 図 205	PL49	519	2a 南	SB05	北東	剥片	泥岩	暗灰色	-	28.0	35.0	7.0	7.3	-	-	側辺に二次加工有　剥離面打面残り　欠損後に２側辺部を加工
第 63 図 206	PL49	518	2a 南	SB05	Pit13	敲石	砂岩	暗灰色	（80%）	141.0	64.0	44.0	657.5	長楕円形	三角形	下面タタキ　上半部欠損
第 72 図 261	PL21 49	525	1c	SB11	Pit2 No.2	敲石	安山岩	灰色	100%	157.0	63.0	44.0	653.8	長楕円形	楕円形	上面・下面タタキ
第 79 図 320	PL49	527	1c	SB15	ｶﾏﾄﾞ	剥片	泥岩	暗灰色	-	24.0	40.0	4.5	4.8	-	-	使用痕なし

第 20 表　金属製品一覧

図版番号	写真図版	管理番号	地区	出土地点			材質	遺物名称	法量				遺構時期	備考
				出土遺構	取上 No.	出土層位			長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）		
第 63 図 207	PL49	601	2a 南	SB05	No.1	床直上	鉄	毛抜き	101.0	19.0	8.0	15.29	平安	
第 63 図 208	PL49	602	2a 南	SB05	No.2	埋土	鉄	刀子	95.0	14.0	5.0	8.89	平安	
第 63 図 209	PL49	603	2a 南	SB05	No.3	床	鉄	棒状製品	48.5	26.5	5.0	5.56	平安	
第 63 図 210	PL49	604	2a 南	SB05	No.4	床	鉄	棒状製品	64.0	5.0	4.0	2.14	平安	

報告書抄録

ふ り が な	あさかわせんじょうちいせきぐん　ほんむらみなみおきいせき
書　　名	浅川扇状地遺跡群　本村南沖遺跡
副 書 名	新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書
シリーズ番号	113
著作者名	長谷川桂子、町田勝則、西　香子、髙山いず美、福井優希
編集機関	（一般財団法人）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL 026-293-5926
発行年月日	2017年３月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
浅川扇状地遺跡群（あさかわせんじょうちいせきぐん） 本村南沖遺跡（ほんむらみなみおきいせき）	長野県長野市（ながのけんながのし） 三輪８丁目（みわちょうめ） 49-7	20201	A-①	36° 39′ 55″ （世界測地系）	138° 12′ 03″ （世界測地系）	20150407 ～ 20151130	6,000	新県立大学施設整備事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡	集落跡	弥生時代前期以前 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 弥生～平安時代	墓跡1 竪穴住居跡7、掘立柱建物跡1、墓跡3、溝跡1、土坑4、遺物集中1 流路跡1 竪穴建物跡10、掘立柱建物跡1、流路跡2、土坑4 土坑292	縄文土器、弥生土器、土器片加工板?、打製石斧、磨製石鏃、敲石、凹石、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、青磁、鉄製品（刀子ほか）、歯破片（ウマ）	浅川扇状地上の弥生時代後期と９世紀後半の集落跡。 弥生時代後期吉田式期の竪穴住居跡７軒のうち１軒は逆位に置かれた土器埋設炉をもつ。掘立柱建物跡は棟持柱をもつ。 箱清水式期の土器棺墓のうち１基は３個体の壺と１個体の甕を組み合わせたもので、中心となる壺１個体は胴部に焼成後の穿孔がある。

要　約

浅川扇状地の扇央部西端の標高387～390mに立地する。
縄文時代は遺物のみで、遺構は確認されない。弥生時代前期は墓跡１基のみが確認される。
弥生時代後期は集落跡で、後期初頭の吉田式期の竪穴住居跡７軒、掘立柱建物跡１棟、土坑が確認される。短期間に存在した集落で、標式遺跡である吉田高校グランド遺跡の集落の時期とほぼ同時期である。後期前半からは箱清水式期の成立段階に相当する土器棺墓が２基、遺物集中が１か所確認される。
古墳時代は中期の祭祀行為が行われた可能性のある流路跡１条のみ確認される。北方400mに古墳時代中期の拠点的集落である本村東沖遺跡が存在し、関連がうかがわれる。
奈良・平安時代は、７世紀末から８世紀前半頃には埋没を始める流路跡１条のみ確認される。平安時代は集落跡で、９世紀後半の竪穴建物跡10軒が確認される。竪穴建物跡は切り合いがあるが、出土土器に差がないため、ほぼ同一時期の集落である。また土坑や流路の埋没後には掘立柱建物跡が建てられる。
中世は青磁破片が１点出土したのみで、遺構は確認されない。

平成 29（2017）年3月 15 日　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　113

浅川扇状地遺跡群　本村南沖遺跡

新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者　長野県
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　info@naganomaibun.or.jp
印刷者　明和印刷株式会社
〒 380-0943　長野県長野市安茂里 2161-2
Tel 026-226-5311　Fax 026-228-0799

写　真　図　版

ヤマボウシ

1　１区西壁
J 断面
（東より）

2　２区南壁
H 断面
（西より）

3　１区西壁(宿舎)
C 断面付近
（東より）

4　１区北壁
D 断面付近
（南より）

5　１区北壁
E 断面付近
（南より）

6　２区南壁
F 断面付近
（北より）

7　２区南壁
G 断面付近
（北より）

8　２区南壁
H・I 断面付近
（北東より）

9　1区西壁(宿舎)
J 断面付近
（東より）

10　１区西壁
K 断面付近
（東より）

1　２区西壁
Ｌ断面付近
（東より）

2　２区南壁
Ｍ断面付近
（北より）

3　２区西壁
Ｎ断面付近
（南東より）

4　１区南壁
Ｏ断面付近
（北より）

5　１区南壁
Ｐ断面付近
（北より）

6　２区北壁
Ｑ断面付近
（南東より）

7　１トレンチ
断面全体
（南西より）

8　１トレンチ
Ｒ断面
（南西より）

9　２トレンチ
断面全体
（南西より）

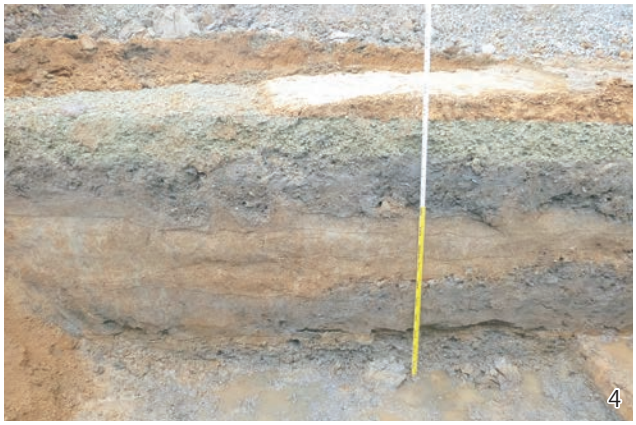
10　２トレンチ
Ｓ断面
（南より）

1　3トレンチ
断面全体
（南西より）

2　3トレンチ
T断面
（南東より）

3　4トレンチ
断面全体
（南西より）

4　4トレンチ
U断面
（南より）



5　5トレンチ
断面全体
（南西より）

6　5トレンチ
V断面
（南より）

7　6トレンチ
断面全体
（西より）

8　6トレンチ
W断面
（南東より）

9　7トレンチ
断面全体
（南西より）

10　7トレンチ
X断面
（南西より）

1　８トレンチ
断面全体
（南西より）

2　８トレンチ
Ｙ断面
（北西より）

3　１区ａ断面
（南西より）

4　１区ｃ断面
（北東より）

5　１区ｅ断面
（北西より）

6　１区ｈ断面
（西より）

7　２区ｉ断面
（南西より）

8　２区ｊ断面
（南東より）

9　２区Ｂ断面
（北より）

10　２区ｋ断面
（北東より）

1　SQ02
1 出土状態
（東より）

2　SB01 断面
（南より）

3　SB01
遺物出土状態
（南東より）

4　SB01 完掘
（南東より）

5　SB01
26 出土状態
（南東より）

6　SB01
36 出土状態
（南東より）

7　SB01･02
完掘
2c 区全景
（空撮）

1　SB02
A-B 断面
（北より）

2　SB02
遺物出土状態
（北西より）

3　SB02 完掘
（北より）

4　SB02
遺物出土状
態接写
（西より）

5　SB02
52 出土状態
（北より）

6　SB02
60 出土状態
（北より）

7　SB03
A-B 断面
（南西より）

8　SB03
遺物出土状態
（南西より）

9　SB03
遺物出土状
態接写
（南より）

10　SB03
遺物出土状
態接写
（南より）

1　SB03
Pit5 完掘
（南より）

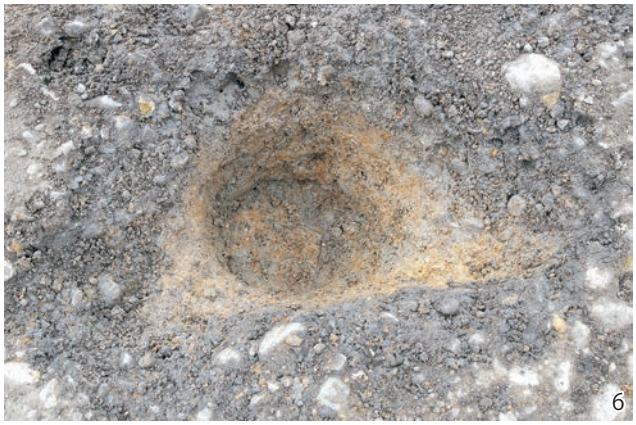
2　SB03
Pit7 完掘
（西より）

3　SB03
Pit9 完掘
（東より）

4　SB03
Pit10 完掘
（東より）

5　SB03
Pit11 完掘
（西より）

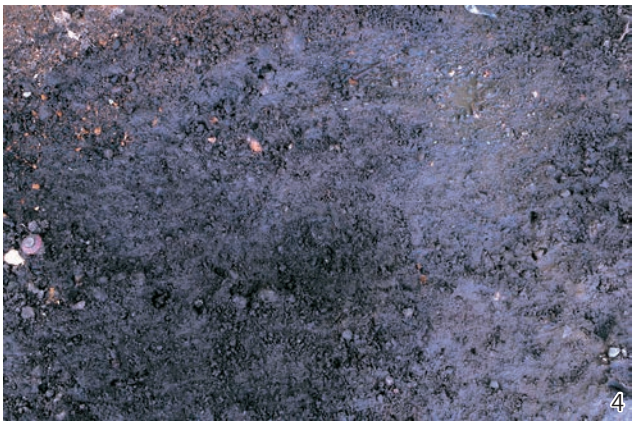
6　SB03
Pit12 完掘
（南より）



7　SB03
完掘（北より）

1　SB04
A-B 断面
（南東より）

2　SB04
遺物出土状態
（東より）



3　SB04
88 遺物出土
状態（東より）

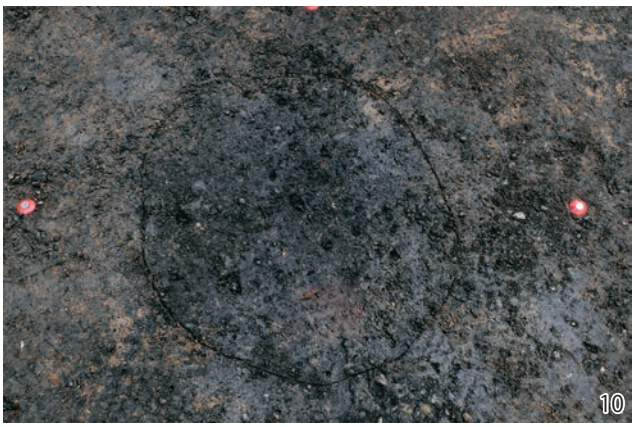
4　SB04
炉完掘
（東より）

5　SB04
Pit2 断面
（東より）

6　SB04
Pit2 完掘
（東より）

7　SB04
Pit3 完掘
（東より）

8　SB04 完掘
（南より）

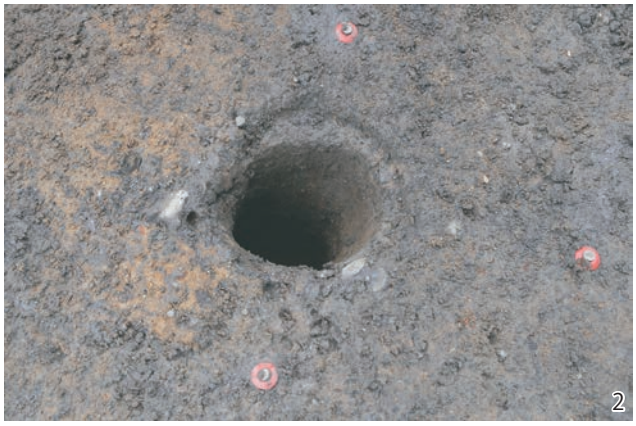


9　SB09
A-B 断面
（北より）

10　SB09 炉検出
（南より）

1　SB09
Pit1 完掘
（東より）

2　SB09
Pit4 完掘
（北より）



3　SB09
Pit5 完掘
（北より）

4　SB09
Pit6 完掘
（北より）

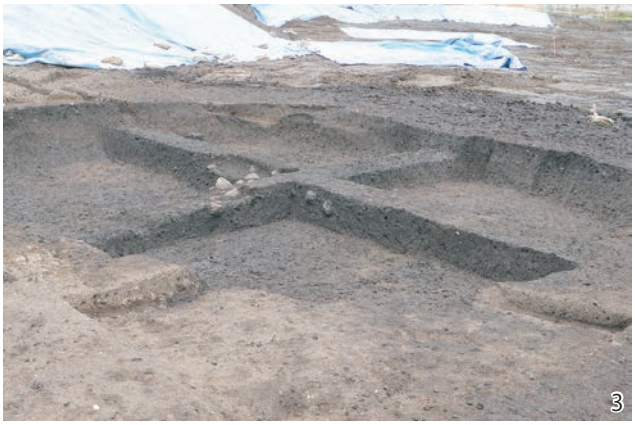
5　SB09
Pit8 完掘
（北より）

6　SB09
Pit9 完掘
（北より）

7　SB09 完掘
（北より）

1　SB16
C-D 断面
（東より）

2　SB16 完掘
（東より）



3　SB17
A-B･C-D 断面
（南より）

4　SB17
遺物出土状態
（南東より）

5　SB17
108 出土状態
（東より）

6　SB17
110 出土状態
（南東より）

7　SB17
炉 G-H 断面
（南西より）

8　SB17
炉 火床
（南東より）

9　SB17
Pit1 完掘
（北西より）

10　SB17
Pit2 完掘
（南東より）

1　SB17
Pit3 完掘
（北西より）

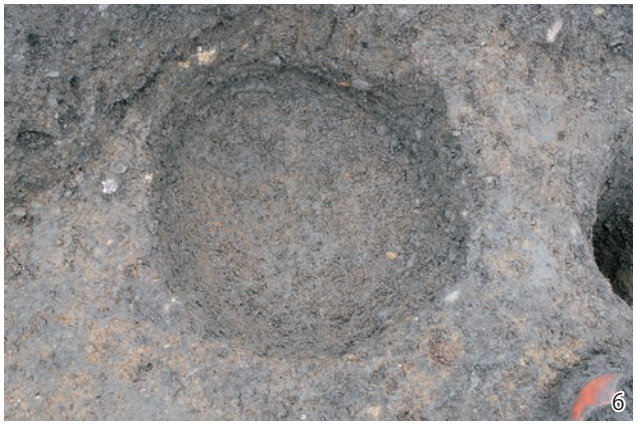
2　SB17
Pit4 完掘
（北西より）

3　SB17
Pit5 完掘
（南東より）

4　SB17
Pit6 完掘
（北西より）

5　SB17
Pit7 完掘
（北西より）

6　SB17
Pit8 完掘
（北西より）



7　SB17 完掘
（北西より）

1　ST01
Pit1 完掘
（北より）

2　ST01
Pit2 完掘
（北より）

3　ST01
Pit3 完掘
（北より）

4　ST01
Pit4 断面
（南より）

5　ST01
Pit4 完掘
（北より）

6　ST01
Pit5
120
出土状態
（北より）

7　ST01
Pit5 断面
（南より）

8　ST01
Pit5 完掘
（北より）

9　ST01
Pit6 完掘
（北より）

10　ST01
Pit7 完掘
（北より）

1　ST01
完掘全景
（空撮）

2　SM01
A-B 断面
（南西より）

3　SM01 完掘
（南東より）

4　SM02
遺物出土状態
（東より）

1　SM02
C-D 断面東側
（南より）

2　SM02
A-B 断面
（東より）

3　SM02
遺物出土
状態（下面）
（北西より）

4　SM02 完掘
（南より）

5　SM03
125 出土状態
（北より）

6　SM03
棺内完掘
（北より）

7　SM03
125 出土状態
（南西より）

8　SM03 完掘
（北より）

9　SD04
A-B 断面
（東より）

10　SD04 完掘
（南東より）

1　SD06 断面
（南西より）
2　SD06 完掘
（北東より）

3　SD07 完掘
（東より）
4　SD08
A-B 断面
（北西より）

5　SD08 完掘
（東より）
6　SD09 完掘
（北東より）

7　SD10 完掘
（北東より）
8　SK220 完掘
（北より）

9　SK287
130 出土状態
（北東より）
10　SQ01
131・132
出土状態
（南より）

1　SD01
A-B 断面
（南西より）

2　SD01
C-D 断面
（南西より）

3　SD01
G-H 断面
（南西より）

4　SD01
遺物出土状態
（南西より）

5　SD01
152・158
出土状態
（南より）

6　SD01
遺物出土状
態中央部
（西より）

7　SD01
北半分完掘
（南西より）

8　SD01
南半分完掘
（北より）

1　SB05
C-D 断面
（南西より）

2　SB05
遺物出土状態
（北より）

3　SB05
カマド遺物
出土状態
（北西より）

4　SB05
カマド礫
出土状態
（北西より）

5　SB05
カマド G-H
断面
（北西より）

6　SB05
カマド炭化物
出土状態
（南西より）

7　SB05
Pit5
186
出土状態
（南より）

8　SB05
焼土 1 断面
（東より）

9　SB05
焼土 2 検出
（北より）

10　SB05
完掘
（北西より）

1　SB06･07
C-D 断面
（南西より）

2　SB06･07
A-B 断面
（南東より）

3　SB06･07
遺物出土状態
（北西より）

4　SB06
カマド遺物
出土状態
（南より）

5　SB06
カマド検出
（南より）

6　SB07
カマド遺物
出土状態
（北西より）

7　SB07
カマド火床
検出
（北西より）

1　SB07
カマド G-D
断面
（南より）

2　SB07
カマド掘方
完掘
（西より）

3　SB06 完掘
（南より）

4　SB07 完掘
（北西より）

1　SB08 検出
（東より）
2　SB08
遺物出土状態
（南より）

3　SB08
Pit1 遺物出
土状態
（北より）
4　SB08 完掘
（北より）

5　SB10
遺物出土状態
（東より）
6　SB10
カマド検出
（東より）

7　SB10
カマド G-H
断面
（南より）
8　SB11
C-D 断面
（東より）

9　SB11
遺物出土状態
（北より）
10　SB11
カマド火床
検出
（北より）

1　SB11
Pit2
258・261
出土状態
（北東より）

2　SB11 完掘
（北より）

3　SB12
E-F 断面
（南より）

4　SB12
火床 C-D 断面
（南より）

5　SB12
Pit1
264・265
出土状態
（北より）

6　SB12
Pit2 完掘
（東より）

7　SB12 完掘
（南西より）

1　SB13
C-D 断面
（南西より）

2　SB13
カマド遺物
出土状態
（北西より）

3　SB13
カマド遺物
出土状態
（北西より）

4　SB13
カマド E-F
断面
（北東より）

5　SB13
カマド G-H
断面
（南西より）

6　SB13 完掘
（南東より）

7　SB14
C-D 断面
（北東より）

8　SB14
遺物出土状態
（北西より）

9　SB14
Pit1 断面
（西より）

10　SB14
Pit1 完掘
（西より）

1　SB14 完掘
（北より）

2　SB15
C-D 断面
（東より）

3　SB15
A-B 断面
（西より）

4　SB15
遺物出土状態
（北東より）

5　SB15
遺物出土接写
（北東より）

6　SB15
カマド遺物
出土状態
（南西より）

7　SB15
カマド完掘
（南西より）

1　SB15
カマドエレベーション
H-I 断面
（北西より）

2　SB15
カマドエレベーション
J-K 断面
（南東より）

3　SB15 完掘
（南西より）

4　ST02
Pit1 完掘
（南より）

5　ST02
Pit2 完掘
（北より）

6　ST02
Pit3 完掘
（北より）

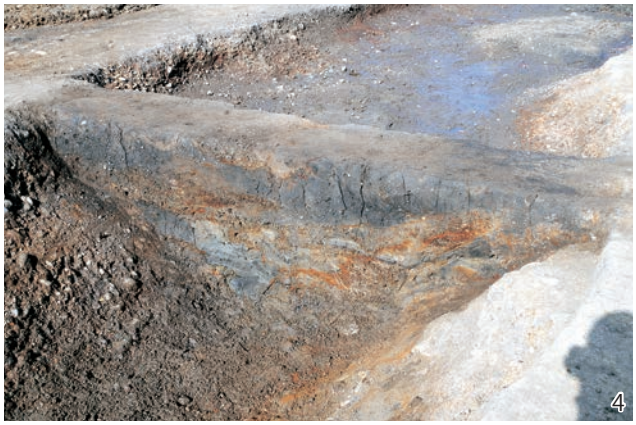
7　ST02
Pit4 完掘
（南より）

1　ST02 完掘
（北より）

2　SD02
C-D 断面
（南より）

3　SD03
A-B 断面
（南西より）

4　SD02･03
E-F 断面
（南東より）



5　SD02･03
G-H 断面
（南東より）

6　SD03
遺物出土状態
（南より）

7　SD03
703 出土状態
（西より）

1　SD03
分析 No.10
出土状態
（北より）

2　SD03
分析 No.12
出土状態
（北より）

3　SD03
北半分完掘
（南東より）

4　SD03
南半分完掘
（北より）

1　1a 区
完掘全景
（南西より）

2　1a 区
完掘全景
（東より）

3　1b 区
完掘全景
（東より）

4　1b 区
SK 群
完掘全景
（北より）

1　1c 区
北側完掘全景
（東より）

2　1c 区
SB 周辺完掘
全景
（南より）

3　1c 区
最東側完掘
全景
（北より）

4　1c 区
最東側完掘
全景
（南より）

5　1c 区
東側完掘全景
（北より）

6　1c 区
東側完掘全景
（南より）

7　1c 区
西側完掘全景
（空撮）

1　1c 区
西側完掘全景
（南より）

2　1c 区
最西側完掘
全景
（南より）

3　2a 区
南完掘全景
（北より）

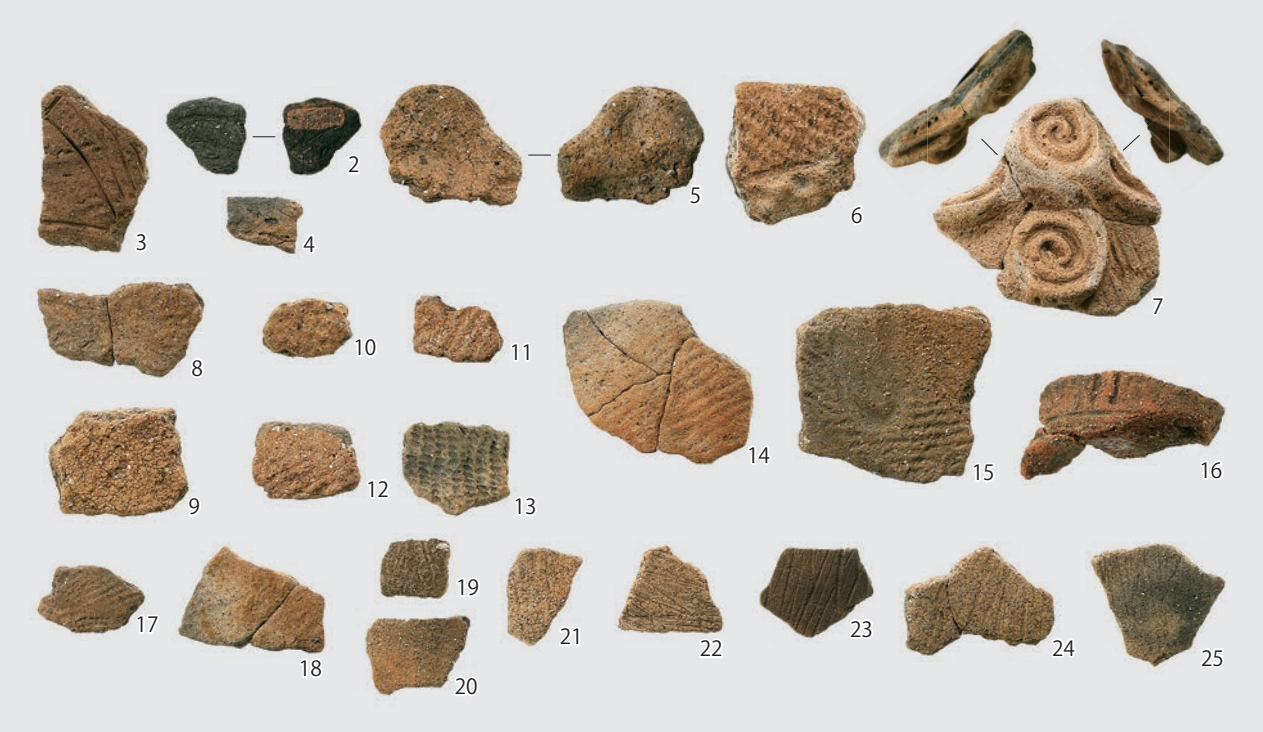
4　2a 区
南完掘全景
（北より）

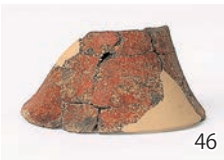
5　2a 区
SK 群
完掘全景
（北より）

6　2a 区
北側検出
（南より）

7　2a 区
完掘全景
（南より）

PL 30　弥生時代前期以前土器・弥生時代後期土器 1





縄文時代以外の遺構、検出面

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

SQ02

1

SB01

26
27
28
29
30
31

SB02（1）

44
45
46
47
51
52

SB02（2）
42
43
48
49
50
53
54
55
56
57
58
59
60

53

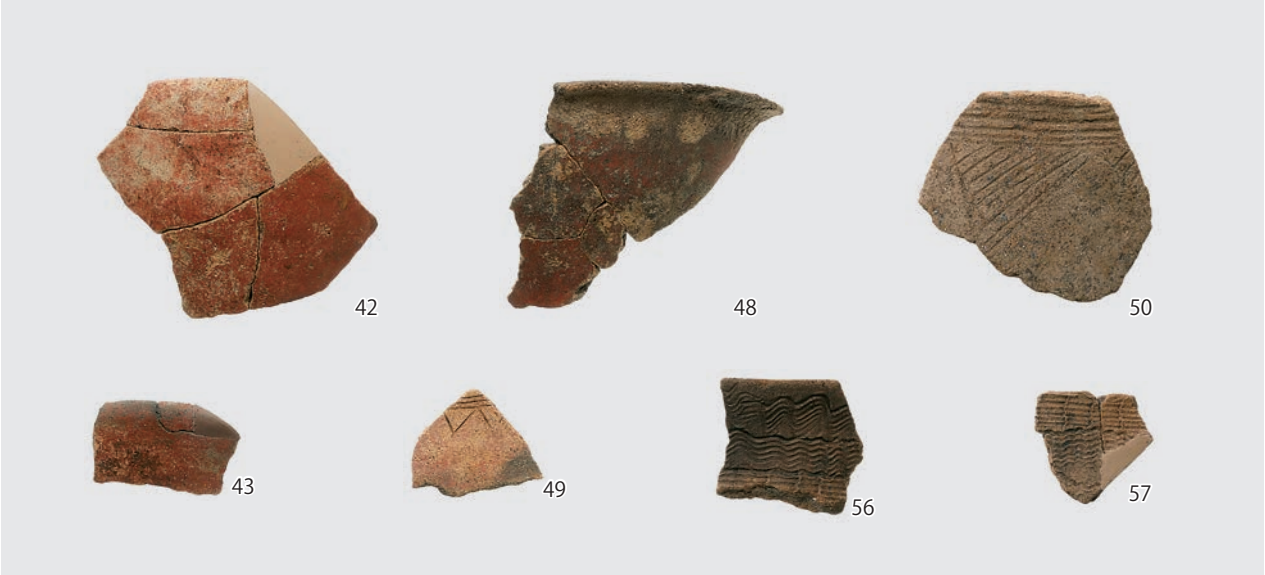
54

60

58

55
59

SB03（1）
集合写真


42
48
50
43
49
56
57

SB03

PL 32　弥生時代後期土器３

SB03（2）
69
70
71
72
79

79

69

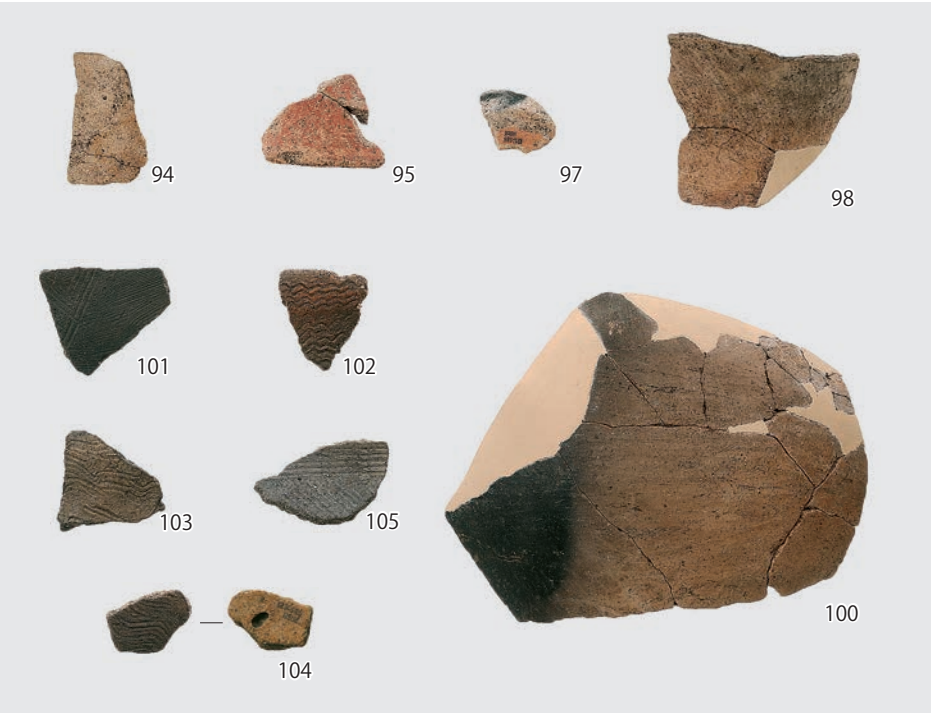
70

71

72

SB03（3）
63
64
65
66
67
68
73
74
75
76
77
78
80
81
82
83

SB04
87
88
89
90
91



SB09
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105

SB16
106
107

SB17
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119

ST01
120

SK220
127
128

SK261
129

SQ01
131
132-1
132-2

SM02（1）
121

121

PL 36　弥生時代後期土器７

SM02（2）
122
124

122

124

SM02（3）
123

SM03
125

遺構外
1a 区
140
143
147

1c 区
133
134
135
136
137
138
141
142
144

2a 区
139
145
146

SD01
集合写真
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

遺構外
1a 区
169
170
171

1c 区
167
172

2a 区
168

SB05（1）
集合写真
174
177
179
181
182
183
184
185
189
190
191
192
193
195
196
198
201

SB05

174

177

181

179

182

183

184

185

189

190

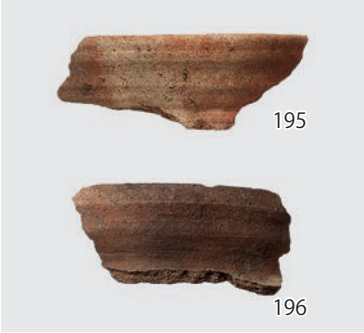
191

192

201

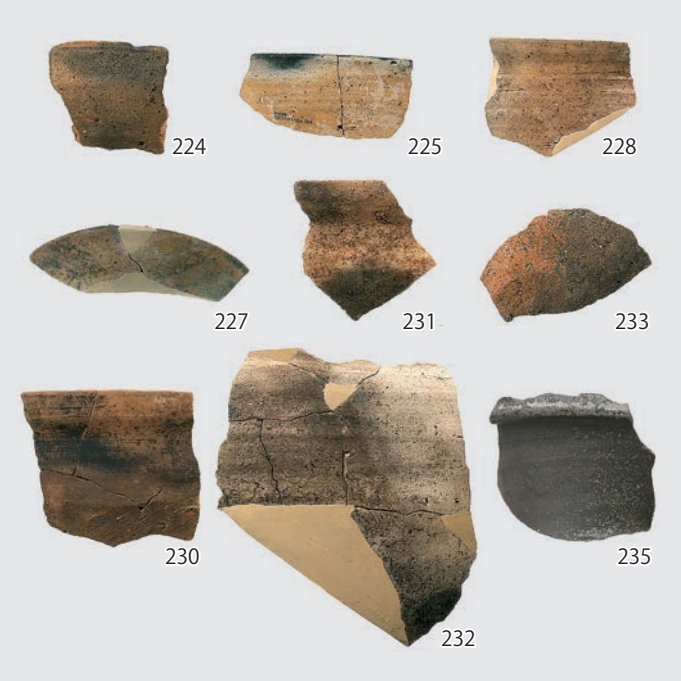
193

198


195
196

SB05（2）
173
175
176
178
180
186
187
188
194
197
199
200
202
203
204

SB06（1）
211
212
215
217

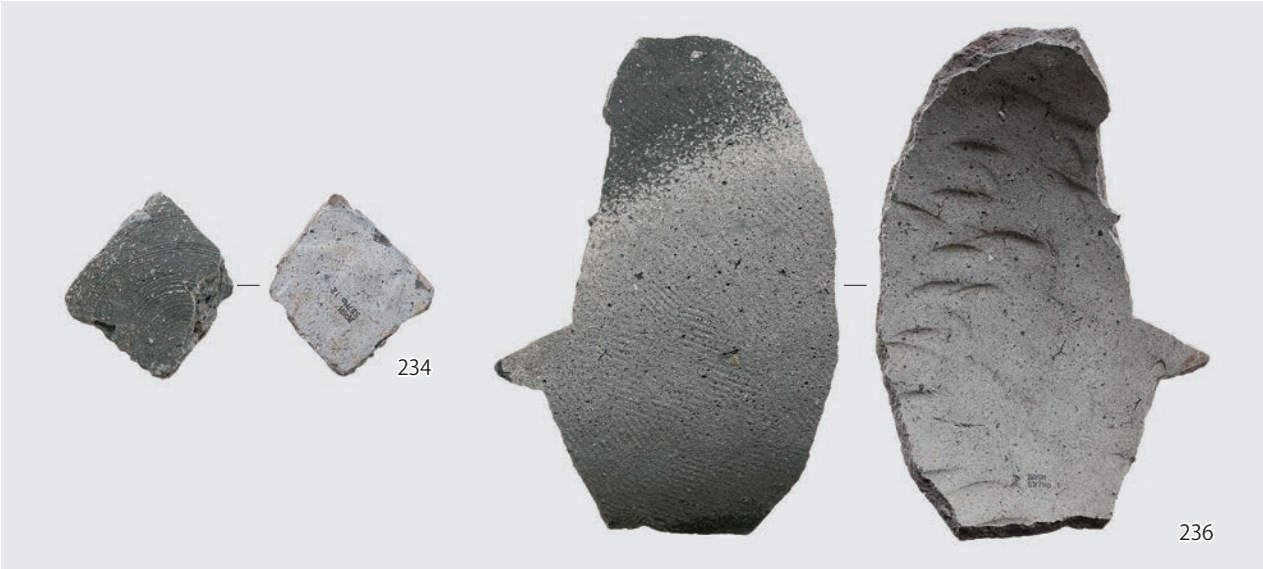


SB06（2）
213
214
216
218

SB07（1）
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
235
237
集合写真

SB07（2）
234
236

SB08
集合写真
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249



SB10（1）
250
251
252
253
254
255

SB11・12
集合写真

SB11
256
257
258
259
260

SB12
262
263
264
265
266
267
268

SB13
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281

SB14（1）
282
283
284
285
286
287
291

270

272

273

269 271 274

275

281

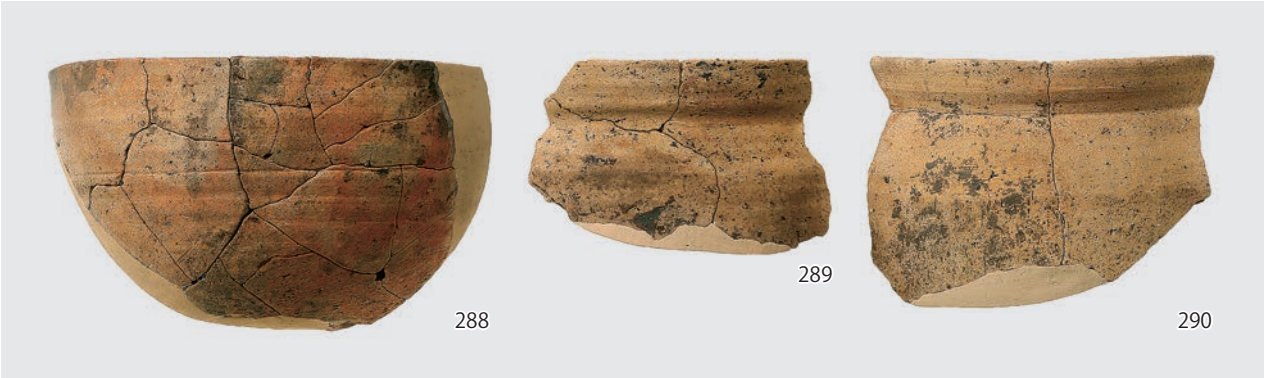
276 277 278 279 280

284 285 286 291

282

283

287



SB14（2）
288
289
290

SB15（1）
集合写真
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
304
307
316
317

SB15（2）
292
303
305
306
308
309
310
311
312
313
314
315
318
319

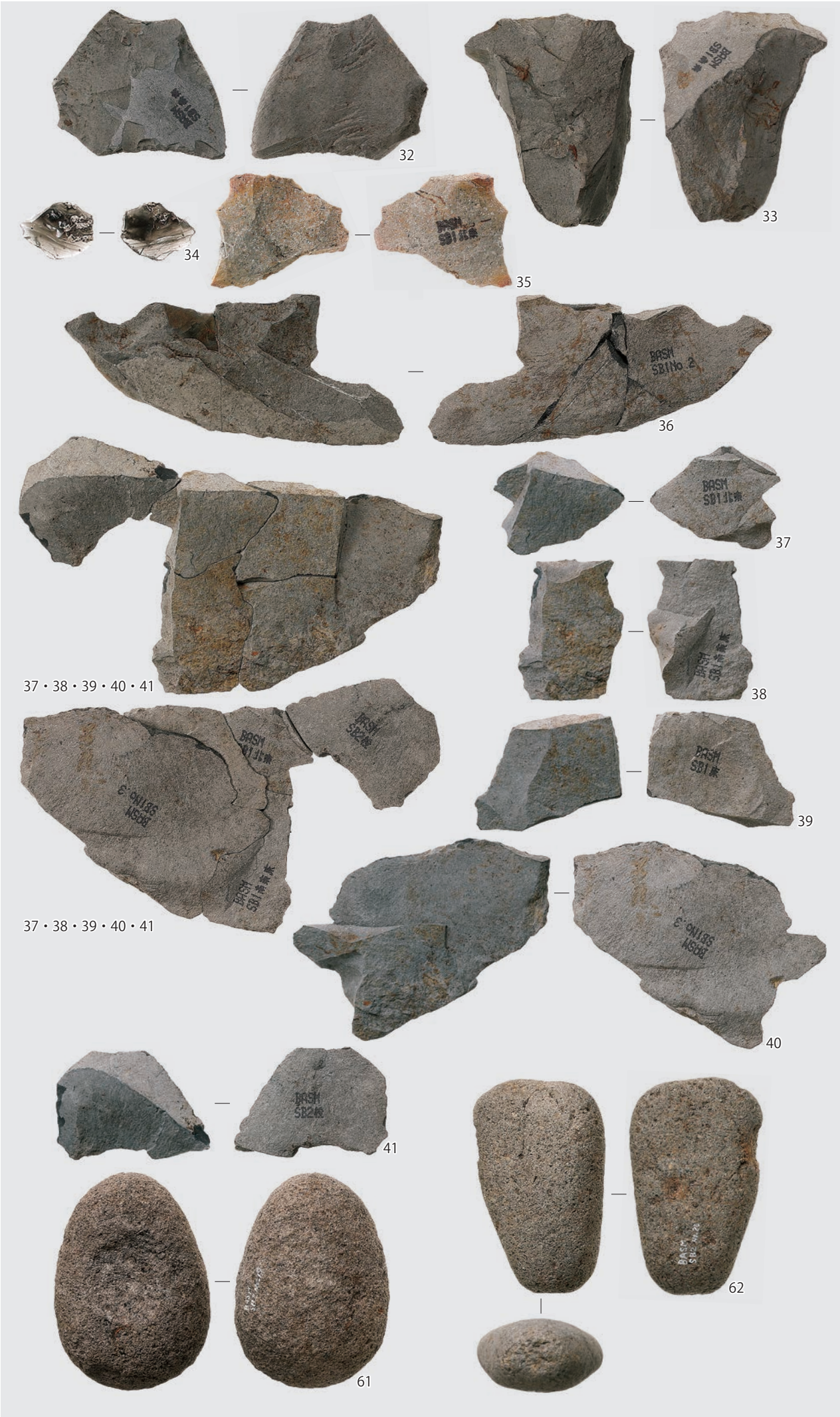
SD03
322
323
324
325
326

ST02
321

遺構外
1a 区
335

1c 区
331
333

2a 区
327
328
329
330
332
334



SB01
32
33
34
35
36
37
38
39
40

SB02
41
61
62

SB03
84
85
86

SB04
92
93

SB05
205
206

SB11
261

SB15
320

SK127
126

SK287
130

SB05
207
208
209
210